

都城市所在

おおくぼ

大窟第1遺跡

西久保地区河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

宮崎県埋蔵文化財センター

都城市所在

おおくぼ

大窟第1遺跡

西久保地区河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、西久保地区河川改修事業に伴い、都城市高城町有水に所在する大窟第1遺跡の発掘調査を平成25年度に実施しました。本書は、その発掘調査の記録を掲載した報告書です。

今回報告する大窟第1遺跡は、大淀川右岸の河岸段丘上に位置し、縄文時代後晩期から平安時代までの遺構と遺物が確認されています。なかでも古墳時代の集落跡内では鞆の羽口や金床石といった鉄造関係の遺物が、また平安時代では多量の土師器とともに土師器焼成土坑といった生産遺構がみつかり、大淀川と共に暮らした人々の生活が明らかになるなど貴重な調査成果を得ることができました。

今回の調査で得られた多くの成果は、今後、当地域の歴史を解明する上で非常に貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、地元の方々に心より厚くお礼申し上げます。

平成28年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 岩切隆志

例　　言

1. 本書は、西久保地区河川改修事業に伴い宮崎県教育委員会が実施した、宮崎県都城市高城町有水 1223－36 ほかに所在する大窟第1遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局宮崎河川国道事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが平成 25（2013）年 4 月 10 日から平成 26（2014）年 3 月 14 日まで実施した。
3. 現地調査に関する図面作成および写真撮影については日高広人、津曲健、吉永登志孝が行い、一部を木場正浩、野崎一人、松林豊樹、二方和也、飯田博之、福田泰典、山元清春、永野一美の協力を得た。
4. 整理作業については当センターで行い、本書に係わる業務のうち、遺構と遺物のデジタル整理作業については、日高、木場、二方、小久保守が、遺物観察表及び計測表作成等については、日高、木場、二方、小久保、高橋浩子が行った。また遺物の写真撮影については日高が行った。
5. 石器の石材同定については赤崎広志の協力を得た。
6. 鉄製品の保存処理および実測については、柳田晴子が行った。
7. 空中写真撮影業務は有限会社ふじた、基準点測量等の測量業務については南日本総合コンサルタント株式会社、自然科学分析は株式会社古環境研究所、石器実測委託は株式会社アーキジオ大分にそれぞれ委託した。
8. 本書で使用した方位については、国土座標第Ⅱ系（世界測地系）の座標北、国土地理院発行地図は真北を指す。またレベルは海拔絶対高である。
9. 本書で使用した土層断面および土器の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖（2008 年版）』に掲載。
10. 本書に使用した位置図は、国土地理院発行の 5 万分の 1 図（野尻）をもとに作成した。
11. 本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

S A = 竪穴、S C = 土坑、S E = 溝状遺構、S Z = 性格不明遺構、T r = トレンチ
12. 揿図の縮尺は各図に示している。
13. 本書に掲載している遺物のうち、遺物番号 697～707 については未掲載資料である。
14. 本書の執筆は分担して行い、第Ⅲ章 1 節の土器は吉本正典、それ以外を日高が執筆し、編集は日高が行った。
15. 出土遺物および記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

本文目次

序文

例言

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の位置と環境	3

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 調査の方法と経過	6
第2節 遺跡の層序	9

第Ⅲ章 調査の記録

第1節 繩文時代後晩期の遺構と遺物	14
第2節 弥生時代の遺構と遺物	35
第3節 古墳時代の遺構と遺物	40
第4節 古代以降の遺構と遺物	56

第Ⅳ章 自然科学分析

第1節 顔料分析（蛍光X線分析）	116
第2節 種実同定	118
第3節 樹種同定	120
第4節 放射性炭素年代測定	123

第Ⅴ章 総括

130

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡位置図	5	第 38 図 弥生時代～古墳時代遺物分布図	52
第 2 図 調査区配置図	8	第 39 図 土師器実測図 1	53
第 3 図 VII層上面の地形とレンチ配置図	10	第 40 図 土師器実測図 2	54
第 4 図 土層柱状図	11	第 41 図 土師器実測図 3 および鉄製品実測図	55
第 5 図 A区遺構分布図	12	第 42 図 SE 1 実測図および出土遺物実測図	57
第 6 図 B区遺構分布図	13	第 43 図 土坑 (SC) 実測図 1	59
第 7 図 土坑実測図	15	第 44 図 土坑 (SC) 実測図 2 および燒土実測図 1	60
第 8 図 土坑内出土遺物実測図 1	16	第 45 図 土坑 (SC) 実測図 3 および焼土実測図 2	61
第 9 図 土坑内出土遺物実測図 2	17	第 46 図 土坑出土遺物実測図 1	62
第 10 図 縄文時代後晩期遺物分布図	18	第 47 図 土坑出土遺物実測図 2	63
第 11 図 縄文土器実測図 1	19	第 48 図 土坑出土遺物実測図 3	64
第 12 図 縄文土器実測図 2	22	第 49 図 土坑出土遺物実測図 4	65
第 13 図 縄文土器実測図 3	23	第 50 図 土坑出土遺物実測図 5	66
第 14 図 縄文土器実測図 4	24	第 51 図 土坑出土遺物実測図 6	67
第 15 図 縄文土器実測図 5	25	第 52 図 燃土出土遺物実測図	67
第 16 図 縄文土器実測図 6	26	第 53 図 SZ 1 実測図	69
第 17 図 縄文土器実測図 7	27	第 54 図 SZ 1 出土遺物実測図	71
第 18 図 縄文石器実測図 1	29	第 55 図 古代遺物分布図	72
第 19 図 縄文石器実測図 2	30	第 56 図 土師器実測図 1	74
第 20 図 縄文石器実測図 3	31	第 57 図 土師器実測図 2	75
第 21 図 縄文石器実測図 4	32	第 58 図 土師器実測図 3	76
第 22 図 縄文石器実測図 5	33	第 59 図 土師器実測図 4	77
第 23 図 縄文石器実測図 6	34	第 60 図 土師器実測図 5	78
第 24 図 SA 5 実測図および出土遺物実測図	36	第 61 図 土師器実測図 6	79
第 25 図 弥生土器実測図 1	37	第 62 図 土師器実測図 7	81
第 26 図 弥生土器実測図 2	38	第 63 図 土師器実測図 8	82
第 27 図 弥生土器実測図 3 および石器実測図	39	第 64 図 土師器実測図 9	83
第 28 図 SA 1 実測図および出土遺物実測図	41	第 65 図 土師器実測図 10	84
第 29 図 SA 2 実測図	42	第 66 図 土師器実測図 11	85
第 30 図 SA 2 出土遺物実測図 1	43	第 67 図 須恵器実測図 1	86
第 31 図 SA 2 出土遺物実測図 2	44	第 68 図 須恵器実測図 2	87
第 32 図 SA 3 実測図	45	第 69 図 瓦質土器および土製品実測図	88
第 33 図 SA 3 出土遺物実測図 1	46	第 70 図 鉄製品および滑石製品・石製品・軽石製品実測図	
第 34 図 SA 3 出土遺物実測図 2	47		
第 35 図 SA 3 出土遺物実測図 3	48	第 71 図 历年較正結果 1	125
第 36 図 SA 4 実測図	49	第 72 図 历年較正結果 2	126
第 37 図 SA 4 出土遺物実測図	50		

写 真 目 次

写真1 SA 3から出土した赤色物塊写真	117	写真4 樹種同定試料写真1	128
写真2 赤色物の顕微鏡写真	117	写真5 樹種同定試料写真2	129
写真3 種実同定試料写真	127		

表 目 次

第1表 調査工程表	7	第22表 古代土師器観察表4	104
第2表 縄文土器観察表1	90	第23表 古代土師器観察表5	105
第3表 縄文土器観察表2	91	第24表 古代土師器観察表6	106
第4表 縄文土器観察表3	92	第25表 古代土師器観察表7	107
第5表 縄文土器観察表4	93	第26表 古代土師器観察表8	108
第6表 縄文土器観察表5	94	第27表 古代土師器観察表9	109
第7表 縄文時代石器計測表1	94	第28表 古代土師器観察表10	110
第8表 縄文石器石器計測表2	95	第29表 古代土師器観察表11	111
第9表 弥生土器観察表1	95	第30表 古代土師器観察表12	112
第10表 弥生土器観察表2	96	第31表 古代土師器観察表13	113
第11表 弥生時代石器計測表	97	第32表 古代土師器観察表14	114
第12表 古墳時代土師器観察表1	97	第33表 古代土製品計測表	115
第13表 古墳時代土師器観察表2	98	第34表 古代鉄製品計測表	115
第14表 古墳時代土師器観察表3	99	第35表 古代滑石製品計測表	115
第15表 古墳時代土師器観察表4	100	第36表 古代石製器計測表	115
第16表 古墳時代土製品計測表	100	第37表 赤色物の蛍光X線分析結果	116
第17表 古墳時代鉄製品計測表	101	第38表 炭化種実同定結果	118
第18表 古墳時代石器計測表	101	第39表 樹種同定結果	121
第19表 古代土師器観察表1	101	第40表 放射性炭素年代測定試料一覧	124
第20表 古代土師器観察表2	102	第41表 放射性炭素年代測定結果	125
第21表 古代土師器観察表3	103		

図 版 目 次

図版1	135	図版4	138
大塚第1遺跡調査区		A区土層断面	
図版2	136	作業風景	S A 1
大塚第1遺跡遠景1 大塚第1遺跡遠景2		S A 1埋甕	S A 2
図版3	137	S A 2遺物出土状況1	S A 2遺物出土状況2
A区		B区	

図版 5	139	図版 12	146
S A 2 内横穴状遺構	S A 3	S A 2・S C 1 の金床石	S A 3 出土遺物 1
S A 3 遺物出土状況 1	S A 3 遺物出土状況 2	S A 3 出土遺物 2	S A 3 出土遺物 3
S A 4	S A 5	S A 4 出土遺物	
S E 1	S C 1	図版 13	147
図版 6	140	古墳時代土師器（甕）	古墳時代土師器（甕）
S C 4 遺物出土状況	S C 4	古墳時代土師器（高环）	
S C 5 白色粘土堆積状況	S C 5	古墳時代土師器（小型甕・小型鉢・須恵器）	
S C 6	S C 9	鉄製品	
S C 14 遺物出土状況	S C 14	図版 14	148
図版 7	141	S E 1・S C 1 出土土器	S C 5 出土遺物
S C 17	S C 20	S C 6・11・12・燒土出土遺物	
S C 21	S C 24	S C 13 出土遺物	S C 14 出土遺物
S Z 1 検出状況	S Z 1 遺物出土状況 1	図版 15	149
S Z 1 遺物出土状況 2	S Z 1 完観状況	S C 4 出土遺物 1	
図版 8	142	図版 16	150
S C 17・24 出土遺物	S C 20・21 出土遺物 1	S C 4 出土遺物 2	S Z 1 出土遺物 1
S C 20・21 出土遺物 2	縄文土器 1	図版 17	151
縄文土器 2	縄文土器 3	S Z 1 出土遺物 2	
縄文土器 4	縄文土器 5	図版 18	152
縄文土器 6		古代土師器（环）	
図版 9	143	図版 19	153
縄文土器 7	縄文土器 8	古代土師器（高台付塊・鉢・赤彩のある土器・黒色土器）	
縄文土器 9	縄文土器 10	図版 20	154
縄文土器 11	石礫・石錐・両面加工石器	古代土師器（甕・懶）	
搔器・削器	石鏟・楔形石器・尖頭器・石核	図版 21	155
図版 10	144	古代土師器（布痕土器）	
石斧	石斧・敲石・石錘	古代須恵器（环・高台付塊）	
S A 5 出土遺物	弥生土器 1	図版 22	156
弥生土器 2	弥生土器 3	古代須恵器（鉢・甕・壺）	古代瓦質土器（环・高台付塊）
弥生土器 4	弥生土器 5	古代土製品	古代鉄製品・鉄滓
磨製石礫・石庖丁		古代滑石製品・石製品・軽石製品	
図版 11	145		
S A 1 出土遺物	S A 2 出土遺物		

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

大淀川は、霧島山麓に広がる都城盆地を経て、宮崎平野を貫流し日向灘に注ぐ九州屈指の河川である。この流域では、昔から人々に豊かな恵をもたらしている反面、時には激しい水流となって洪水等の災害をもたらしている。宮崎市や都城市等の市街部等では大淀川堤内側の地盤高が洪水時の河川水位に比べて低い地形を呈しているため、近年においても平成2年、平成5年、平成9年、平成16年・17年と内水被害が頻発している。特に平成17年9月の台風14号に伴う洪水では床上浸水約3,830戸、床下浸水約870戸にのぼる被害を受け、大淀川上流域にあたる都城市高崎町繩瀬地区や高城町有水地区でも甚大な被害を受けていた。このため国土交通省九州地方整備局宮崎河川国道事務所（以下「宮崎河川国道事務所」）では、これらの地区的洪水時の越水対策として堤防の築堤整備を行うとともに、流下能力の向上対策として河道掘削を計画していた。

宮崎河川国道事務所では、同事業が平成23年度に計画が実施段階へ向けて具体化したことにより、宮崎県教育庁文化財課（以下、文化財課）に埋蔵文化財の有無について照会を行っている。文化財課では、該建設予定対象域（対象面積約15,000m²）が周知の埋蔵文化財泡蔵地である大窪第1遺跡に隣接していることから事前に遺跡の有無と内容を確認するための調査が必要であると判断して協議を開始した。平成25年1月には、宮崎河川国道事務所から対象地の用地引き渡しの連絡を受け、同年1月29日から31日にかけて確認調査を実施した。

その結果、縄文時代後晩期や弥生時代後期、古代（平安時代）等の遺物や遺構が確認し、約10,000m²の範囲について遺跡の存在が確実となったことから、引き続き、計画変更等の埋蔵文化財保護の方策について協議を行ったが、前述の通り、当該地は台風による浸水被害地域でもあり、地元住民からも早期の事業完了を望んでいることから工事区全域にわたり現状保存が困難という結論に至り、発掘調査による記録保存の措置をとることになった。

平成25年4月3日付けで宮崎河川国道事務所より、調査経費の見積り依頼があり、平成25年4月4日付けで回答を行い、平成25年4月9日付けで委託契約を交わした。本発掘調査は宮崎県教育委員会が主体となって、宮崎県埋蔵文化財センターが平成25年4月15日から平成26年3月14日まで実施した。

第2節 調査の組織

発掘調査及び整理作業・報告書作成については以下の組織で実施した。

調査主体 宮崎県教育委員会

調査機関 宮崎県埋蔵文化財センター

平成25年度 発掘調査

宮崎県埋蔵文化財センター

所長

向井 大蔵

副所長

長津 宗重

総務課長 坂上 恒俊
総務課総務担当リーダー 副主幹 高園 寿恵
調査第二課長 菅付 和樹
調査第二課調査第四担当リーダー 副主幹 松林 豊樹
調査第二課調査第四担当 主査 日高 広人（調査担当）
調査第二課調査第四担当 主査 津曲 健（調査担当）
調査第二課調査第四担当 主査 吉永 登志孝（調査担当）
宮崎県教育庁文化財課
埋蔵文化財担当 主査 堀田 孝博（事業調整）

平成 26 年度 整理作業

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 岩切 隆志
副所長兼総務課長 長津 宗重
総務課総務担当リーダー 副主幹 安藤 忠洋
調査課長 菅付 和樹
調査課調査第二担当リーダー 主幹 吉本 正典
調査課調査第二担当 主査 日高 広人（整理担当）
宮崎県教育庁文化財課
埋蔵文化財担当 主査 二宮 満夫（事業調整）

平成 27 年度 整理・報告書作成

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 岩切 隆志
副所長兼調査課長 菅付 和樹
総務課長 上谷 正隆
総務課総務担当リーダー 副主幹 安藤 忠洋
調査課調査第二担当リーダー 主幹 吉本 正典
調査課調査第三担当リーダー 副主幹 日高 広人（整理・報告書担当）
宮崎県教育庁文化財課
埋蔵文化財担当 主査 松本 茂（事業調整）

第3節 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

大塚第1遺跡は、宮崎県都城市高城町有水に所在する。人口が約17万人、市域面積が約650m²と県内では宮崎市に次ぐ規模である都城市は宮崎県の南西部に位置し、都城盆地のほぼ中央を占めている。

都城盆地は、北西に高千穂峰（標高1,174m）を有する霧島山火山群をはじめ、西に瓶台山（標高534m）や白鹿岳（標高604m）が属する高隈山地、東から南にかけて東岳（標高898m）や柳岳（標高968m）が連なる鰐塚山地に囲まれている。また盆地中央部には、大淀川が多くの支流と合流しながら南から北へと貫流し、低地を取り囲むように成層シラス台地やシラス台地群が発達している。

当遺跡が含まれる西久保地区は、西に大淀川、南にその支流の有水川、東に高尾山（標高351m）・岩骨岳（標高372m）が連なる岩骨山地、北に轟丘陵地に挟まれるように田辺一有水台地群が形成されているほか、河川近くでは河岸段丘が発達している。遺跡は河岸段丘上に立地し、東に広がる成層シラス・シラス台地との接続付近には北と西の両側から低地が入り込み、また北流する大淀川が遺跡付近で東に向きを変えることで北西に突き出した扇状を呈した地形となっている。現況では段丘上で畑地が、低地には水田が広がっている。なお、調査地との標高は約131m、西に隣接する大淀川とは、比高差は8mを測る。

2. 歴史的環境

当遺跡の所在する高城町域では、これまでにも多くの調査が行われており、旧石器時代から中世にかけての遺跡が確認されている。ここでは周辺地域の歴史的環境について、時代別に概観していきたい（第1図）。

旧石器時代

都城地域では当該期の調査事例が少ないものの雀ヶ野第3遺跡（高城町）で後期旧石器時代末から縄文時代草創期にかけて細石刃や細石核（野岳・休場型）、有舌尖頭器が出土している。

縄文時代

早期では、高八重遺跡（高城町）で集石遺構とともに妙見式土器が確認されているほか、平松遺跡（高崎町）では平柄式土器や塞ノ神式土器期の集落跡が検出されている。また雀ヶ野第3遺跡では押型文土器群や桑ノ丸式土器、手向山式土器、平柄式土器や塞ノ神式土器等が集石遺構とともに出土している。

後期になると調査事例が多くなり、高城町細井地区遺跡群のうち山城第1遺跡で堅穴建物跡59軒等が確認されており、出土土器から指宿式期、草野式・市来式期、黒色磨研土器期の3時期に分かれる。また同遺跡群内の上原第1遺跡では市来式期・丸尾式期の堅穴建物跡が、上原第3遺跡では指宿式期・納曾式期のかに晩期の孔列文期の堅穴建物跡が検出されている。

弥生時代

当該期の調査事例は少なく、中期では、朴木遺跡（高崎町）で石蓋土壙墓11基確認されており、そのうちの1基から副葬品として多量の磨製石鎌が出土している。後期では、城ヶ尾遺跡（高城町）の堅穴建物跡3軒、様屋敷第2遺跡（高崎町）でも1軒、上示野原遺跡で後期終末から古墳初頭のものが1軒確認されている。

古墳時代

この時期になると高城町では、有水地区をはじめ、南部の石山地区、さらに南東部の大井手地区に高城町古墳群（県指定）が造営されている。そのうち石山地区では円墳 2 基（高城町古墳 16・17 号墳）の北側では、高取原地下式横穴墓が 1 基、香禅寺遺跡では地下式板石積石室や地下式横穴墓が各 1 基確認されている。大井手地区では、本格的な墳丘調査は行われていないが、周辺の牧ノ原遺跡群では地下式横穴墓や箱式石棺墓、木棺直葬墓、土壙墓が多数検出されている。また高崎町では高崎塚原古墳（県指定高崎町古墳）をはじめ、横尾地下式横穴墓群や原村地下式横穴墓群、鶴ノ原地下式横穴墓群などの地下式横穴墓が確認されている。

一方、集落については、上原第 1 遺跡や山城第 1 遺跡で古墳時代中期の竪穴建物跡が確認されている。

古代

古代（平安時代）の調査事例のうち、城ヶ尾遺跡では掘立柱建物跡 1 棟を確認し、土師器・須恵器・製塙土器等の遺物が出土している。また山城第 1 遺跡第 3 次調査でも、掘立柱建物跡 1 軒が検出されており、柱穴への一括廃棄と考えられる土器集積遺構が確認されている。真米田遺跡（高城町）では大型掘立柱建物跡をはじめとする掘立柱建物跡および柵列を合計 28 棟、楕円形周溝墓 1 基、土師器焼成土坑や井戸跡を含む土坑を 71 基、溝状遺構 13 条等が確認されており、風字硯や中国産の貿易陶磁器や国内産の縁釉陶器の出土から在地有力者の居宅跡あるいは公的施設の一部と考えられている。

古代～中世にかけての遺跡としては、七日市前遺跡（高城町）が挙げられる。七日市遺跡では、掘立柱建物跡 5 棟と古代の溝状遺構、中世の土坑等が確認されている。土坑内からは、近辺に存在したと伝えられる高称寺（時宗）との関連を窺わせる錫杖も出土している。

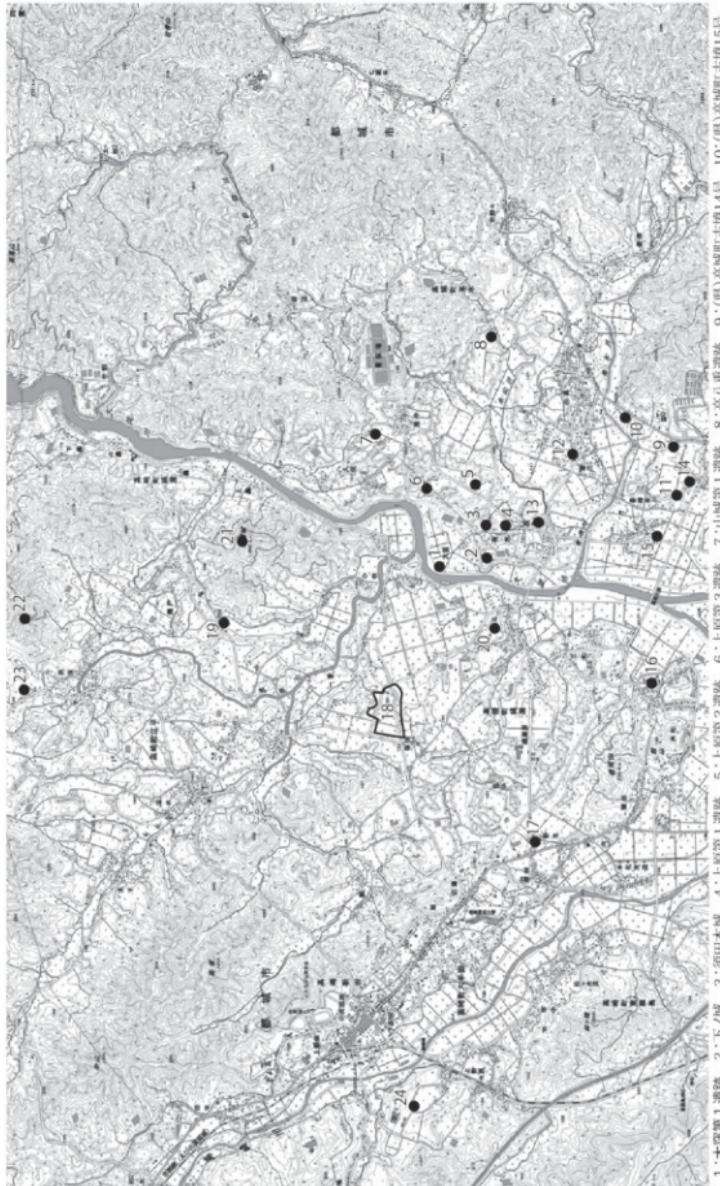
中世

南北朝期になると高城町でも高城（月山日和城）はじめとする中世城郭が造営されるようになる。高城は、南九州の典型とも言える群郭式の城で大規模な堀で独立させた 7 つの曲輪で構成されており、肝付兼重が南朝方の拠点として、北朝方の畠山直顥と争う等、庄内の乱まで激しい争奪戦が繰り広げられていた。

大窟第 1 遺跡周辺に目を向けると、遺跡南側台地上には、応永年間（1400 年頃）に島津豊久によって築かれた下之城（三俣下城）やその支城須田木城（古城）が確認されているほか、大淀川を挟んだ西岸の丘陵上に柳の城、北側山上には元亀 2 年（1571 年）に伊東義祐が伊東加賀守を配した木場城（とともに高崎町）が見られる。なお、明応 4 年（1495 年）に伊東氏が三俣院を手中に治めた際、下之城に福永丹波守を配するなど、この地が戦略上の要所であったことが窺える。

引用・参考文献

- 宮崎県 1981 「小林・西諸県地域 土地分類基本調査 野尻」
- 高城町教育委員会 1989 『城ヶ尾遺跡』 高城町文化財調査報告書第 1 集
- 高城町教育委員会 2004 『細井地区遺跡群』 高城町文化財調査報告書第 14 集
- 高城町教育委員会 2005 『雀ヶ野遺跡群』 高城町文化財調査報告書第 18 集
- 高城町教育委員会 2005 『高取原地下式横穴墓』 高城町文化財調査報告書第 19 集
- 高城町教育委員会 2005 『牧ノ原遺跡群』 高城町文化財調査報告書第 20 集
- 宮崎県教育委員会・南九州城郭談話会 1999 『宮崎県中近世城跡緊急分布調査報告書 II』 解説編
- 都城市教育委員会 2013 『平松遺跡』 都城市文化財調査報告書第 108 集
- 都城市教育委員会 2014 『真米田遺跡・七日市前遺跡』 都城市文化財調査報告書第 111 集



1:大塙第1遺跡 2:トノ坂
3:須田木城 4:上原第1道路 5:上原第2道路 6:上原第3道路
7:山坂1号 8:高八重道路 9:(県)高崎町古墳14号 10:(県)高崎町古墳15号
11:(県)高崎町古墳16・17号 12:(県)高崎町古墳19・20号 13:(県)高崎町古墳21・22号 14:高崎原地下式巻六塚群
15:高崎原地下式巻六塚群 16:柳原地下式巻六塚群 17:原村上地下式巻六塚群
18:(県指定)高崎町古墳(高崎城跡古墳) 19:櫛原城 20:柳原城 21:木出城
22:すかしの城 23:朴木城 24:仁野野猪跡

第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

第Ⅱ章 調査の概要

第1節 調査の方法と経過

工事は、調査対象地の中央付近で二分割し、同時進行していくため、調査区については下流側をA区、上流側をB区に設定し、それぞれの工事工程を勘案して、A地区をさらに三分割（南からA1・A2・A3区）、B区は二分割（北からB1・B2区）した。

平成25年4月の協議では、A区に河川敷に降りる工事用道路を設置する必要が生じたため、工事用道路をA3区に設置、A1区及びA2区南半分に堆土を置き、A2区から調査を行うことになった。またB区では法肩の工事を急ぐためB2区北側に工事用道路を設置し、B1区の調査から行うことになった。またA区の一部には竹や立木等が残された状態になっており、伐採作業や工事用道路設置が終わるのを待って、本調査を開始することになった。なお、4月15日には竹の抜根作業及び土質試験の立ち会いを行っている。

調査は、国上座標（X=、Y=）を起点に10m×10mグリッドを1単位として調査区全体に覆うように設定し、南北方向にアルファベット（北よりABC…）、東西方向に算用数字（東より1.2.3…）を付したものと組み合わせてグリッド名（例：A1グリッド）とした。遺構番号や遺物取り上げ番号については、同時並行で調査を行うことで番号の重複が想定されたことから、それぞれの地区で番号を付けている。なお遺構番号については、両地区併せて報告することから、整理作業時に連番に振り直した。

掘り下げについては、基本的に表土（I層）から高原スコリア層（III層）まで重機による掘削を行った後、黒色土層（IV層）から人力による掘り下げを行っているが、A区南端や中央部のように表土下がすぐ霧島御池軽石層（VII層）を確認したところも認められた。面的な掘り下げを行うに先立ち、地形に沿ってトレーナーを設定して掘り下げ、土層の観察や遺構・遺物の有無とその広がりを確認しながら、グリッドごとに掘削、遺構・遺物を確認した時点で、周辺に拡張する方法をとった。なお、遺構検出は、上記以外にも黒色土層（VIa層）及び霧島御池軽石層（VII層）上面で行っているが、なかにはにぶい黄褐色土層（Va層）上面で検出したものもある。

遺構実測は、基本的に土坑等を縮尺1/10、豎穴建物跡及び柱穴、溝状遺構の土層断面等を縮尺1/20での手測り実測による図化を行ったが、溝状遺構や柱穴の一部については、トータルステーションを用いて記録した三次元座標を基にデジタル図化も行っている。

また出土遺物のうち、包含層のものについては、基本的にトータルステーションを用いて三次元座標の記録を行っているが、遺物集中箇所については、別途、縮尺1/10で図化作業を行っている。

写真撮影は関しては、基本的に35mmの小型フィルムカメラでカラーリバーサルフィルムとモノクロフィルムを用いて撮影したほか、デジタルカメラでも記録を行っている。なお、遺構の一部については、6×6cmの中判フィルムカメラも使用して撮影を行った。また空中写真については、VII層上面で撮影を行っている。

以下、調査区ごとに調査の経過を説明していきたい。

平成25年5月7日からA2区及びB1区の表土剥ぎを行い、その後5月15日から作業員を雇用して掘り下げ作業を開始した。

開始してまもなく、A区側の工事計画の変更に伴い、早急にA1区の工事を行う必要が生じた。こ

のため急遽6月からA1区に変更して行うことになった。A1区については6月3日から重機による表土剥ぎを行い、人力による包含層掘削後、VII層上面で遺構検出を行い、遺構の掘り下げを行った。7月18日に空中写真撮影、22日に調査を終了した。

A2区については、7月8日から調査を再開し、29日からA2区南側の表土剥ぎを行った。調査では、南北に延びる埋没谷が入る関係で堆積が厚く、そこから古代の土師器等が多量に出土するなど時間を要した。11月8日に空中写真撮影し、調査を終了した。

A3区は11月11日から重機による表土剥ぎを行った。調査区南側については、表土を剥ぐとVII層が確認したが、こちらでも南北に延びる浅い埋没谷が確認された。2月に入ると雨が多くなったことにより、検出した竪穴建物跡が水没する等、作業進捗が大幅に遅れ、3月3日に空中写真撮影、終了後に調査区南側にトレーンチを4箇所（A Tr 7～10）設定し、VII層・VIII層の掘り下げを行ったが遺構・遺物等は確認されなかった。11日からは重機の埋め戻しを行い、14日に終了した。

B1区については、前述の通り、5月15日から作業員を入れて包含層掘り下げを行った。竪穴建物跡や溝状遺構、土坑、ピット群を検出し、8月28日に空中写真撮影、29日に終了した。

B2区は9月6日からの重機による表土剥ぎ、18日から包含層掘削作業を開始した。表土剥ぎ作業中に、今度はB区側の工事計画が変更され、12月に調査区北側に新たな工事用道路を作る必要ができた。このため、北側の調査を優先して進めることになり、北側については11月29日に空中写真撮影、12月2日に地形測量を行い、3日に調査を終了した。残り南側については、2月4日に空中写真撮影を行い、遺構実測及び土層断面実測を10日に終了した。12日からはトレーンチを7箇所（B Tr 1～7）設定し、重機を使ってVII層除去作業を行った。さらにB Tr 2・5についてはX層上面まで掘削を行い、うちB Tr 5の一部についてはX層の層厚を確認するため、さらに掘り下げたが湧水のため、それ以上の掘削を断念した。B Tr 2についてもその後の降雨で水没したため、掘り下げを行えなかった。残りの5箇所については黒色土（VII層）以下の掘り下げを行ったが、IX層中またはX層上面で水がしみ出し始めたため調査を断念した。遺物や遺構等は確認されなかった。2月28日に重機や水中ポンプを使って埋め戻しを行い、同日終了した。

なお、調査で検出した遺構の一部については、埋土中で炭化物が多量に認められたことから、センターに埋土を土嚢袋に入れて持ち帰り、平成26年度にフローテーションによる選別作業を行った。

地 区 名	平成25年											平成26年		
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
A	1		6/3		7/22									
	2		5/7	7/8			11/8					
	3								11/11			3/14		
B	1		5/7		8/29								
	2	北				9/6		12/3					
		南			9/6	10/6				2/28		

第1表 調査工程表



第2図 調査区配置図

第2節 遺跡の層序

本遺跡の基本層序は、A・B区の層序を組み合わせて設定した。

I層：2層に分層でき、I a層は現表土、I b層は現代の造成土である。

II層：やや硬質でしまりが有る黒褐色土で、霧島高原御鉢スコリアを散漫に含む。旧耕作土である。

III層：霧島高原御鉢スコリア層（1235年）である。

IV層：やや硬質でしまりが有る黒色土で、スコリア（霧島高原御鉢スコリアか）の有無で2層に分層（a, b）できる。そのうちa層では3mm以下のスコリアを僅かに含む。b層はB区の南側～東側のみで確認できる。遺物包含層である。

V層：やや硬質でしまりが有るにぶい黄褐色～黒褐色土で5mm以下の霧島御池軽石を僅かに含む。2層に分層（a：にぶい黄褐色、b：黒褐色土）でき、b層はVI層との漸移層でa層より粘性がある。B区では、ほとんど確認できなかった。遺物包含層である。

VI層：粘性が強く、しまりが有る黒色土～黒褐色土層で、霧島御池軽石の含有量により、さらに2層に分層（a, b）でき、下位にいくほど同軽石の含有量が多い。両地区で確認できるが、b層についてはA区の谷間で存在しない箇所も認められた。遺物包含層である。

VII層：霧島御池軽石層（約4,600年前）

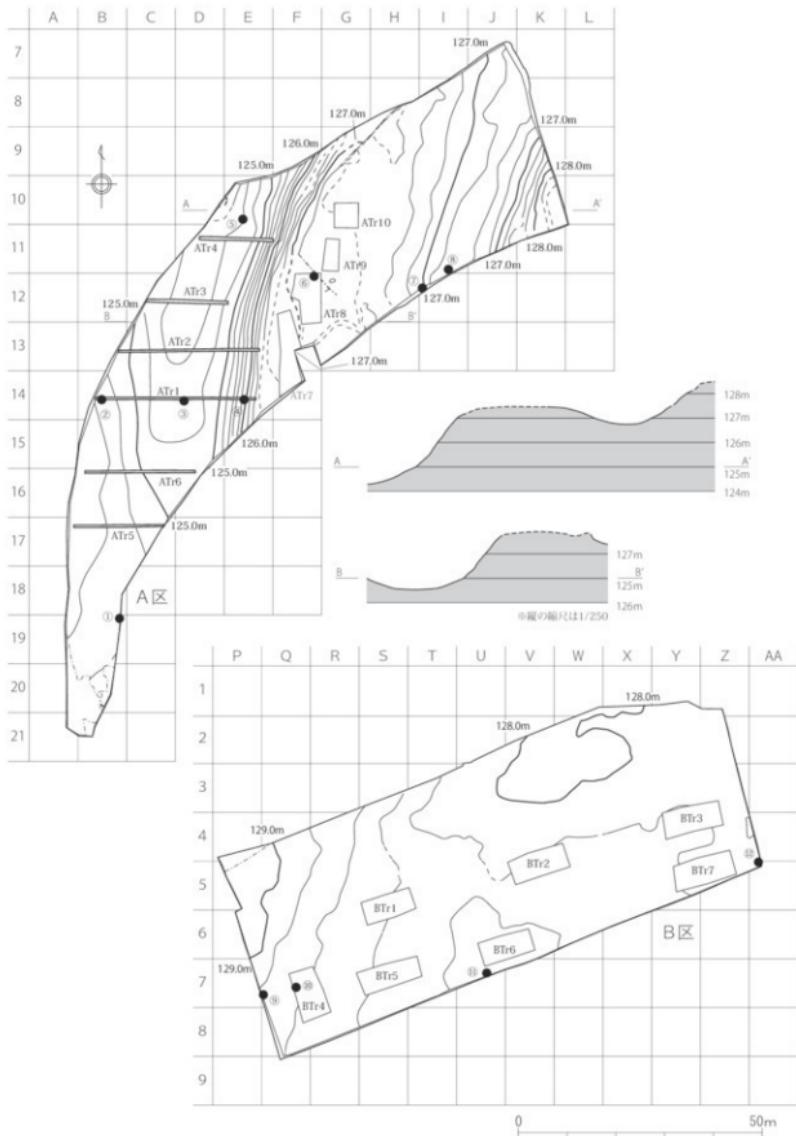
VIII層：細粒で粘性が強く、しまりが有る黒色土層。無遺物層。

IX層：水気を帯び、細粒で粘性が強く、しまりが有る暗褐色土。鬼界アカホヤ火山灰粒を散漫に含む。B区では全てのトレンチ（B Tr 1～B Tr 7）で確認した。無遺物層。

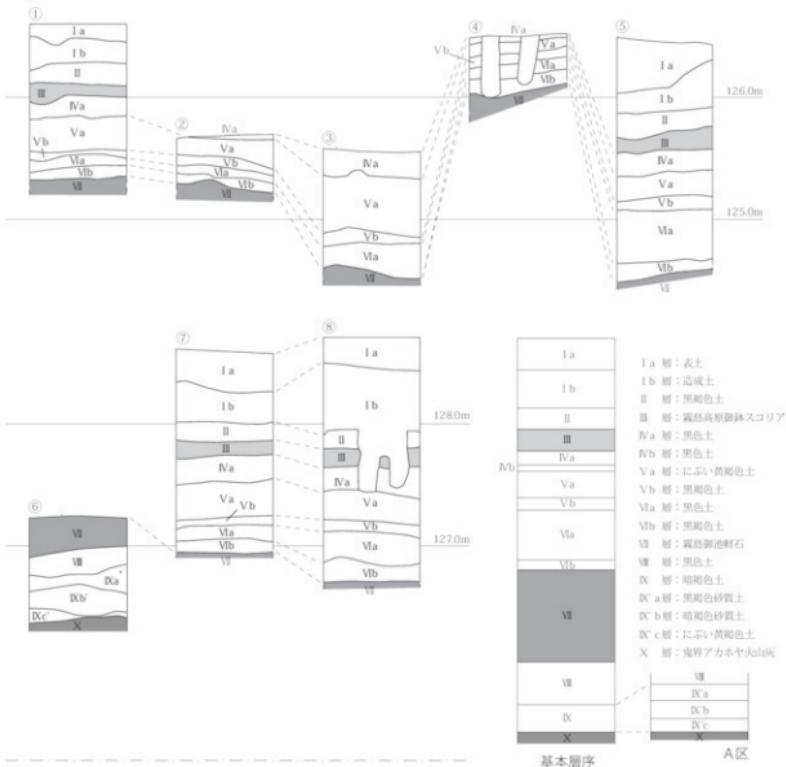
X層：霧島御池軽石層（約7,400年前）

A区はC・D列やJ列を中心に二箇所に埋没谷が入るなど複雑な地形を呈しているため、斜面では堆積が薄く、谷間では堆積が厚い傾向にある。またA Tr 7～A Tr 10付近とK 11グリッド付近は、削平を受けI層下はVIII層となっていたが、それ以外ではIII層以下は確認されている。対してB区では北西から北東に向かって緩やかに低くなっている、堆積も比較的安定している。B区西側では、IV層まで削平を受けているところも多いが、それ以外では、III層以下が確認されている。また両地区では、層位横転（倒木痕）が多く確認されている（図版3）。ほとんどのものがVI層～VII層が横転しているものも多いが、V層やVIII層が含まれるものも認められたほか、7m規模の大型のものも認められた。

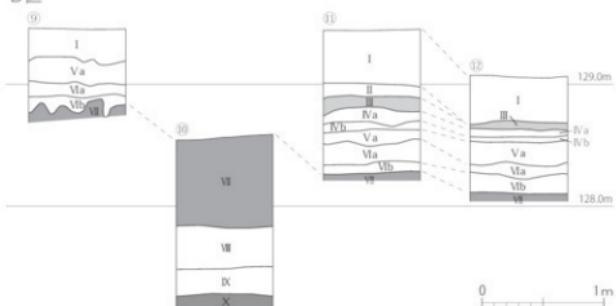
遺物包含層は、両区ともIV a層～VI b層で、縄文時代～古代の遺物が複数層にまたがって出土している。そのうち縄文時代のものは、V a層中位～VI a層を中心に出土しており、傾向としてVI a層に出土が多い。弥生時代に関しても、縄文時代のものと同様でV a層中位～VI a層を中心に出土しているが、V a層中位に出土が多い傾向にある。古墳時代は、一部IV層やVI a層でもみられるが、V a層を中心に出土している。古代については、一部でVI a層出土が見られるものの、IV a層～V a層を中心に出土しているおり、V a層の出土が多い傾向にある。なお近世の遺物については、ほとんどが搅乱土中からの出土である。



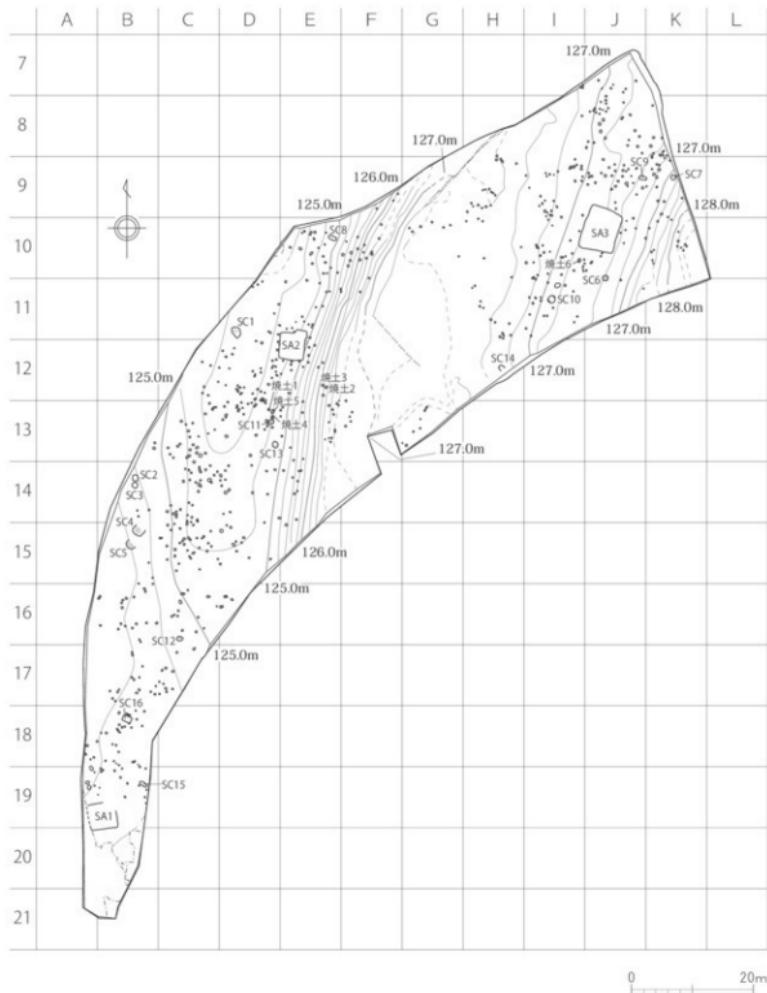
A区



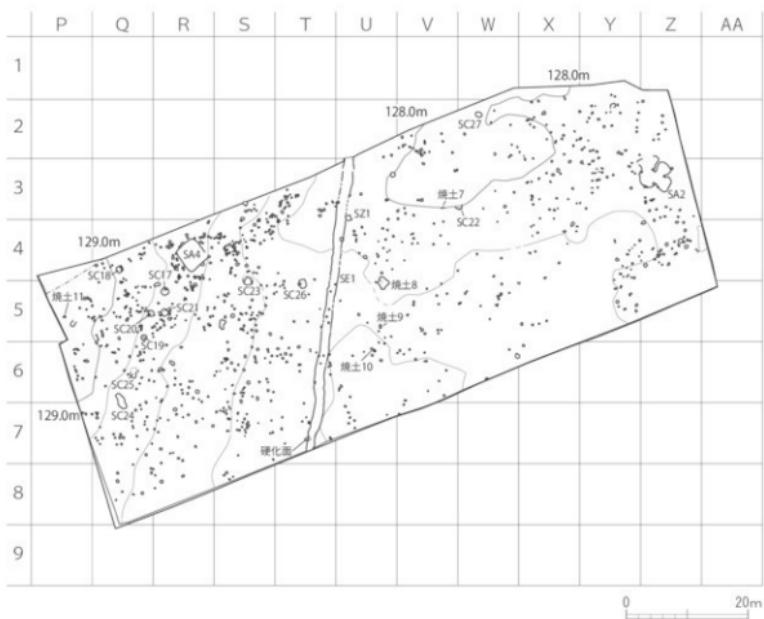
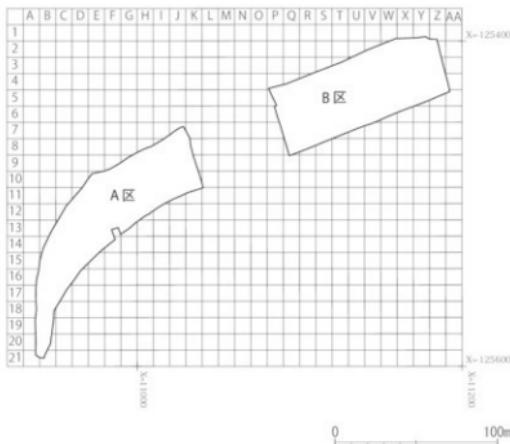
B区



第4図 土層柱状図 (S=1/40)



第5図 A区遺構分布図 (S=1/800)



第6図 B区遺構分布図 (S=1/800)

第Ⅲ章 調査の記録

第1節 繩文時代後晩期の遺構と遺物

本遺跡では、A区及びB区の両方で縄文時代の遺物が約1,500点確認されており、そのうちB区が約86%を占める。また当該期の遺構は、B区で土坑9基（SC 17・18・20・21・23・24～27）をVII層上面で確認した。埋土は、いずれも御池軽石を含む黒褐色土で、2層から3層に分層される。なお、VII層上面で検出したピットのうち、一部で弧状に巡るものも認められた。

1. 遺構

（1）土坑

17号土坑（SC 17）（第7図、第8図1・2）

B区R5グリッド北西部で検出した。規模は1.2m×1.18mの円形に近いプランを呈し、検出面からの深さは0.59mである。北東側はピットに切られている。遺物は、遺構上部から中程にかけて出土している。また炭化物も認められたことから、埋土をサンプリングし、フローテーションによる選別作業を行ったが、種実等は確認されなかった。

出土した遺物のうち、1は小振りな鉢の器形で、器面に磨きを施す黒色磨研土器系の精製品である。口縁部の肥厚帯とその下部、および胴部の屈曲部に細い沈線を巡らせる。2は深鉢の口縁部であろう。外面は粗めのナデ調整である。

18号土坑（SC 18）（第7図、第8図3）

B区Q4グリッド南部中央で検出した。南東約8.5m先には、17号土坑が位置する。土坑の東側はピット3基に切られているが中場から底面の形状より、楕円形プランを呈しているものと考えられる。また東側の中場には、テラスが認められる。規模は1.03m×0.8m+α、検出面からの深さは約0.4mである。

遺物は、遺構上部から中程にかけて出土している。3は断面三角形の刻目のない突堤の部位で、晩期土器の鉢か深鉢の口縁部近くと推測される。

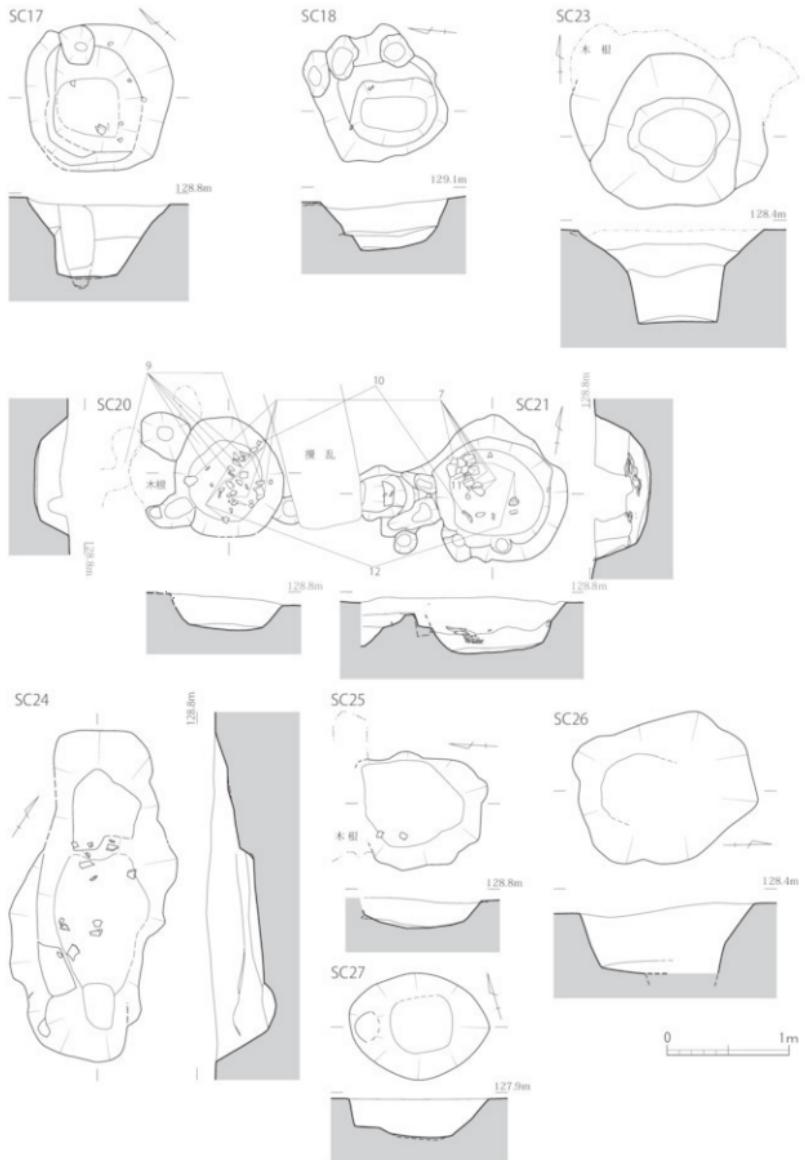
20号土坑（SC 20）（第7図～第9図5～7・9～12・14）

B区Q5グリッド中央東側からR5グリッドにかけて検出した。東へ約1m先には、21号土坑が位置する。規模は0.98m×0.9mの楕円形プランを呈し、検出面からの深さは0.27mである。西側や東側は、ピットや木根等に切られている。

遺物は、遺構上部から下部にかけて出土している（5～7・9～12・14）。そのうち6や9・10・12・14の遺物については、後述する21号土坑内の土器片と接合関係にある。11・12は晩期の浅鉢で、同一個体の可能性がある。外面にミガキを施し、黒褐色の色合いとなる。胴部は稜線を形成して屈曲する。口縁部内面には明瞭な沈線を巡らせる。11には補修孔が認められる。また12の口縁部と胴部には、リボン状、あるいはヒレ状の突起が付される。14は平底の精製浅鉢ないしは鉢であろう。薄手で、外面はよく研磨されて黒色を呈する。

21号土坑（SC 21）（第7図～第9図4・6・8～10・12～14）

B区R5グリッド中央西側で検出した。規模は1.25m×1.07m+αの楕円形プランを呈し、検出



第7図 土坑実測図 ($S=1/40$)

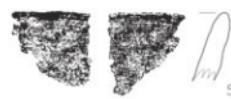
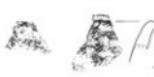
SC17



SC18

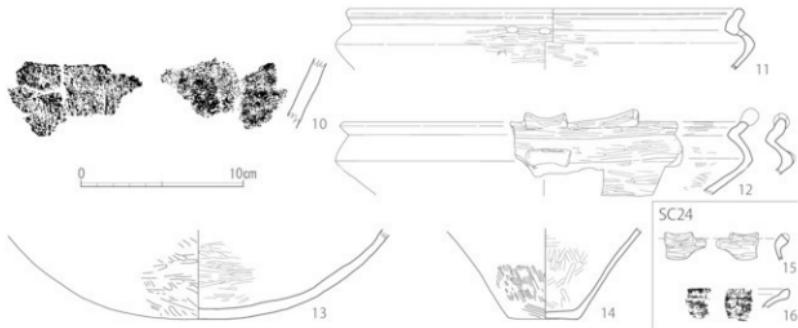


SC20 + 21



0 10cm

第8図 土坑内出土遺物実測図1 (S=1/3)



第9図 土坑内出土遺物実測図2 (S=1/3)

面からの深さは0.45mで、20号土坑と比べ一回り大きい。なお西側は、ピット等に切られている。

遺物は、遺構中部から下部にかけて出土している(4・6・8~10・12~14)。8は晩期土器の深鉢。口縁部に肥厚帯を巡らせる。肥厚帯の下に補修孔とみられる穴が認められる。外面・内面とも粗い条痕を施す。内面はケズリ状となる。二次的な火熱を受けたためか変色している箇所がある。9は晩期の深鉢で口縁部に幅約2cm肥厚帯を巡らせる。13は浅鉢の底部か。外・内面にミガキを施す。ただし単位は粗大で、タッチも14などと比較すると粗い。

23号土坑 (SC 23) (第7図)

B区 S 4 グリッド中央南側から S 5 グリッドにかけて検出した。西へ約12m先には、17号土坑が位置する。規模は $1.67\text{m} \times 1.32\text{m} + \alpha$ の楕円形プランを呈し、検出面からの深さは0.74mである。断面形は底面から中場にかけてまっすぐに伸び、中場から上場にかけて外方向へと開く。なお北側は、木根等に切られている。遺物等は確認されていないが、埋土の特徴や周辺の遺物出土状況より当該期のものとした。

24号土坑 (SC 24) (第7図、第9図 15・16)

B区 Q 6 グリッド中央南側から Q 7 グリッドにかけて検出した。北東へ約3.5m先には、25号土坑が位置する。規模は $2.72\text{m} \times 1.26\text{m}$ の長楕円形プランを呈し、検出面からの深さは、最深で0.5mを測る。また北側には $0.64\text{m} \times 0.54\text{m}$ 不整形のテラスを有し、底部南側には窪みが見られることからピットや別土坑と複数切り合っている可能性も考えられたが、土層断面では判断できなかった。

遺物は遺構上部から中部で確認されている。15と16は晩期の浅鉢。15は玉縁状の口縁部突帯を巡らせる。当該期の土器の特色であるリボン状の突起を付す。16も同様の口縁部突帯が認められる。なお出土した土器片のうち、Q 6・Q7 グリッド等で出土している組織痕土器(99・100)と接合するものも確認されている。

25号土坑 (SC 24) (第7図)

B区 Q 6 グリッド中央で検出した。北側は木根等に切られている。規模は $1.0\text{m} + \alpha \times 0.96\text{m}$ で底面の形状から楕円形プランを呈すると思われる。検出面からの深さは、0.26mである。遺物は遺構上部で縄文晩期の土器小片が確認されている。

26号土坑（SC 26）（第7図）

B区T4グリッド中央南側からT5グリッドにかけて検出した。西へ約7.8m先には、23号土坑が位置する。規模は1.48m×1.2mの楕円形プランを呈し、検出面からの深さは0.58mである。底面の北側は、ピットに切られている。遺物等は確認されていないが、埋土の特徴や周辺の遺物出土状況より当該期のものとした。

27号土坑（SC 27）（第7図）

B区W2グリッド中央よりやや北西部寄りで検出した。他の遺構の分布から離れており、26号土坑とは約39m離れている。規模は1.18m×0.88mの楕円形プランを呈し、検出面からの深さは0.3mを測る。南側にはテラスを有する。遺物等は確認されていないが、埋土の特徴や周辺の遺物出土状況より当該期のものとした。

2. 包含層の遺物

（1）土器（第11図～第17図 17～105）

包含層から出土した縄文土器は、後期から晩期にかけての時期に属するものである。後期に属する土器はほとんどが小片であり、数量的にも晩期に属するものが多い。以下、特徴的な個体について所見を記す。

後期（第11図 17～33）

17の外縁文様は、沈線による区画を意図するもので、縄文の施文は認められないが、磨消縄文系の影響を受けた後期前葉の土器の特徴とみられる。

20・21と23・24は貝殻文系に属する土器で、外縁の口縁部に貝殻腹縁による横方向に連続する圧痕文を施す。

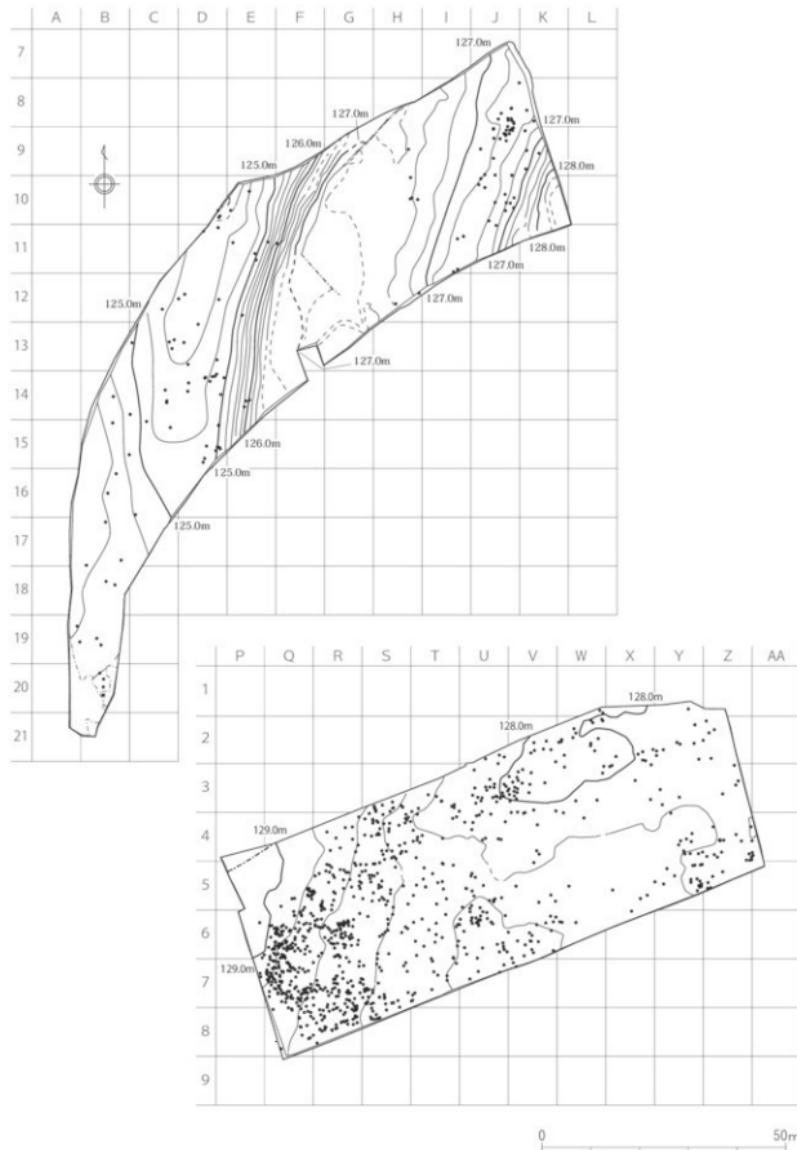
22は北久根山式に特徴的な口縁部を肥厚させる深鉢。波状口縁となる。口唇部には刻目が入る。外面には斜方向の短沈線文を施す。

25～29は口縁端部を肥厚させ、外面に横方向の沈線文を施す。28と29には肥厚させた文様面の下部に列点文を施文する。いずれもミガキ調整がなされる。31は頸部が屈曲し、おそらくは球形に近い胴部が付く深鉢か鉢と思われる。頸部には列点文を施し、胴部の沈線間に複数の縄文が認められる。32も同様の特徴を有する口縁下部～頸部にかけての破片である。33も同種の胴部で細い沈線の間に不明瞭ではあるが縄文が施されている。

晩期（第12図～第17図 34～105）

34は胴部の張る器形の深鉢で、口縁部は直線的に外に開く。わずかに頸部近くが厚くなり、頸部に段が形成される。口縁部も含めて外面は粗いナデ調整が施される。内面も調整は丁寧ではなく、特に胴部には接合痕が明瞭に残る。35も同種の深鉢。36は深鉢の肩部～胴部にあたる。外面の肩部以上は比較的丁寧なナデ調整が施されるが、胴部は粗めの貝殻条痕が施される。ただし、器面の全面がケズリ状の調整によって多孔質となるという説ではなく、部分的にはミガキ状の調整による光沢も発している。色調は、当該期の深鉢に多い黒褐色系ではなく、黄色味が強い。37は鈍く「く」字形に屈曲する深鉢で、外面は貝殻条痕を施す。

40と42は口縁部が内湾する器形を呈する。鉢であろう。42は口縁部外面の上部は接合の痕跡が明



第10図 縄文時代後晩期遺物分布図 (S=1/1,000)



第11図 繩文土器実測図1 (S=1/3)

瞭に観察できる。内面はミガキ調整がなされる。

43は、全体形は不明だが、胴部が鈍く屈曲する深鉢であろう。口縁端部にはいわゆる鱗状の突起が付く。また、屈曲部付近に横方向の瘤状の短い突帯が付く。外面口縁部と内面の屈曲部以下には貝殻条痕が施される。44は口縁部がほぼ直に立ち上がる鉢であろう。屈曲部が認められ、丸味を帯びて底部に至るのであろう。口縁端部に鱗状突起が付く。

45と58は口縁部が内折する。深鉢あるいは鉢と考えられる。おそらくは後期後葉の土器に顕著な口縁部文様帶の残存形であろう。ただし、器面はミガキや丁寧なナデ調整がなされるが、外面に文様は認められない。

46～50は口縁部に肥厚帯を巡らせる深鉢ないしは鉢である。46は口縁部の肥厚部が蒲鉾状となり、図面ではあまり明瞭でないが、下部に鈍い段が形成される。外面に主に横方向の貝殻条痕が施される。47も特徴は似るが、肥厚部の幅は狭い。48は傾きから判断して鉢であろう。外面の上半部は横方向のミガキが施され、部分的に光沢を発する。下半部はやや粗めの工具によるナデ調整となる。49は肥厚部の幅が広く、下端は三角突帯状となる。肥厚部の下半部以下にススが付着している。50は肥厚部の幅は狭く、高さもわずかなものである。

51～57は刻目がない突帯が巡る深鉢、あるいは鉢である。このうち51～53は上述の肥厚部を形成する一群と特徴的に近い。54～57は肥厚帯の中位付近をなでつけることによって、その下端部に断面三角形の突帯状の高まりを形成する。なお57については、外面に付着する炭化物について年代測定を行ったところ、¹⁴C年代(AMS)は、2805±20年BP(暦年代:BC 1007～907年)の測定値を得ている。

59～64は孔列文を施す深鉢、ないしは鉢である。孔列は、いずれも外面からの刺突によるもので、内面まで貫通しない。59は胴下部のわずかな屈曲から、鉢に近い形状であった可能性が指摘できる。孔列文の近くは細めの工具によるナデ、それ以下はミガキ状のナデ調整である。60は断面「D」字形の突帯を巡らせ、その下部に孔列文を施す。62は内面に接合痕が明瞭に残る。外面はススが付着し、加熱による変質が認められる。64は、46などと同様の口縁部の特徴(肥厚帯)を有するものである。外面からの刺突により内面が瘤状に隆起している。外面は粗いナデ調整である。

65と66は、刻目突帯を巡らせるものである。65は胴部で屈曲する器形で、屈曲部の接合面で割れている。突帯の断面は三角形であるが、ところによっては断面「D」字形となる。器面には指頭によると目される凹部が認められる。

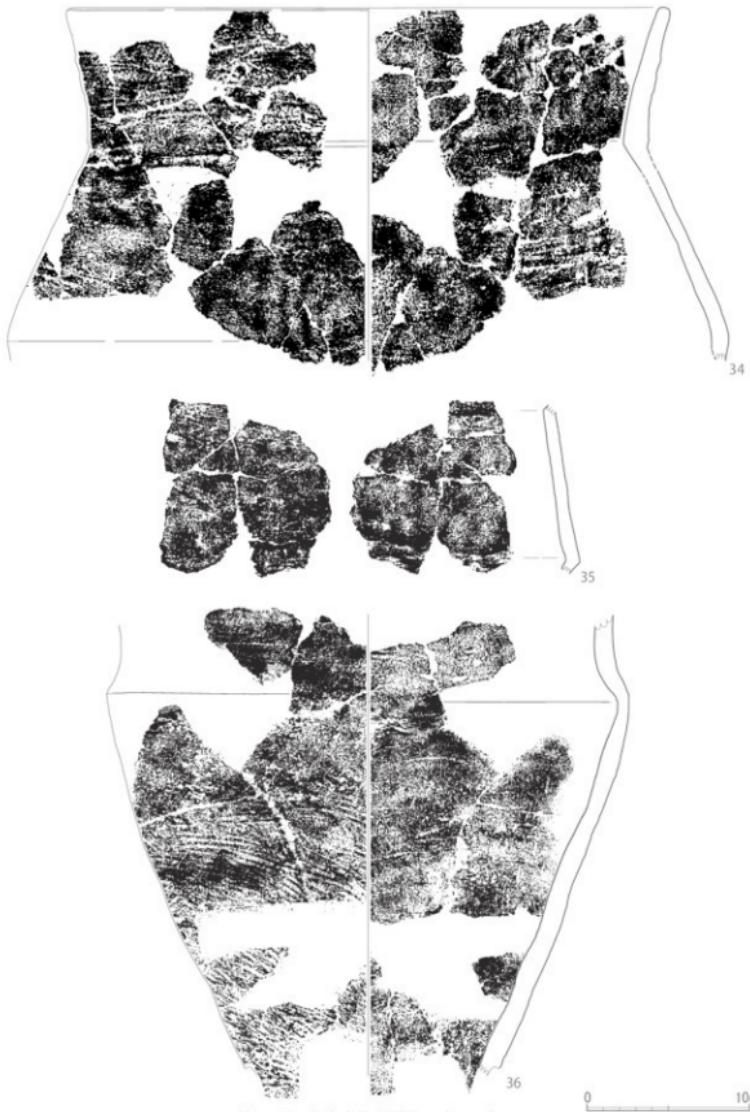
67～75は深鉢、鉢の底部。67は底面の小さなもの、68は上げ底となるもので、これらについては後期後葉に属する可能性が高い。72～74は円盤状の底面が外方に張り出す形状で、黒川式期に特徴的な個体である。

76～97は当該期の浅鉢である。そのほとんどが、器面が磨かれた精製品である。76は晩期前葉の特徴を有する。文様は認められない。77は胴部が球形を呈するもので、口縁部に外面、内面とも沈線が入る。胴部の最大径部付近とそのわずかに上部に接合痕が認められる。幅11mmほどの粘土紐であることがわかる。78も、おそらくは77同様の器形になると思われるが、口縁部外面には沈線ではなく、内面におそらくはその痕跡である段を形成する。78もやはり同じような特徴を有するが、内面は沈線が巡る。80～83は、浅鉢でも胴部が稜を成して屈曲する一群である。80は内面に沈線を施す。82は外面に沈線が巡り、内面は明瞭な段が形成される。84と85は口縁部の端部がわずかに立ち上がり、その外面に沈線を巡らせる。後期末葉～晩期前葉に顕著な口縁部文様帶の痕跡であろう。82よりも編年的に古期段階の資料であると考えられる。87と88は、口縁部の立ち上がりが消失したもので、その痕跡として、紐状の粘土を貼り付けた突帯が口縁端部に巡る。

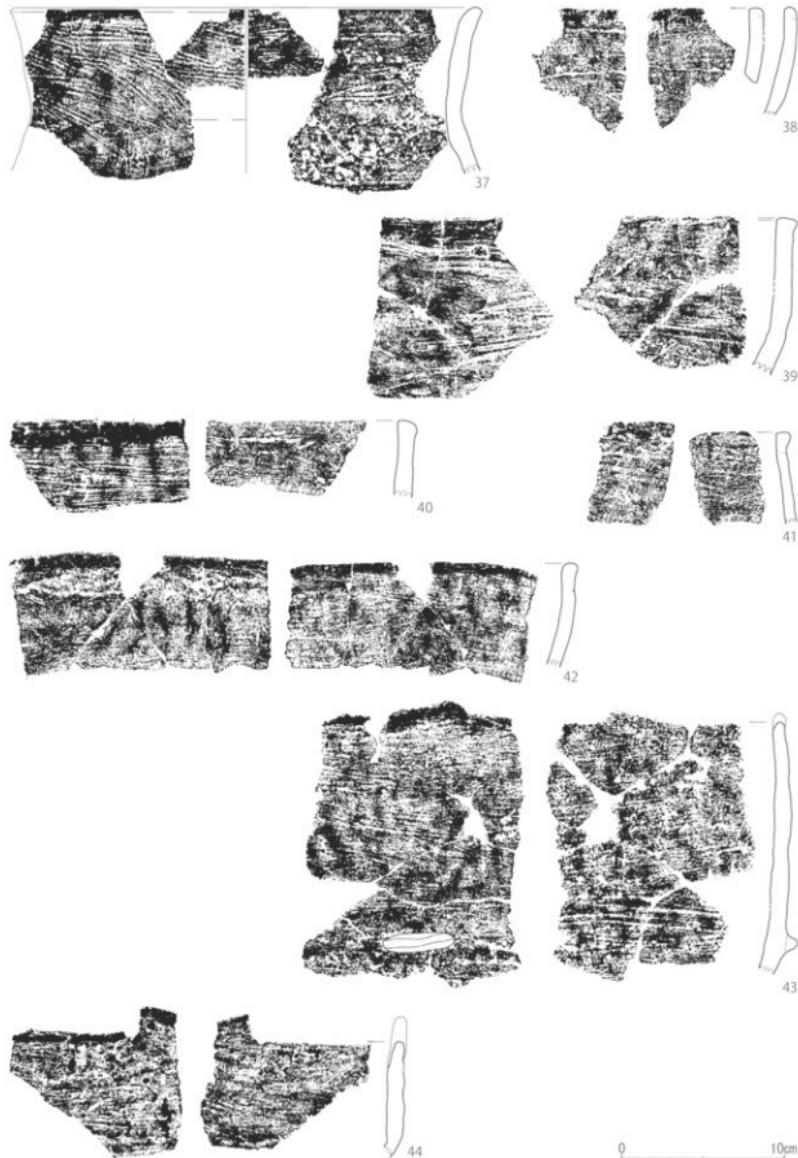
89～91や96・97は、波状口縁のおそらくは(95のような)平底となる浅鉢であろう。編年的に、刻目突帯文期に下る資料である。そのうち92、93には赤彩が施される。

98は口縁部が内済する鉢。外面は粗めのナデ調整である。

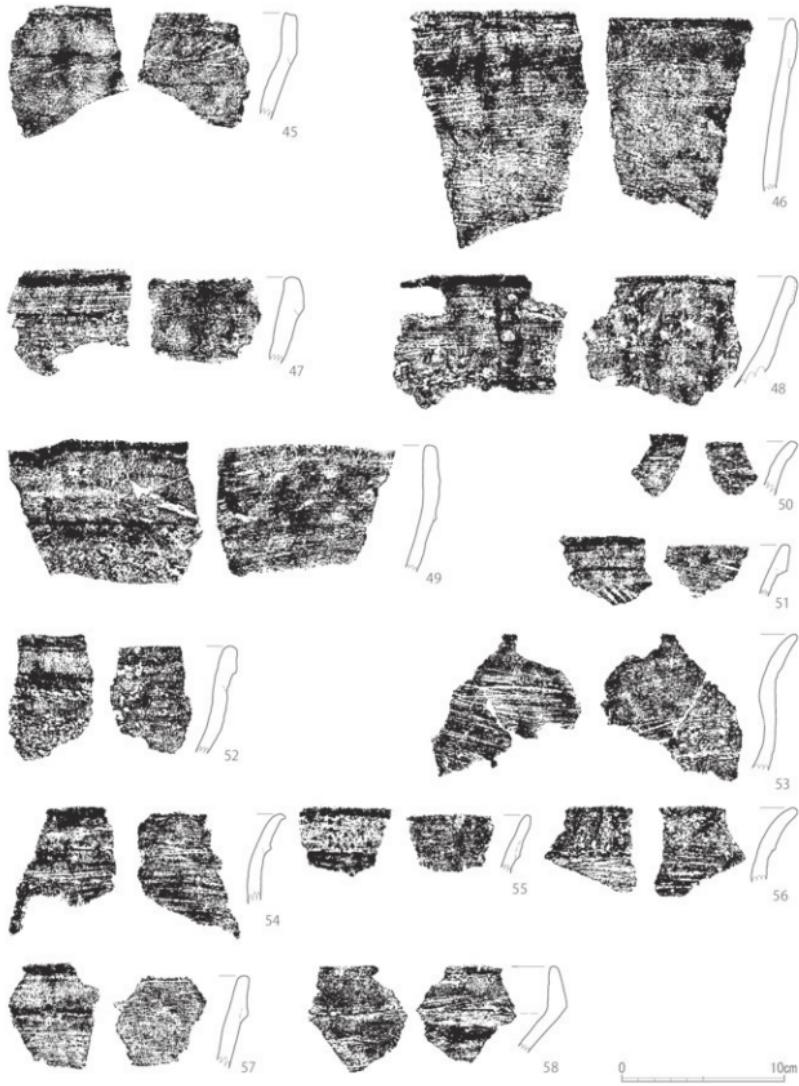
99～105は底部に席目の圧痕が残るもので、「組織痕土器」と称される一群である。99と100は



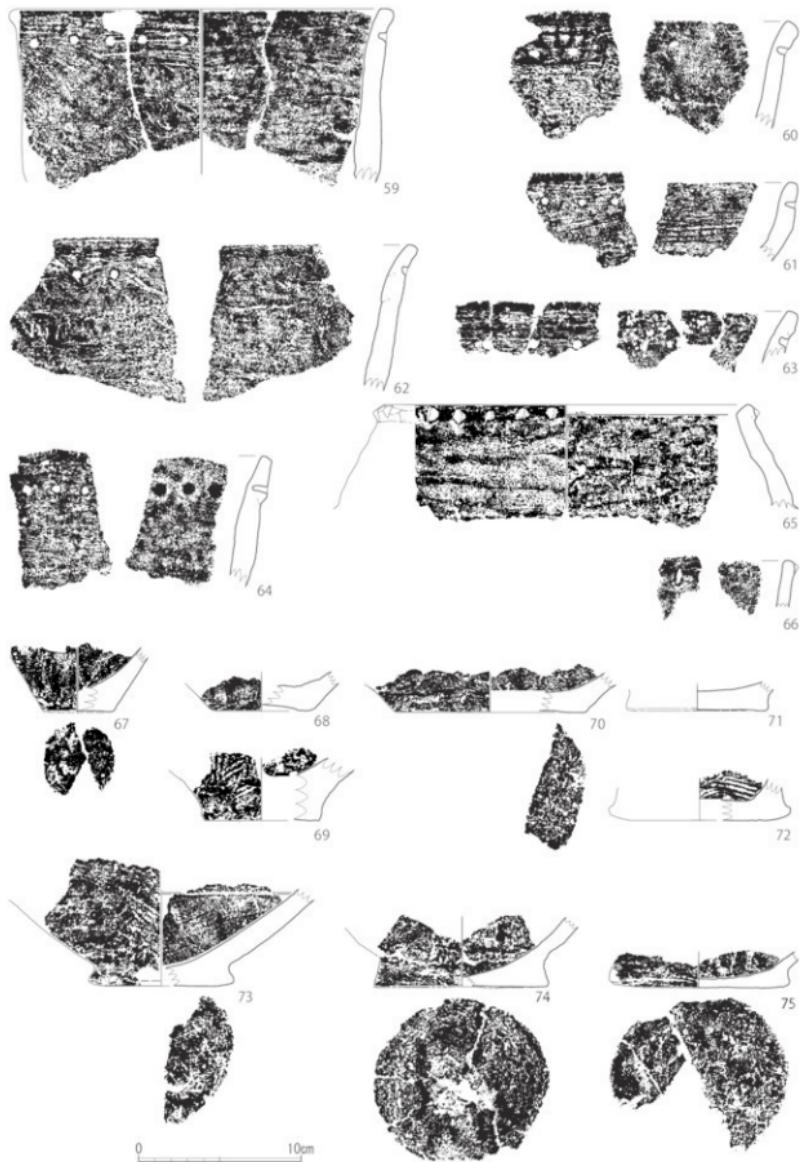
第12図 繩文土器実測図2 ($S=1/3$)



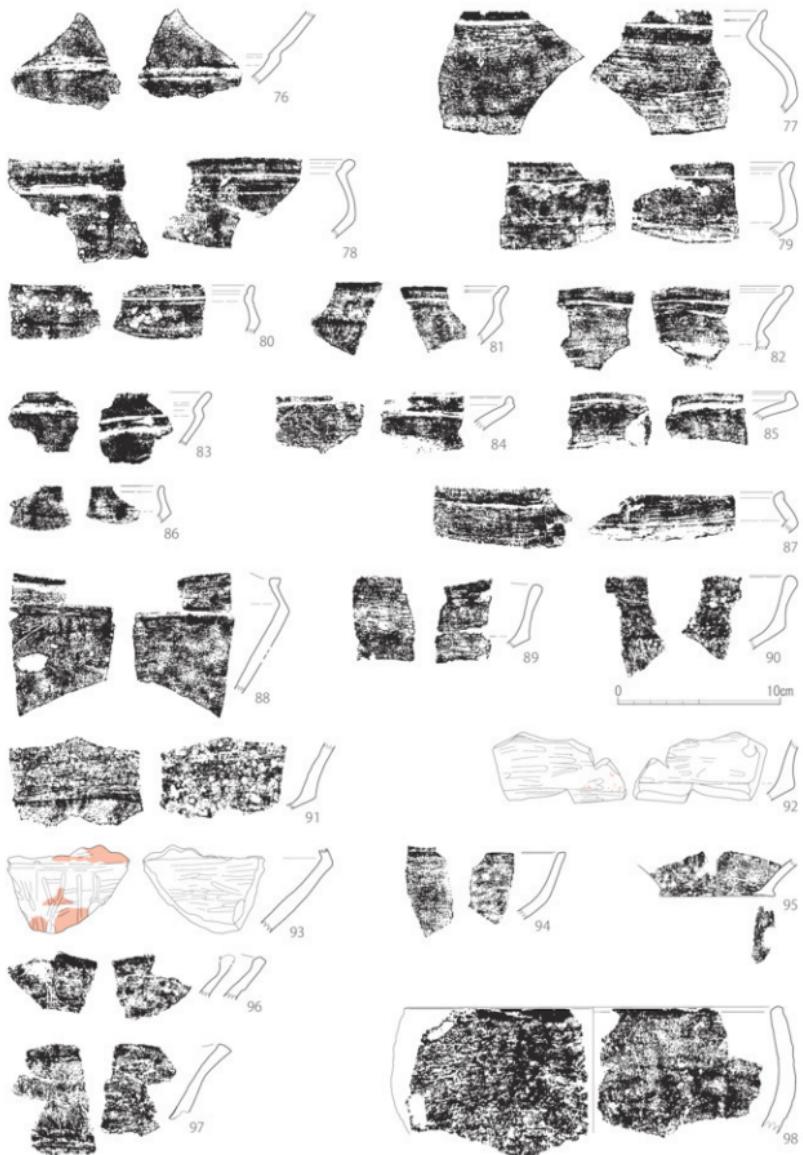
第13図 繩文土器実測図3 (S=1/3)



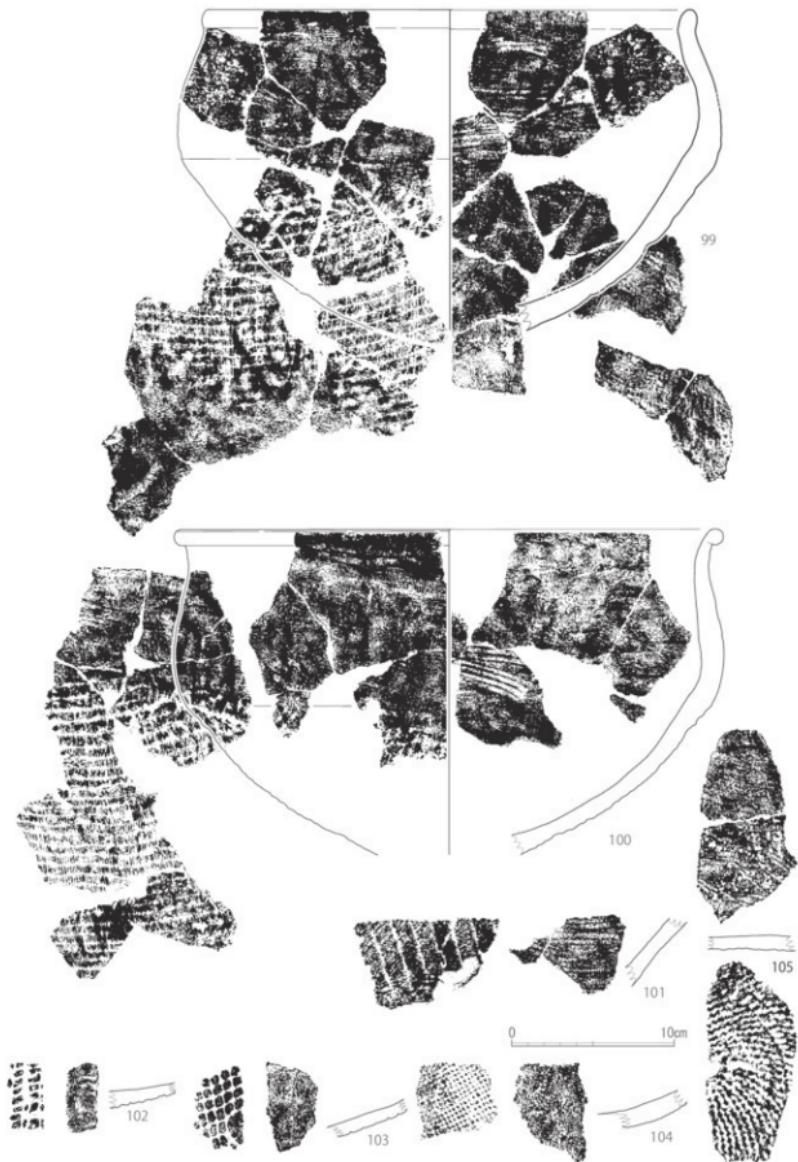
第14図 繩文土器実測図4 (S=1/3)



第15図 繩文土器実測図5 (S=1/3)



第16図 繩文土器実測図6 (S=1/3)



第17図 繩文土器実測図7 (S=1/3)

下底を除く器形の状況がわかる好資料である。99は口縁部が肥厚し、胴部で屈曲する。屈曲部以下に席目の圧痕が認められる。内面の下半部は丁寧な調整が施される。100も特徴は99とほぼ同じであるが、口縁の肥厚部がより高く、粘土紐貼り付けの痕跡が明瞭である。

(2) 石器（第18図～第23図 106～175）

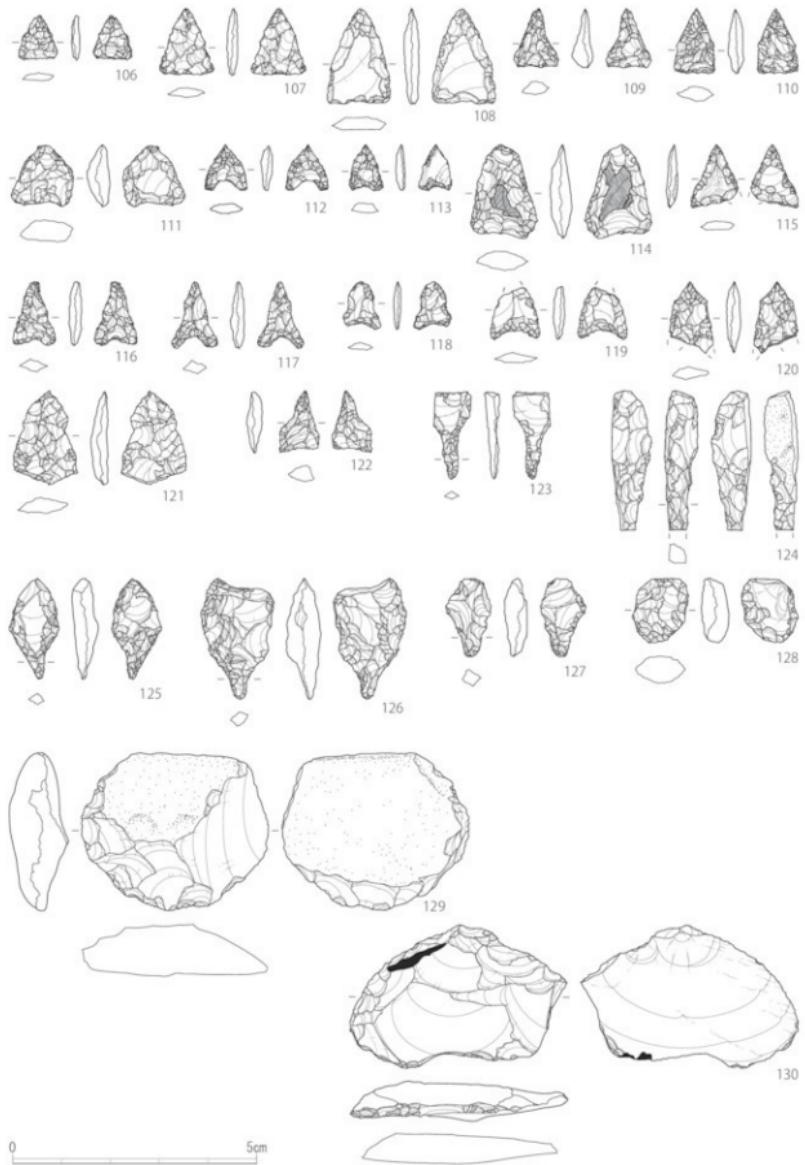
石器については、A・B区のV a層からVI a層にかけて出土している。石材については、チャートをはじめ、黒曜石や安山岩、ホルンフェルス、頁岩、砂岩、凝灰岩等が利用されているが、頁岩や砂岩、凝灰岩については、後の時代の利用もあることから時期を特定できないものもみられた。また黒曜石については、腰岳産や姫島産、竜ヶ水・三船産のものが認められるほか、ガラス質安山岩については多久産の可能性があるものがみられる。

106～122は石鏃である。B区で18点出土し、利用石材はチャート製が9点（109～113・116・117・121・122）と多く、黒曜石5点（106・107・115・120ほか）、頁岩（114）、砂岩（119）、ホルンフェルス（108）、ガラス質安山岩（118）である。うち17点を図化した。106～110は、基部が平基のもので、106は正三角形、107～109は二等辺三角形、110は五角形を呈する。うち108は先端及び縁周に加工を施すが、両面ともに素材時の剥離痕を大きく残す。また110は細かな調整があり、比較的丁寧な作りである。111～120、122は基部に抉りを有するもので、うち111・112は正三角形、113～119は二等辺三角形、120・122は、五角形を呈する。基部の抉りは、浅いものが多く、112や117のように比較的深いものも認められる。111の右脚部は直線的になっており、リダクションの可能性が高い。114は両面中央に摩滅が認められる。115は表面に研磨痕が認められるところから局部磨製石鏃と考えられる。118は先端が丸みを帯び、脚部が外方へと張り出す。119は両面ともに素材時の剥離痕を大きく残しているが、基部と裏面の両側縁に加工が施されている。122は右側が折損後、リダクションを行っている。121は、基部が欠損していており、一部再加工を行っている。

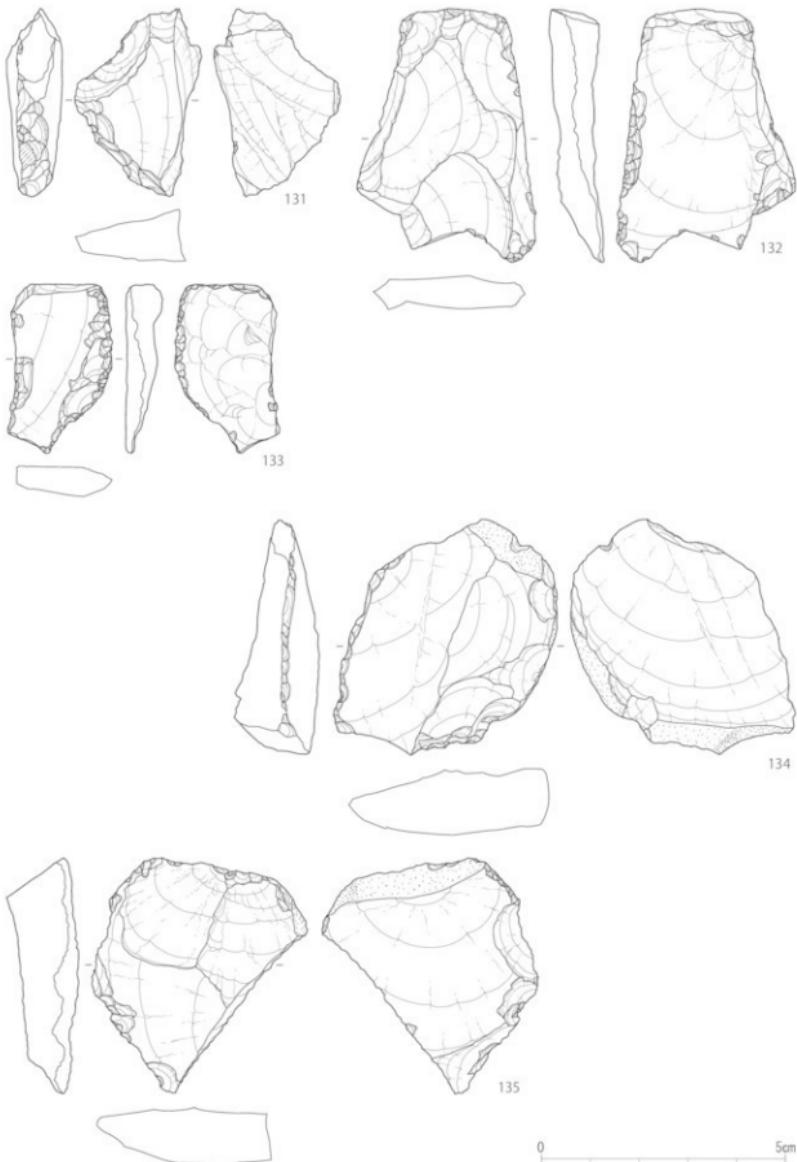
123～127石錐で全てB区のものである。石材は1点のみ砂岩（124）で、その他はチャートである。123は、長い錐部、頭部につまみ部を有するもので、素材時の剥離痕を大きく残す。124は棒状を呈し、長い錐部を有する。一部礫面を残す。125・127は菱形、126は逆五角形を呈し、短い錐部を有する。

128はB区出土の両面加工石器でチャート製である。打面部を残し、縁周に加工を施している。129～137はスクレイバーで、5点がA区、4点がB区出土である。石材は砂岩（129・131・132・134～136）、流紋岩（130）、チャート（133）である。このうち129～131は掻器、132～137は削器である。そのうち掻器については、129のように両面に礫面を大きく残し、両面からの加工により刃部を作り出していくものや130のように横長の剥片を利用し、主要剥離面からの加工により刃部を作り出していくもの等がある。削器のうち132・134・136は、一側縁に直線的な刃部を作り出しているのに対し、133・135は弧状の刃部である。137は両側縁に刃部を持つ。また132・134以外は両面から加工を施している。

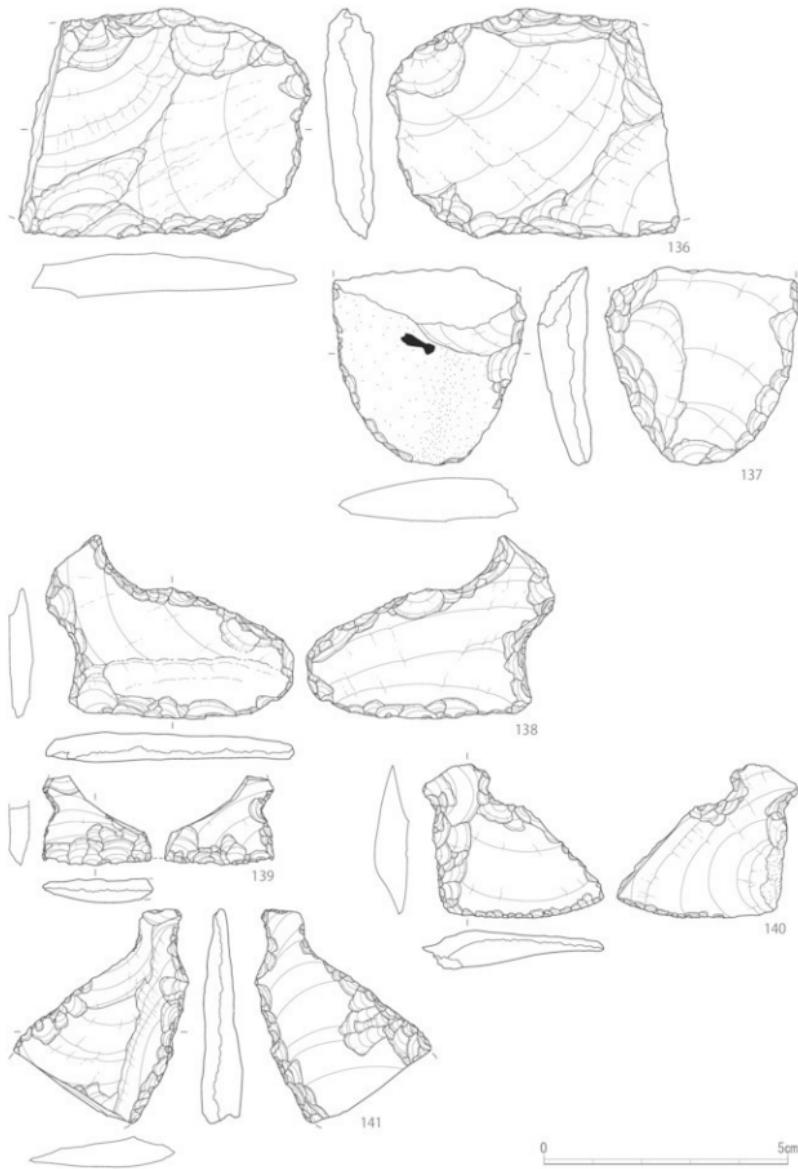
138～141は石匙である。うちA区2点・B区2点で確認されている。石材は、ガラス質安山岩（139・140）、ホルンフェルス（138）、黒色チャート（141）である。うち138～140は横型の石匙で、つまみ部の反対側の下縁に両面から加工を行い、刃部を作り出す。141は縦型の石匙で、縦長剥片を素材にして両側縁から加工を行い、刃部を作り出している。横型・縦型とも縁辺のみの加工で、両面とも素



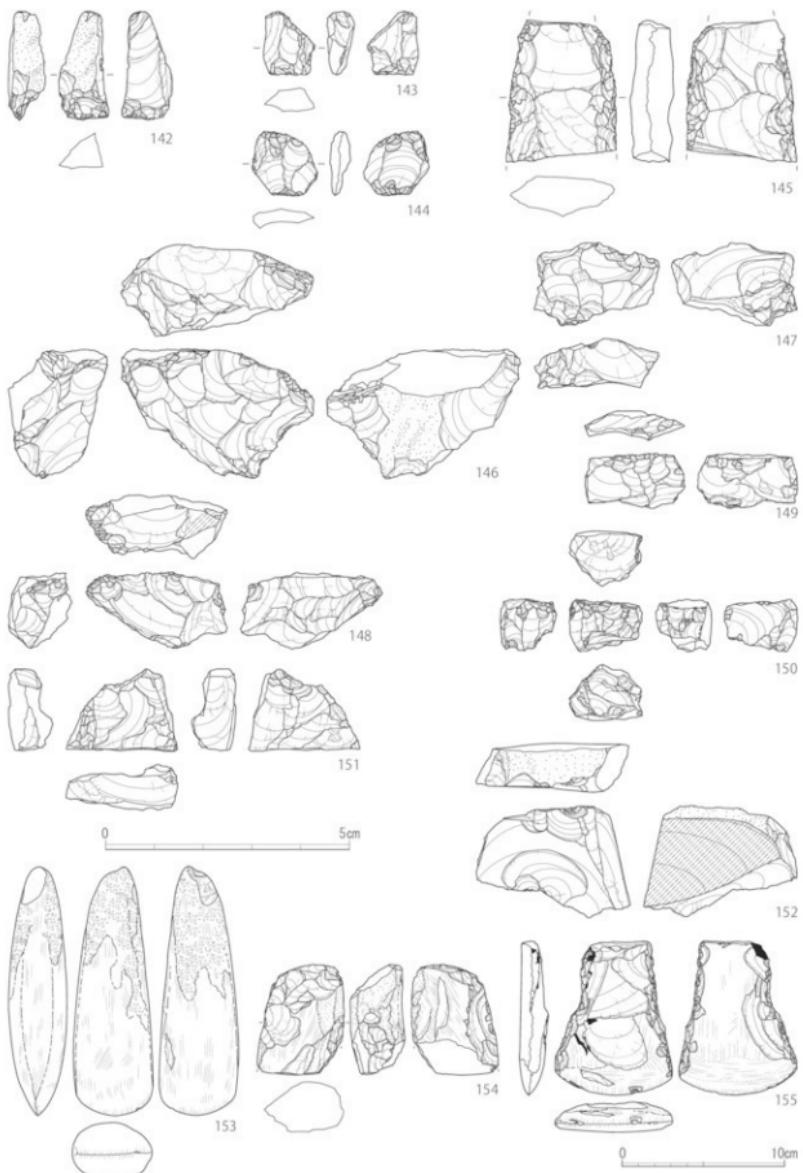
第18図 繩文石器実測図1 (S=2/3)



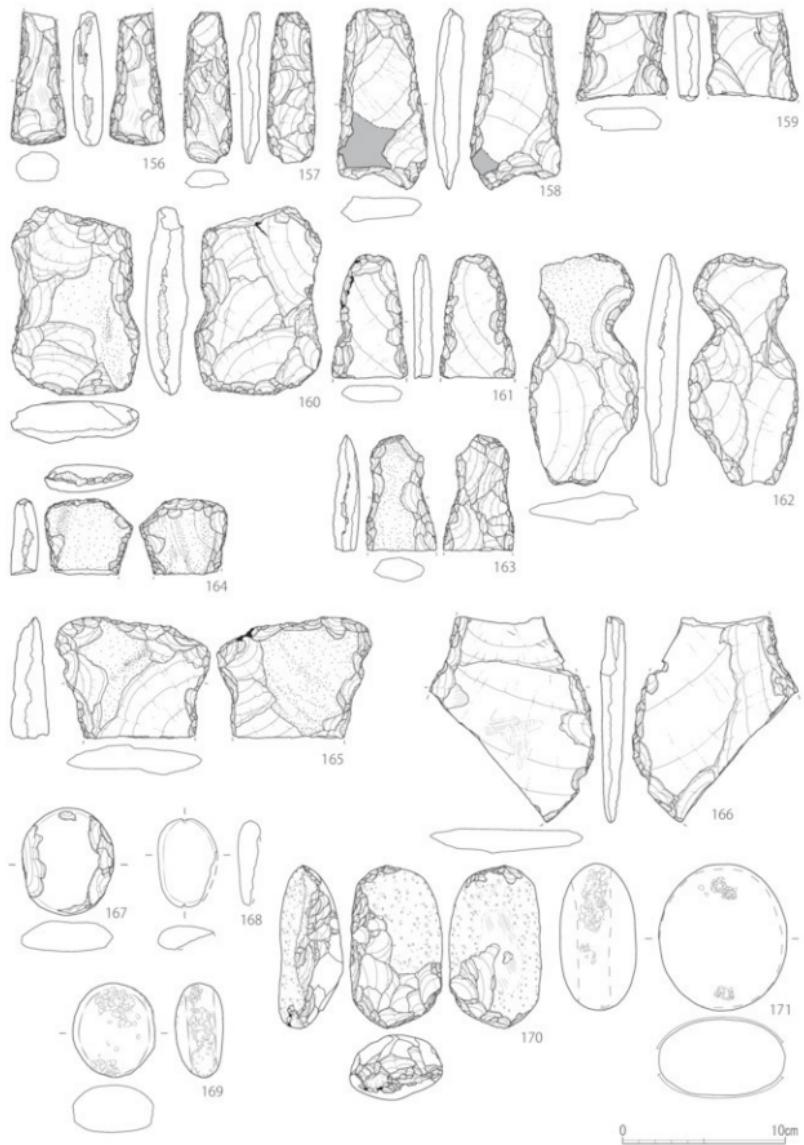
第19図 繩文石器実測図2 (S=2/3)



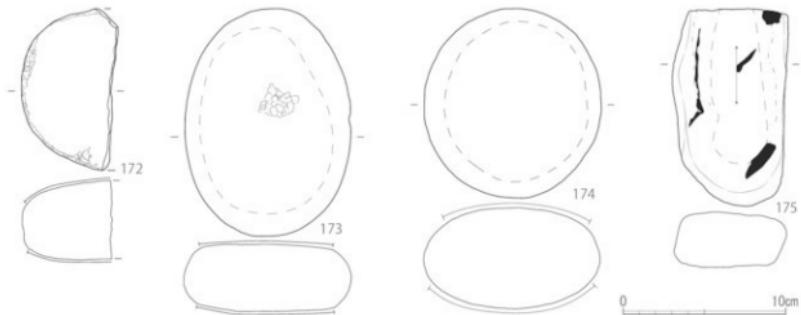
第20図 繩文石器実測図3 (S=2/3)



第21図 繩文石器実測図4 (S=2/3、1/3)



第22図 繩文石器実測図5 (S=1/3)



第23図 繩文石器実測図6 (S=1/3)

材時の剥離痕が認められる。

142～144は楔形石器で、B区出土。3点の図化を行った。石材は黒曜石（142）、チャート（143・144）である。いずれも上下両端に並行する剥離痕が認められる。

145は尖頭器でB区出土。石材は頁岩の可能性がある。先端・基部ともに欠損しているが、両側縁に両面から加工を施している。

146～150は石核である。6点図化した。出土の内訳は、A区3点、B区3点で石材はチャート（147～149）、泥岩（146）、黒曜石（150）、ホルンフェルス（152）である。上面を打面に設定して、同一方向から剥片剥離を行うもの（149）や上下面を打面にして二方向から作業を行うもの（147・150・152）。打面を転移させながら剥片剥離を行うもの（146・148・151）が認められる。

153～166は石斧である。利用石材はホルンフェルス（153・155～159）や砂岩（154・160・162～164）、輝石安山岩（161・165・166）がある。また図化していないが、石斧調整剥片も出土しており、石斧製作を行っていたものと考えられる。153～157は磨製石斧である。そのうち153は乳房状を呈し、表裏両側縁の基部側に敲打痕が認められる。154は再加工品である。155は扁平で撥状を呈する。158～166は打製石斧である。158は長方形に近い形状で、刃部付近は、再加工が行われている。また両面刃部付近に摩滅が認められる。160～166は、側縁に抉り部を持つ有肩石斧である。抉り部には敲打による整形が認められる。多くのものが浅い抉りを有するが、162や165・166のように抉りが深いものもある。166は刃部が膨らみ、丸みを帯びる。

167は砂岩製の礫器である。両側縁に加工が入るが、そのうち右側縁側は両面からの加工により刃部を作出している。

168は砂岩製の切目石鉗である。長軸両端に表裏両面から擦り切りによる切目が入る。

169・170は敲石である。そのうち169は砂岩製で熱を受け赤化している。表面や側縁に敲打痕が認められる。170はホルンフェルス製で左側縁や上下に敲打痕が認められる。

171～174は磨石である。うち174は溶結凝灰岩製、他は砂岩製である。楕円形・円形を呈し、いずれも表裏両面に磨面が認められるが、171～173のように敲打痕が認められるものもある。

175は砂岩製の砥石である。表面中央は使用により、やや凹みが認められる。

第2節 弥生時代の遺構と遺物

本遺跡では、A区及びB区の両方で弥生時代の遺物が約450点確認されており、そのうちB区が約92%を占める。また当該期の遺構は、B区で竪穴建物跡1軒（S A 5）を検出した。

1. 遺構

(1) 竪穴建物跡

5号竪穴建物跡（S A 5）（第24図176～179）

B区の北東部、Z3グリッド北西部からZ2・Y3グリッドにかけてVII層上面で検出した。円形を基調とする間仕切り住居（花弁状住居）と考えられる。検出面の関係からか、間仕切り部分の残りが悪く、浅いところでは検出面からの深さが5cmのところもある。また南から西にかけては、間仕切りが確認できなかった。残存している箇所より、規模は直径5m規模になるものと考えられる。床面中央は円形（直径2.8m）の掘り込みがある。その部分には、10cmの厚さで貼床（御池輕石を含む黒色土）が認められた。柱穴のうち、円形の掘り込みと間仕切りの境で検出した4本（深さ0.58～0.84m）が主柱穴になるとされる。柱間距離は東西方向に2.1～2.3m、南北方向に1.7～2.2mを測る。床面積は17.5m²+αである。遺物は少なく、櫛描波状文を有する複合口縁壺の口縁部（176）や高环の裾部（177・178）、砥石（179）等が出土している。

2. 包含層の遺物

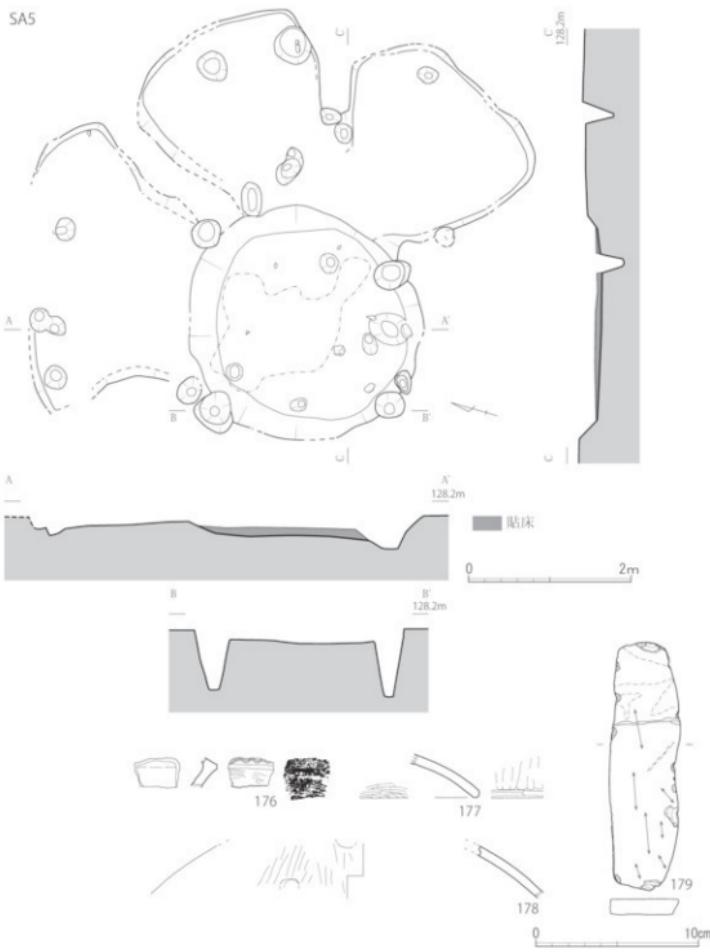
当該期の遺物は、V a層～VI a層で出土している。そのうちB区では、南東部や中央南部、南西部で比較的まとまって前期～後期の遺物が出土している。

(1) 土器（第25図～第27図180～199）

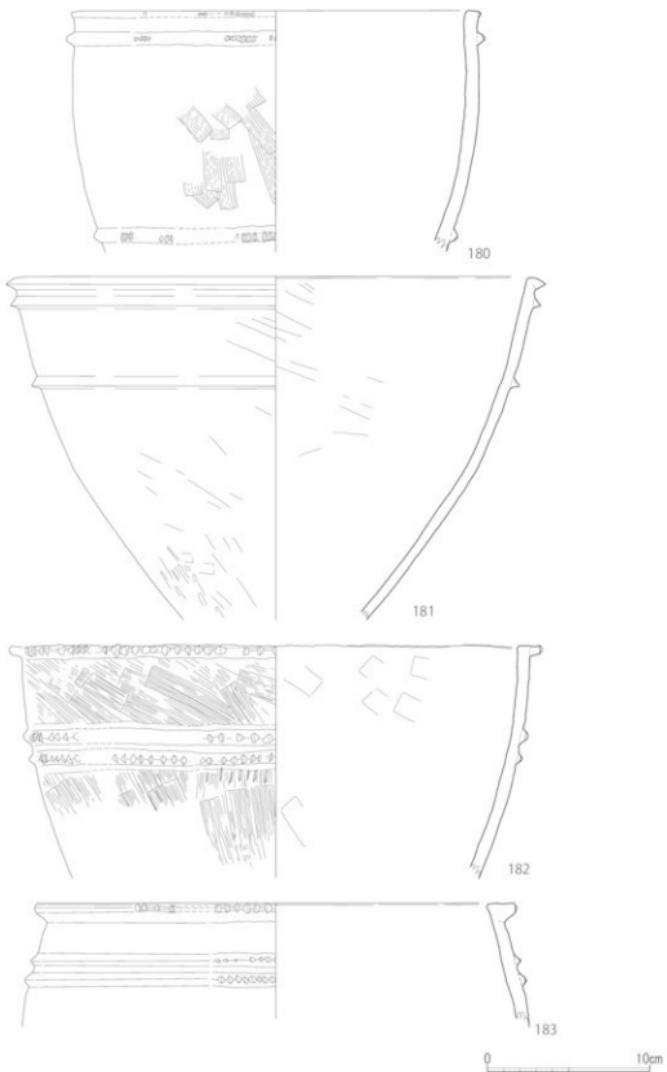
180～192は甕である。そのうち180～182・184については、B区U6グリッドを中心に出土している。また188～190・192はA区で出土している。

180～192は甕である。180は砲弾型の器形で口縁端部に刻目が施されているほか、そのすぐ下位と胴部下半に2条の刻目突帯が巡る。調整は外面にハケ目が施されている。181も砲弾型の器形を呈するが、180に比べ底部に向かって急にすぼまる。口唇部とそのすぐ下位、胴部上半に断面三角形の貼付突帯が3条巡る。調整は外面に工具によるナデ調整やミガキが、内面は工具によるナデ調整が見られる。182・183は逆L状の口縁をもつもので、突帯には刻目が施されている。また胴部に断面三角形の刻目突帯が2条巡る。182の外面には斜め方向や縱方向のハケ目が顕著に入る。184～187は、口縁部のやや下がった位置に断面三角形の突帯をもつもので、そのうち184・185には、刻目をもつ。188は胴部が膨らみ、口縁部がS字状に外反するもので、底部に向かってすぼまる。底部は上げ底ぎみで端部は外方へやや張り出している。器面にはハケ目が施され、頸部や底部付近には指痕痕が認められる。189は、「く」の字に強く外反する口縁をもち、器面にはミガキが施されている。190～192は底部の資料である。そのうち192は、端部が張り出し、底面は内湾していて不安定である。

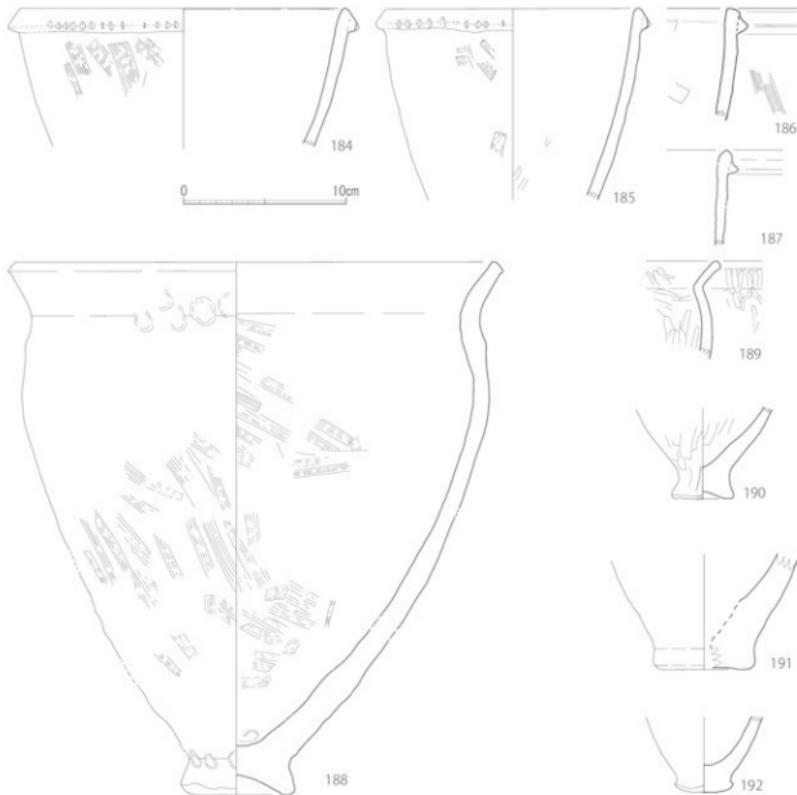
193～199は壺である。193は口縁部と頸部の境には、削り出しによる段をもち、頸部と胴部の境に突帯が1条巡る。外面にはミガキが施されている。また内面には炭化物が付着している。194は複合口縁で、外面に櫛描波状文が施されている。195・196は同一個体と考えられる。大きく聞く口縁部を持ち、球状に膨らむ胴部には、2条の刻目突帯が巡る。底部は上げ底ぎみである。器面の風化が著しく、



第24図 SA5実測図 (S=1/60) および出土遺物実測図 (S=1/3)



第25図 弥生土器実測図1 (S=1/3)



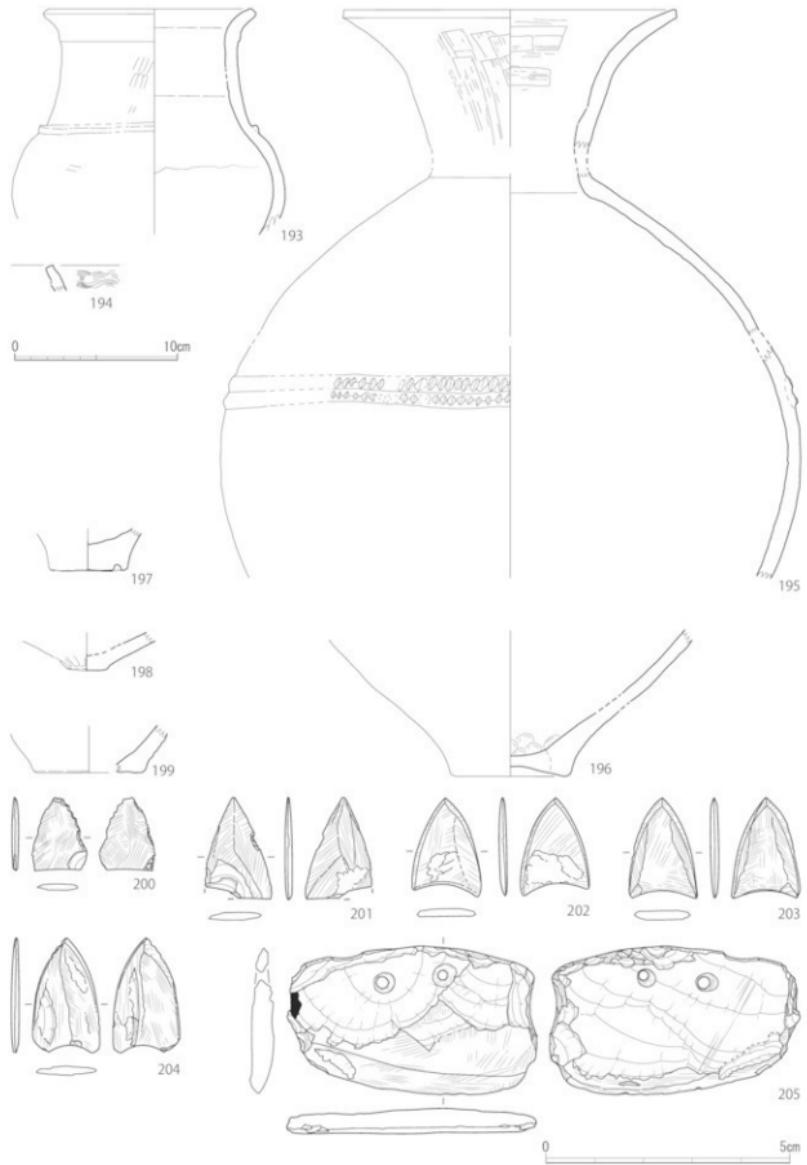
第26図 弥生土器実測図2 (S=1/3)

口縁部外面に縦方向のハケ目、内面に横方向のハケ目が認められる。197～199は底部である。そのうち198は平底で、円盤状の粘土を貼りつけて成形したものである。

(2) 石器 (第27図 200～205)

当該期の石器と思われるものは磨製石鎌と石庖丁のみで数は少ない。そのうち200～205は磨製石鎌である。利用石材は、緑色頁岩(200・202～204)、頁岩(201)である。いずれも二等辺三角形を呈し、平基のもの(200・201)と浅い抉りを有するもの(202～204)が認められる。また研磨により先端部から両側縁に稜をもつもの(202～204)も認められる。さらに浅い抉りを有するものの中には、202・203のように脚端が尖りぎみのものや204のように丸みがあるものも認められる。

205は頁岩製の石庖丁である。全体形は長方形を呈し、背部・刃部ともやや外湾する。右側縁は再加工によりやや内湾している。



第27図 弥生土器実測図3 (S=1/3) および石器実測図 (S=2/3)

第3節 古墳時代の遺構と遺物

本遺跡では、A区及びB区の両方で古墳時代の遺物が約1,800点確認されており、そのうちA区が約74%を占め、縄文時代や弥生時代の主体がB区だったのに対し、A区へと主体が移る。当該期の遺構は、竪穴建物跡が4軒（A区3軒、B区1軒）確認されている。

1. 遺構

（1）竪穴建物跡

1号竪穴建物跡（S A 1）（第28図206～210）

S A 1は、A区の南西部、A 19～B 20グリッドにかけてV層上面で検出したが、遺構の北東部及び西部側は搅乱により削平を受けている。遺構規模は4.43m×4.28mの方形プランを呈し、検出面からの深さ0.17mを測る。

主柱穴は3本（深さ0.36～0.42m）確認されており、残りは北東部の搅乱部分に存在していたものと考えられる。柱間距離は東西方向に2.1m、南北方向に1.6mを測る。床面積は16.6m²+αである。中央付近には上器埋設炉があり、0.45m×0.43m、深さ0.18mの円形プランの小土坑内に口縁部を打ち欠いた甕（206）が設置されている。

遺物は、他に甕の口縁部（207）や塊（208・209）、台石片（210）等が出土している。206は、頸部付近から底部の資料で尖底に近い丸底を有する。接合痕が顕著に認められ、外面には指頭痕がみられる。207は短い口縁部をもち、口径よりも胴部径が大きい。また208は、遺構南西部で、ほぼ完形で据え置かれた状態で出土している。口縁部が直立しながら立ち上がり、外面にはミガキ調整が施されている。また内面はナデ調整で部分的に指頭痕が認められる。

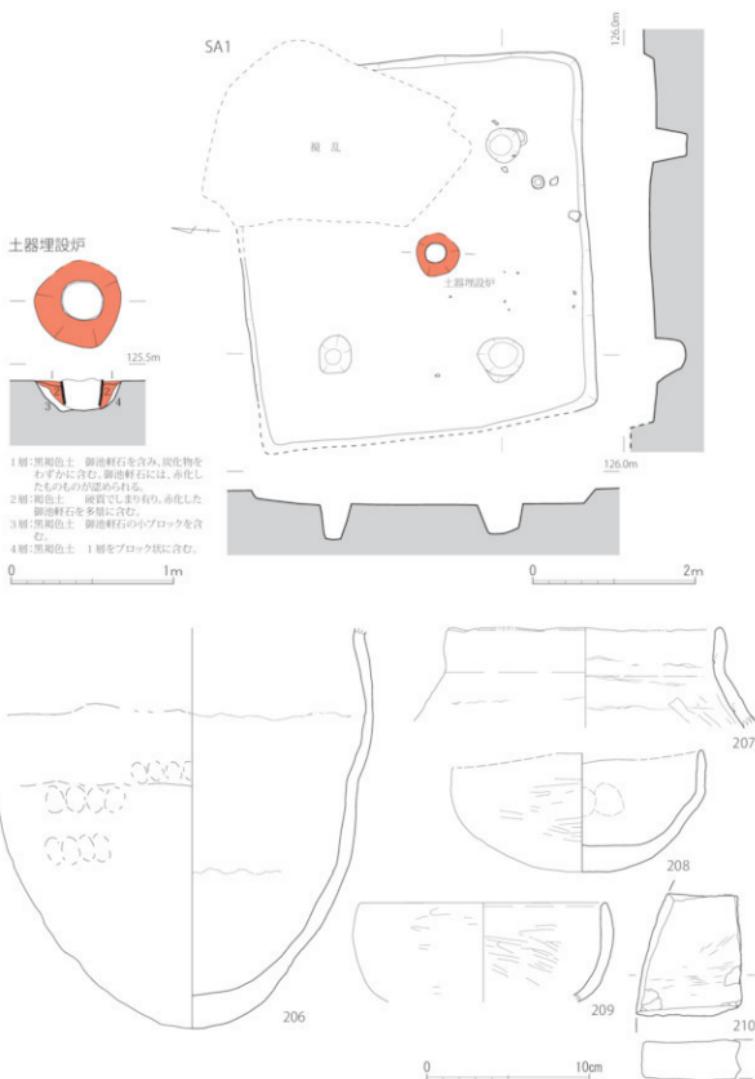
2号竪穴建物跡（S A 2）（第29図～第31図211～244）

S A 2は、A区の中央部、D 11～E 12グリッドにかけてV b層で検出した。南西約79m先にはS A 1、北東約48m先にはS A 3が位置する。遺構の規模は4.41m×4.15mの方形プランを呈し、検出面からの深さは、東壁で0.83m、西壁で0.32mを測る。また遺構の北東部には、1.93m×1.17mの長方形の張り出しが認められるほか、張り出し部近くの東壁には、横穴状の施設（横穴状遺構）が認められる。また南壁中央には0.87m×0.75m、深さ0.14mの楕円形プランの土坑が配置されている。

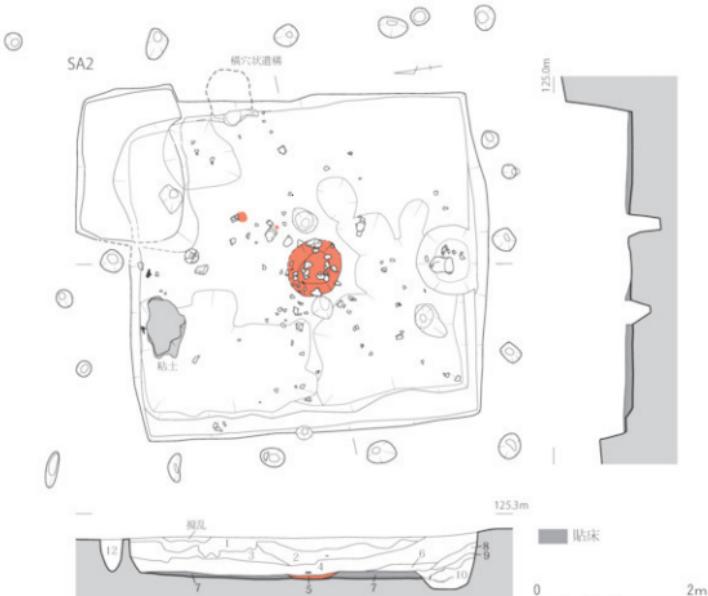
主柱穴は2本（深さ0.31m、0.43m）確認されており、柱間距離は1.2mを測る。また遺構周辺では、北側は不明瞭だが、西から東にかけて柱穴（深さ0.15～0.41m）が1.1m～1.7m間隔で巡る。床面中央には、0.72m×0.62mの楕円形を呈する地床炉が配置されている。床面積は張り出し部と合わせて17.3m²になる。

遺構北西部の床面には、0.7m×0.5mの範囲に厚さ6cmの灰黄褐色粘質土が未焼成のまま、溜められていた。また床面全体に3cm～8cmの厚みで貼床が認められる。貼床下の状況については、北西隅から南西隅を通り、南壁中央に設置されている土坑までの範囲に西壁から0.2～0.4m、南壁から0.15mの幅でL字状段差がつく。また北東端の張り出しの下には、本来の遺構のコーナー部分を確認することができる。

遺物は、甕（211）や小型丸底甕（212）、高环（213～219）、小型の鉢（220）、輪羽口（221・222）、砥石（223）、金床石（224）等が出土している。そのうち211は頸部のくびれは弱く、口縁部に向かって緩やかに外反する。また底部は平底である。土坑内で横向きに倒れた状態で出土している。



第28図 SA1実測図 (S=1/30、1/60) および出土遺物実測図 (S=1/3)

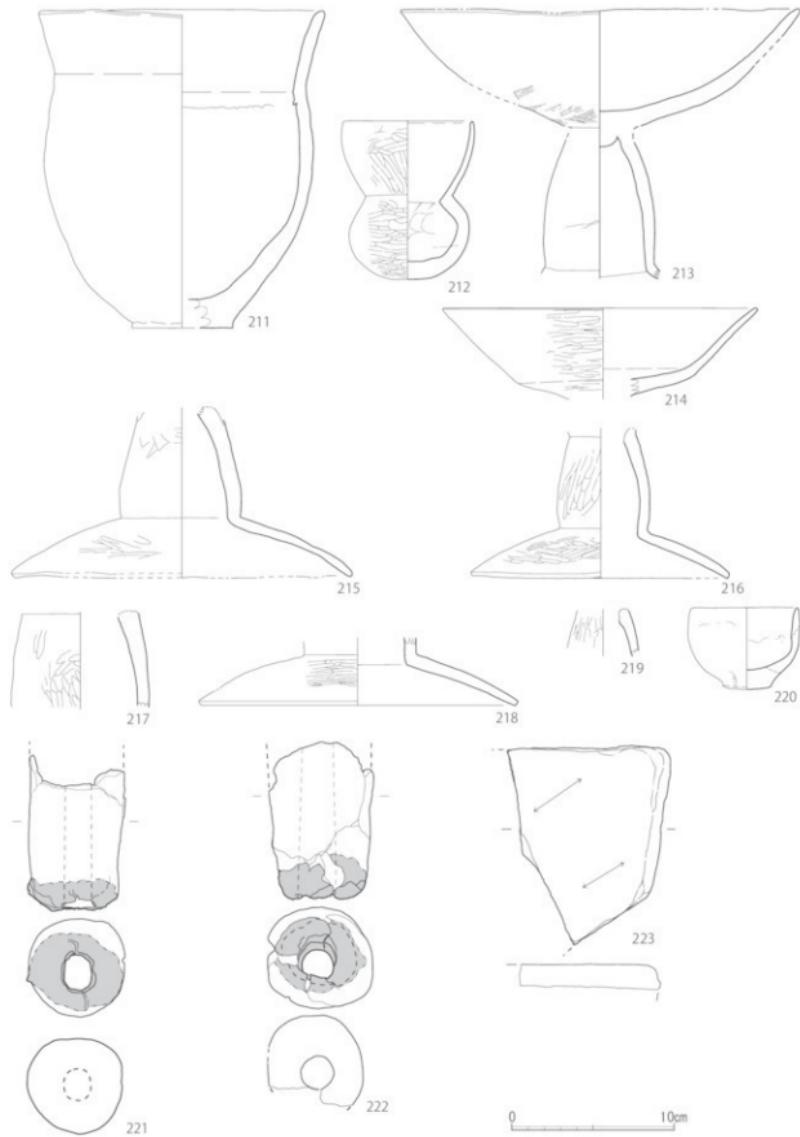


- やや硬質でしまり有り、10mm以下の鋼渣軽石を10%含み、炭化物をわずかに含む。
硬質でしまり有り、30mm以下の鋼渣軽石を10%含む1層に比べ、10mm以上のものが多い。
硬質でしまり有り、30mm以下の鋼渣軽石を15%含み、炭化物をわずかに含む。
やや硬質でしまり有り、10mm以下の鋼渣軽石を20%含み、炭化物をわずかに含む。
やや硬質でしまり有り、10mm以下の鋼渣軽石を10%含む。
かなり硬質でしまりが強い、6mm以下の鋼渣軽石を50%含む、粘床。
やや硬質でしまり有り、5mm以下の鋼渣軽石を40%含む。
やや軟質で粘性でしまり有り、3mm以下の鋼渣軽石を10%含み、炭化物をわずかに含む。
8層に似るが、炭化物を含まない。

横穴状遺構



第29図 SA2実測図 (S=1/60、1/30)



第30図 S.A.2出土遺物実測図1 (S=1/3)



第31図 S A 2出土遺物実測図2 (S=1/4)

212は遺構の西側テラス付近で出土している。口径が胴部径よりも大きく、口縁部と胴部～底部の長さがあまり変わらない。また口縁部は内湾しながら立ちあがる。外面にはミガキ調整が顕著にみられる。

213は環部の稜が弱く、口縁部は内湾しながら立ちあがる。脚柱部はエンタシス状を呈する。それに対して214は、環部に稜があり、外反しながら立ちあがる。215・216はエンタシス状の脚柱部を持ち、裾部は内湾しながら開く。どちらも外面にはミガキ調整が施されているが、216は特に顕著である。また216は遺構北側で直立した状態で確認されている。217・219は脚柱部、218は裾部の資料である。220は、平底の底部を持ち、直立しながら立ちあがる。

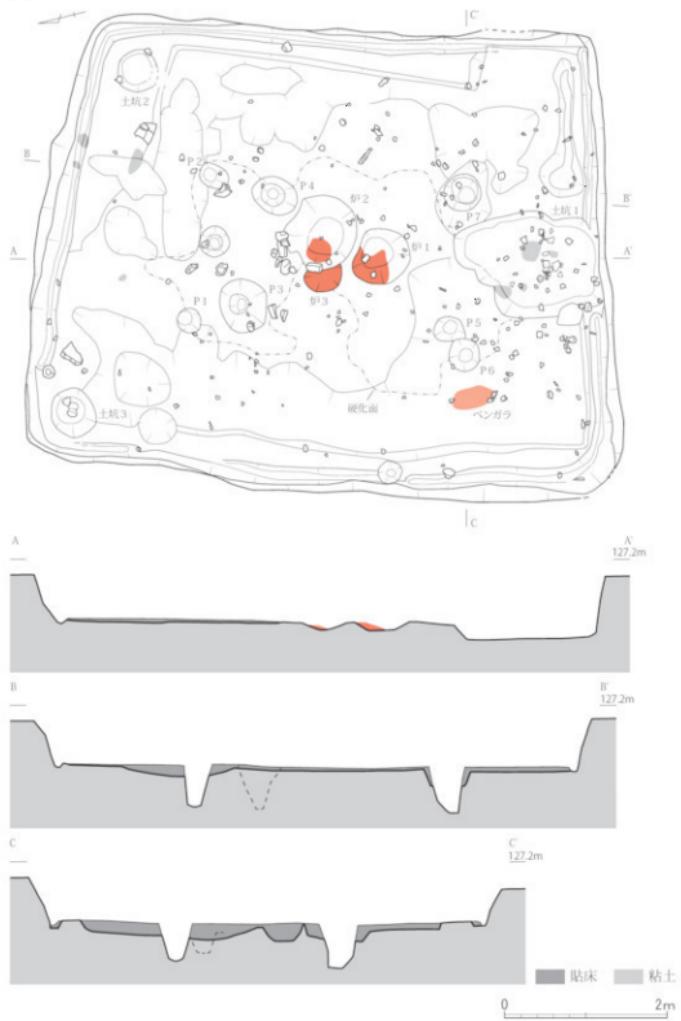
221・222は、鞆羽口の先端で、どちらも熱によりひび割れをおこしているほか、溶解物が付着している。2点とも地床炉の南西部で確認されている。

224についてはB 15 グリッドやD 12・E 12 グリッドで出土したものと接合している。また鉄分が付着している縁辺部については、敲打の際に、衝撃に耐えられず、剥片状に割れている。

横穴状遺構については、奥行きが0.54 m、幅0.54 m、高さは最大で0.45 m、奥壁で0.16 mを測る。断面形はドーム状を呈する。入口付近から内部にかけて深さ0.1 mの落ち込みが認められるほか、入口付近には、建物跡壁面と並行して長さ0.57 m、横幅8～14 cmの溝が認められる。内部での遺物等出土はみられなかった。

また灰黄褐色粘質土付近で出土した炭化材については、古環境研究所で分析を行い、樹種はセンダン

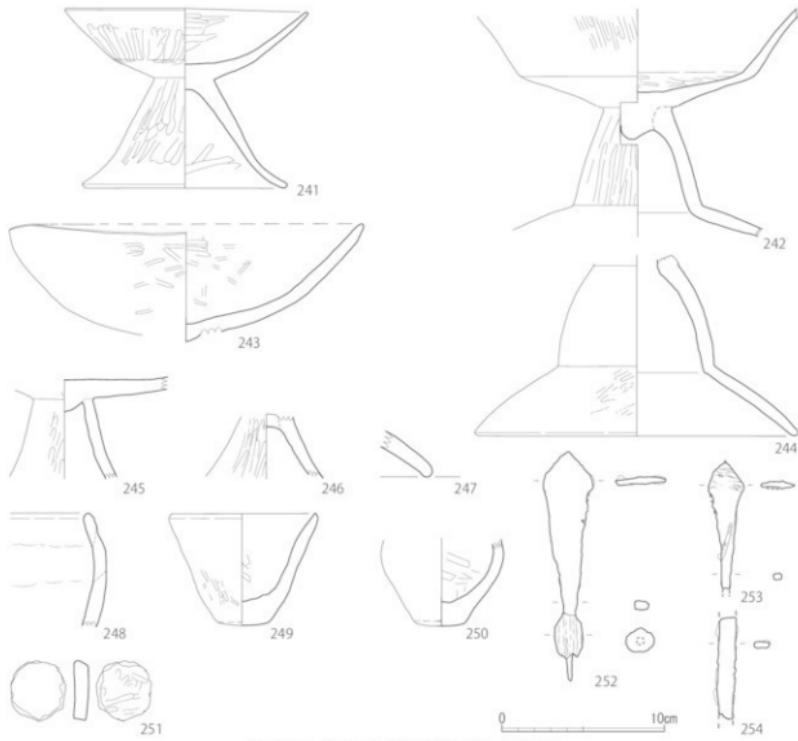
SA3



第32図 SA3実測図 (S=1/60)



第33図 SA 3出土遺物実測図1 (S=1/3)



第34図 S A 3出土遺物実測図2 (S=1/3)

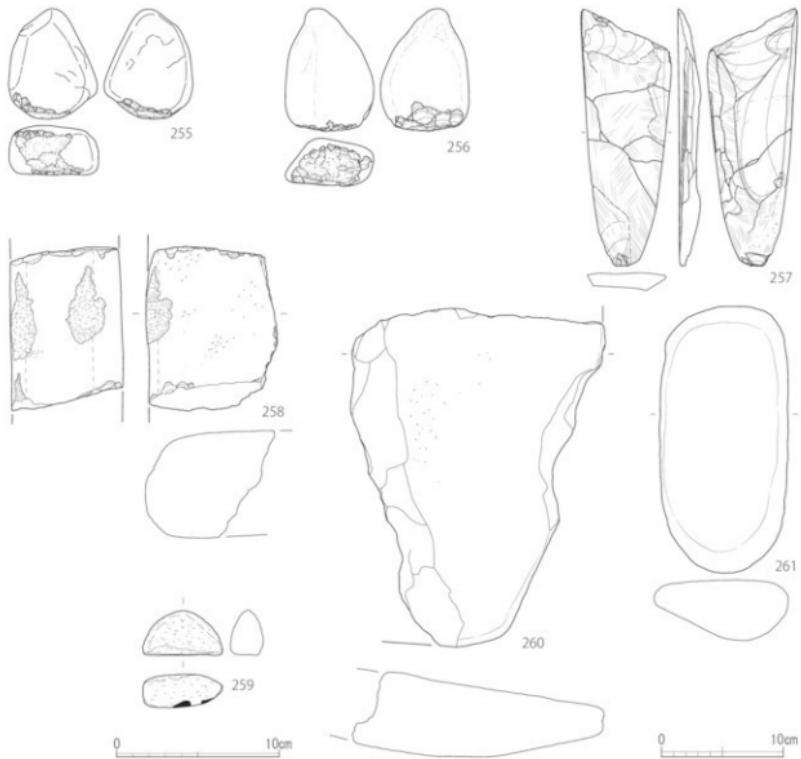
で¹⁴C年代(AMS)は、1670±20年BP(歴年代:AD337~417年)の測定値を得ている。なお、縦羽口や金床石が確認されたことから、埋土の一部についてサンプリングを行い、フローテーションによる選別作業を行ったが、炭化物は確認されたが、製鉄関連の遺物は確認されなかった。炭化物については種実同定分析を実施したが、種実等は確認されていない。

3号竪穴建物跡(S A 3)(第32図~第35図225~261)

S A 3は、A区の北東部、J 9~J 10・I 10グリッドにかけてV b層~VI a層上面で検出した。遺構は、西側が聞く台形プランを呈しており、一辺の長さが、北 5.33 m、東 6.04 m、南 5.7 m、西が 7.33 m で本遺跡の中で最大である。検出面からの深さは、0.58 mを測る。床面積は 35.23m²である。

床面壁際に幅7~18cm、深さ5~10cmの壁帶溝が認められ、ほぼ四方を巡る。また南壁中央には、不整な楕円形プランの土坑1(1.75 m×1.3 m、深さ0.19 m)配置されている他、円形の小土坑が北東隅(土坑2:0.5 m×0.41 m、深さ0.38 m)及び北西隅(土坑3:0.61 m×0.53 m、深さ0.3 m+α)が配置されている。

床面には南壁中央の土坑1から南西隅を通り、土坑3付近まで壁面から0.18 m~0.46 mの幅でL

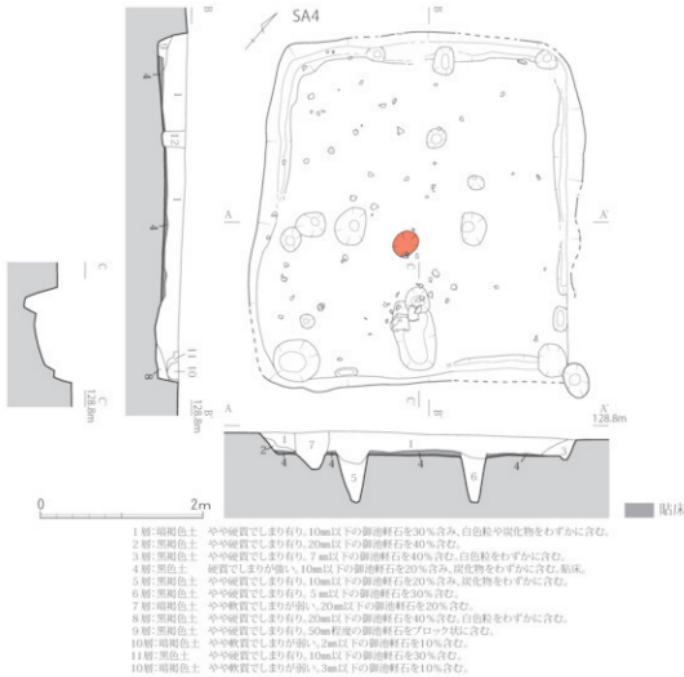


第35図 SA 3出土遺物実測図3 (S=1/3、1/4)

状の地山（VII層）が残る。また北壁の中央部から北東隅を通り、南壁から北に1.5mの付近までの範囲に0.13m～0.82mの幅でL状の地山が残る。床面中央は比較的平坦で、貼床は壁面に接するテラスとの間にある窪地を中心に4cm～16cmの厚さで認められる。また中央付近は硬化面が発達している。

地床炉は、遺構中央で3基近接して確認されている。炉1（0.75m×0.6m、深さ0.15m）は単独で設置されているが、炉3（4.8m×3.2m+α）は炉2（9.1m×8.3m、深さ0.18m）に切られている。その炉3の上には硬化面が認められる。

確認された柱穴のうち7本（P1～P7）は、主柱穴になると考えられる。そのうちP3～P5については、硬化面下もしくは貼床下で確認されており、時期差が認められる。壁面に接するテラスの存在から遺構を拡張した可能性が認められ、おそらくⅠ期はP3～P5、P7の4本（深さ58～84cm）が主柱穴となり、Ⅱ期がP1・P2・P6・P7の4本（深さ58～84cm）が主柱穴になると考えられる。Ⅰ期の柱間距離は、東西方向に1.5～1.6m、南北方向に2.4～2.6mを測る。またⅡ期の柱間



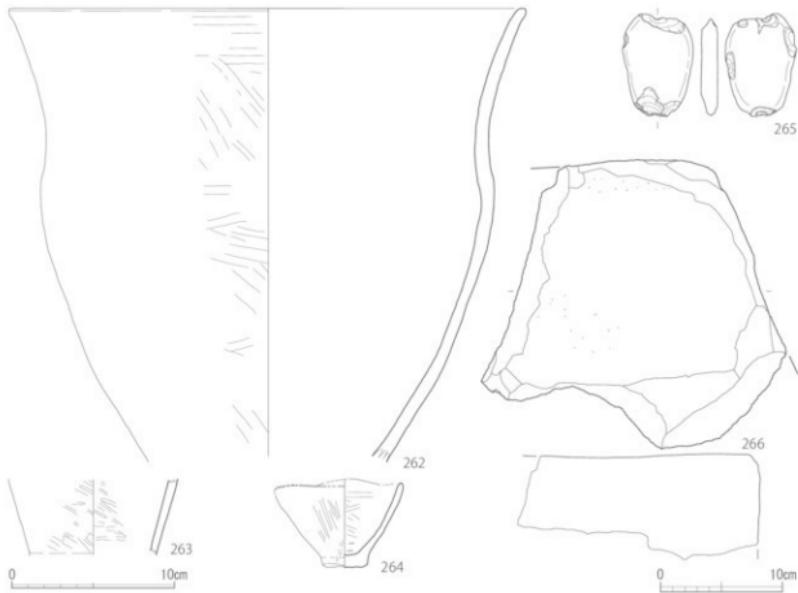
第36図 SA4実測図 (S=1/60)

距離は、東西方向に1.8~2.0m、南北方向に3.2~3.5mを測る。地床炉はⅠ期に炉2・炉3、Ⅱ期に炉1が伴うものと考えられる。

遺物は、甕(225~233)や壺(234~240)、高环(241~247)、鉢(248~250)、土器片加工品(251)、鉄製品(252~254)、敲石(255・256)、砥石(257・258)、軽石製品(259)、台石(260・261)等が出土している。また建物北西部の貼床内から0.53m×0.27mの範囲で赤色物の小塊(パイプ状ベンガラ)が多量に出土している。

225は口縁部が緩やかに外反しながら開き、頸部に刻目突帯をもつ。刻目には布目压痕がみられる。また突帯付近の内面には、指痕が認められる。226は頸部の屈曲が強く、外反しながら大きく聞く。外面にはハケ目調整が認められる。227は、口縁部が直行ぎみに立ちあがる。調整は工具によるナデ調整が施されている。229~233は底部の資料である。全て平底である。そのうち229は円盤状の粘土を貼りつけて成形している。232には外面に工具ナデが顕著に見られる。

234・235は小型の壺で同一個体である。236~238は小型丸底壺である。そのうち、236は口径が胴部径よりもわずかに大きいが、胴部へ底部ほうへ口縁部よりも長い。口縁部は内湾しながら立ちあがる。外面にはミガキ調整が施されている。土坑3内で出土している。240はミニチュア土器で焼成後に、底部外面から穿孔が施されている。



第37図 S A 4出土遺物実測図 (S=1/3、1/4)

241は完形の資料である。遺構北西端で脚部、中央西側で坏部が出土している。241は短い口縁部にラッパ状の脚部をもつ。内外面ともミガキ調整が施されており、外面には縦方向、内面には横方向に入る。242は、坏部に明瞭な稜の入り、口縁部に向かって大きく外反する。またエンタシス状の脚柱部を有し、裾部は内湾しながら開く。243は坏部の稜が弱く、口縁部は内湾しながら立ちあがる。244もエンタシス状の脚柱部をもち、角度を付けながら内湾する裾部を有する。

249・250は小型の鉢で、どちらも平底をもつ。そのうち249は口縁部に向かって外方に開くのに対し、250は内湾しながら立ちあがる。251は、土器片加工品で周縁を打ち欠いて、整形している。外面にはミガキが認められる。

252・253は圭頭鏡で、そのうち252には茎部に木質を残す。254はヤリガンナの茎部か。

255・256は砂岩製の敲石で、端部の敲打痕が顕著にみられる。257は頁岩製の砥石である。258は砂岩製の砥石で、表裏左側面に砥面がみられ、稜付近に敲打痕が明瞭に入る。260・261は砂岩製の台石である。261は、一部で研磨らしき痕跡が認められたため台石としたが、同規模の石が遺構中央でまとまって出土している。259は軽石製品である。半円状に整形されている。

4号竪穴建物跡 (S A 4) (第36図・第37図 262～266)

S A 4は、B区の北西部、R 4グリッドに位置し、VII層上面で検出した。規模は4.29 m × 3.9 mの方形プランを呈し、検出面からの深さは、0.36 mを測る。床面積は14.5m²である。

主柱穴は2本（深さ0.61 m、0.64 m）確認されており、柱間距離は1.4 mを測る。遺構の中央には、

0.28 m × 0.36 m の楕円形プランの浅い地床炉が設置されている。床面壁際には、幅9～13cm、深さ3～6cmの壁帶溝が南西側以外の三方を巡る。遺構南側中央には0.86 m × 0.5 m、深さ0.24 m の楕円形の土坑が見られる他、南西隅には0.56 m × 0.51、深さ0.32 m の円形の土坑が認められる。また床面には4cm～6cmの厚みで貼床が認められる。

遺物は、甕(262)や壺(263)、小型の鉢(264)や石錐(265)、台石(266)等が出土している。262は、楕円形土坑内出土で、口縁部～底部付近の資料である。胴部はあまり張らずに口縁部に向かって緩やかに外反する。264は建物南西部で伏せた状態で出土している。完形品で、底部は平底で内湾しながら外方へ開く。265は砂岩製で両端に両面から加工を行い、紐掛け部を作出している。266は262同様、土坑内出土で全体的に火を受け、赤化している。

また炭化材が確認されており、炭化材の一部について分析を行い、樹種はスダジイで14C年代(AMS)は、 1700 ± 20 年BP(暦年代: AD257～285、290～295、321～400年)の測定値を得ている。

なお、埋土の一部については、フローテーションによる選別作業を行ったところ、サンショウ属の種子やタデ属の果実、アカザ属の種子、ミズキ核片、クマノミズキ核片、アオツヅラフジの種子、アカネ科の種子、エゴマの果実が確認されている。

2. 包含層の遺物

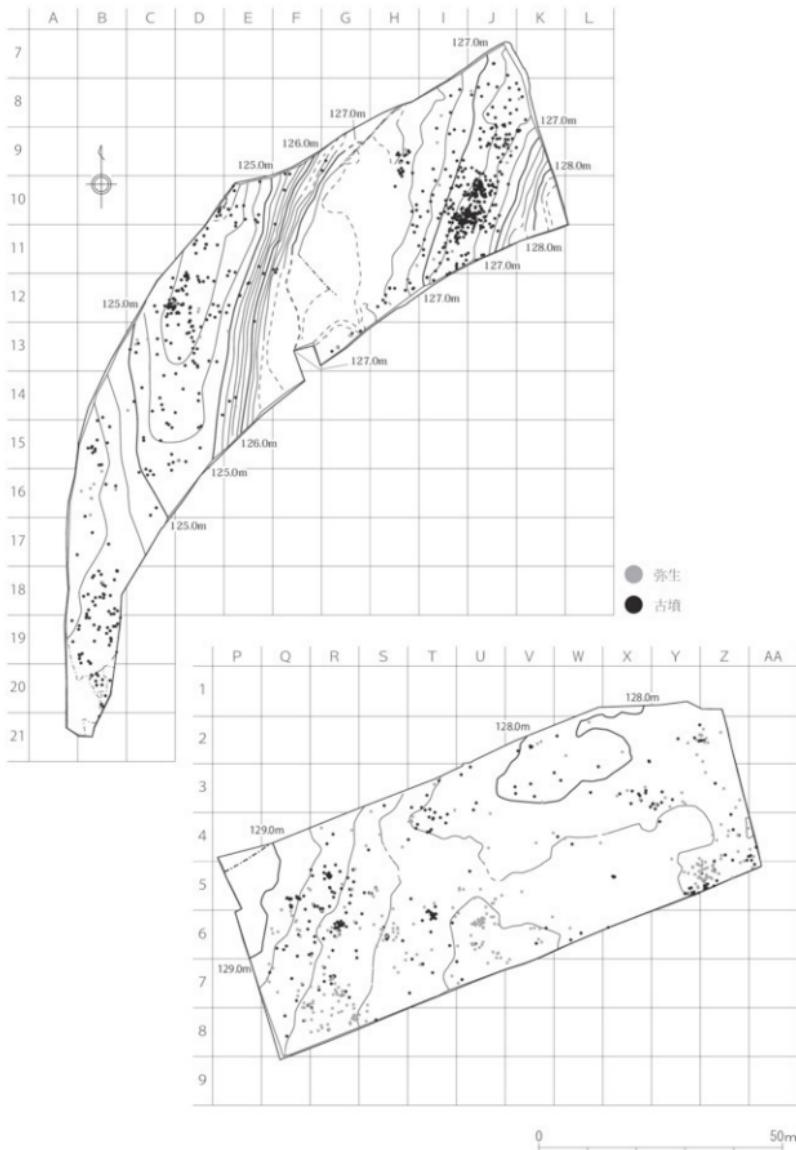
当該期の遺物は、V a層～VI a層(一部VI b層で)で出土しているが、主にV a層で出土している。両地区とも竪穴建物跡周辺を中心にまとまって遺物が出土している。

(1) 土器(第39図～第41図267～301)

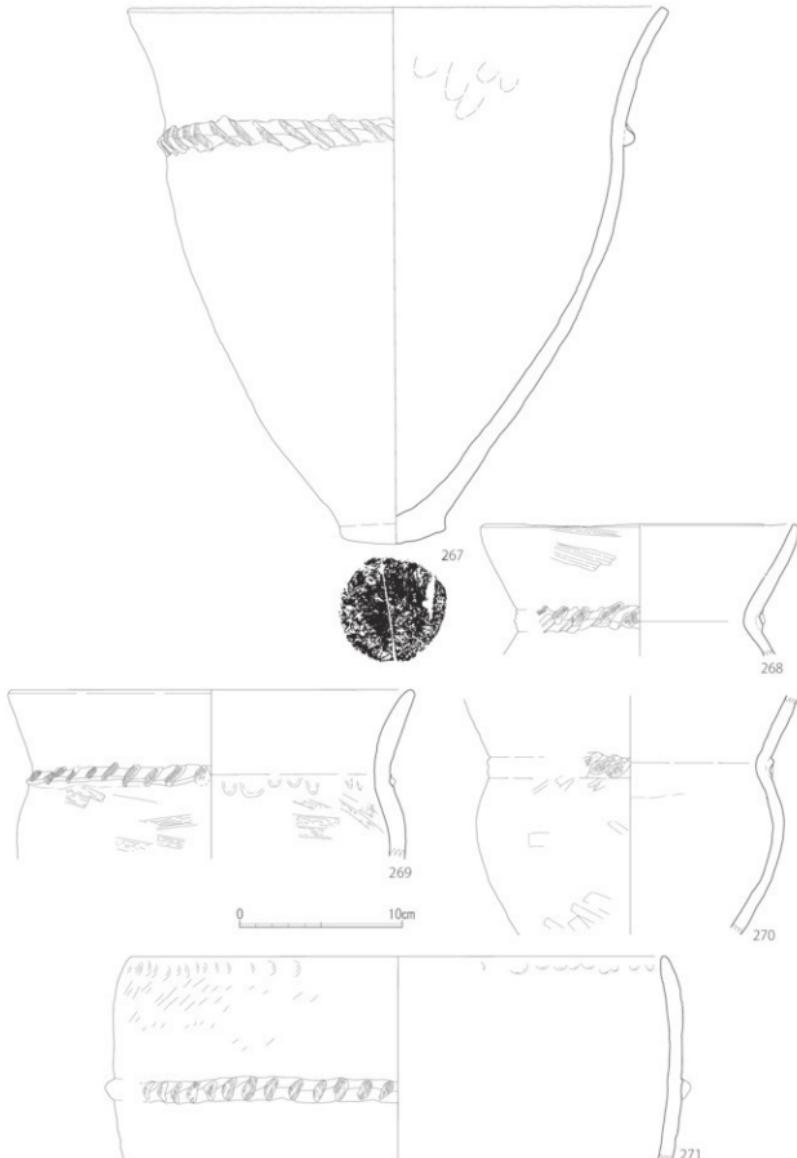
267～283は甕である。そのうち267～271は頸部に刻目突帯をもつ一群で刻目には、布目圧痕がみられる。271のみB区で、他はA区出土である。そのうち267は完形品で、A区のS A 3の南、I 11やJ 11グリッドで出土している。胴部は、あまり張らず、口縁部が緩やかに外反する。底部は丸みがあり不安定である。また底面には線刻が入る。

268・270は頸部のくびれが強い。そのうち268は、頸部のくびれが強く、口縁端部がやや内湾する。突帯には、ヘラ状工具による刻目を入れた後、布目圧痕を加えている。なお、口縁部外面には斜め方向のハケ目が施されている。270は胴部の張りが強い。271は、胴部が張らず口縁部に向かって、内湾しながら立ちあがる。口縁端部両面には指頭痕が認められる。272は胴部があまり張らずに、底部へ向かってそぼまる。風化が著しく、調整については不明だが、一部でナデ調整が認められる。273は、頸部が屈曲し、球状の胴部をもつ。調整は内外面ともハケ目が認められる。274～283は底部の資料である。そのうち274～281は平底で、274は上げ底ぎみである。275は丸みを帯び、底面の稜が不明瞭である。279・280には、縱方向の工具ナデが顯著である。282・283は脚台を有するものである。282は断面形が逆U字状を呈し、283は、断面台形を呈する。

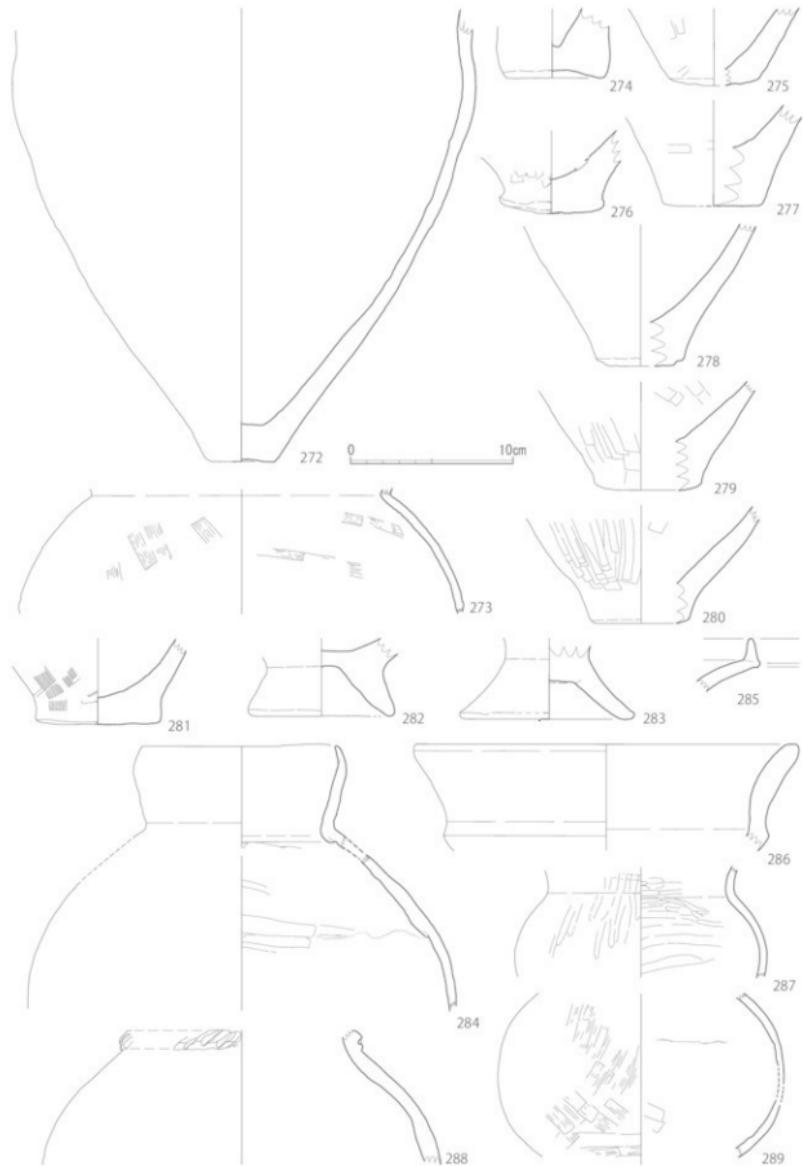
285～294は、壺の資料である。284は直口壺で、内湾する口縁部をもつ。内面には接合痕が顯著に認められる。285・286は二重口縁壺の口縁部で、285は「く」の字に屈曲するのに対して、286は屈曲部から外方に外反する。288は頸部に刻目突帯を有する。287は、頸部の屈曲が弱い。調整はミガキ調整で、外面は縱方向、内面は横方向に施されている。289は球状の胴部をもち、外面にはハケ目調整が施されている。290は、球状の胴部に丸底の底部をもつ。292は底部に脚台を有する。293・



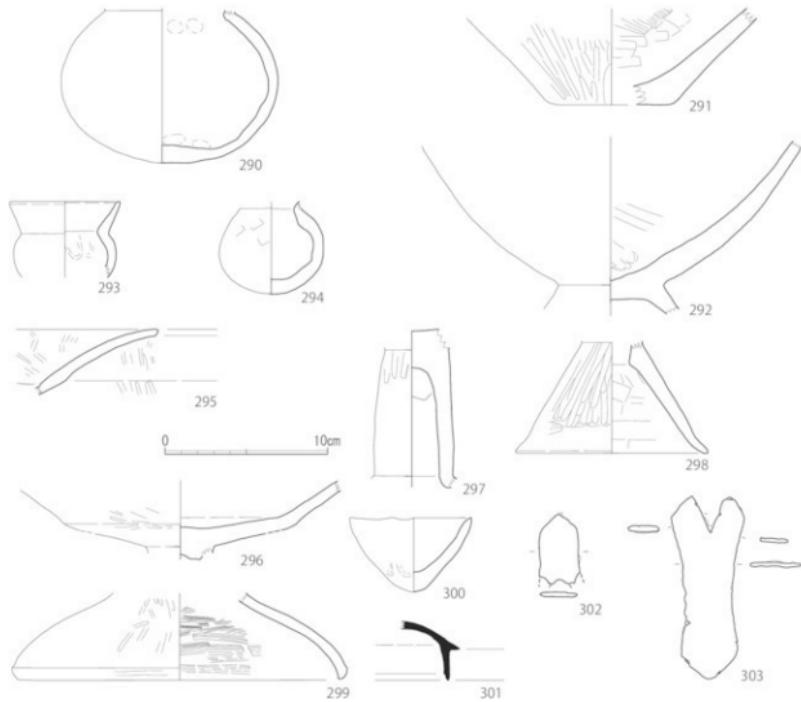
第38図 弥生時代～古墳時代遺物分布図 (S=1/1,000)



第39図 土師器実測図1 ($S=1/3$)



第40図 土師器実測図1 ($S=1/3$)



第41図 土師器および鉄製品実測図1 (S=1/3)

294は小型の壺である。

295～299は高環の資料である。そのうち295・296は壺部、297～299は脚部である。295は外反しながら大きく開く。297は、脚柱部あまり膨らまず、裾部との境に明瞭な稜をもつ。298はラッパ状に開き、ミガキ調整が顕著である。299は、壺状に開く裾部で外面には縦方向のミガキ調整、内面には横方向のハケ目調整が施されている。

300は小型の鉢である。尖底ぎみで口縁端部が尖る。301は須恵器有蓋高環の蓋で、天井部と体部の境に明瞭な段をもち、口縁部は直立し、端部に段を有する。時期的には陶邑編年のTK23～TK47段階に相当すると考えられる。

(2) 鉄製品 (第41図302・303)

当該期の鉄製品は2点確認されている。302はB区出土。柳葉形の鉄鎌で脚部は欠損している。303は不明鉄製品でA区出土である。長さ11.2cmの板状で、一端が二股に分かれている。

第4節 古代以降の遺構と遺物

本遺跡では、A区及びB区の両方で古代の遺物が4,600点以上確認されており、そのうちA区が約90%を占める。また当該期及び時期不明の遺構が、B地区で溝状遺構1条、両地区で土坑18基（A区16基、B区2基）、焼土11基（A区6基、B区5基）、性格不明遺構1基を検出した。なお、國化していないが近世の薩摩焼（甕・壺・鉢、）関西系鉢、寛永通宝等も出土している。

1. 遺構

（1）溝状遺構（S E、第42図304・305）

S E 1は、B区中央のV a層で検出した。断面形は台形状を呈し、やや直線的に北北東から南南東にかけてへと走る。確認された範囲では、全長約48m、溝幅は1.14m～1.66mで検出面からの深さは最深0.65mを測り、わずかだが北側のほうが低くなる。また南端では硬化面（2.15m×0.57m、最大厚み8cm）が認められ、S E 1が埋没後に形成されたものと考えられる。遺物は、壺（304）や鐵鍊の莖部と思われる鉄製品（305）が出土している。

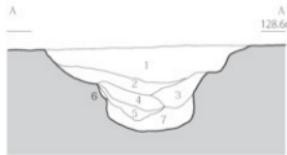
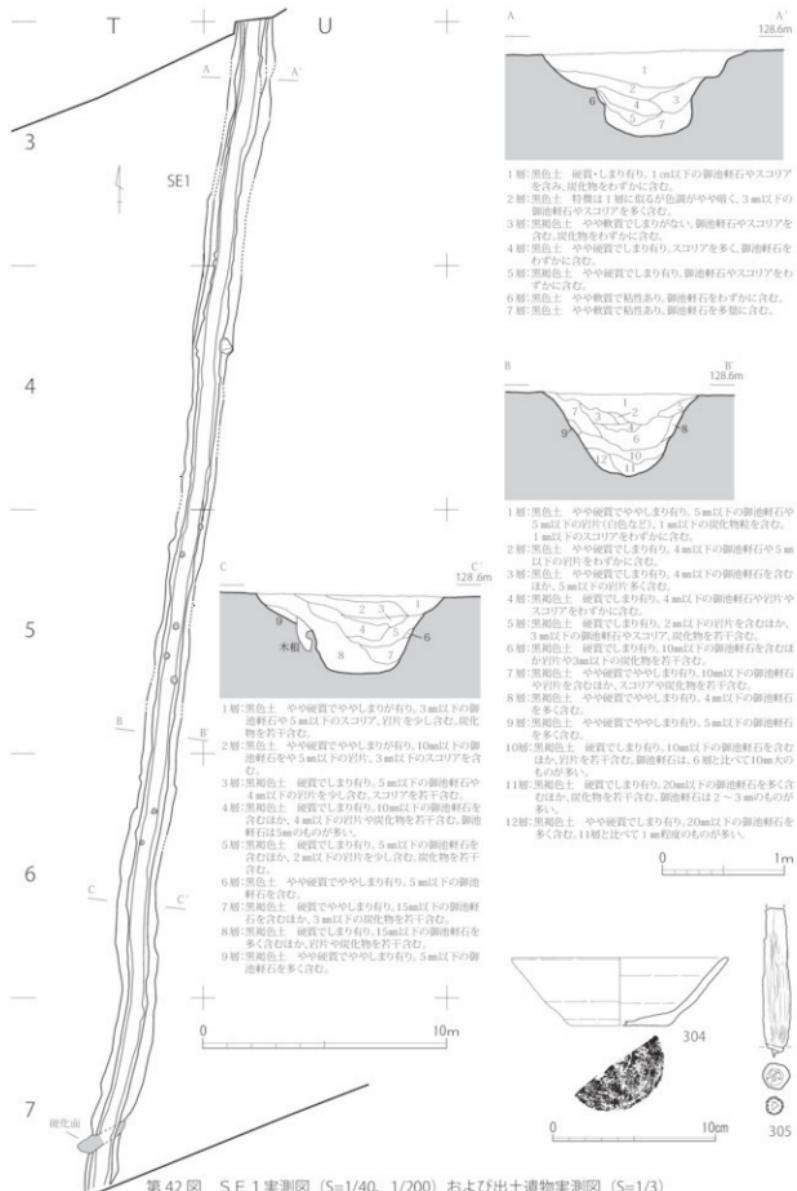
（2）土坑（S C、第43図～第51図306～403）

土坑は18基（A区16基、B区2基）が確認されている。土坑の中には焼土を有するものが9基確認されている。V b層からVII層にかけて検出を行った。

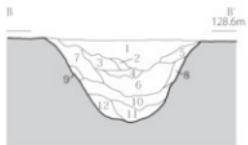
S C 1は、A区D 11 グリッド南西端、VI b層で検出した。規模は1.84m×1.34mの不整な梢円形プランを呈し、検出面からの深さは0.2mである。遺構北側には焼土が認められる。遺物は壺（306・307）、塊（308）、甕（309）、須恵器の甕（310）、金床石（311）や炭化材等が出土している。そのうち金床石は、11号土坑や焼土5のものと接合関係にある。炭化材は、古環境研究所の分析によれば、炭化材の一部はセンダンで¹⁴C年代（AMS）は、1220±20年BP（曆年代：AD721～741、766～882年）の測定値を得ている。

S C 2・S C 3は、A区B 14 グリッド中央北寄りに隣接し、VI b層で検出した。S C 2の規模については0.98m×0.91mの開丸方形プランを呈し、検出面からの深さは0.15mである。S C 3は、直径0.92mの円形プランを呈し、検出面からの深さは0.12mである。どちらも埋土は1層でにぶい黄褐色土が堆積していた。遺物は確認されていない。

S C 4・S C 5は、A区B 15 グリッド中央北側に位置する。トレンチを挟み、両遺構が近接する。そのうち、S C 4は、VI a層で検出した。北側は搅乱によって削平を受けている。遺構の規模については1.9m×1.36m+aの梢円形プランを呈するものと考えられる。検出面からの深さは0.43mである。埋土は9層からなり、大きくは焼土粒を含む黒褐色土と焼土とに分かれる。また遺構上やその周辺には褐色粘質土を含む暗褐色土の溜まりが認められた。遺物は、壺（312～327）や高台付塊（328～346）、注口土器（347）、耳環様土器（348）、赤彩のある土器（349）、黒色土器（350～351）、高台付鉢（352）、甕（353～362）、懶（363）、小壺（364）、布痕土器（365）、須恵器の甕（366）、壺（367・368）、土製品（369・370）、軽石製品（371・372）、焼成粘土塊、炭化材・炭化種子等が多量に出土しており、番号を付けて取り上げたものだけでも約400点にのぼる。焼成粘土塊にはスサ入りのものも出土している。当初は埋土と地山の判別ができず、ある程度掘り下げた時点で遺構を検出しているため、遺物が遺構周辺にも広がることから、本来は現状の遺構規模よりも大きい可能性がある。

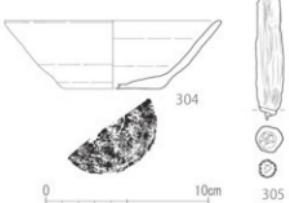


1層: 黒色土、硬質・ややしまりあり、1m以下との御池軒石やスコリアを含み、炭化物をわずかに含む。
2層: 黒色土、付帯は1層に似たが色調がやや暗く、3mm以下の炭化物を含む。
3層: 黑褐色土、やや硬質であり、御池軒石やスコリアを含む。
4層: 黑色土、やや硬質であり、10mm以下の御池軒石やスコリアを含む。
5層: 黑褐色土、やや硬質であり、御池軒石やスコリアを含む。
6層: 黑色土、やや軟質であり、御池軒石を含む。
7層: 黑褐色土、やや軟質であり、御池軒石を含む。



1層: 黒色土、やや硬質でややしまりあり、5mm以下の御池軒石や5mm以下の岩片 (白色など)、1mm以下の炭化物を含む。
2層: 黒色土、やや硬質でややしまりあり、5mm以下の御池軒石や5mm以下のスコリアを含む。
3層: 黑褐色土、やや硬質でややしまりあり、4mm以下の御池軒石を含むほか、5mm以下の岩片が多く含む。
4層: 黑褐色土、硬質でややしまりあり、2mm以下の岩片を含むほか、3mm以下の御池軒石やスコリア、炭化物を若干含む。
5層: 黑褐色土、硬質でややしまりあり、2mm以下の岩片を含むほか、3mm以下の御池軒石やスコリアを含む。
6層: 黑褐色土、硬質でややしまりあり、10mm以下の御池軒石を含むほか、岩片や5mm以下の炭化物を若干含む。
7層: 黑褐色土、やや硬質でややしまりあり、10mm以下の御池軒石を含むほか、岩片や5mm以下の炭化物を若干含む。
8層: 黑褐色土、やや硬質でややしまりあり、5mm以下の御池軒石を含む。
9層: 黑褐色土、やや硬質でややしまりあり、5mm以下の御池軒石を含む。
10層: 黑褐色土、硬質でややしまりあり、10mm以下の御池軒石を含むほか、岩片を若干含む。御池軒石は6mmと比べて10mmのものが多い。
11層: 黑褐色土、硬質でややしまりあり、20mm以下の御池軒石を多く含むほか、炭化物を若干含む。御池軒石は6mmと比べて10mmのものが多い。
12層: 黑褐色土、やや硬質でややしまりあり、5mm以下の御池軒石を多く含む。11層と比べて1mm程度のものが多い。

0 1m



なお、313 や 330 は S C 5 の土器片と接合するほか、後述する包含層の遺物で掲載した 448 や 457、462、629（S C 5 も接合）のものと接合する。

出土した炭化材一部については分析の結果、クスノキ科で¹⁴C 年代（AMS）は、1300 ± 20 年 BP（曆年代：AD663 ~ 719、742 ~ 767 年）の測定値を得ている。また埋土の一部についてフローテーションによる選別作業を行ったところ、クマノミズキの核片やイネ・ムギ類の果実、ササゲ属の子葉、モモの核片が確認された。

S C 5 は、V b ~ VI a 層にかけて検出。北側はトレンチに切られている。1.58 m × 0.92 m + a の円形もしくは梢円形プランを呈するものと考えられる。検出面からの深さは 0.35 m である。埋土は、埋土は 7 層からなり、大きくは焼土粒を含む暗褐色～黒褐色土とにぶい黄橙色や褐灰色粘質土を含む褐灰色土、焼土とに分かれる。

遺物は、壺（373 ~ 377）、高台付塊（378 ~ 381）、赤彩のある土器（383）、甕（384）、炭化材等が確認されている。また出土した炭化材一部についてはコナラ属アカガシ亜属で¹⁴C 年代（AMS）は、1190 ± 20 年 BP（曆年代：AD775 ~ 866 年）の測定値を得ている。

S C 6 は、A 区 J 10 ~ J 11 グリッド中央に位置する。検出層は VI a 層で規模は 0.94 m × 0.88 m の円形プランで、検出面からの深さは 0.2 m である。埋土は、焼土粒を多量に含む褐色土、暗褐色土に分層でき、褐色土中から甕（385・386）や焼成粘土塊等が出土している。

S C 7 は、A 区 K 9 グリッドに位置し、VI a 層で検出した。規模は、直径 0.82 m の円形プランで、検出面からの深さは 0.15 m である。

S C 8 は、A 区 E 12 グリッドに位置し、V a 層で検出した。規模は 1.4 m × 0.65 m の長梢円形プランで、検出面からの深さは 0.26 m で、端部にピットが 2 基確認されているが切り合い関係は不明である。遺物は、土器小片が出土している。

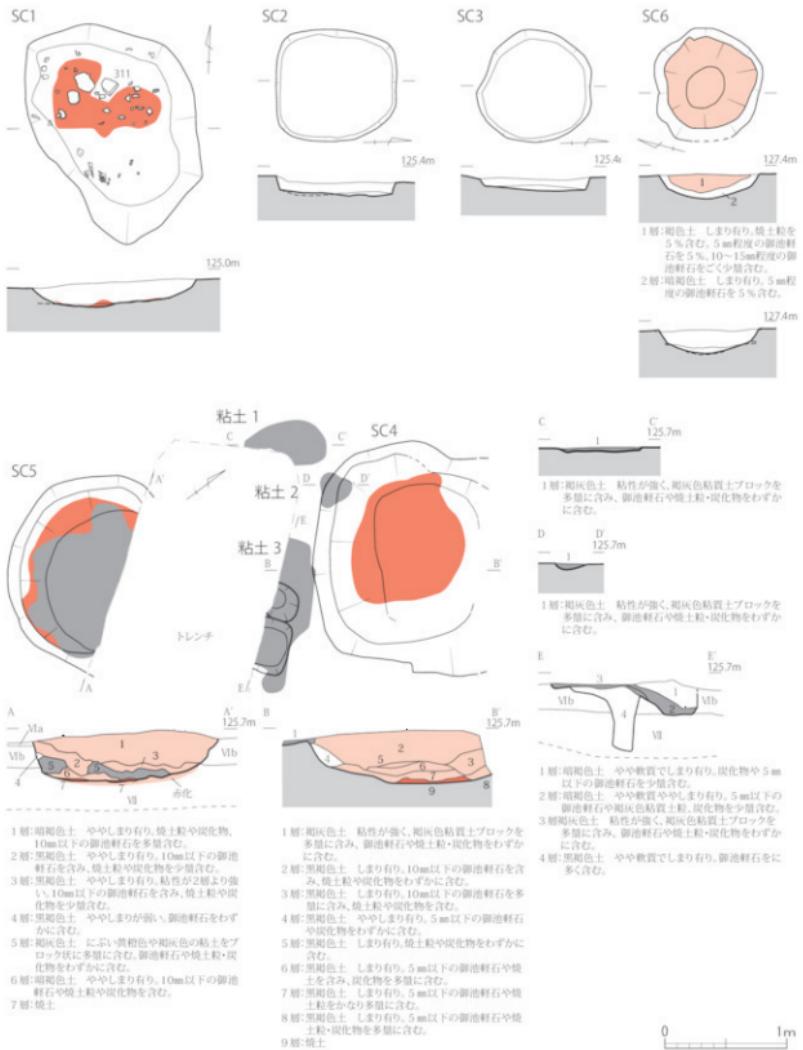
S C 9 は、A 区 J 9 ~ K 9 グリッドにかけて VI a 層で検出した。規模は 1.32 m × 0.58 m の長梢円形プランで、検出面からの深さは 0.2 m。全体的に焼土粒を含む暗褐色土が堆積していたが、東端部に焼土粒が密集している。遺物は確認されなかった。

S C 10 は、A 区 I 11 グリッドの VII 層上面で検出した。規模は 1.2 m × 1.1 m の不整な円形プランで、検出面からの深さは 0.32 m。東西をピットに切られている。遺物は確認されていない。

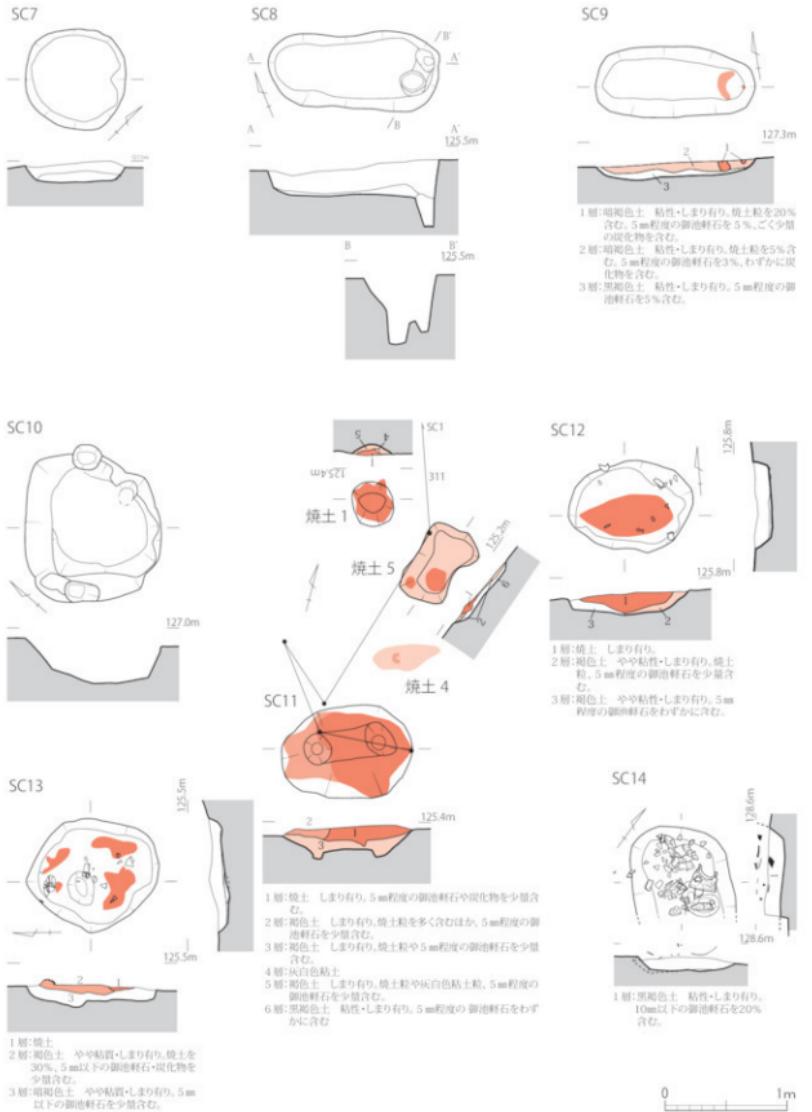
S C 11・S C 13 については、A 区 D 13 グリッドの VI a 層で検出した。そのうち S C 11 の遺構規模は 1.08 m × 0.76 m の梢円形プランで、検出面からの深さは最深で 0.24 m を測る。また S C 13 については 1.1 m × 0.93 m の梢円形プランで、検出面からの深さは最深で 0.18 m を測る。どちらも埋土に焼土もしくは焼土粒が見られる。遺物は S C 11 で布痕土器（387）や軽石製品（388）・金床石（311）等、S C 13 で高台付塊（392）や甕（393）等が出土している。なお、同グリッドには焼土 1 や焼土 4・5 も確認されている。

S C 12 は、A 区 C 16 グリッドの VI a 層で検出した。規模は 1.45 m × 0.74 m の梢円形プランで、検出面からの深さは 0.14 m。焼土を伴い、高台付塊（389）や甕（390）、須恵器の塊（391）等が遺構上部で出土している。

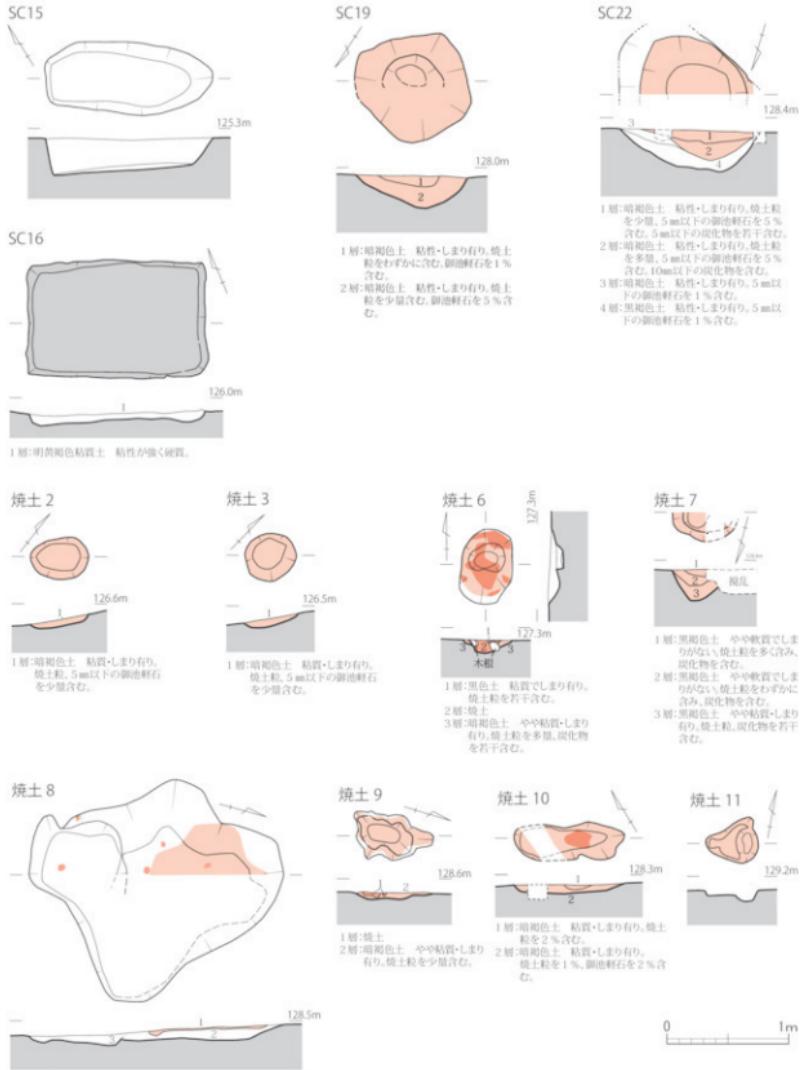
S C 14 は、A 区 H 12 グリッドの VI a 層で検出した。南側は搅乱により削平されている。遺構の規模は 0.81 m × 0.72 m + a の梢円形プランになる可能性がある。検出面からの深さは、最深で 0.14 m



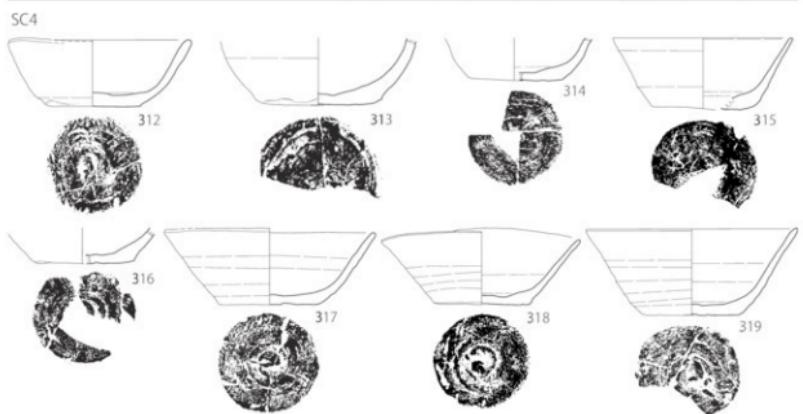
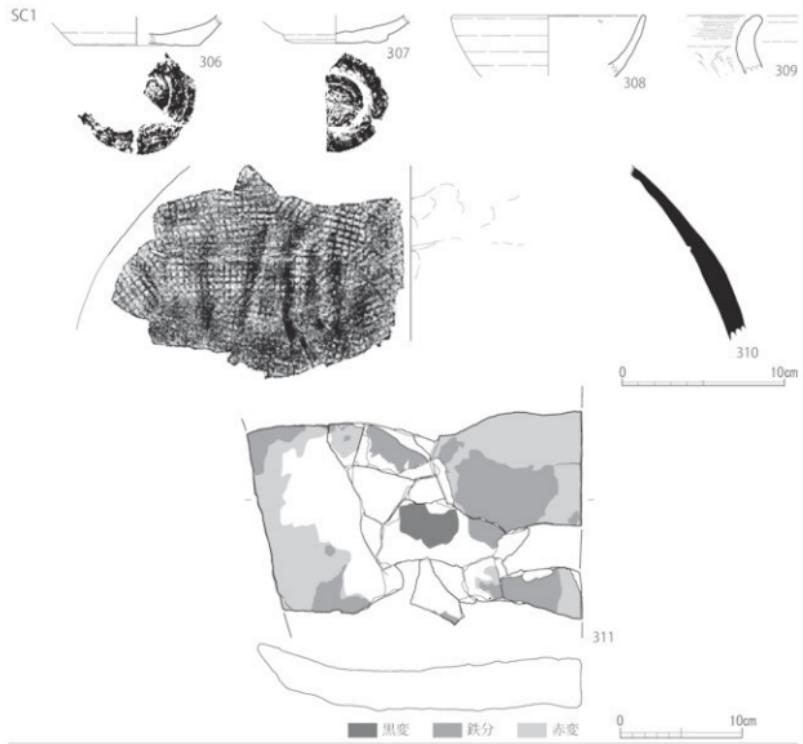
第43図 土坑(SC) 実測図1 (S=1/40)



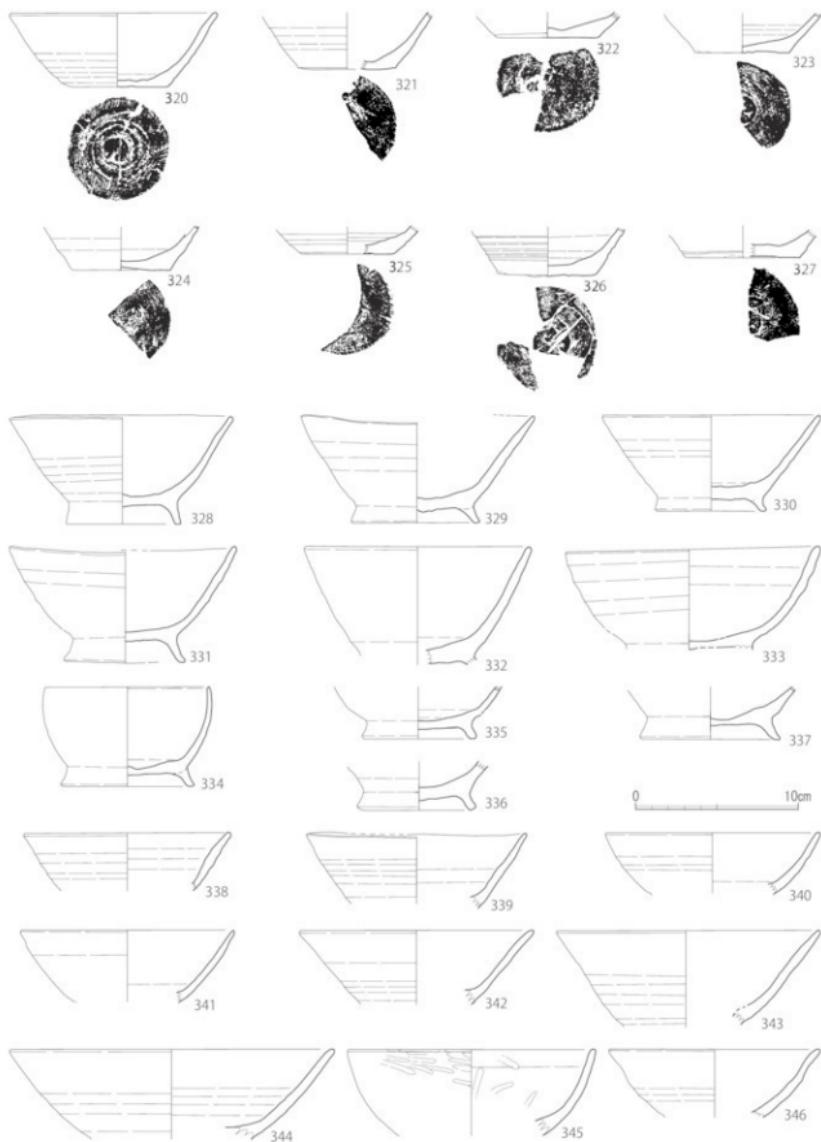
第44図 土坑(SC) 実測図2および焼土実測図1 (S=1/40)



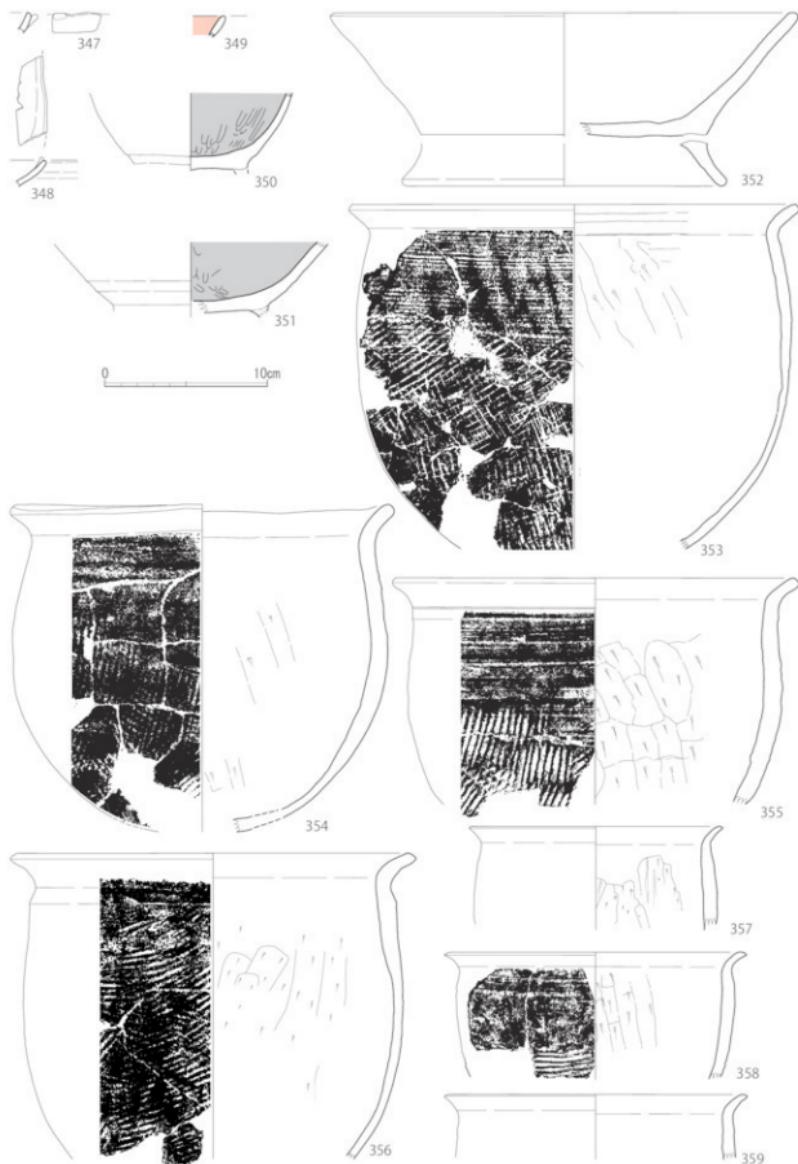
第45図 土坑(SC)実測図3および焼土実測図2 (S=1/40)



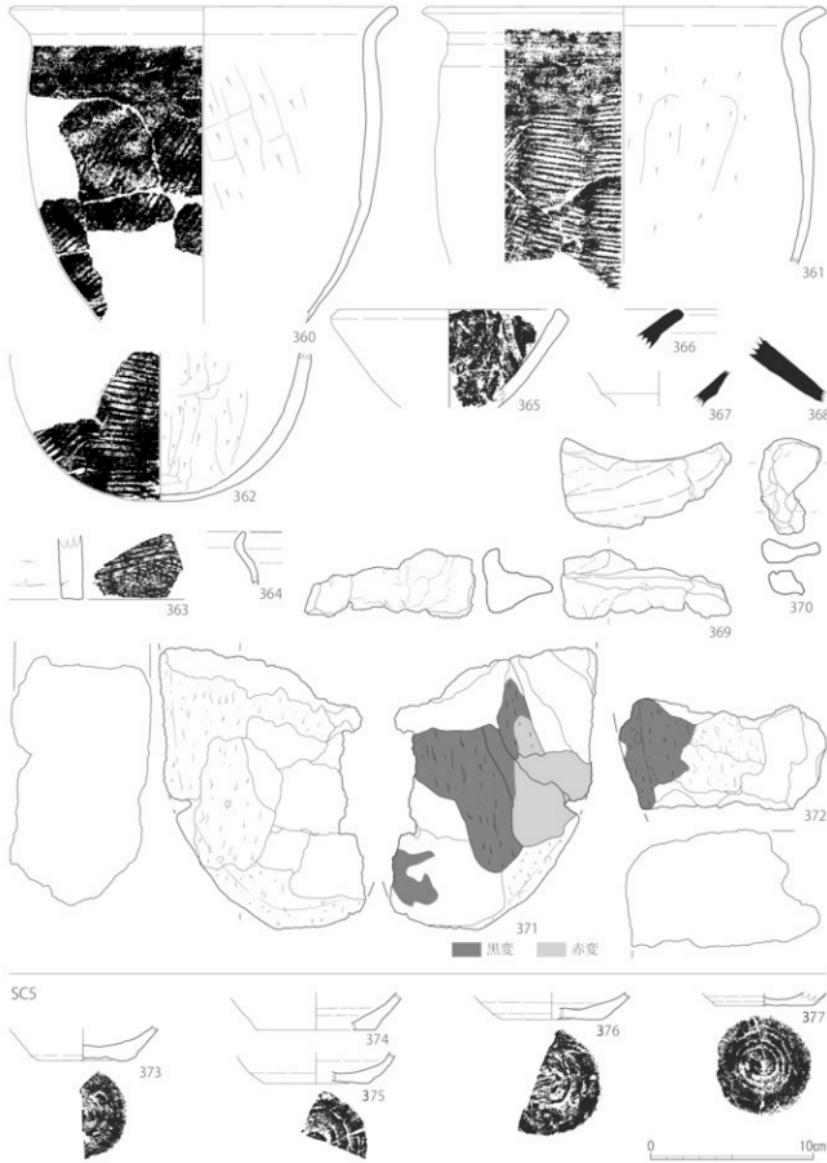
第46図 土坑出土遺物実測図1 ($S=1/3$)



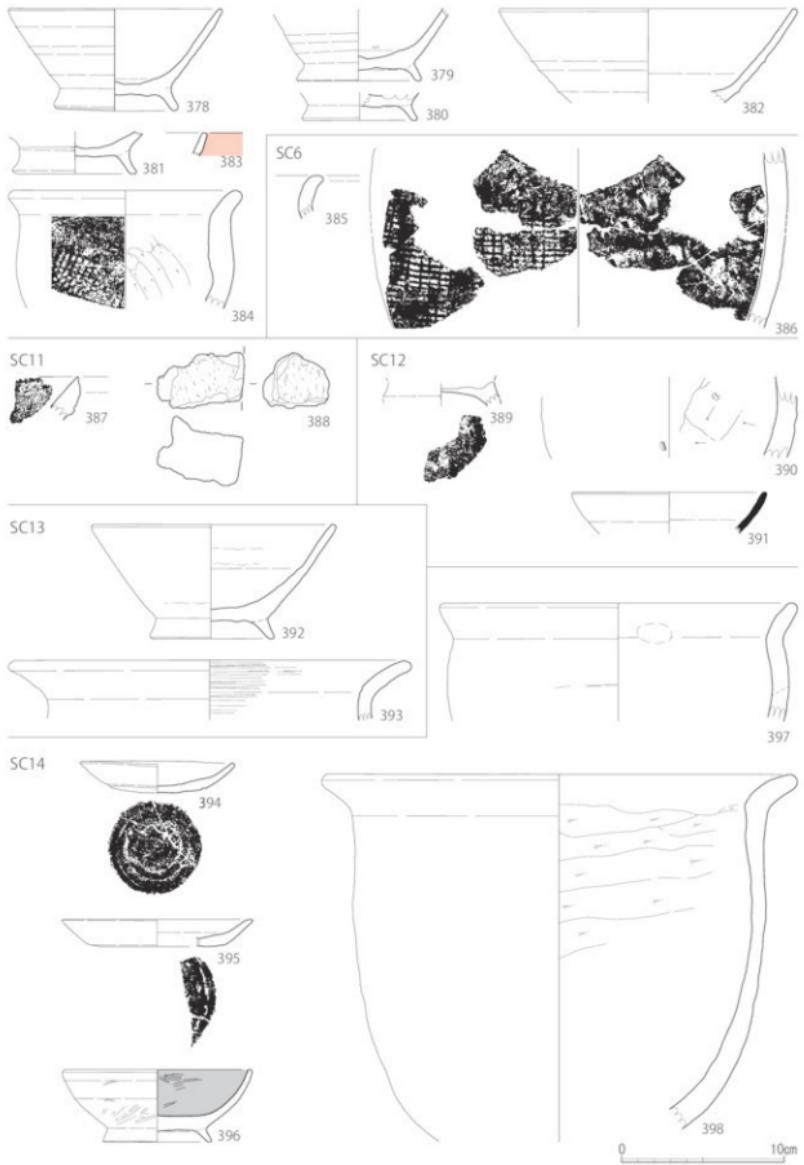
第47図 土坑出土遺物実測図2 (S=1/3)



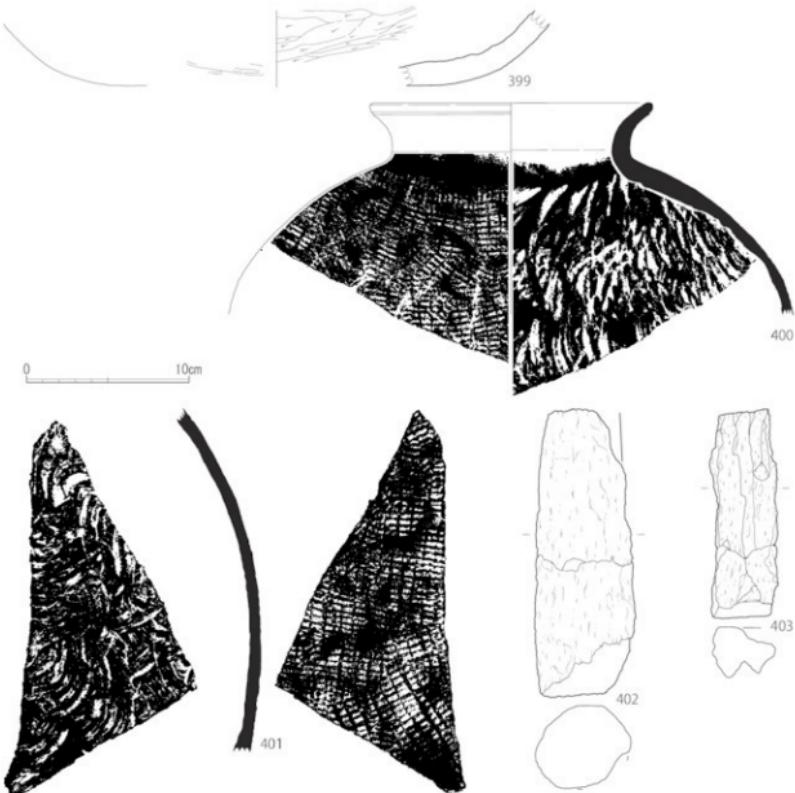
第48図 土坑出土遺物実測図3 (S=1/3)



第49図 土坑出土遺物実測図4 (S=1/3)



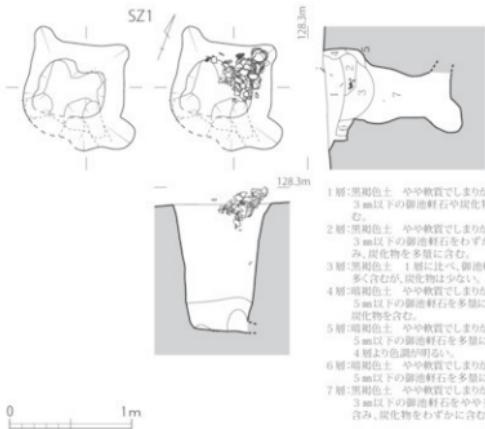
第50図 土坑出土遺物実測図5 (S=1/3)



第51図 土坑出土遺物実測図6 (S=1/3)



第52図 焼土出土遺物実測図 (S=1/3)



第53図 SZ 1実測図 (S=1/40)

である。遺物は、塊（394・395）や黒色土器（396）、甕（397～399）、須恵器の甕（400・401）、輕石製支柱（402）、輕石製品（403）等が多量に出土している。

S C 15は、A区B 19 グリッドのVII層上面で検出した。規模は 1.36 m × 0.58 m の長楕円形プラン、検出面からの深さは 0.3 m である。遺物は出土していない。

S C 16は、A区B 18 グリッドのV b層で検出した。規模は 1.45 m × 0.98 m の長方形プランで、検出面からの深さは 0.1 m であり、遺構内に明黄褐色粘質土が貼られていた。遺構上面で II 層が一部認められることから、後世の可能性が高い。

S C 19は、B区Q 5 グリッド南東端のVI a層で検出した。規模は直径 1 m の不整な円形プランで、検出面からの深さは最深で 0.26 m を測る。埋土には焼土粒を含む暗褐色土で構成されている。

S C 22は、B区V 3～W 3 グリッドにかけて、VI a層で検出した。北側及び南側、西側はトレンチヤー等で削平を受けている。規模は $1.1 \text{ m} + a \times 0.5 \text{ m} + a$ で、検出面からの深さは最深で 0.34 m を測る。埋土には焼土粒を含む暗褐色土が認められる。出土した炭化材については、分析の結果、スタジイで¹⁴C年代(AMS)は、 $1260 \pm 20 \text{ 年 BP}$ (暦年代: AD684～773年)の測定値を得ている。なお西側には近接して焼土7がある。

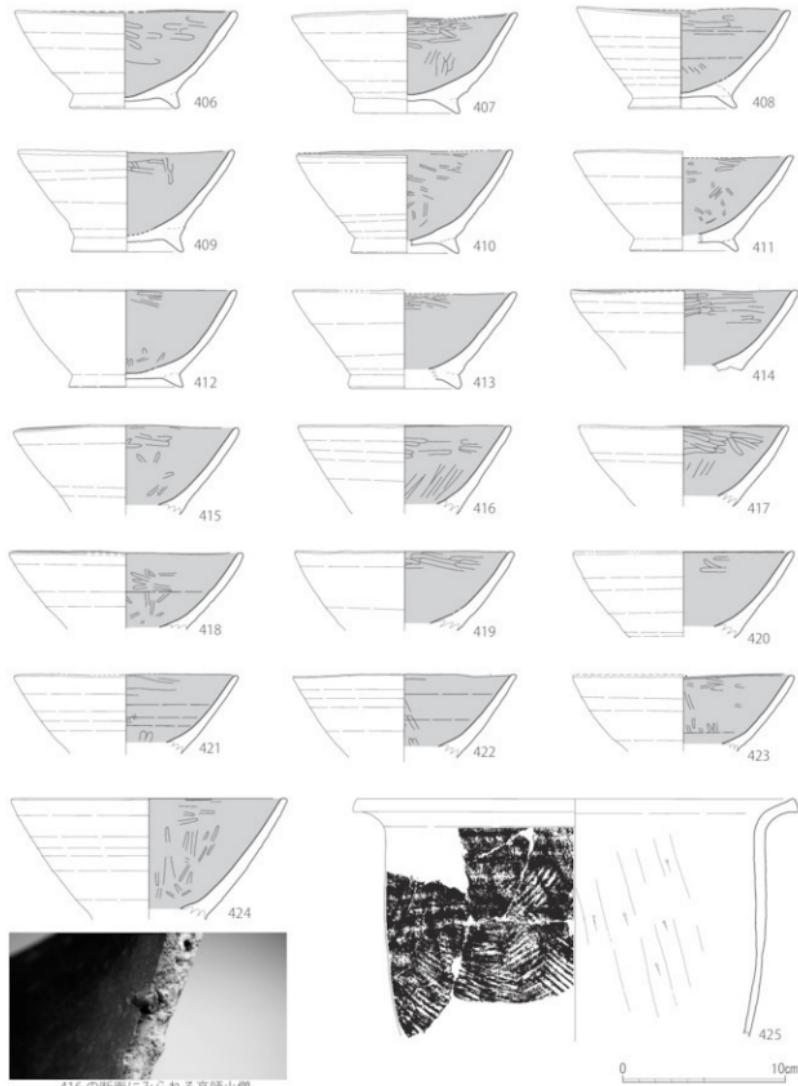
(3) 焼土 (第44図・第45図・第52図404・405)

焼土は、11基確認されている。そのうちA区では6基、B区が5基である。

焼土1はA区D 13 グリッド北東部、VI a層で検出した。規模は $0.36 \text{ m} \times 0.31 \text{ m}$ の円形プランを呈し、検出面からの深さは 9 cm を測る。北西約 0.3 m 先には焼土5、南南東約 1 m 先に焼土4、南方向 1.5 m に S C 11 が位置する。遺物は須恵器甕の胴部片（404）等が出土している。

焼土2はA区E 12 グリッド南東部に位置し、VI a層で検出した。北西約 2.8 m 先には、焼土3が隣接する。規模は $0.48 \text{ m} \times 0.34 \text{ m}$ の楕円形プランを呈し、検出面からの深さ 5 cm を測る。遺物は確認

SZ1



第54図 SZ1出土遺物実測図 (S=1/3)

されていない。

焼土3は焼土2同様、A区E 12 グリッド南東部に位置し、VI a 層で検出した。0.42 m × 0.4 m の円形プランを呈し、検出面からの深さは 6 cm を測る。遺物は確認されていない。

焼土4は A 区 D 13 グリッド南東部に位置し、VI a 層で検出した。遺構の規模は 0.56 m × 0.22 m の楕円形プランを呈する。

焼土5は焼土1・焼土3同様、A区D 13 グリッド南東部に位置し、VI a 層で検出した。遺構の規模は 0.66 m × 0.47 m の楕円形プランを呈し、検出面からの深さ 8 cm を測る。遺物は布痕土器（405）や金床石（311）等が出土している。

焼土6は、A区I10 グリッド中央東に位置し、VI a 層で検出した。規模は、0.6 m × 0.42 m の楕円形プランを呈し、検出面からの深さは 11 cm を測る。南東 4.3 m 先には S C 6 が位置する。遺物は確認されていない。

焼土7は、B区V 3 グリッド南東部に位置し、VI a 層で検出した。遺構の南及び西側はトレンチャーによる削平を受けている。規模は $0.51 \text{ m} + \alpha \times 0.23 \text{ m} + \alpha$ の楕円形プランを呈するものと考えられる。検出面からの深さ 25 cm を測る。遺物は確認されていない。

焼土8は、B区U 4～U 5 グリッドにかけて検出した。検出面は VI a 層で、規模は 2.1 m × 1.8 m の不整形プランを呈する。検出面の深さ 10 cm を測る。複数の焼土が切り合っている可能性がある。出土した炭化材を分析に出したところ、サカキで ^{14}C 年代 (AMS) は、1220 ± 20 年 BP (暦年代: AD714～744、765～886 年) の測定値を得ている。なお南方向約 6 m 先には、焼土9が位置する。

焼土9は、U 5 グリッド南東部に位置し、VI a 層で検出した。0.64 m × 0.37 m の不整な楕円形プランを呈し、検出面からの深さ 6 cm を測る。南南東 3.6 m 先には焼土10が位置する。

焼土10は、U 6 グリッド中央北側に位置し、VI a 層で検出した。0.91 m × 0.27 m の長楕円形プランを呈し、検出面からの深さ 8 cm を測る。遺物は確認されていない。

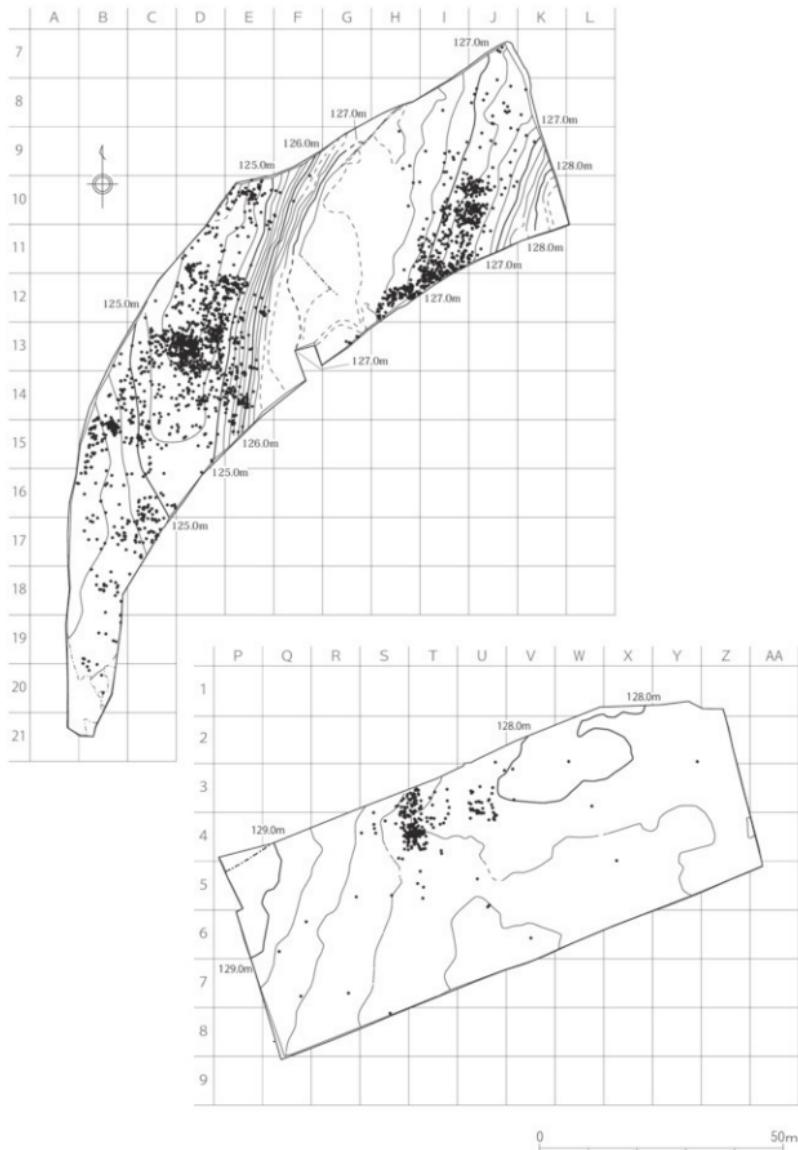
焼土11は P 5 グリッドに位置し、VII層上面で検出した。0.45 m × 0.35 m の不整な楕円形プランを呈し、深さ 8 cm を測る。遺物は確認されていない。

(4) 性格不明遺構 (S Z、第53図・第54図 406～425)

S Z 1は B 区 U 3～U 4 グリッドにかけて VII 層上面で検出されている。規模は 0.91 m × 0.83 m の不整な円形プランを呈し、深さは最深で 1.08 m である。当初は土坑として調査していたが、底面付近では四方に小穴が伸び、大雨等で水が湧くことから水穴の可能性も考えられる。ここでは不明遺構として報告する。

遺物は、遺構上面から中位にかけて出土しており、黒色土器（高台付塊：406～423）や甕（425）等が確認されている。そのうち黒色土器は 21 個体が入れ子状に重なった状態で出土している。8 点のみ完形・もしくは完形に近くものが認められるが、11 点は口縁部から体部まで、2 点は底部（未図化、図版 17・697・698）のみである。1 点のみ口径が 16.7 cm を測るが、他は 12.75～14.15 cm の間に収まる。

体部内面には、横位または斜位のミガキを口縁部から底部付近まで施されるが、比較的口縁部から体部中位に密に入るものが目に付く。黒化処理は底部まで及んでいないものも認められた。高台の断面が三角形に近い形状を呈し、退化傾向が顕著である。なお図化を行っていないが、环底部（図版 17・



第55図 古代遺物分布図 (S=1/1,000)

699) が 1 点出土している。なお、出土した炭化材の一部を分析に出したところ、スタジイで ^{14}C 年代 (AMS) は、 1380 ± 20 年 BP (暦年代: AD625 ~ 670 年) の測定値を得ている。

2. 包含層の遺物

これらの遺物は A・B 区から出土しているが、特に A 区で多く確認されており、全体の約 90% を占める。今回の調査から外れた残された包蔵地との関係は詳細に言及できないが、A 区の南東方の畠地に古代の集落等が展開する可能性を想起させる出土状況が見られた。

以下、出土した遺物の器種や器形的特徴をもとに、遺物について説明を加える。

(1) 坪 (第 56 図~第 59 図 426 ~ 491)

426 は、体部下位の底部からの変化点付近にやや丸みを帯びる。体部外面は丁寧な回転ナデが施され、調整時に生じる稜が認められない。

427・428・431 は、口縁端部に弱い内湾傾向が見られる。体部の調整痕は内外面とともに丁寧にナデ消されている。429 は、やや不整形な底部から直線的に立ち上がる器形に特徴がある。底部から体部への変化点付近は器壁が厚い。口縁部に見られる弱い歪みは、焼成時に生じたと考えられる。430 は、底部から体部中位までの資料である。底部外面に比較的明瞭に面取された痕が認められる。

432 ~ 434 は、底部から角度をもって直線的に立ち上がる体部をもつ。434 は、器高が前出の 2 個体より劣るが、厚い器壁を有し体部が同様に直線的に立ち上がる。

435 ~ 439 は、底径がやや小さく、底部から外方に向かい緩やかに聞く器形を有する。体部の外面に調整痕が認められる個体もあるが、概ね回転ナデでにより体部外面は稜のない平滑な仕上げとする。436 には体部下位に墨書が認められる。運筆から判断して倒位に書された文字と判断できる。文字が書された部分は全体が残っておらず、その全体を認識することができないため確実な判読はできない。440 ~ 444 は、底部片の一括資料である。

445 ~ 452 は、5 cm 前後の底径で、比較的高い器高を有する一群である。体部は、ほぼ直線的に立ち上がり、体部の調整痕が明瞭に残る。453 は、底部外縁をシャープに仕上げる。454 は体部外面の下位にナデ上げ状の調整が認められる。455・456 は、底部から体部への変化点付近に張りがあり、そこから角度をもって立ち上がる器形を呈する。457 は、底部の径に比して大きな口径をもち、体部外面には丁寧な回転ナデによる調整を施す。底部内面の中央に成形時に生じたと考えられる突出部が認められる。458 ~ 461 は、底部片の一括資料である。

462 ~ 467 は、円盤様の底部を有する一群である。そのうち 462 は、安定した底部から直線的かつやや立ち気味に外方に向かい立ち上がる器形を呈する。463 は、いわゆる円盤状高台に類した断面形状を呈すが、底部外面付近の調整観察から考えると器形成時の所産と考えられる。464 ~ 467 は、底部から体部への変化点付近に弱い屈曲を有する一群である。464・467 は、内外面ともに丁寧な回転ナデを施す。465 は、他と比して器高と底径に大きな差はないが口径が優越し調整も丁寧である。466 は、口径と底径がやや小さく、外方に角度をもって立ち上がる器形を呈する。

468 ~ 483 は、底部の一括資料である。468・470・472・473 は、底部外縁が鋭角を呈するタイプである。469 は、463 に類似した同様に円盤状高台に類した断面形状を呈す。471 は、底部から体部への変化点に弱い屈曲が認められる個体である。また 465 に類するが底径が小さい。474 ~ 477 は、

底部外縁を回転ナデにより面取りした痕跡が認められる。480・481は、底部から体部への変化点付近に弱い屈曲を有する。478・479・482・483は、外方に開く体部を有する底部片である。

484は、底径11.5cmを計り、他と比して異質な器形を呈する。底部外面の接地面から一度外方に向かって開き、底部下位から角度をもって立ち上がる。内面調整が丁寧なことから、器高によっては鉢状の器形となる可能性も指摘しておきたい。

485～488・491は、器高が3cmに満たない环である。491は、口径が大きくやや外反しながら外方に開く器形を呈する。口縁端部がやや肥厚し丸く收める。489は、安定した底部を有し、体部は一度外方に開き立ち弱い屈曲を持ちながら角度を変えて立ち上がる。口縁端部をやや尖り気味に仕上げる。白磁のVI類に類似した器形を呈する。490は、小型の环である。

(2) 塊 (第60図～第61図 492～539)

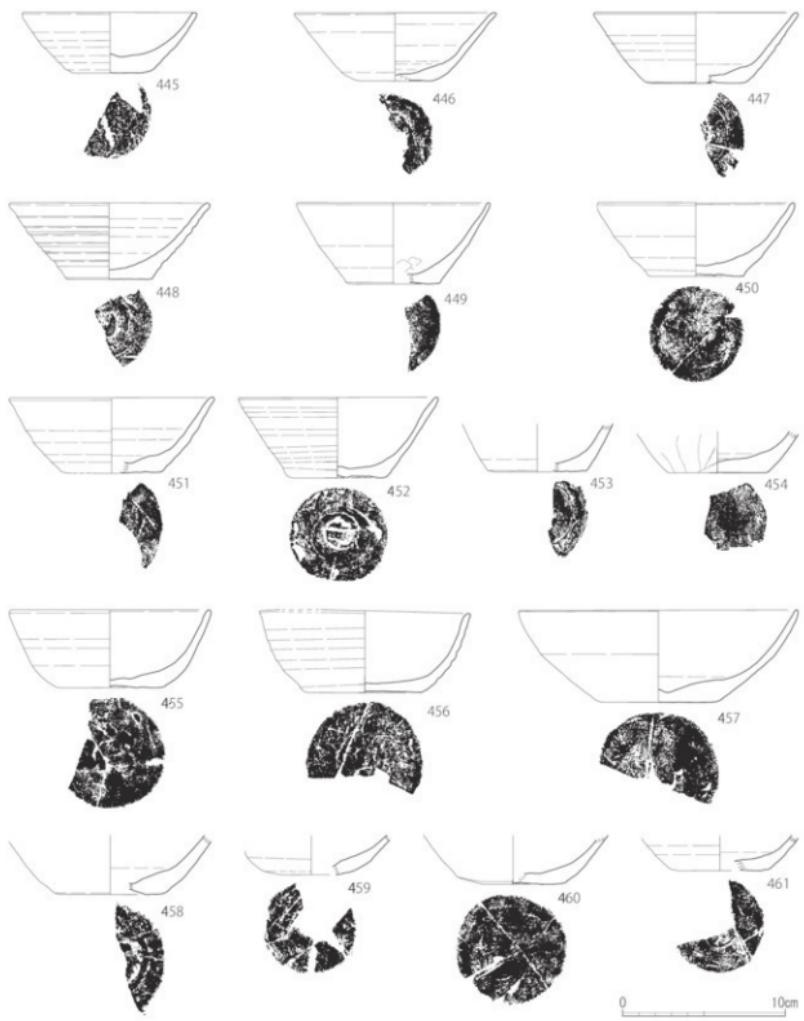
包含層から出土した塊については、円盤高台付塊の類いは少なく、高台付塊が大半を占める。黒色土器にも塊類が多く含まれるが、それらについては黒色土器の項で取り上げるものとする。

492は、外方に向かい直線的に開く体部を有する。高台は外方に開き、接地面を平滑に仕上げる。493は、器形的に492と同様の体部を有するが、底部はかなり肥厚する。高台の接地面は平滑に仕上げるがやや外縁はやや浮き気味となる。494・495は、体部片である。底部付近の破断面の特徴から高台付塊と判断した。494は、ほぼ直線的に外方に開く器形を呈す。器表面の内外面に成形時の回転ナデによる調整が明瞭に残る。器高的に優越しやや大型の塊といえる。495は、体部の器壁厚がやや不均一である。体部内面に沈線状の調整痕が認められるが、意図的なものでではないと考えられる。496・497は、高台の接地面がやや浮き気味となる特徴がある。なお497の高台外面には、弱い外反が認められる。498は、高台端部を丸く收める。高台外面の調整は丁寧である。500・501は、内湾気味に立ち上がる体部に特徴がある。504は、やや尖り気味の高台端部を有する。高台外縁は、鋭角的かつ接地面を平滑に仕上げている。506は、やや高めの高台である。弱い外反が認められ、端部を丸く收める。508の高台外縁には、弱い屈曲が認められる。

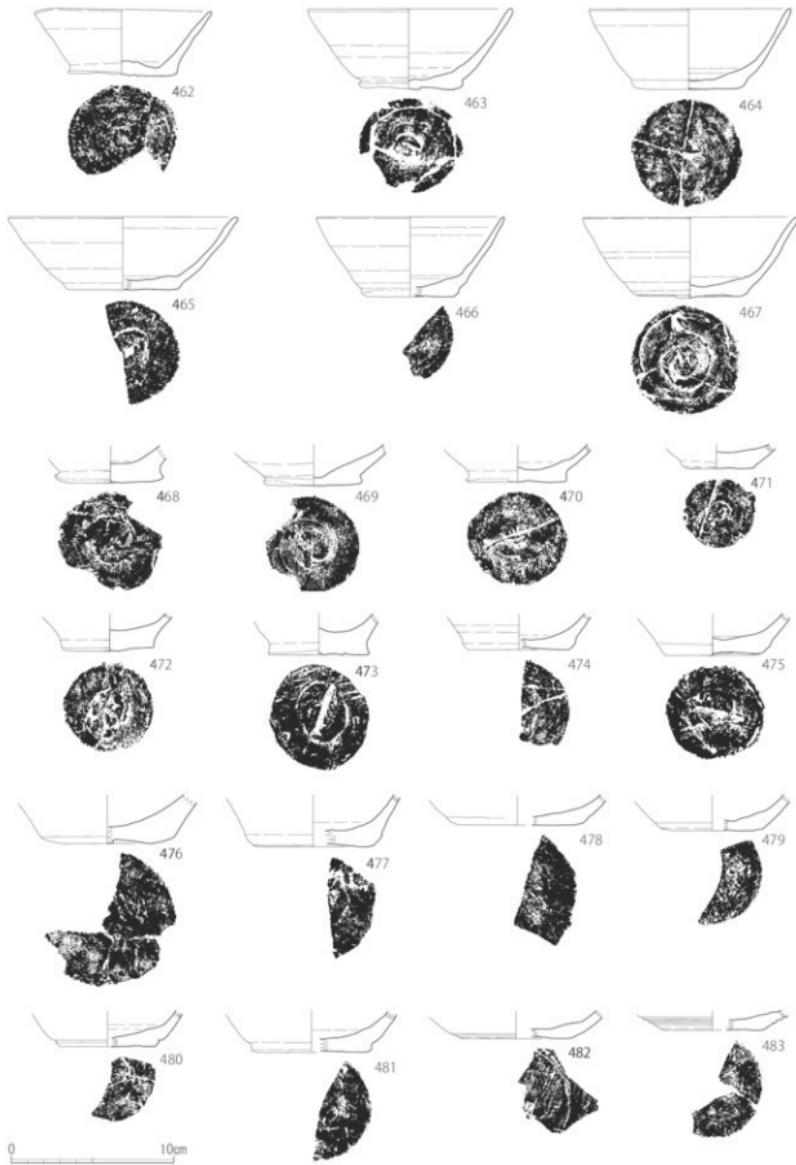
507・509は器形的に近似すると考えられる。507は、体部の内外面に比較的密にミガキを施す。底部から一度外方に開き、体部下位から上方に向かい立ち上げる。口縁端部は、わずかに外反する。510は、507・509に近い口径を有すると考えられるが、器形的には立ち上がりが507と比してやや弱く外方に広がる器形を呈すると考えられる。511は、高台の高さが一定しない不整形な器形である。512は、鋭角な三角形となる断面形状を呈する高台を有する。底部内面付近に粗密のあるミガキを施す。513・514は充実した高台を有する個体である。特に514は、内外面とも丁寧な調整を施す。516は、高台外面がわずかに膨らみをもつ。519は、508と類似した高台である。体部は外方に大きく開き、器高的にはやや低めか。521～526は低めの高台であり、やや退化傾向にある。529は、高台付塊の底部片である。底部内面には当て布の痕跡が、高台内面には工具によると考えられる連続する圧痕が認められる。531～534は高台の断面が三角形に近い形状を呈する。退化傾向が顕著である。536には底部内面の調整時に残された圧痕が、明瞭に残る。537は、高台を有する小型の塊である。丁寧な調整を施し、特殊な器形であることから仏器の模倣品の可能性が指摘できる。538・539も小型の塊であり、537に類似すると考えられる。



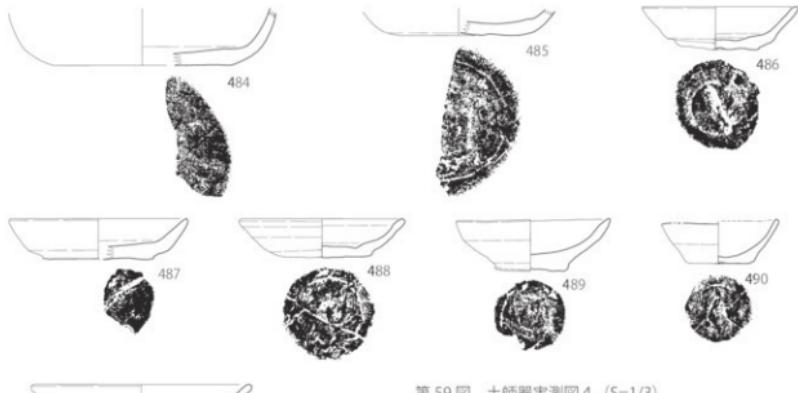
第 56 図 土器実測図 1 (S=1/3)



第 57 図 土器実測図 2 ($S=1/3$)



第 58 図 土器実測図 3 (S=1/3)



第59図 土師器実測図4 (S=1/3)

(3) 鉢 (第61図 540～547)

540～546は、鉢である。底部片を確認していないが、平底の底部とを考えられる。540・541は、口縁が外方に開き、口縁直下から底部に向かいやや膨らみを持ちながらすぼまる器形を呈する。また540の体部外面には、格子目のタタキ痕が明瞭に残る。内面には工具によるナデ調整が顕著である。541は、口径が25cm近くあり、鍋的な性格で使用された可能性もある。547は、高台付鉢である。厚めの器壁を有し、口縁端部まで器壁がほぼ均一である。

(4) 壺蓋ほか (第61図 548・549)

548は、壺蓋と考えられる。端部が下方に向かい屈曲する。549は、大きく変形した壺の底部である。全体のプロポーションが把握できないが、焼成前に意図的に成形されたと考えられる。

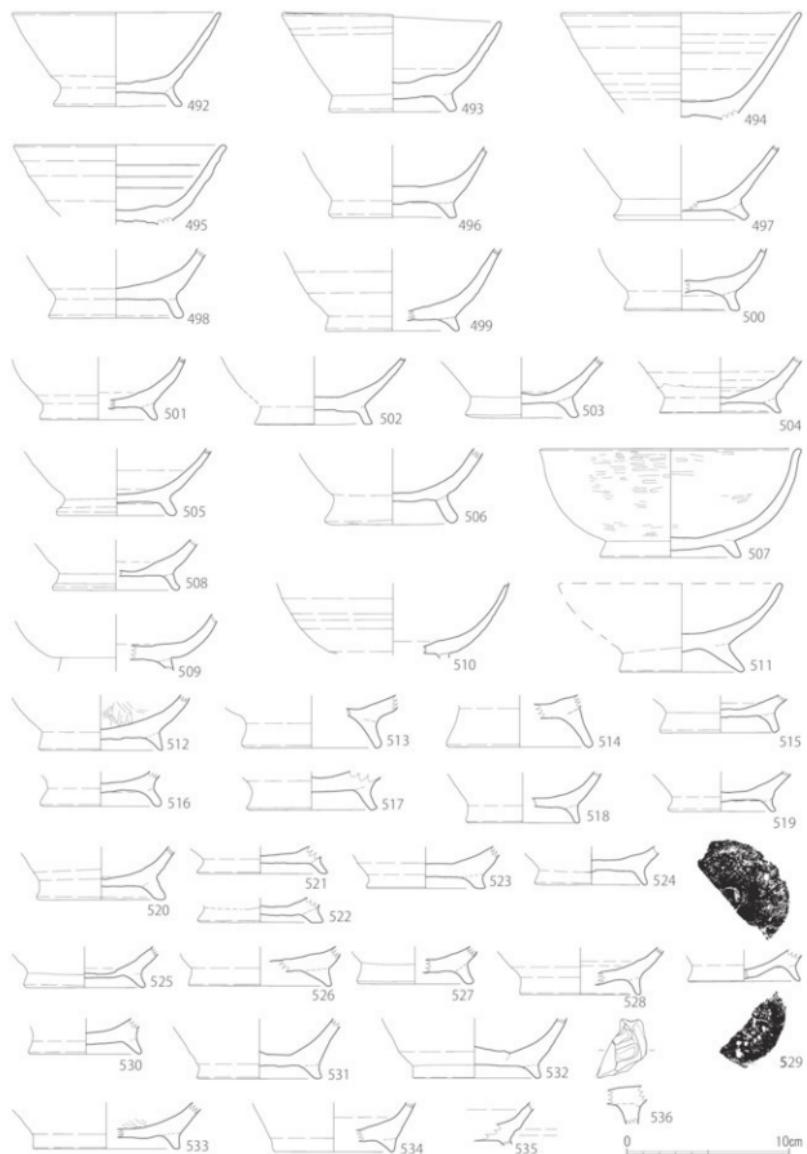
(5) 赤彩のある土器 (第61図 550～552)

赤彩のある土器は点数は少ないが、A区のS C 4やS C 5からも出土している。550～552は壺で、内面に赤彩を施している。550は、底部外縁をシャープに仕上げる。内面には横位のミガキが口縁部から体部中位付近まで密に施す。551・552は、体部片である。ともに内面に横位を中心としたミガキを施す。

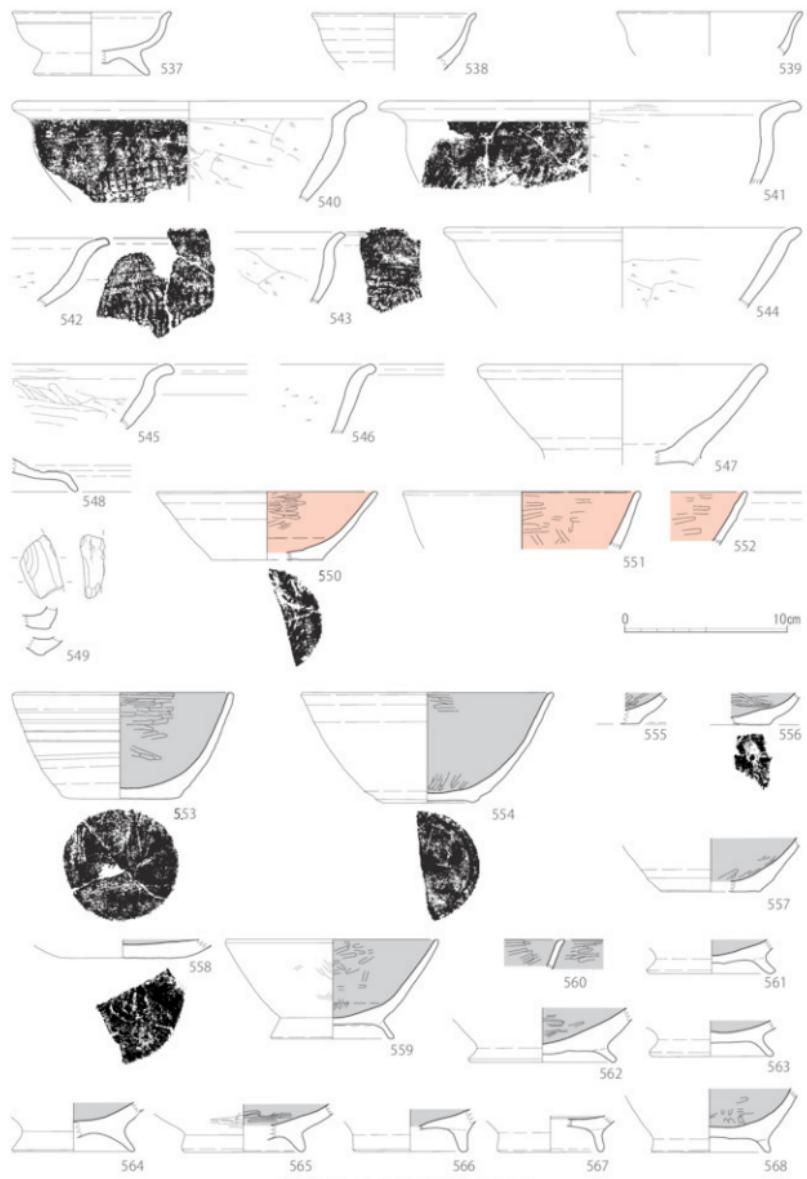
(6) 黒色土器 (第61図 553～568)

黒色土器は、B区のS Z 1から入れ子状態で出土するなど、この遺跡の時期を考える上で重要な意味を持つ遺物である。壺と高台付塊があるが、大半は高台付塊である。内外面に黒化処理を施す両黒の個体として560を1点のみ認定するが、口縁部付近の破片であり焼成時の所産の可能性も考えられる。

553・554は大型の壺である。553は、底部外面のヘラ切り痕を丁寧にナデ消している。底部から体部への変化点付近の形状は前述の465等に類似する。体部内面に横位、斜位のミガキを口縁部から体



第60図 土器実測図5 (S=1/3)



第 61 図 土師器実測図 6 (S=1/3)

部中位付近まで密に施すが、中位以下では疎となる。また 554 は、底部に高台が外れたと考えられる痕跡を残す。器形としては、本来は高台付塊であろう。内面の口縁部付近と底部付近に横位と斜位のミガキを施す。555～558 は、坏の底部片である。559 は、底部付近から外方に直線的に開く体部と同じく直線的に開く細身の高台をもつ個体である。内外面にミガキが見られる。内外面ともにミガキの単位は把握できるが方向を一にしていない。

(7) 瓢 (第 62 図～第 64 図 569～602)

瓢は、胴部外面の口縁直下から底部付近まで格子目タタキまたは平行タタキを施し、内面には上から下へのケズリ痕を明瞭に残す個体が多い。569 は、胴部中位が球状に張るタイプである。570 もこの器形に類すると考えられる。口縁は水平に近い角度まで大きく外反する。571 は、胴部中位から斜位に方向を一にして平行タタキを施す。572 は、胴部外面の調整がやや不明瞭であるが、水平方向に工具による横方向のハケメが認められる。573 は、丸底の底部から直線的に立ち上がる胴部に特徴がある。575 は、胴部の最大径は、口径をわずかに上回ると考えられる。調整に特徴があり、胴部外面と口縁内部から胴部上位まで密に横方向のハケメを施す。576～578 は、比較的小型の瓢である。576 は、やや寸胴の器形を呈すと考えられる。579 は、胴部外面上位にヨコナデを施す。明瞭な稜が立つ。585・593 にも同様の特徴が認められる。583 は、口縁が矮小化する特異な器形を呈する。586・587 の口縁内部には、周回する工具ナデが顕著に残る。591～593 は、ほぼ水平に開く口縁に特徴がある。594 は、口縁が上方に伸び、外面には調整によると考えられる平滑面が認められる。595 は、短い単位の工具ナデを口縁の内外面に施す。胴部外面はナデにより平滑に仕上げる。596 は、短小の口縁を有し、胴部内面に縦方向のケズリを施す。597 は、成形及び調整がやや粗い。粗製である。598・599 は小型の個体である。599 は、口径が 10cm にも満たないが、成形及び調整は丁寧である。

600・601 は底部片の一括資料である。601 は、底部付近全体に格子目タタキによる調整を施す。

(8) 潢 (第 65 図 603～613)

603・604 は同一個体と考えられる。漚については、口縁を確認した個体は 603 のみである。605 は、球状に胴が張る器形を呈する個体である。外面には密な平行タタキを内面には工具ナデを施す。606 は、漚の底部付近の破片である。外面には密に格子目タタキを施す。607～609 は、底部付近が一部欠損した資料であるが、底部の器壁の厚み等から漚と認定した。610～613 は、漚の把手と考えられる。

(9) 布痕土器 (第 66 図 614～625)

布痕土器の破片は数多く出土したが、土器の性質上風化が激しく、口径が復元できた個体は 10 点のみである。口径の最大は 11.8cm (619)、最小は 10.9cm で (618) あり、平均口径は 11.2cm である。口径的には、個体間にさほど大きな差異はなく、法量的にも近しい。

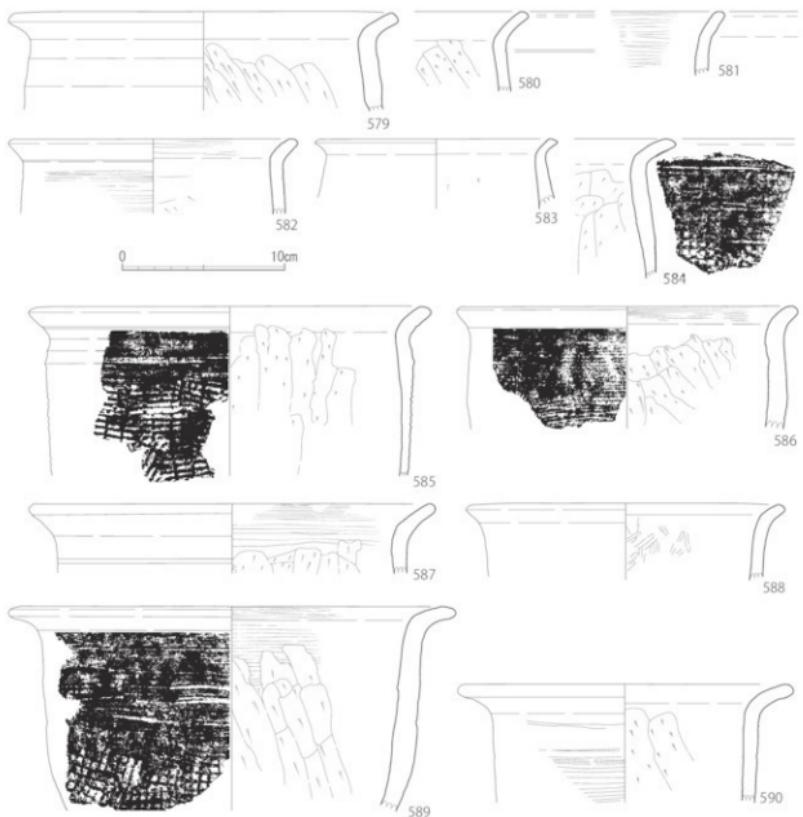
(10) 須恵器 (第 67 図～第 69 図 626～667)

坏 (第 67 図 626～632)

626・627 は同一個体と考えられる。体部の内外面に丁寧な調整を施す。628～632 に比して大型



第62図 土師器実測図7 (S=1/3)



第63図 土器実測図8 (S=1/3)

の器形を呈する。

高台付塊（第67図633～647）

635は、口縁端部が玉縁状に肥厚し、口径16.2cmを計る大型の塊である。641は、体部下位から緩やかに湾曲しながら立ち上がる器形を呈する。643・644に見られるように全体的に高台には退化傾向が認められる。640の内面には、鉄分の沈着が認められるが要因は不明である。

鉢（第68図648～653）

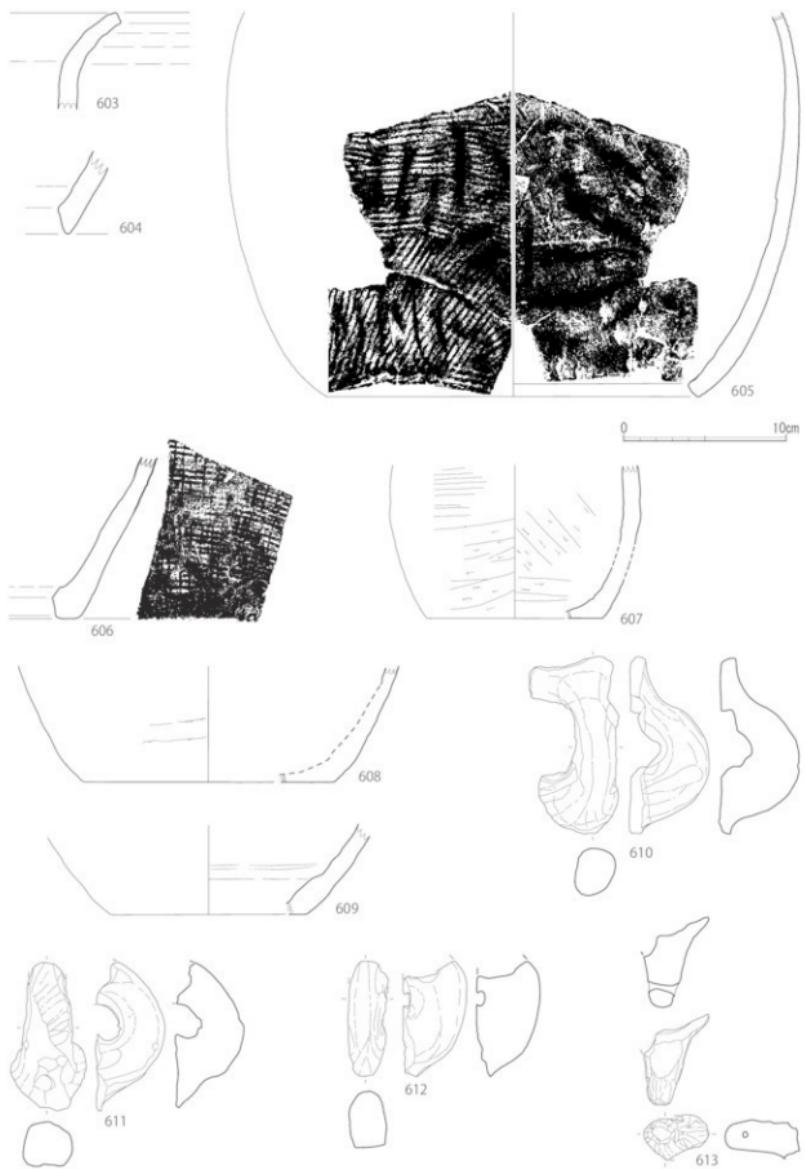
底部を平滑に整え、やや立ち気味に外方に開く器形が共通する。口縁端部は、その上部を平滑に仕上げるもの（648・650）、嘴状に仕上げるもの（649・651・652）がある。

甕（第68図654）

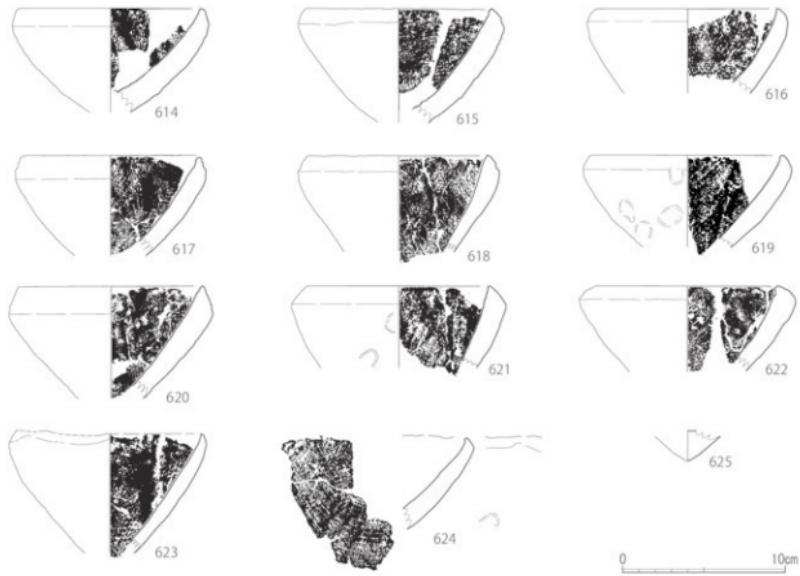
外方に向かい開くやや短い口縁を有する。器形全体は把握できないが、胴部の中位より上に最大径を



第 64 図 土器実測図 9 (S=1/3)



第65図 土器実測図10 (S=1/3)



第66図 土師器実測図11 (S=1/3)

もつと考えられる。胴部外面には格子目タタキを施す。

壺（第68図・第69図655～667）

655～663は、受け口状の二重口縁を有する壺である。664～667は、胴部外面に格子目タタキ(664・666・667)、平行タタキ（665）を施す。665は、二耳壺と考えられる。667は、高台を有する壺である。

(11) 瓦質土器（第69図 668～673）

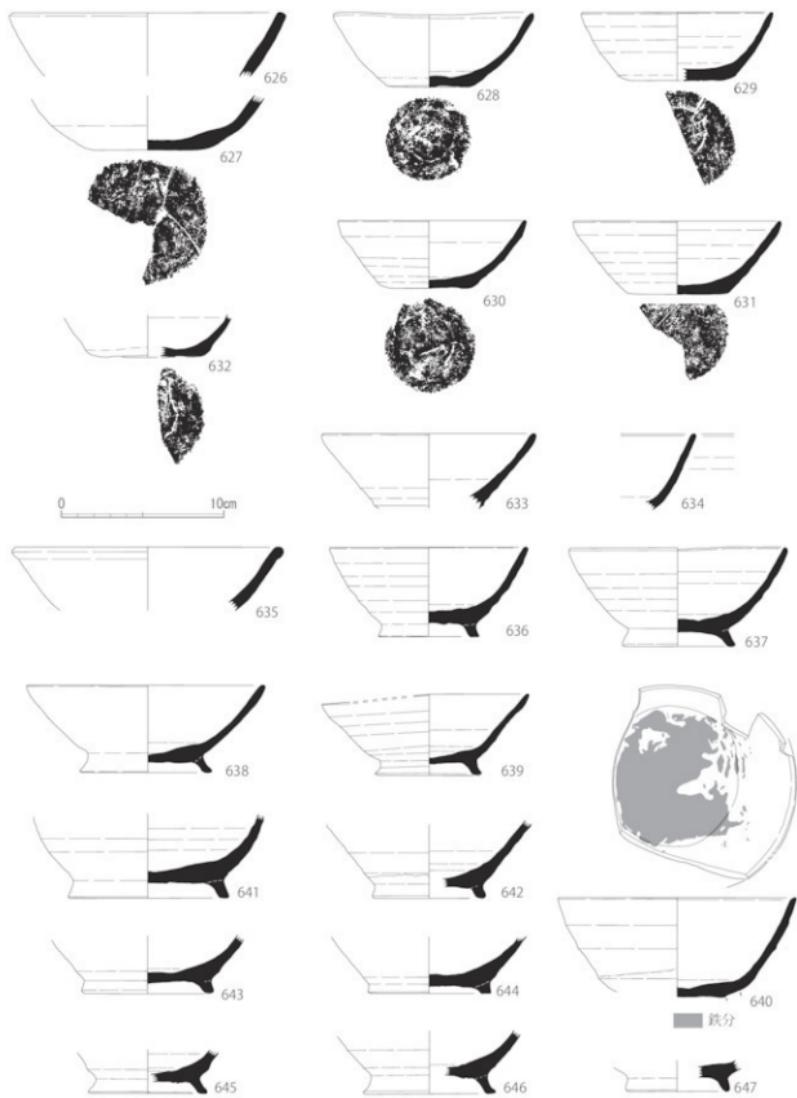
点数は少ないが、高台付塊を中心に出土している。高台付塊の高台は退化傾向が認められる。

(12) 土製品（第69図 674～682）

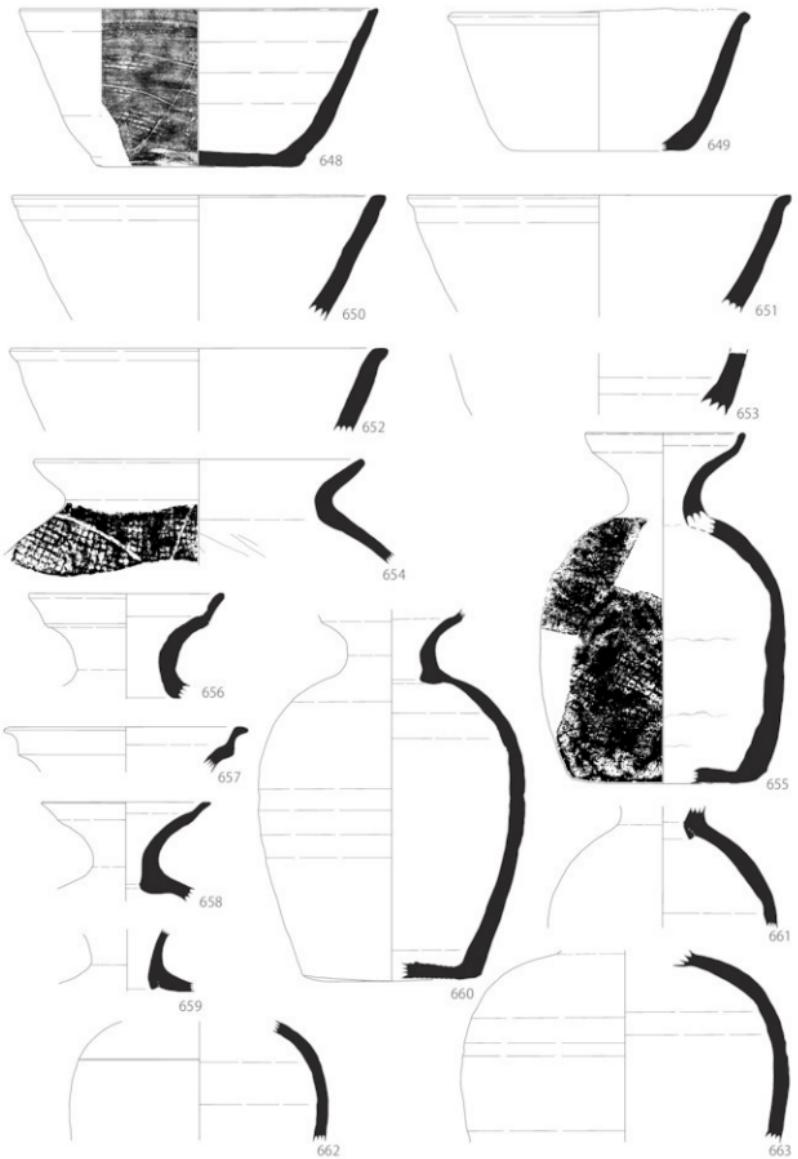
674・675は、鞆羽口の先端付近である。どちらも溶解物が付着している。古墳時代のもの（221・222：径6cm）と比べると7.8～8.1cmと径が一回り大きい。676～679は、紡錘車である。円形で中央に穿孔が認められる。このうち676は、直径6cm、穿孔径1.4cmである。680～682は、用途不明の土製品である。そのうち680は、紡錘形の形状で中央に穿孔が認められる。

(13) 鉄製品（第70図 683～686）

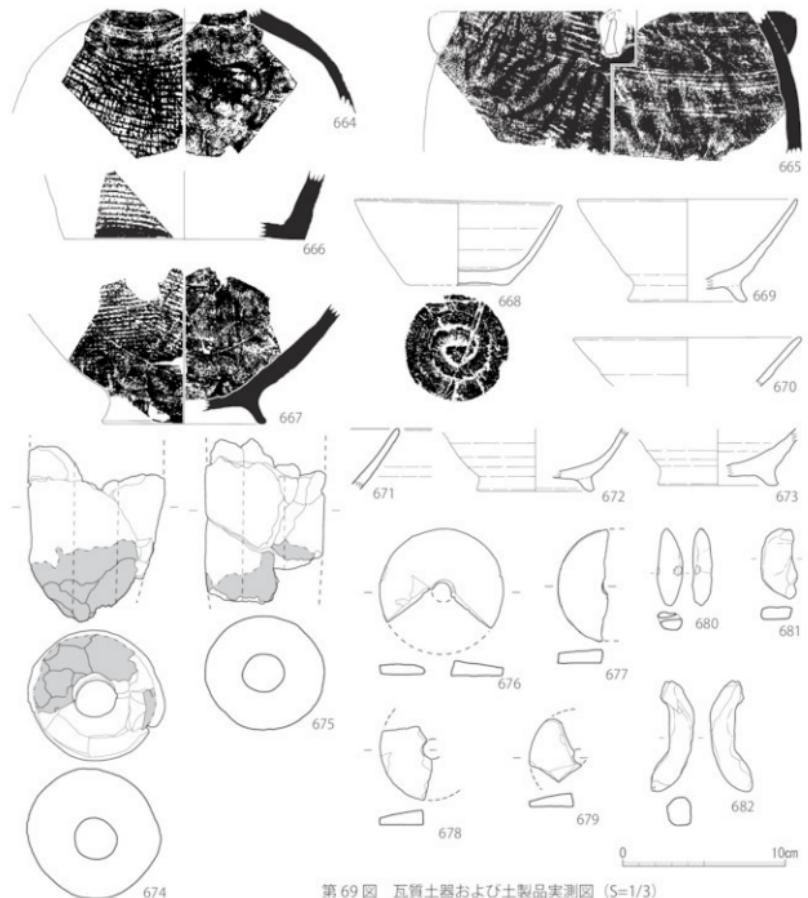
638・684は、鋤先と考えられる資料である。685は、先端部が二股に分かれる雁股鎌である。686は鉄鎌の茎部と考えられる。また図化を行っていないが、A区のV a層中から鉄滓が出土している（図



第67図 須恵器実測図1 ($S=1/3$)



第 68 図 須恵器実測図 2 ($S=1/3$)



第 69 図 瓦質土器および土製品実測図 (S=1/3)

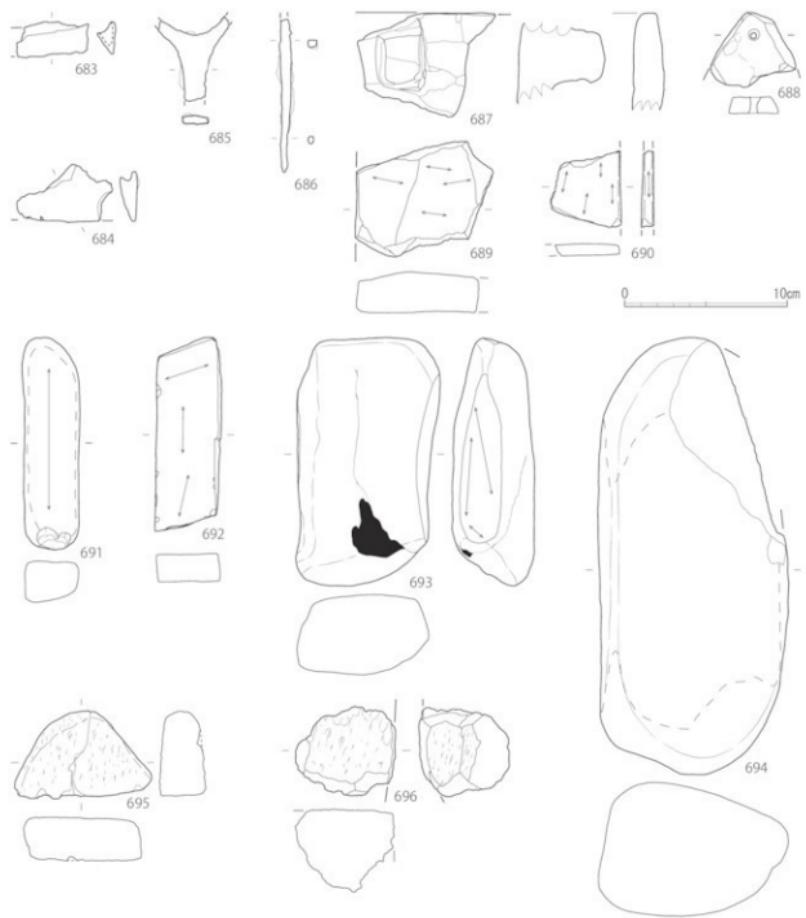
版 22、700 ~ 705)。

(14) 滑石製品 (第 70 図 687)

687 は、縦方向の瘤状把手いわゆる耳を有する滑石製石鏝片の二次加工品である。上下に削痕が認められることから、把手は本来もう少し大きいものであったと考えられる。

(15) 石製器 (第 70 図 688 ~ 694)

688 は、有孔石製品である。689 ~ 694 は砥石である。そのうち 689 は、砥面は 1 面のみで、表面中央には使用による稜が入る。690・691 は表裏側面の 3 面で使用されている。692 は表裏 2 面が砥



第70図 鉄製品および滑石製品・石製品・軽石製品実測図 (S=1/3)

面となる。使用により両面とも光沢がある。693は右側面が砥面となり、内湾ぎみになっている。694は大型で表面・左側面が使用されている。

(16) 軽石製品 (第70図 695～696)

695・696は、軽石製品である。そのうち695は、三角形状に面取されている。696は、全体形が不明だが、表面・右側面に面取された痕跡が認められる。

番号	種別	部材	出土 地點	層序	手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
					外 面	内 面		外 面	内 面		
1	縄文土器	鉢	B 1 口縁部 ～胴部	沈殿文 —	洗練文 横方向のナデ 横・斜方向のミガキ	洗練文 横・斜方向のミガキ	良好	灰褐色	灰白色	ごく微細な透明光沢、1mm以下の細 孔・黒褐色・灰白色・黒褐色光沢・淡 黄色を含む	
2	縄文土器	鉢	B 1 口縁部	SC17	横方向のナデ 横方向の貝殻条痕	ナデ	良好	に高い 黄褐色	黄褐色	ごく微細な透明光沢、2mm以下の細 孔・黒褐色・灰褐色・黒褐色光沢・外 面：スス付着 赤褐色斑を含む	
3	縄文土器	鉢	B 1 脚部	SC18	横方向のナデ 横方向のナデ	横方向のナデ	良好	に高い 黄褐色	褐色	ごく微細な透明光沢、2mm以下の細 孔・黒褐色・灰褐色・黒褐色光沢・外 面：スス付着	
4	縄文土器	鉢	B 2 口縁部	SC21	横方向のナデ 横方向のナデ	横方向のナデ	良好	に高い 黄褐色	明黃褐色 黄褐色	2mm以下の透明光沢・灰褐色・透 明光沢を含む	
5	縄文土器	深鉢	B 2 口縁部	SC20	— ミガキ？	ミガキ	良好	灰褐色	灰黃褐色	3mm以下の細灰色・透明光沢を含む	
6	縄文土器	深鉢	B 2 ～脚部	SC20 SC21	貝殻条痕 —	貝殻条痕	良好	に高い 黄褐色	褐色	4mm以下の透明光沢・灰白色を多量 に含む	外面：スス付着
7	縄文土器	深鉢	B 2 口縁部	SC20	刷付突痕 横方向のナデ	横方向のナデ	良好	灰黃褐色	褐色	1mm以下の細灰色、3mm以下の灰白 色・淡灰白色・に高い・褐色・黒褐色 光沢を含む	
8	縄文土器	深鉢	B 2 口縁部	SC21	刷付突痕 横方向の貝殻条痕 横方向のナデ	横方向の貝殻条痕 横方向のナデ	良好	に高い 黃色	黃褐色	ごく微細な透明光沢、1mm以下の透 明光沢・淡黃褐色、3mm以下の明黃褐色 ・黒褐色・黑褐色光沢・灰褐色・灰白色 を含む	7と同一個体 透定日付30.9m 外面：スス付着 穿孔あり
9	縄文土器	深鉢	B 2 口縁部～ 底部附近	SC20 SC21	横・斜方向の貝殻条痕 横・斜方向の貝殻条痕 一部強化ぎみ	横・斜方向の貝殻条痕 横・斜方向の貝殻条痕 一部強化ぎみ	良好	淡黃褐色	黃褐色	ごく微細な透明光沢、3mm以下の灰 白色・明黃褐色・軟黄色・4mm以 下の細灰褐色・に高い・淡黃褐色・黑 褐色・黑褐色光沢を含む	6と同一個体 透定日付33.6m 外面：スス付着
10	縄文土器	鉢	B 2 脚部	SC20 SC21	横方向の剥痕 横・斜方向の剥痕	ナデ	良好	明黃褐色 黃褐色	に高い 黃褐色	2mm以下の灰白色・褐色・黑褐色・浅 褐色・無色透明・黑色光沢を含む	内面：スス付着
11	縄文土器	深鉢	B 2 ～頭部 RSGr	SC20 V a	横・斜方向のミガキ 横・斜方向のミガキ	横・斜方向のミガキ	良好	黒褐色	黒褐色	繊細な透明光沢・黑色光沢の粒を少量 に含む	穿孔あり 透定日付24.1m
12	縄文土器	深鉢	B 2 ～脚部	SC20 SC21	口縁部にヒレ状突起 横方向のミガキ 脚部にリボン状突起	横方向のミガキ	良好	褐色	褐色	1mm以下の灰白色をわずかに含む	透定日付46.6m
13	縄文土器	鉢	B 2 底部	SC21	ミガキ 強化煮し	ミガキ	良好	明黃褐色 褐色	褐色	1mm以下の細灰色・黒褐色・灰白色・ 外側一部黒褐色 黄褐色光沢の粒をわずかに含む	透定底径14.5cm
14	縄文土器	深鉢	B 2 底部	SC20 SC21	横方向のミガキ 横・斜方向のミガキ ミガキ	横・斜方向のミガキ	良好	黒褐色 黒色	黑褐色	1mm以下の灰白色・褐色・黑褐色・ 黒褐色光沢の粒を含む	透定底径4.4cm
15	縄文土器	深鉢	B 2 口縁部	SC24	— 口縁部にリボン状突起	ミガキ	良好	に高い 黃褐色	黃褐色	繊細な透明光沢を少量含む	
16	縄文土器	深鉢	B 2 ～脚部	SC25	ミガキ 強化煮し	ミガキ	良好	灰白色	灰白色	繊細な透明光沢を少量含む	
17	縄文土器	深鉢	A 3 口縁部	M a	沈殿文 ナデ	横方向のナデ	良好	灰黃褐色 褐色	褐色	ごく微細な透明光沢、1mm以下の黑 褐色・褐色・黑色・黑色光沢を含む	内面：スス付着
18	縄文土器	深鉢	B 2 口縁部	V a RSGr	沈殿文 ナデ	ナデ	良好	に高い 黃褐色	黃褐色	ごく微細な透明光沢、2mm以下の灰白 色・褐色・灰褐色・灰褐色光沢の粒、 6mm以下の細灰褐色を含む	
19	縄文土器	深鉢	B 2 口縁部	V a R7Gr	沈殿文 横方向のナデ	ナデ	良好	に高い 褐色	黃褐色	ごく微細な透明光沢、2mm以下の黑 褐色・褐色・灰褐色・灰褐色光沢・透明光沶・ 灰褐色・灰褐色光沢を含む	
20	縄文土器	深鉢	B 2 口縁部	M a RSGr	貝殻条痕 貝殻条痕	貝殻条痕 貝殻条痕の後ナデ	良好	明黃褐色 明褐色	明褐色	1mm以下の細灰褐色・透明光沶・黑色光 澤	透底日付
21	縄文土器	深鉢	B 2 口縁部	V b M a RSGr	貝殻条痕 貝殻条痕	ナデ	良好	褐色	褐色	2mm以下の灰白色・淡灰褐色・黑褐色 ・赤褐色・褐色光沢を含む	
22	縄文土器	深鉢	B 2 口縁部	V a M a Y5Gr	横方向の縦文・刷付突 横方向の縦文・ナデ 横方向のナデ	横方向のミガキ	良好	褐色 黃褐色	褐色	に高い 2mm以下の灰白色・黒褐色・黑色光沶・ 透明光沶を多く含む	透底日付
23	縄文土器	深鉢	A 3 口縁部	V a J9Gr	ナデ 日暮刷突	ナデ	良好	明褐色 褐色	褐色	1mm以下の透明光沶を少量、2mm以 下の細灰褐色を含む	外面：スス付着

第2表 縄文土器観察表1

遺物 番号	種別	測定 部位	出土 地点	順序	手法・調整・文様はか		焼成	色調		前土の特徴	備考	
					外 面	内 面		外 面	内 面			
24	縄文土器	深鉢	A-3	V-a	手捏	横方向の貝股刺突交 繩方向の貝股刺突交	ナデ	良好	に赤い 褐色	明褐色 褐灰色	2mm以下の透明光沢・黒色光沢を多量、 灰白色・灰白色粉を少量含む	
25	縄文土器	深鉢	B-1	V-a	手捏模文・弦文 繩方向のミガキか	横方向のナデ 繩方向のミガキか	ナデ	良好	黒褐色	に赤い 褐色	2mm以下の褐色光沢・に赤い褐色光沢、 3mm以下の明褐色・黒褐色光沢・透 明光沢・灰白色・灰白色粉を含む	
26	縄文土器	深鉢	A-2	V-a	手捏模文・弦文 「レ」字模文・ナデ	ナデ	良好	に赤い 褐色	黄褐色	軟質赤茶粉を少量含む	表土3層	
27	縄文土器	深鉢	A-2	V-a	手捏模文・弦文・刺 要文・繩方向のミガキ	ナデ	良好	に赤い 褐色	黄褐色	2mm以下の黒色光沢・灰白色・黒褐色 粒を多く含む	内面：スス付着	
28	縄文土器	深鉢	B-2	V-a	透続刺突文 ナデ	透続刺突文 ナデ	ナデ	良好	に赤い 褐色	赤褐色	3mm以下の透明光沢・黒色光沢・灰白 色粉を多く含む	
29	縄文土器	深鉢	B-2	V-a	透続刺突文 ナデ	透続刺突文 ナデ	ナデ	良好	黒褐色	に赤い 褐色	2mm以下の灰白色・褐灰色・淡褐色・ 黒褐色・黒褐色光沢・透明光沢を含む	
30	縄文土器	深鉢	B-1	V-a	手捏模文（貝網） 貝股刺突交	ナデ	良好	褐色	明赤褐色	2mm以下の黒色光沢・無色透明光沢・褐 灰色・灰白色・淡褐色粉を含む		
31	縄文土器	鉢	B-2	V-a	手捏模文・弦文・透 通刺突文	ミガキ 貝股刺突	ナデ	良好	に赤い 黃褐色	黑色	2mm以下の黒色光沢・透明光沢粉を少 量含む	
32	縄文土器	深鉢	A-2	V-a	繩方向のミガキ 透続刺突文	繩方向のヘラミガキ	ナデ	良好	に赤い 褐色	褐灰色	1mm以下の灰白色・透明光沢・黒色光沢・ 褐灰色粉。角閃石を多く含む	
33	縄文土器	深鉢	A-3	V-a	手捏模文・弦文・丁 字なナデ	ナデ	良好	に赤い 褐色	赤褐色	1mm以下の褐灰色・灰白色・透明光沢 粉を多く含む	外面：スス付着	
34	縄文土器	深鉢	B-2	V-a	手捏 V-a 貝股刺突 ～刺部	ナデ ナデ 貝股刺突 貝股刺突	ナデ	良好	に赤い 黃褐色	淡黄色	3mm以下の透明光沢粉・4mm以下の褐 色・褐褐色・灰白色・黒色光沢粉を多 く含む	外側：スス付着 推定1径36.4cm
35	縄文土器	深鉢	A-2	V-a	手捏 貝股刺突	ナデ	良好	浅黄色	淡黄色	2mm以下の灰白色・に赤い黄褐色・黑 色光沢・透明光沢粉を含む	外側：スス付着	
36	縄文土器	鉢	A-3	V-a	貝股刺突 ～刺部	ナデ V-a 貝股刺突	ナデ	良好	淡黄色	淡黄色	6mm以下の黄褐色・褐褐色・褐灰色 灰白色・淡黄色・褐灰色粉を含む	粘土のつなぎ目 刺部径32.0mm
37	縄文土器	深鉢	B-2	V-a	貝股刺突 ～刺部	貝股刺突	ナデ	良好	に赤い 褐色	褐褐色	3mm以下の灰褐色・褐褐色・褐灰色 4mm以下の灰白色・灰白色・褐色・黑 色・黄褐色・赤褐色・褐色・褐灰色粉を含む	推定1径29mm
38	縄文土器	深鉢	B-2	V-b	ナデ 柔軟	ナデ	ナデ	良好	浅黄色	浅黄色	2mm以下の黒褐色光沢・透明光沢・に 赤い赤褐色・褐灰色・褐色粉を含む	外側：スス付着 粘土のつなぎ目
39	縄文土器	深鉢	B-2	V-a	横方向のミガキ 一部柔軟 風化気味	横方向のミガキ 一部柔軟 風化気味	ナデ	良好	に赤い 黃褐色	黄褐色	ごく微細な透明光沢粉・3mm以下の明 褐色・透明光沢・灰白色・褐灰色・ 黑褐色・黄褐色・褐褐色・明赤褐色・褐 色粉を含む	外側：一部削痕
40	縄文土器	深鉢	B-2	V-a	横方向のミガキ 貝股刺突	横方向のミガキ 貝股刺突	ナデ	良好	浅黄色	褐灰色	ごく微細な透明光沢粉・2mm以下の灰 白色・黑褐色光沢・透明光沢・褐灰色・ 褐褐色光沢・淡褐色・黑褐色粉を含む	外側：一部削痕
41	縄文土器	深鉢	B-1	V-a	ミガキ 横・縦方向のミガキ	ミガキ？	ミガキ？	良好	に赤い 褐色	褐黄色	ごく微細な透明光沢粉・2mm以下の灰 白色・黑褐色光沢・透明光沢・淡褐色・ 褐褐色光沢を含む	内面：加熱 淡褐色粉を含む
42	縄文土器	深鉢	B-2	V-a	ミガキ ～刺部	ミガキ 貝股刺突の後ミガキ	ミガキ	良好	淡黄色	褐黄色	微細な透明光沢粉・2mm以下の灰白色 粉をわずかに含む	外側：スス付着
43	縄文土器	深鉢	B-2	V-a	口脣部にヒレ状突起 ナデ・貝股柔軟	ナデ・貝股柔軟	ミガキ？	良好	浅黄色	褐色	ごく微細な黒褐色光沢・透明光沶・黑 褐色・褐褐色・に赤い褐色・褐色・ 褐灰色・灰白色・浅褐色・黄褐色粉を 含む	外側：スス付着
44	縄文土器	深鉢	B-2	V-a	口脣部にヒレ状突起 ナデ・貝股柔軟	ナデ・貝股柔軟	ナデ・柔軟	良好	浅黄色	浅黄色	ごく微細な透明光沶粉・2mm以下の透 明光沶・黒褐色光沶・に赤い褐褐色・ 灰白色・明褐色・灰褐色・褐灰色粉を 含む	外側：スス付着
45	縄文土器	深鉢	B-2	V-a	ミガキ 風化気味	ミガキ 風化気味	ミガキ	良好	黒褐色	褐褐色	3mm以下の灰白色・黑褐色・黑色光沶・ 透明光沶粉を多く含む	外側：スス付着

第3表 縄文土器観察表2

遺物 番号	種別 部位	出 土 地 点	層 序	手 法・調 整・文 様ほか		焼成 度	色 調		胎 土の特 徴	備 考
				外 面	内 面		外 面	内 面		
46	縄文土器 口縁部 ～胴部	深井	B 2 Q6Gr	M a 貝殻条痕	貝殻条痕の後ナデ	良好	浅黄色	黄灰色	ごく微細な透明光沢、2mm以下の透 明光沢・黒褐色光沢・灰白色・明るい褐色、 外側：スス付着 黒褐色・にぶい褐色・灰褐色を含む	
47	縄文土器 口縁部	深井	B 2 Q6Gr	M a 貝殻条痕	貝殻条痕の後ナデ	良好	灰褐色	灰褐色	3mm以下の白色・透明光沢・灰褐色 透明白光沢を多く含む	
48	縄文土器 口縁部 ～胴部	深井	B 2 Q7Gr	M a 貝殻条痕 業者の後、ミガキ	貝殻条痕の後、ミガキ	良好	灰褐色	浅黄色	2mm以下の灰褐色・白色・淡灰白色。 5mm以下の灰褐色・白色・明るい褐色 色・暗褐色・黒褐色・軟質赤褐色を含 む	外側：黒斑
49	縄文土器 口縁部 ～胴部	深井	B 2 P7Gr	M a 貝殻条痕 業者の後、ミガキ？	貝殻条痕の後、ミガキ？	良好	灰褐色	灰褐色	ごく微細な透明光沢、2mm以下の灰 白色・透明光沢・黒褐色光沢・明るい褐色、 外側：スス付着 黒褐色・明るい褐色を含む	
50	縄文土器 口縁部	深井	B 2 Q5Gr	V a 業者の後	業者の後、ミガキ	良好	黑褐色	黄褐色	にぶい 1mm以下の灰白色・淡灰白色・黒褐色	
51	縄文土器 口縁部 ～胴部	深井	B 2 S5Gr	V a 貝殻条痕	貝殻条痕の後ナデ	良好	黄褐色	黄褐色	にぶい 2mm以下の白色・透明光沢をわず かに含む	
52	縄文土器 口縁部	深井	B 2 Q6Gr	M a 貝殻条痕 ナデ	貝殻条痕の後ナデ	良好	灰褐色	浅黄色	2mm以下の白色・透明光沢・黒褐色 軟質赤褐色を多く含む	外側：スス付着
53	縄文土器 口縁部 ～胴部	深井	B 1 V3Gr	V a ミガキ？	ミガキ？	良好	浅黄色	浅黄色	2mm以下の褐色・黒褐色光沢・透明光沢・ 黒褐色色を含む	
54	縄文土器 口縁部	深井	B 1 V3Gr	V a 貝殻条痕	貝殻条痕の後ナデ	良好	黄褐色	黄褐色	にぶい 2mm以下の透明光沢・黑色光沢・灰褐色	
55	縄文土器 口縁部	深井	B 1 V3Gr	V a ナデ、ナデの後ミガ キ？	貝殻条痕、ナデ	良好	灰褐色	浅黄色	2mm以下の黒褐色光沢・透明光沢・に ぶい褐色色、明るい褐色を含む	外側：スス付着
56	縄文土器 口縁部	深井	B 2 R5Gr	M a 業者の後ナデ	業者の後ナデ	良好	黑褐色	灰褐色	2mm以下の灰褐色・透明光沢、5 mm以下の白色・淡灰白色・にぶい黃 色・黒褐色を含む	外側：スス付着 灰白色・黒褐色を含む
57	縄文土器 口縁部	深井	B 2 Q7Gr	V a 風化気味 貝殻条痕	貝殻条痕	良好	灰白色	灰白色	2mm以下の白色・透明光沢、1mm以下の 白色・黑色光沢・灰褐色・灰白色、外側：スス付着 灰白色・黒褐色を含む	
58	縄文土器 口縁部	深井	B 2 R8Gr	M a 横力印のナデ	横力印の工具ナデ	良好	黑褐色	灰褐色	透明な光沢、1mm以下の灰白色・淡 灰白色・赤褐色・黑褐色色を含む	
59	縄文土器 口縁部 ～胴部	深井	B 1 S3-4Gr 孔井文（未貫通）	V b 貝殻条痕の後ミガ キ？	貝殻条痕の後ミガキ	良好	灰褐色	浅黄色	2mm以下の灰白色・黄褐色・透明光沢・ 黒褐色光沢を多く含む	推定口径 22.9cm
60	縄文土器 口縁部 ～胴部	深井	B 2 P6Gr	V a ナデ、貝殻条痕、孔井 文（未貫通）	貝殻条痕の後ミガキ	良好	灰褐色	浅黄色	にぶい 2mm以下の白色・淡灰白色・にぶい黃褐色・ 灰褐色・黒褐色色を含む	
61	縄文土器 口縁部 ～胴部	深井	B 2 Q6Gr 孔井文（未貫通）	M a 貝殻条痕 孔井文（未貫通）	貝殻条痕	良好	灰褐色	灰褐色	2mm以下の灰白色・淡灰白色・黑褐色 色を含む	
62	縄文土器 口縁部 ～胴部	深井	B 2 S5Gr	V b 孔井文（未貫通）	貝殻条痕	良好	黄褐色	灰褐色	3mm以下の黒褐色・褐色色、3mm以下の にぶい黃褐色・黑色光沢・透明光沢・灰 褐色・にぶい褐色色を含む	外側：スス付着
63	縄文土器 口縁部	深井	B 2 T-16Gr	V a 貝殻条痕	貝殻条痕	良好	黄褐色	灰褐色	にぶい 2mm以下の透明光沢・灰白色・黒褐色 色を多く含む	外側：スス付着
64	縄文土器 口縁部 ～胴部	深井	B 2 Q6Gr	M a 帶、孔井文（未貫通）、ナデ	貝殻条痕 ナデ	良好	黄褐色	浅黄色	2mm以下の透明光沢・灰白色・にぶい 黄褐色色を多く含む	
65	縄文土器 口縁部 ～胴部	深井	B 2 R8Gr	V a 貝殻条痕、ナデ 風化気味	貝殻条痕、ナデ	良好	にぶい 黄褐色	浅黄色	2mm以下の黒褐色・褐色色、3mm以下 のにぶい黃褐色・黑色光沢・透明光沢、 黒褐色・にぶい褐色色を含む	推定口径 22.4cm
66	縄文土器 口縁部	深井	B 1 SG 1	— 貝殻条痕	貝殻条痕	良好	黄褐色	黄褐色	にぶい 2mm以下の透明光沢・灰褐色光沢・ 灰褐色・白色・灰白色・明るい褐色を含む	外側：スス付着
67	縄文土器 底部	深井	B 2 X5Gr	V a 貝殻著しい 風化気味	貝殻著しい	良好	褐色	褐色	にぶい 4mm以下の灰白色・灰褐色・透明光沢 色を多く含む	推定底径 4.3cm
68	縄文土器 底部	深井	B 2 S5Gr	V a ミガキ？	ミガキ？	良好	明るい 黄褐色	黑褐色	透明な透明光沢、3mm以下の灰白色、 黒褐色色を少額含む	推定底径 6.6cm
69	縄文土器 底部	深井	A 2 B10Gr	V a 貝殻条痕 ナデ	貝殻条痕 ナデ	良好	にぶい 黄褐色	黄褐色	2mm以下の灰白色・灰褐色色を含む	推定底径 7cm
70	縄文土器 底部	深井	A 1 SA 1	— 横力印の工具ナデ ナデ	横力印の工具ナデ ナデ	良好	にぶい 褐色	灰褐色	2mm以下の黄褐色・灰褐色色、3mm以 下にぶい黄褐色・灰白色・灰褐色・黒褐色色、 全表面を含む	推定底径 11.7cm

第4表 縄文土器観察表3

遺物 番号	種別 部位	測定 地点	出土 順序	手法・調整・文様はか 外面 内面		焼成	色 調			前の特徴	備考
				外 面	内 面		外 面	内 面	外 面		
71	縄文土器	深鉢 底部	B 1 Q4Gr	Vla 細化気味	ナデ 細化氣味	ナデ	良好	浅黄色	灰灰色	ごく微細な透明光沢が多く、2mm以下の 下のに深い褐色・灰白色・黒褐色光沢・ 透明光沢に高い黒褐色・黒灰色に、 少ない褐色色料を少量含む	直径 8.7cm
72	縄文土器	深鉢 底部	B 1 W2Gr	Vla 細化氣味	ナデ 細化氣味	ナデ	良好	黄褐色	灰白色	繊細な透明光沢(深), 2mm以下の黒褐色・ 灰白色を含む	推定直徑 11cm
73	縄文土器	深鉢 鉢部 ～底部	B 2 R5Gr	Vla 細化氣味	貝殻表面 工具ナデの痕ナデ 洗鍛文	工具ナデの痕ナデ 洗鍛文	良好	浅黃褐色	淺黃褐色	3mm以下の灰白色・黒褐色・黃褐色・ 黒褐色・灰黃褐色を含む	推定直徑 8.9cm
74	縄文土器	深鉢 底部	B 2 Y5Gr	Vla 細化氣味	ナデ 細化氣味	ナデ	良好	浅黄色	淡黄色	3mm以下の灰褐色・黒褐色・ 透明光沢・黒褐色光沢・ 直径 10.6cm	
75	縄文土器	深鉢 底部	B 1 + 2 Z+7Gr	Vla 細化氣味	ナデ 細化氣味	ナデ	良好	浅黄色	黃色	深い繊細な透明光沢(深), 2mm以下の灰白色・ 灰褐色色料を含む	推定直徑 10.7cm
76	縄文土器	口縁部近 ～鉢部	B 1 T4Gr	Vla 斜方方向のミガキ 斜方方向のミガキ ～削除	ミガキ ミガキ	ミガキ ナデの後ミガキ?	良好	灰褐色	灰褐色	繊細な光沢(深), 1mm以下の灰白色料を 含む	
77	縄文土器	口縁部 ～鉢部	B 2 Q7Gr	Vla ～削除	ミガキ	ミガキ ナデの後ミガキ?	良好	灰褐色	灰褐色	繊細な透明光沢(深), 3mm以下の黒褐色・ 褐色・灰白色を含む	
78	縄文土器	口縁部 ～鉢部	B 2 Q6Gr	Vla ～削除	横方向のナデ 横方向のヘラミガキ	横方向のナデ 横方向のヘラミガキ	良好	灰褐色	暗灰褐色	繊細な透明光沢(深), 1mm以下の透明光 澤・黒褐色光沢・灰白色をわずかに内面: 黑褐 色	
79	縄文土器	口縁部 ～鉢部	B 2 R6Gr	Vla ～削除	横方向のミガキ	洗鍛文 横方向のミガキ	良好	灰白色	灰白色	繊細な光沢(深), 1mm以下の灰白色・黑 褐色・黄褐色色料を含む	
80	縄文土器	口縁部 ～鉢部	B 2 P7Gr	Vla ～削除	横方向のナデ 横方向のナデ	洗鍛文 横方向のナデ	良好	淡黄色	淡黄色	1mm以下の灰褐色・淡灰褐色・暗褐色 料を含む	
81	縄文土器	口縁部 ～鉢部	B 2 R9Gr	Vla ～削除	横方向のミガキ	洗鍛文 ～削除	良好	浅黄色	灰褐色	繊細な灰褐色・透明光沢・黒褐色, 1mm以下の灰白色・黒褐色色料を含む	
82	縄文土器	口縁部 ～鉢部	A 2 E12Gr	Vla ～削除	横方向のヘラ 横方向のナデ 横方向のヘラミガキ 丁寧なナデ	洗鍛文 横方向のナデ 横方向のヘラミガキ 丁寧なナデ	良好	浅黄色	浅黄色	繊細な黒褐色・灰白色をわずかに含 む	内面: 黑褐
83	縄文土器	口縁部 ～鉢部	A 2 C12Gr	Vla ～削除	横方向のナデ 横方向のヘラミガキ 丁寧なナデ	洗鍛文 横方向のヘラミガキ 丁寧なナデ	良好	浅黄色	浅黄色	繊細な黒褐色・灰白色をわずかに含 む	外内面: 黑褐
84	縄文土器	口縁部	B 2 X5Gr	Vla ～削除	横方向のミガキ 牛・風化氣味	横方向のミガキ 牛・風化氣味	良好	淡黄色	淡黄色	2mm以下の黄褐色・黒褐色・淡灰白色・ 灰褐色・灰白色料・角閃石を含む	
85	縄文土器	口縁部	B 1 Y+2+8	Vla ～削除	ミガキ	ミガキ 風化氣味	良好	褪灰色	灰褐色	繊細な透明光沢料を多く含む	
86	縄文土器	口縁部 ～鉢部	B 2 Q6Gr	Vla ～削除	横・斜方向のミガキ 風化氣味	横方向のミガキ 風化氣味	良好	に深い 黄褐色	黄褐色	ごく微細な透明光沢(深), 1mm以下の透 明光沢・黒褐色・黒灰色・灰白色料を 含む	
87	縄文土器	口縁部 ～鉢部	B 2 S5Gr	Vla ～削除	ミガキ 風化氣味	ミガキ 風化氣味	良好	淡黄色	淡黄色	繊細な透明光沢(深)を多量, 1mm以下の 黑褐色料をわずかに含む	
88	縄文土器	口縁部 ～鉢部	B 1 S3+4Gr	Vb ～削除	ミガキ	ミガキ 風化氣味	良好	黑色	黑色	繊細な透明光沢(深)を多量, 1mm以下の 灰白色料をわずかに含む	波状3縁
89	縄文土器	口縁部 ～鉢部	B 2 T6Gr	Vla ～削除	横方向のミガキ 風化氣味	横方向のミガキ 風化氣味	良好	に深い 黄褐色	黄褐色	ごく微細な透明光沢(深), 1mm以下の に深い 褐色・2mm以下の黒褐色・透明 光澤・暗褐色と含む	
90	縄文土器	口縁部 ～鉢部	B 2 V6Gr	Vla ～削除	横方向のミガキ	横方向のナデ 横方向のミガキ	良好	褪褐色	褪褐色	繊細な透明光沢(深), 1mm以下の暗褐色 料を含む	波状3縁?
91	縄文土器	口縁部 鉢部	B 2 Q7Gr	Vla ～削除	横方向のヘラミガキ 後、横方向のナデ、横 方向のヘラミガキ 剥離気味	工具ナデの横方向の 横方向のヘラミガキ 剥離気味	良好	灰褐色	褪褐色 褐色	ごく微細な透明光沢(深), 1mm以下の 赤褐色・黒褐色・灰白色料を含む	外面: 黑褐
92	縄文土器	口縁部	B 1 + 2 T4+7Gr	Vla ～削除	横方向のミガキ 風化氣味	ミガキ 風化氣味	良好	に深い 黄褐色	黄褐色	繊細な灰白色・黒褐色光沢・褐色料, ごく微細な透明光沢料を含む	外面: 赤褐色
93	縄文土器	口縁部 鉢部	B 2 U6Gr	Vla ～削除	横方向のヘラミガキ 牛	横方向のヘラミガキ 牛	良好	に深い 黄褐色	黄褐色	1mm以下の灰白色・暗褐色色料を少量含 む	外面: 赤褐色

第5表 縄文土器観察表4

番号	器種	基材	出土 場所	層位	手法・調整・文様ほか				焼成	色調			胎土の特徴	備考
					外 面	内 面	外 面	内 面		外 面	内 面	外 面		
94	縄文土器	陶器	口縁部 ～胴部	B 2 Q7Gr	V a ナデ	楕円方向のナデ 楕円方向のヘラミガキ	良好	灰黄色	黄灰色	微細な網状灰色・ 透明光沢をわずかに含む				
95	縄文土器	陶器	口縁部 ～胴部	B 1 S3Gr	M a ミガキ？ ナデ	ミガキ？ ナデ	良好	和灰色	褐灰色	微細な透明光沢・ 1mm以下の灰白色・角閃石をわずかに含む	標準径7.1cm			
96	縄文土器	陶器	口縁部 ～胴部	B 1 V3Gr	M a 後傾方向のナデ、三叉 後傾方向のナデ、三叉	後傾方向のナデ、三叉、 後傾方向のナデ、三叉	良好	浅黄色	浅黄色	黒灰色・ 黑色光沢・透明光沢をわずかに含む	外側：黒灰 内側：灰白			
97	縄文土器	陶器	口縁部 ～胴部	B 2 X3Gr	V b 2号牛の後ナデ	楕円方向のナデ 楕円方向のヘラミガキの 後ナデ	良好	灰黄褐色	灰黄褐色	2mm以下の褐色・ 和灰色を多少含む	外側：スズ付着			
98	縄文土器	陶器	口縁部 ～胴部	B 2 U6Gr	M a 丁寧なナデ 目要柔柔？	ミガキ	良好	灰白色	淡黄色	2mm以下の黑色光沢、3mm以下の灰 白色・透明光沢を少量含む	標準径22.9cm			
				B 2										
99	縄文土器	陶器	口縁部 ～胴部	B 2 Q6 + 7 R7 + S7 U5Gr	SC24 M a 柔直 柔直 M b 柔直直 一部強化味 一部強化味	柔直 柔直、強直直 楕円方向のミガキ 一部強化味 一部強化味	良好	に赤い 黄色	に赤い 黄色	微細な透明光沢、2mm以下の黒褐色 光沢、3mm以下の黒褐色・ 灰白色・ 灰白色・ 透明光沢・ 和灰色を含む	標準径29.8cm 外側：スズ付着 100と同一側ほか			
100	縄文土器	陶器	口縁部 ～胴部	B 2 SC24 Q6 + 7 R5Gr	V a 柔直 柔直 M a 柔直、強直直 楕円方向のミガキ 一部強化味 一部強化味	柔直 柔直、強直直 楕円方向のミガキ 一部強化味 一部強化味	良好	浅黄色	浅黄色	ごく微細な透明光沢、2mm以下の灰 黄色・ 灰白色・ 黑色光沢・ 透明光沢・ 和灰色を含む	99と同一側ほか 外側：スズ付着 窓口径33cm			
101	縄文土器	陶器	口縁部 ～胴部	B 2 Q5Gr	M a 弱織痕	弱織痕	良好	浅黄色	浅黄色	2mm以下の淡灰色・灰白色・ 灰褐色・ 黑色光沢を含む				
102	縄文土器	陶器	口縁部 ～胴部	B 2 Z5Gr	V a 弱織痕	ナデ	良好	橙色	浅黄色	微細な透明光沢を多く含む				
103	縄文土器	陶器	口縁部 ～胴部	B 2 U4Gr	M a 弱織痕	ナデ	良好	灰白色	淡黄色	2mm以下の黑色光沢をわずかに含む	内側：スズ付着			
104	縄文土器	陶器	口縁部 ～胴部	B 2 Q6Gr	M a 弱織痕	ナデ	良好	に赤い 黃褐色	浅黄色	3mm以下の褐色・ 黑色光沢・ 透明光 2mmを少量含む				
105	縄文土器	陶器	底部	B 2 Q7Gr	V a M a	弱織痕 ミガキ	良好	浅黄色	浅黄色	2mm以下の灰・ 黃褐色・ 灰白色・ 黑色光沢を含む				

第6表 縄文土器観察表5

番号	器種	出土場所	層位	計測値				石材	備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最小厚(cm)	重 量(g)		
106	石器	B 2	Q6Gr	V a	1.3	1.2	0.3	0.3	鶴見産黒曜石
107	石器	B 2	Q7Gr	M a	2.0	1.7	0.4	0.8	電タケ・三浦産黒曜石か
108	石器	B 1	R3Gr	V a	2.9	1.9	0.5	2.5	ホルンフェルス
109	石器	B 2	S6Gr	V a	1.8	1.4	0.7	0.9	チャート
110	石器	B 2	S5Gr	V a	2.0	1.3	0.5	1.0	チャート
111	石器	B 2	T6Gr	V a	1.9	1.9	0.7	2.4	チャート
112	石器	B 1	ジユコソ	—	1.4	1.3	0.4	0.5	チャート
113	石器	B 2	Q7Gr	M a	1.4	1.0	0.3	0.4	チャート
114	石器	B 2	R8Gr	M a	2.9	2.1	0.7	3.4	真岩
115	局部焼製石器	B 1	U3Gr	V a	4.7	2.6	1.05	15.6	鶴見産黒曜石 片側欠損
116	石器	B 1	S4A	—	2.0	1.3	0.4	0.8	チャート
117	石器	B 2	Q6Gr	V a	2.0	1.4	0.4	0.7	チャート
118	石器	B 2	U6Gr	V a	1.4	1.2	0.2	0.3	ガラス質突山岩
119	石器	B 2	Q8Gr	V a	1.6	1.5	0.4	0.8	砂岩
120	石器	B 2	T7Gr	V a	2.2	1.4	0.4	1.0	先端部欠損 脚部欠損
121	石器	B 2	—	B 2	2.9	2.0	0.6	2.4	チャート
122	石器	B 2	—	B 2	1.9	1.2	0.5	0.8	チャート
123	石器	B 2	V4Gr	V a	2.7	1.2	0.5	0.8	チャート
124	石器	B 2	S7Gr	—	4.3	1.0	1.2	5.5	砂岩
125	石器	B 1	B4Gr	N	3.1	1.5	0.8	3.0	チャート
126	石器	B 1	S4Gr	M a	3.7	2.2	1.0	6.9	チャート
127	石器	B 2	Q6Gr	M a	2.4	1.4	0.7	1.9	チャート
128	両面加工石器	B 2	S5Gr	V a	2.0	1.7	0.9	3.4	チャート
129	種器	B 2	S6Gr	V a	4.8	5.8	1.8	48.3	砂岩(農水品有り)
130	種器	A 2	A15Gr	V a	4.4	6.7	1.2	26.7	淡緑岩
131	種器	A 3	I11Gr	V a	5.7	3.9	1.7	33.9	砂岩
132	削器	B 2	Y3Gr	M a	7.8	5.5	1.7	57.0	砂岩
133	削器	A 2	カクラン	—	5.2	3.2	1.1	18.8	チャート
134	削器	A 3	E10Gr	V a	7.3	6.9	2.6	108.2	砂岩

第7表 縄文時代石器計測表1

遺物 番号	器種	出土地点	層位	計測値					石材	備考
				最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)			
135 鋸齒	A 2 B14Gr	V a	7.3	6.6	2.2	77.0	砂岩			
137 鋸齒	B 2 D13Gr	V a	6.1	5.9	1.5	53.4	砂岩		左側欠損	
138 石器	B 2 Y3Gr	M a	5.6	7.6	0.9	37.3	ホルンフェルス (鉄石層)		表面に鉛滅あり	
139 石器	B 2 Q7Gr	M a	2.8	3.4	0.7	5.3	ガラス質安息香		上部・右側欠損	
140 石器	A 2 C12Gr	V a	4.7	5.7	1.2	22.1	ガラス質安息香 (多角変形)			
141 石器	A 3 H10G	V a	6.6	5.4	1.3	29.1	黒色セメント		下部欠損	
142 横切石器	B 1 S4Gr	V a	3.4	1.5	1.2	4.2	鰐岩・黒曜石			
143 横切石器	B 1 S4Gr	V b	1.9	1.6	0.8	2.4	チート			
144 横切石器	B 1 S3Gr	V a	2.0	2.0	0.7	2.0	チート			
145 実器	B 1 T3Gr	M a	4.4	3.4	1.3	25.4	頁岩		先端部・基部欠損	
146 石核	A 3 H9Gr	V a	4.0	5.9	3.0	52.7	泥岩			
147 石核	B 2 Q6Gr	V a	2.6	3.8	1.5	13.7	チート			
148 石核	B 2 -	-	1.7	3.1	0.9	4.3	チート			
149 石核	A 3 H11Gr	V a	2.4	4.3	2.0	17.7	チート			
150 石核	B 2 Q6Gr	M a	1.6	2.2	1.7	5.8	電気水・二輪車黒曜石か			
151 石核	A 3 H10G	M a	2.5	3.4	1.4	11.2	チート			
152 石核	B 2 Q7Gr	M a	3.5	4.8	1.5	26.7	ホルンフェルス (鉄石層)		被削を受け、赤化	
153 砕削石斧	B 2 R8Gr	M a	15.3	4.9	3.6	374.5	ホルンフェルス (鉄石層)			
154 砕削石斧	A 2 E11Gr	V a	6.8	5.3	3.3	153.7	砂岩		刃部欠損。上部に再加工あり。裏面に 軋印か	
155 砕削石斧	B 2 AASGr	V a	9.5	7.2	1.8	150.2	ホルンフェルス (鉄石層)			
156 砕削石斧	B 2 Q7Gr	M a	8.2	3.4	1.8	68.9	ホルンフェルス (鉄石層)		基部欠損。刃部は再加工か	
157 砕削石斧	B 2 QTGr	M a	9.3	3.0	1.4	68.9	ホルンフェルス (鉄石層)		一部欠損あり	
158 行削石斧	B 2 R8Gr	V a	11.3	3.6	1.9	123.1	ホルンフェルス (鉄石層)		被削あり。刃部再加工か	
159 行削石斧	B 2 W5Gr	M a	5.5	5.6	1.6	63.9	ホルンフェルス (鉄石層)		基部・刃部欠損	
160 行削石斧	A 3 カクラン	-	11.5	7.8	2.6	282.0	砂岩			
161 行削石斧	B 2 Q8Gr	M a	7.6	4.7	1.2	54.5	輝石角閃石		刃部欠損	
162 行削石斧	B 2 U6Gr	V a	14.3	6.8	2.3	207.5	砂岩			
163 行削石斧	B 1 SE 1	-	7.1	4.4	1.7	53.1	砂岩		刃部欠損	
164 行削石斧	B 1 S4Gr	V b	4.6	5.4	1.8	59.2	砂岩		刃部欠損。上部に細目打痕	
165 行削石斧	A 2 E14Gr	M a	7.5	9.6	2.4	165.5	輝石角閃石		刃部欠損	
166 行削石斧	A 2 E14Gr	V a	12.6	10.2	1.6	184.2	輝石角閃石 (鷺島)		基部・刃部欠損	
167 剣頭	B 2 S7Gr	V a	6.6	5.6	1.8	93.5	砂岩			
168 石鍬	B 2 QTGr	M a	5.4	3.65	1.4	26.7	砂岩		刃部石鍬	
169 砕石	B 2 Q6Gr	V a	5.8	3.1	2.9	112.9	砂岩		被削を受け。赤化	
170 砕石	B 2 Z4Gr	M a	100	5.6	4.0	301.0	ホルンフェルス (鉄石層)			
171 砕石	B 2 V5Gr	V a	100	7.9	4.7	486.7	砂岩		左侧面・表面に細目打痕	
172 砕石	B 2 QTGr	V a	9.9	5.6	4.9	413.8	砂岩		周辺に細目打痕	
173 砕石	B 2 Z4Gr	V a	15	10.3	4.1	952.8	砂岩		表面に細目打痕	
174 砕石	B 2 J32J5	-	116.5	10.9	6.5	1146.6	消泡闇灰岩			
175 砕石	B 2 V5Gr	V a	12.1	7	3.4	485.8	砂岩			

第8表 繩文時代石器計測表2

遺物 番号	種 類	層 位	地 点	法量 (kg)	手法・調節・文様ほか		被成	色	調	胎土の特徴	備 考
					柱	底	高	外 面	内 面		
176 有生土器 口縁部	直	B 2	-		繩目状文	ナデ		良好	橙色	明黄褐色 料を少量、微細な光沢を含む	2 mm以下の黒褐色、透明光沢 む
		S A 5			楕円形のミガキの 後ナデ						
177 有生土器 腹部	高环	B 2	-		縦方向のミガキ 楕円形のミガキ	ナデ、楕円形の工 具ナデ、斜方向ナ デ		良好	橙色	明黄褐色 褐色・暗褐色	微暗な光沢無、2 mm以下の黒 褐色
		S A 5			楕円形のミガキ 工具ナデ						透明光沢を含む
178 有生土器 腹部	高环	B 2	-		縦方向のミガキ	ナデ		良好	橙色	に赤い 黄褐色	微暗な光沢無、2 mm以下の黒、円形の透かし 孔
		S A 5	V a								
180 有生土器 口縁部 ～脚部	直	B 2	推定		ナデ、斜方向 斜・縦方向ハケ ナデ	楕円形のナデ 一部風化味 ナデ		良好	黄褐色	に赤い 黄褐色	4 mm以下の赤褐色、黄褐色、外側：黒褐 色、内側：灰白色
		U S + 6	V a	25.0	斜・縦方向ハケ ナデ	丁寧なナデ					
181 有生土器 口縁部 ～脚部	直	T 6	推定		斜・縦方向ハケ ナデ	楕円形のナデ 一部風化味 ナデ		良好	黄褐色	に赤い 黄褐色	3 mm以下の赤褐色、黄褐色、透 明光沢、黒褐色、暗褐色光沢、 透明白色
		U 6 + 7Gr	V a	32.0	ナデの後ナデ						
182 有生土器 口縁部 ～脚部	直	B 2	推定		楕円形のナデ、指 压痕、斜・縦方向の工具 ナデ	楕円形のナデ 指・斜・縦方向の工具 ナデの後ナデ		に赤い 黄褐色	に赤い 黄褐色	3 mm以下の細赤色、白褐色、口脚部・内面： スス付着	
		U 6Gr	V a	32.8	ハケ目						

第9表 弥生土器観察表1

番号	種別 部位	出上 地点	層位 10m 1メートル 底部 基部 高さ M.a	法面 (m)	手法・測量・支拂はか 横方向のナデ 斜日駆け差違 斜方向のハケ目 一部風化気味	横成 良好 良好 良好 良好	色調		崩上の特徴	備考
							外 面	内 面		
183	角牛土器 口縁部 ～胴部	B 2 U6Gr	V a M.a	横定 T5・R7Gr M.a	横方向のナデ 斜日駆け差違 斜方向のハケ目 一部風化気味	ナデ ナデ ナデ	に赤い 相 相	に赤い 灰褐色・黒褐色 相	3 m以下の暗紅色・黒褐色。 灰白色・黒褐色光沢を多く含む 付む	外側：ヌス付 岩面：黒褐色
184	角牛土器 口縁部 ～胴部	B 2 U6Gr	V a M.a	横定 T6Gr	横方向のナデ 斜日駆け差違 斜方向のハケ目 一部風化気味	工具ナデ? 工具ナデの後 ハケ目 風化気味	に赤い 黄褐色	暗褐色 色・淡灰白色・灰白色の、 2 m以下の黒褐色光沢を含む	ごく微細な透明光沢。3 mm 以下の黒褐色・暗褐色・灰褐色 外側：ヌス付 付着、内面：	
185	角牛土器 口縁部 ～胴部	B 2 U6Gr	V a M.a	横定 T5.6	横方向のナデ 斜日駆け差違 斜方向のハケ目 風化気味	工具ナデの後 ハケ目 風化気味	に赤い 黄褐色	相 相	4 m以下の灰白色・黒褐色。 相・透明光沢を含む	外側：ヌス付 付着
186	角牛土器 口縁部 ～胴部	B 2 T7Gr	V a	横定 T7Gr	横方向のナデ 斜日駆け差違 斜方向のハケ目	工具ナデの後ナデ ナデ	に赤い 黄褐色	黒褐色 相	3 m以下の灰白色・黒褐色和 色を多く含む	外側：ヌス付 付着、内面： 黒褐色
187	角牛土器 口縁部 ～胴部	B 2 T6Gr	V a	横定 T6Gr	横方向のナデ 斜日駆け差違 斜方向のナデ	工具ナデの後ナデ ナデ	に赤い 黄褐色	浅黄色 相	4 m以下の暗褐色・黒褐色。 灰白色を多く含む	内面：黒褐色
188	角牛土器 口縁部 ～底部	A 2 C15-D15	V a	横定 29.6	横方向のナデ、相 酒頭、横・斜方向 のハケ目、ナデ、 一部風化気味	横方向のナデ 横・斜方向のハケ 目、相・酒頭	に赤い 黄褐色	浅黄色 相	5 m以下の暗褐色・透明光沢・ 黒褐色光沢・灰白色・に赤い 色・相・暗褐色・暗赤褐色、 透明光沢を含む	外側：ヌス付 付着
189	角牛土器 口縁部 ～胴部	A 3 E9Gr	—	横定 6.1	ナデ ミガキの後ナデ ミガキの後ナデ	ミガキの後丁寧な ナデ	良好	相	1.5m以上の暗褐色・相灰褐色・ 透明・灰褐色・褐色光沢を含む 3 m以下の明褐色を多く含む	内面：黒褐色
190	角牛土器 胴部～ 底部	A 2 B16Gr	V a	横定 6.1	ナデ 一部風化気味	ナデ	良好	明褐色	に赤い 相	5 m以下の黒褐色・暗灰色・ 透明光沢を多く含む
191	角牛土器 胴部～ 底部	B 2 R5Gr	V a	横定 3.4	ナデ 粘土の止め	ナデ 風化著しい	良好	相	2 m以下の暗褐色・黒褐色・ 灰白色・相色、灰白色を外側： 黒褐色多く含む	外側：黒褐色
192	角牛土器 胴部～ 底部	A 2 E15Gr	V a	横定 3.7	斜・縱方向の工具 ナデ、ナデ	縱方向の工具ナデ	に赤い 黄褐色	浅黄色 相	2 m以下の暗褐色・暗灰色・ 暗褐色・暗褐色、淡灰白色・ 透明光沢を含む	内面：黒褐色
193	角牛土器 口縁部 ～胴部	B 1・B 2 T4～6Gr	V a	横定 M.a 12.4	斜・橫方向のエラ ギ、削り出し状の 突起、斜日駆け差 違、斜日駆け差 違	横化が著しく済み 良、削り出し状の 突起	良好	相	3 m以下の暗褐色・黒褐色、 相・相・暗褐色、灰白色、 透明光沢を含む	内面：炭化物 付着
194	角牛土器 口縁部	A 2 D12Gr	V a	横定 2.4	横方向のチヂ 剥離	横方向のチヂ 剥離	に赤い 相	相 相	ごく微細な透明光沢。1 mm 以下の暗褐色・暗褐色光沢に 複合口縫	外側：黒褐色
195	角牛土器 口縁部 ～胴部	B 2 R8・56-7 T5-Q4Gr	V a	横定 M.a 20.3	横方向のナデ 縱方向のハケ目 斜日駆け差違 風化著しい	横方向のナデ 纵方向のハケ目 ナデ 風化著しい	暗褐色 相 相	暗褐色 相 相	2 m以下の暗褐色・暗褐色 相・透明光沢を多く含む 4～5 mmの暗褐色・暗灰色、灰 色	内面：黒褐色 内面：疣癌部
196	角牛土器 胴部～ 底部	B 2 R7-8 S5-WGr	V a	横定 7.3	風化著しく調整不 明瞭	ナデ ナデ	良好	暗灰褐色 相	1 mm以下の暗褐色・褐色・透 明光沢を多く含む	体か
197	角牛土器 底部	A 3 H1Gr	V a	横定 4.8	縱方向の工具ナデ、剥離多い ナデ	剥離	に赤い 黄褐色	相	ごく微細な透明光沢。2 mm 以下の暗褐色・暗褐色光沢・灰白 色、相	外側：疣癌部 4 mm以下の暗褐色・黒褐色、 暗褐色を多く含む
198	角牛土器 底部	B 2 Y3Gr	V a	横定 2.4	縱方向の工具ナデ、剥離多い ナデ	エガキ?	良好	相	ごく微細な透明光沢。2 mm 以下の暗褐色光沢・灰白色、 暗褐色、暗褐色光沢を含む	外側：黒褐色
199	角牛土器 底部	B 2 U6-7Gr	V a	横定 6.8	ナデ 風化著しい	ナデ 風化著しい	良好	相	4 mm以下の暗褐色・黒褐色、 暗褐色光沢を多く含む	外側：黒褐色

第 10 表 弥生土器観察表 2

遺物 番号	器種	出土地点	部位	計測値				石材	備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
179	砥石	B 2	SA 5	—	15.3	4.3	1.0	135.9	497
200	砂製石器	B 2	USGr	V a	2.2	1.7	0.2	0.9	緑色白岩
201	砂製石器	A 3	111Gr	V a	3.2	2.1	0.2	1.3	白岩
202	砂製石器	A 3	18Gr	V a	3.0	2.3	0.3	1.7	緑色白岩
203	砂製石器	A 2	Ph575	—	3.1	2.1	0.3	2.0	緑色白岩
204	砂製石器	B 1	T46r	Vla	3.5	2.1	0.3	2.0	緑色チャート
205	石臼	B 2	ZGr	Vla	4.6	7.7	0.8	36.4	807

第11表 弥生時代石器計測表

遺物 番号	種別	基種 部位	出土 地点	層位	法量(cm)		手法・調整・文様ほか	焼成	色調	施土の特徴	備考	
					上	下	左	右	内面	外	内	
206	土師器	縦部付 ~瓶部	A 1	—	推定	斜方向のナデ	横方向のナデ	良好	褐色	褐色	微細な白色・透明光沢。	
		SA1			L1		斜面				1mmの大黒色・灰白色・赤褐色 内面: 黒度 料を含む	
207	土師器	上縦部 ~側部	A 1	—	推定	ナデ	横・斜方向の工具	良好	浅黃褐色	淡黄色	3mm以下の褐色・灰褐色・褐色・灰白 外面: スス付 着	
		SA1	Vla	16.6			ナデ				色彩料を含む	
208	土師器	口縁部 ~瓶部	A 1	—	15.3	2.9	7.5	ナデ、横方向の ミガキ、斜面	良好	浅黃褐色	黄褐色	1mm以下の灰褐色。2~4mm大 の灰褐色を含む
		SA1						斜面				
209	土師器	上縦部 ~側部	A 1	—	推定	横方向のミガキ	横方向のナデ	良好	に赤い 黄褐色	黄褐色	2mm以下の褐色・に赤い褐色・ 灰白色。3~8mmの大黄褐色 料を含む	
		SA1	Vla	15.0			風化著しい				外面: スス付 着	
211	土師器	口縁部 ~瓶部	A 2	—	推定	ナデ	横方向のナデ	良好	褐色	に赤い 褐色	1mm以下の白色・灰色料を含む 着、内面: 黑 度	
		SA1			17.2	6.2	19.5	横方向のナデ				
212	土師器	上縦部 ~瓶部	A 2	—	推定	丁寧なヨコナデ	斜方向のナデ、ナ ド、粘土の跡り	良好	明黄褐色	に赤い、 黄褐色	丁寧なヨコナデ、1mm以下の白色	
		SA1			7.9	2.2	9.6	横・斜方向のハラ ミガキ			料を多く含む	
213	土師器	环节部 ~側部	A 2	—	推定	横方向のナデ	横方向のナデ	良好	明黄褐色	4mm以下の褐色・灰白色の料を に赤い、 黄褐色	に赤い、 少星含む	
		SA2			22.6			ハラ目、斜面				
214	土師器	环节部 ~側部	A 2	—	推定	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	明黄褐色	1mm以下の褐色	1mm以下の褐色・灰白色。2mm以下 の褐色料を多く含む	
		SA2	V a	19.3			横方向の工具ミ ガキ					
215	土師器	环节部 ~側部	A 2	—	推定	ナデの痕へラ拭	ナデ	良好	褐色	5mm以下の赤褐色をわずかに 含む	外面: 黑度	
		SA2			21.0			貝えがき				
216	土師器	环节部 ~側部	A 2	—	推定	ナデの痕へラ拭	ナデの後工ナデ	良好	褐色	3mm以下の赤褐色・灰褐色・乳 白色料をわずかに含む		
		SA2			15.7			貝えがき				
217	土師器	环节部 ~側部	A 2	—	推定	ナデ	ナデの後工ナデ	良好	褐色	1mm以下の褐色。3mm以下の 明黄褐色料をわずかに含む	218と同一 体か	
		SA3	Te3	V a			ナデの後工ナデ					
218	土師器	环节部 ~側部	A 2	—	推定	ナデ	横方向のミガキ	良好	褐色 浅黄色	2mm以下の明赤褐色をわずか に含む		
		SA2					斜面					
219	土師器	环节部 ~側部	A 2	—	推定	ハラミガキ	ナデ	良好	褐色	1mm以下の灰白色・灰褐色・相 色	外面: スス付 着、黒度	
		SA2	V a	19.5								
220	土師器	小形部 ~瓶部	A 2	—	推定	斜・縱方向の工具	ナデ、斜面	良好	浅黃褐色	0.5mm以下の灰白色。1.5mm以 下の褐色料を多く含む		
		SA2			6.4	2.9	5.0	ナデ、ナデ 斜・縱方向の工具				
222	土師器	上縦部 ~側部	A 3	—	推定	横方向のナデ	斜・縱方向の工具ナ ド、ナデ	良好	に赤い 黄褐色	1mm以下の黑色をわずか。2 mm以下の乳白色・灰褐色・褐色 料を多く含む	外面: スス付 着、黒度	
		SA3			30.0			斜・縱方向の工具 ナド、ナデ				
223	土師器	上縦部 ~側部	A 3	—	推定	横方向のナデ	斜・縱方向の工具ナ ド、ナデ	良好	褐色	2mm以下の乳白色・灰褐色・褐色 料を多く含む		
		SA3	V a	27.4			斜面					
224	土師器	上縦部 ~側部	A 3	—	推定	横方向のナデ	斜・縱方向の工具 ナデ	良好	浅黃褐色	2mm以下の黒色・灰褐色・褐 色	外面: スス付 着、黒度	
		SA3			14.6			斜面				

第12表 古墳時代土師器観察表1

遺物 番号	種別 部位	出土地点	層位	法面 (cm)	手法・調整・文様ほか		焼成	色調		胎土の特徴	備考
					口付	底部		外 面	内 面	外面	
229	土師器 胴部	A 3 SA3 J1Gr	— V a	標準 7.6	標準	ナデ	ナデ	良好 淡黄色	に高い 黄褐色	3 mm以下の低い赤褐色・赤褐色 色・乳白色・光沢を多く含む	
230	土師器 底部	A 3 SA3 J1Gr	— V a	標準 7.0	ナデ	ナデ	良好 黄褐色	に高い 黄褐色	4 mm以下の低い赤褐色・乳白色 色・無光沢・透明感を多く含む		
231	土師器 胴部～ 底部	A 3 SA3 J9Gr	— V a	標準 7.4	縦・斜方向の工具 ナデ、糊いコロナ デ、ナデ、指痕直	斜方向のナデ	良好 淡黄色	黄褐色	1 mm以下の透明光沢 下の赤褐色・灰白色・褐灰色を 多く含む		
232	土師器 胴部～ 底部	A 3 SA3	— 6.6	標準	斜方向の工具ナ デ、糊いナデ	指痕直	良好 淡黄色	淡黄色	下の赤褐色・灰白色・灰褐色を 多く含む		
233	土師器 底部	A 3 SA3	— 7.8	標準	斜方向のハケ目 ナデ	横・斜方向のハケ 目	良好 淡黄色	灰白色 黄褐色	2 mm以下の黒色光沢・灰白色 を少量含む		
234	土師器 口縁部	A 3 SA3	— 10.6	標準	丁寧なコロナ 縦・斜方向のハラ ミガキ	丁寧なナデ ナデ	良好 灰白色	淡黄色 黄褐色	微細な黒色・褐色・透明感を含 む	235と同一個 体	
235	土師器 底部	A 3 SA3	—	標準	横方向のミガキ 竿	ナデ	良好 黄褐色	灰白色 灰白色	2 mm以下の赤褐色をわずかに 含む	234と同一個 体	
236	土師器 口縁部 ～底部	A 3 SA3	— 9.5	2.8 11.0	標準	斜方向のミガキ 糊化実験	横方向のナデ ナデ	良好 黄褐色	褐色 褐色	微細な透明光沢・1 mm以下の灰 色・灰白色・赤褐色・黑色光沢・外 面：黒褐色を含む	
237	土師器 ～箱底	A 3 SA3	— 9.4	標準	コロナデ 縦方向のミガキ	コロナデ	良好 褐色	浅黄色 黄褐色	1 mm以下の赤褐色を含む		
238	土師器 胴部～ 底部	A 3 SA3	—	標準	横方向のミガキ	ナデ	良好 黄褐色	灰白色 黄褐色	2 mm以下の黒褐色・灰褐色・褐 色・褐色		
239	土師器 胴部～ 底部	A 3 SA3	—	標準	斜方向の工具板 糊化実験	横方向のナデ	良好 明黄褐色	明黄褐色 灰褐色	2 mm以下の黒褐色・灰褐色・褐 色・透明光沢・黒褐色を含む		
240	土師器 底部～ 底部附近	A 3 SA3 V a H10+11Gr	—	標準	ナデ	ナデ	良好 黄褐色	淡黄色 黄褐色	1 mm以下の透明・白色粒を含む	焼成後底部分 孔	
241	土師器 口縁部 ～底部	A 3 SA3	— 15.0	I2I 11I	横方向のナデ、糊 斜方向のミガキ	横方向のナデ 工具ナデ、ナデ 横方向のミガキ	良好 明黄褐色	褐色 明黄褐色	3 mm以下の乳白色・明赤褐色 を含む		
242	土師器 口縁部～ 底部附近	A 3 SA3 V a J10Gr	—	標準	縦方向のミガキ 丁寧なナデ	横方向のミガキ 工具ナデ	良好 明黄褐色	褐色 明黄褐色	4 mm以下の赤褐色を含む 1 mm以下の灰褐色・透明光沢・褐 色を少す。微細な光沢を多く含 む		
243	土師器 口縁部	A 3 SA3 V a H10+11Gr V a	— 21.7	標準	コロナデ、横方向 のナデの後機・斜 方向のミガキ 一部糊化実験	コロナデ、横方 向のナデの後機・斜 方向のミガキ 方向のミガキ	良好 明黄褐色	褐色 明黄褐色	4 mm以下の透明光沢・2 mm以下の 灰褐色・透明光沢・褐褐色 3 mm以下の赤褐色を、に高い 白色を含む		
244	土師器 脚柱部 ～底部	A 3 SA3 V a T 7	— 19.4	標準	ミガキの後機方向 のナデ、丁寧なナ デ、ミガキの後機 斜方向のナデ	ミガキの後機ナ デ、丁寧なナデ ミガキの後機ナ デ、ミガキの後機 斜方向のナデ	良好 明黄褐色	褐色 明黄褐色	微細な灰白色・褐色光沢。1 mm以下の透明光沢、2 mm以下 の褐色を含む		
245	土師器 脚柱部～ 脚柱部	A 3 SA3 V a T 10+10Gr	—	標準	縦方向のミガキ	ミガキの後機ナ デ	良好 明黄褐色	褐色 明黄褐色	1.5 mm以下の赤褐色を少量 1 mm以下の褐色・透明光沢を わずか、微細な光沢を多く含 む		
246	土師器 脚柱部	A 3 SA3	—	標準	縦方向のミガキ	ナデ	良好 明黄褐色	褐色 明黄褐色	2 mm以下の明褐色・灰白色和 色を多く含む		
247	土師器 脚柱部	A 3 SA3	—	標準	横・斜方向のミガ キ、丁寧なナデ ナデ	横・斜方向のナデ	良好 明黄褐色	褐色 明黄褐色	微細な光沢。2 mm以下の灰白 色・乳白色・褐褐色・明褐色和 色を含む		
248	土師器 ～脚柱部	A 3 SA3 V a J9Gr	—	標準	斜方向の工具ナ デ、ナデ	斜方向の工具ナ デ、ナデ	良好 ナデ	褐色 浅黄色	5 mm以下の明褐色を含む	外面：スス材 若	
249	土師器 ～脚柱部	A 3 SA3	— 8.8	標準	縦方向のミガキ ナデ	ナデ 工具ナデ	良好 灰白色	浅黄色 灰白色	3 mm以下の褐色・灰白色・透 明光沢を多く含む	外面：黒褐色	

第13表 古墳時代土師器観察表2

遺物 番号	種別 部位	形状 部位	出土 地点	層 位	法量 (cm)	手法・調節・支撐ほか	焼成			色	調 色	出土の特徴	備 考
							工具	内面	外面				
250	土師器 胴部～ 底部	小筒型	A 3 SA3	—	2.9	ナデ	横・斜方向の工具 ナデ、ナデ	良好	浅黄色	浅黄色	2 mm以下の灰白色・黒褐色・褐 色を多く含む		
262	土師器 上部部 ～脚部	筒	B 1 SA4	—	31.7	ヨコナデ 工具ナ 横方向のナデ	ナデ 良好 浅黄色	淡黄色	淡黄色	2 mm以下の黒褐色、3 mm以下の外 面：スズ付			
263	土師器 上部部 ～脚部	筒	B 1 SA4	—	—	斜方向のミガナ 斜方向のハケ目 ナ	横・斜方向のミガ ナ 良好	に赤い 黄褐色	に赤い 黄褐色	ごく微細な透明光沢、1 mm以 下の灰白色・に赤い黄褐色を含 む			
264	土師器 上部部 ～脚部	小筒型	B 1 SA4	—	7.9	2.8 5.4	横・斜方向のミガ ナ ナデ	横・斜方向の工具 ナデ	良好	灰褐色	ごく微細な透明光沢・黒褐色光 沢・に赤い黄褐色の粒	外側：黒褐 色	
267	土師器 上部部 ～脚部	筒	A 3 II-11 V-a JB-10Gr	丁寧ナデ ヨコナデ 脚部	32.8 6.5 33.0	ヨコナデ ナデ 脚部	ヨコナデ ナデ 脚部	良好	浅黄色	浅黄色	2 mm以下の透明・白色を少量 含む	外側：スズ付 着	
268	土師器 上部部 ～脚部	筒	A 3 II-10 J10Gr	—	V-a 24.0	方角のハケ目 脚部帶 (布目) 脚部のナデ	横方向のナデ 良好	に赤い 黄褐色	に赤い 黄褐色	1.5 mm以下の明褐色・黒褐色。 2 mm以下の灰白色・黒褐色・褐 色・透明光沢含む	外側：スズ 付着		
269	土師器 上部部 ～脚部	筒	B 2 R7-S7Gr Ma	—	V-a 24.6	横方向のナデ 脚部帶 (布目) 横・斜方向のハケ 目 (布)	横方向のナデ 脚部、横・斜 方向のハケ 目 (布)	良好	浅黄色	灰褐色	3 mm以下の暗褐色・黒褐色・灰 白色を多く含む	外側：黒褐 色	
270	土師器 上部部 ～脚部	筒	A 3 J10Gr	V-a	—	脚部帶 (布目) 横・斜方向の工具 ナデ (後ナデ)	横方向のナデ 良好	に赤い 黄褐色	灰褐色	2 mm以下の暗褐色・灰白色・褐 色・透明光沢を多く含む	外側：スズ付 着	内部：黒皮	
271	土師器 上部部 ～脚部	筒	A 2 B18 C17+18Gr	V-a	—	脚部	横方向のナデ 良好	に赤い 黄褐色	3 mm以下の暗褐色・灰白色・ 黒褐色・褐色・透明光沢・灰 白色・褐色を含む				
272	土師器 胴部～ 底部	筒	B 2 RS-Y6Gr Ma	V-a	4.2	ナデ 風化著しい	ナデ 風化著しい	良好	浅黄色	浅黄色	4 mm以下 (7) 暗褐色・灰白色・ 黑色・透明光沢を含む	内側：スズ付 着	
273	土師器 胴部～ 底部	筒	B 1 Z2-Y2Gr	V-a	—	斜方向のハケ目 風化著しい	斜方向のハケ目 風化著しい	良好	褐色	褐色	4 mm以下の暗褐色・黑褐色・褐 色・透明光沢を含む	外側：スズ付 着	
274	土師器 底部	筒	B 2 UTGr	V-a	5.95	ナデ 風化気味	ナデ 風化気味	良好	浅黄褐色	黄褐色	2 mm以下の赤褐色・に赤い 褐色・3 mm以下の黄褐色・ 黑色・褐色・透明光沢を含む		
275	土師器 底部	筒	A 3 G2Gr	V-a	4.78	工具ナデの後ナデ ナデ	工具ナデの後ナデ ナデ 風化気味 脚部	良好	浅黄色	淡黄色	3 mm以下の暗褐色・に赤い赤 褐色・4 mm以下の赤褐色・ 赤褐色・黑色・黒褐色光沢・透 明光沢を含む	外側：スズ付 着	内部：黒廣
276	土師器 底部	筒	B 2 S5Gr	V-a	6.05	縦方向の工具ナ デ、ナデ	ナデ	良好	淡黄色	浅黄色	2 mm以下の灰白色・淡灰色・ 褐色・褐色・明褐色・明褐色・透 明光沢を含む		
277	土師器 底部	筒	B 1 V2-V3Gr Tr	V-a	5.4	縦方向の工具ナ デ、ナデ	丁寧なナデ ナデ	良好	浅黄褐色	浅黄色	2 mm以下の赤褐色・暗褐色・褐 色・黑色・灰褐色・透 明光沢を含む		
278	土師器 底部	筒	A 2 B15Gr V1)	V-a	6.4	縦方向の工具ナ デ、ナデ	工具ナデ	良好	に赤い 黄褐色	黄褐色	1 mm以下の暗褐色・灰褐色・ 黑色・透明光沢を少量含む		
279	土師器 底部	筒	B 2 T3Gr	V-a	6.05	工具ナデの後ナ デ、ナデ	工具ナデの後ナ デ、ナデ 風化著しい	良好	淡黄色	淡黄色	4 mm以下の暗褐色・黒褐色・灰 白色・透 明光沢を多く含む	内側：黒廣	
280	土師器 底部	筒	A 3 JB-K9Gr Tr	V-a	6.0	縦方向の工具ナ デ、ナデ	縦方向のナデ ナデ	良好	に赤い 黄褐色	黄褐色	1 mm以下の暗褐色・灰褐色・ 褐色・黑色・褐色・透 明光沢を多く含む		
281	土師器 底部	筒	B 2 Q7Gr	V-a	7.6	縦・斜方向のハ ケ目、 横・斜方向の工 具ナ デ、ナ デ、 風化著 しい	工具ナデの後ナ デ、 ナデ、 風化著 しい	良好	に赤い 黄褐色	浅黄褐色	3 mm以下の暗褐色・暗褐色・褐 色・白色・透 明光沢を多く含む	外側：スズ付 着	
282	土師器 底部	筒	B 2 Z5Gr	V-a	8.9	横・斜方向の工 具ナ デ、 横方向のナ デ、 ナ デ、 脚部	横・斜方向の工 具ナ デ、 ナ デ、 ナ デ、 脚部	良好	に赤い 黄褐色	黄褐色	2 mm以下の暗褐色・褐色・透 明光沢・黒褐色を多く含む	内側：黒廣	
283	土師器 底部	筒	B 2 R9Gr	V-a	10.8	横方向のナデ ナデ	—	良好	に赤い 黄褐色	黄褐色	2 mm以下の暗褐色・褐色・透 明光沢・黑褐色・灰白色を多く 含む		

第 14 表 古墳時代土師器観察表 3

遺物 番号	種別 部位	出土地点	層位	法面 (cm)	手法・調整・文様等		焼成	色調			胎土の特徴	備考	
					外 面	内 面		外 面	内 面	外 面			
284	土師器 ～軋部	口縁部 ～軋部	A 3 J10Gr	110 V a	標準 化焼成	ナデ、工具ナデ 丁寧なナデ 粗い工具ナデ	ナデ 良好 粗い工具ナデ	浅黄褐色 明黄褐色	浅黄褐色 明黄褐色	色・白色・透明 灰白色	2 mm以下の褐色・灰褐色・明褐色 1 mm以下の褐色・灰褐色・明褐色	複合構造 内面：スス材	
285	土師器	口縁部	B 2 Z4Gr	V a	横方向のナデ 風化著しい	横方向のナデ 風化著しい	良好	柑色	柑色	灰白色	1 mm以下の褐色・灰褐色・明褐色 灰白色・褐色を含む	複合構造	
286	土師器	口縁部	A 2 D12Gr	V a	標準 化焼成	横方向のナデ 横方向のミガキ 横・縱方向のミガキ 手・脚の跡のナデ	横方向のナデ 横方向のヘラミガキ 横・縦方向のヘラミガキ 手・脚の跡のナデ	良好 良好	浅黄褐色 浅黄褐色	浅黄褐色	1 mm以下の褐色・灰褐色・明褐色 光沢を多く含む	複合構造	
287	土師器 ～軋部	部～ 軋部	A 3 H6Gr	V a	横・縱方向のミガキ 手・脚の跡のナデ	横・縦方向のミガキ 手・脚の跡のナデ	良好	柑色	柑色	微細な褐色・褐色をわずかに含む	微細な褐色・褐色をわずかに含む		
288	土師器 ～軋部	C14-15 D15 E15Gr	V a	剝離付帯帶 ナデ 化焼成	剝離付帯帶 ナデ 化焼成	ナデ 良好 化焼成	浅黄褐色 黄褐色	浅黄褐色 黄褐色	に近い 黒褐色	2 mm以下の褐色・3 mm以下の褐色 黒褐色	2 mm以下の褐色・3 mm以下の褐色 黒褐色	外内面：黒褐色	
289	土師器 ～軋部	B 2 Q6-B6 R7Gr	V a V a	縦・斜方向のハケ 縦・斜方向のナデ 目	縦・斜方向のハケ 縦・斜方向のナデ 目	良好	柑色 に近い 黄褐色	柑色 に近い 黄褐色	に近い 2 mmの赤褐色をわずかに含む	2 mmの赤褐色をわずかに含む	2 mmの赤褐色をわずかに含む	外内面：スス材	
290	土師器 ～軋部	A 3 J10Gr	V a	横斜方向ナデ 指痕	横斜方向ナデ 指痕	ナデ 良好	黄褐色	明褐色	に近い 黒褐色	1 mm以下の褐色・灰褐色・金	1 mm以下の褐色・灰褐色・金	外内面：黒褐色	
291	土師器 ～軋部	B 2 W3Gr	V a	標準 8.0	ナデの後斜方向 ミガキ、ナデ	横・斜方向のナデ ミガキ、ナデ	良好	明黄褐色	明黄褐色	に近い 黄褐色	微細な褐色・灰褐色・透明感を含む	微細な褐色・灰褐色・透明感を含む	
292	土師器 ～軋部付近	B 2 S5-R5Gr	V a	工具ナデ？ 風化著しい ナデ	工具ナデ？ 風化著しい ナデ	工具ナデ 指痕	良好	柑色	浅黄褐色	に近い 赤褐色・灰褐色	2 mm以下の褐色・灰褐色・暗褐色	2 mm以下の褐色・灰褐色・暗褐色	内面：黒褐色
293	土師器 ～軋部 ～軋部	A 3 H10-11Gr	V a	標準 6.7	横方向のナデ ナデ	横・斜・縱方向のミガキ ナデ、指痕	良好	柑色	柑色	に近い 明褐色	1 mm以下の褐色・灰褐色・透明感・赤褐色を含む	1 mm以下の褐色・灰褐色・透明感・赤褐色を含む	
294	土師器 ～軋部	A 3 H10Gr	V a	子デ 工具痕	子デ 工具痕	ナデ 良好	浅黄褐色	浅黄褐色	に近い 黒褐色	1 mm以下の赤褐色・褐色・灰褐色	1 mm以下の赤褐色・褐色・灰褐色	外内面：黒褐色	
295	土師器 ～軋部	B 2 Y3Gr	V a	ヨコナデ 縱方向のミガキ 一部風化気味	縦・斜方向のミガキ 手	良好	明黄褐色	明黄褐色	に近い 褐色	ごく微細な透明光沢	ごく微細な透明光沢		
296	土師器 ～軋部	A 2 D11-12Gr	V a	横・斜方向のミガキ 手、風化著しい	横・斜方向のミガキ 手、風化著しい	良好	柑色 に近い 黄褐色	柑色 に近い 黄褐色	に近い 褐色	ごく微細な透明光沢	ごく微細な透明光沢	外内面：黒褐色	
297	土師器 ～軋部	A 3 J10Gr	V a	縦方向のナデ ナデ	縦・斜方向のミガキ ナデ、横・斜方向の工具 ナデ	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	に近い 褐色	1 mm以下の褐色・灰褐色を含む	1 mm以下の褐色・灰褐色を含む	外内面：黒褐色	
298	土師器 ～軋部	A 3 J10Gr	V a	標準 11.8	縦・斜方向のナデ ミガキ 横方向のナデ	横・斜方向の工具 ナデ 横方向のナデ	良好	明黄褐色	明黄褐色	に近い 黃褐色	1 mm以下の褐色・灰褐色を含む	1 mm以下の褐色・灰褐色を含む	
299	土師器 ～軋部	B 2 Y3Gr	V a	標準 19.9	斜方向のミガキ 後ナデ	横・斜方向のミガキ 手	良好	明黄褐色	明黄褐色	に近い 褐色	微細な透明光沢	微細な透明光沢	
300	土師器 ～軋部 ～底部	B 2 Q5-R5Gr	V a	7.4	ナデ 指痕	ナデ ナデ	良好	柑色	柑色	に近い 褐色	1 mm以下の褐色・灰褐色・灰白色	1 mm以下の褐色・灰褐色・灰白色	
301	須恵器 天井部 ～口縁部	A 3 J8Gr	V a	回転ナデ	回転ナデ	堅韌	灰褐色	灰褐色	に近い 褐色	微細な灰褐色	1 mm以下の褐色・灰褐色を含む	内面：褐色を含む	

第 15 表 古墳時代土師器観察表 4

路号	器種	出土地点	計測値			色調		胎土	備考	
			最大径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	外面			
221	輪羽口	A 2 SA2	9.6	5.8	6	214	浅黄色 に近い黄褐色	灰褐色	1 mm以下の浅黄褐色・灰白色 の褐色を含む	鉄分・ガラス質付着
222	輪羽口	A 2 SA2	9.7	6.4	6.3	236	浅黄褐色 黄褐色	灰褐色 に近い黄褐色	2 mm以下の灰白色・灰褐色 に近い灰褐色	ガラス質付着
251	土器 加工品	A 3 SA3	3.8	3.4	0.9	12	柑色 に近い黄褐色	柑色 に近い黄褐色	西端の透明光沢を多く、3 mm以下の灰白色 色をわずかに含む	内面：横方向のミガキ

第 16 表 古墳時代土製品計測表

番号	遺物 器種	出土地点	層位	計測値				備考
				最大長(cm)	最小幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
252	鉄劍	A 3	SA3	—	14.2	3.2	0.5	31 木質保存(最大厚 1.4)
253	鉄劍	A 3	SA3	—	7.3	2.1	0.4	11
254	ヤリガンテ	A 3	SA3	—	6.2	1.1	0.4	7 墓部か
302	鉄劍	B 2	R7Gr	V a	4.1	2.4	0.3	7
303	不明鉄製品	A 3	II26r	V a	11.2	3.8	0.4	29

第 17 表 古墳時代鉄器計測表

番号	器種	出土地点	層位	計測値				石材	備考
				最大長(cm)	最小幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
210	台石	A 3	SA1Tr	—	7.6	6.5	2.5	156.7	褐色岩
223	砥石	A 3	SA3	—	12.1	9.9	1.5	280.7	褐色
224	金剛石	A 2	SA2+BI5	—	38.2	35.9	77.5	4,978.0	褐色岩
255	磁石	A 3	SA3	—	6.8	5.5	2.9	163.2	褐色
256	磁石	A 3	SA3	—	7.6	5.5	3.0	149.0	褐色
257	磁石	A 3	SA3	—	15.8	5.6	1.4	115.1	褐色
258	磁石 or 鉄石	A 3	SA3	—	10.2	7.9	6.5	809.9	褐色
259	軽石・鈍石	A 3	SA3	—	2.3	4.9	2.05	5.9	
260	台石	A 3	SA3	—	27.8	20.5	6.4	4,374	褐色
261	台石	A 3	SA3	—	21.9	10.5	4.9	1,873.70	褐色
265	石錐	B 1	SA4	—	6.2	4.3	1.0	42.8	褐色
266	台石	B 1	SA4	—	23.7	24.0	8.4	6,500	褐色

第 18 表 古墳時代石器計測表

高さ 等高 基部 部位	種別	出土 地点	層位	寸法(cm)		手法・調整・文様ほか		焼成	色	調 査 部 面	斯上 の特徴	備考	
				上法	下法	底部	頂部						
304	土師器	口縁部 ～底部	II	B 1	—	標準	標準	回転ナデ	回転ナデ	良好	黄褐色	褐色	2mm以下の軟質色・黄白色をわずかに含む
306	土師器	体部 ～底 部	II	A 2	—	標準	回転ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 褐色	褐色	褐色	微細な光沢料を少量、2mm以下褐色・赤褐色・透明・褐色・灰褐色
307	土師器	底部	II	SC1	V a	13.2	6.1	4.2	へら切り後ナデ	良好	褐色	褐色	1mm以下の微細な褐色・褐色
308	土師器	高台付 口縁部 ～底部	A 2	—	標準	回転ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 褐色	褐色	褐色	1mm以下の灰白色・2mm以下の赤褐色	
309	土師器	口縁部	A 2	—	標準	ヨコナデ	標準	横方向のハサメ 調整・縦方向の ケズリ	良好	灰褐色	灰褐色	1mm以下の褐色・褐色	1mm以下の褐色・褐色
310	土師器	胴部	SC1	A 2	—	標準	熱子目タタキ	ナデ	不良	灰褐色	灰褐色	1mm以下の赤褐色・褐色	1mm以下の赤褐色・褐色をわずかに含む
312	土師器	口縁部 ～底部	II	A 2	—	標準	回転ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 褐色	褐色	褐色	微細な光沢料を多く含む
313	土師器	体部 ～底部	II	SC4	V a	11.1	5.7	4.1	回転ナデ へら切り後ナデ	良好	に赤い 褐色	褐色	2mm以下の赤褐色・褐色を多く含む
314	土師器	体部 ～底部	II	SC4	—	標準	回転ナデ へら 切り後ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 褐色	褐色	褐色	2mm以下の赤褐色をわずかに含む
315	土師器	口縁部 ～底部	II	SC4	V a	11.0	5.4	4.4	回転ナデ へら 切り後ナデ	良好	浅黄色	浅黄色	2mm以下の灰白色を含む
316	土師器	体部 ～底部	II	SC4	—	標準	回転ナデ へら 切り	回転ナデ	良好	に赤い 褐色	褐色	褐色	2mm以下の灰白色を含む
317	土師器	口縁部 ～底部	A 2	—	標準	6.0	4.7	回転ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 褐色	褐色	褐色光沢料をわずかに含む
318	土師器	口縁部 ～底部	A 2	—	標準	12.1	6.0	4.7	回転ナデ へら切り後ナデ	良好	褐色	褐色	褐色光沢料をわずかに含む
319	土師器	体部 ～底部	II	SC4	—	標準	5.3	回転ナデ へら切り	回転ナデ	良好	に赤い 褐色	褐色	2mmの明黄色を含む
320	土師器	口縁部 ～底部	A 2	—	標準	12.5	5.9	4.6	回転ナデ へら切り	良好	褐色	褐色	2mmの明黄色

第 19 表 古代土師器観察表 1

遺物 番号	種別	部位	出土 地点	層位 10cm	法量 (cm)		手法・調整・文様ほか			焼成	色調			刷毛の特徴	備考	
					底部	外 面	内 面	外 面	内 面		外 面	内 面	外 面			
321	土師器	环	A 2	—	都定	回転ナデ	回転ナデ	良好	浅黃褐色	浅黃褐色	微細な光沢有。2mm以下の軟質赤色・黒褐色を含む					
322	土師器	环	A 2	—	都定	ハラ切り後ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐色	3mm以下の赤褐色・灰白色をわずか、微細な透明光沢を含む					
323	土師器	环	A 2	—	都定	回転ナデ	回転ナデ	良好	浅黃褐色	浅黃褐色	2mm以下の赤褐色・褐色・軟質赤色を含む					
324	土師器	环	A 2	—	都定	回転ナデ	回転ナデ	良好	褐色	明黃褐色	3mm以下の軟質赤色・褐色を少額、微細な透明光沢を含む					
328	土師器	环	A 2	—	都定	回転ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 黄褐色	黄褐色	微細な透明光沢を含む					
326	土師器	环	A 2	—	都定	回転ナデ	回転ナデ	良好	反葉褐色	褐灰色	1mm以下の赤褐色・灰白色をごくね ずかに含む					
		底部	SC4	V.a	6.15	ハラ切り後ナデ	回転ナデ	良好	反葉褐色	褐灰色						
327	土師器	环	A 2	—	都定	回転ナデ	回転ナデの後斜 方向のナデ	良好	に赤い 黄褐色	黄褐色	微細な黒褐色・褐灰色を含む					
		底部	SC4	V.a	7.0	ハラ切り後ナデ	方向のナデ	良好	浅黃褐色	浅黃褐色	2mm以下の灰白色・褐色・黒褐色光沢・軟質赤色を含む					
328	土師器	环	A 2	—	13.4	7.0	6.7	回転ナデ	回転ナデ	良好	浅黃褐色	浅黃褐色	2mm以下の灰白色・褐色・黒褐色光沢・軟質赤色を含む			
		底部	SC4	V.a	14.1	7.9	6.5	回転ナデ ナデ	回転ナデ	良好	浅黃褐色	浅黃褐色	1mm以下の白色光沢や赤褐色をわ ずかに含む			
329	土師器	环	A 2	—	都定	回転ナデ	回転ナデの後斜 方向のナデ	良好	に赤い 黄褐色	黄褐色	1mm以下の白色光沢や赤褐色をわ ずかに含む					
		底部	SC4	V.a	15.5	—	回転ナデ ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐灰色	1mm以下の白色光沢や赤褐色をわ ずかに含む				
330	土師器	环	A 2	—	13.3	6.9	5.9	回転ナデ ナデ	回転ナデ	良好	浅黃褐色	浅黃褐色	1mm以下の白色光沢・褐色・黒褐色を含む			
		底部	SC4	V.a	15.5	—	回転ナデ ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐灰色	微細な透明光沢と、1.5mm以下の灰褐色・乳白色を含む				
331	土師器	环	A 2	—	都定	都定	回転ナデ ナデ	ナデ	良好	に赤い 黄褐色	浅黃褐色	1mm以下の赤褐色光沢。2mm以下の灰白 色をごくわずかに含む				
		底部	SC4	V.a	13.6	7.5	7.1	不定方向のナデ ナデ	回転ナデ	良好	浅黃褐色	浅黃褐色	1mm以下の所白色。2mm以下の明赤 色を含む			
332	土師器	环	A 2	—	都定	回転ナデ ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐色	2mm以下の明赤 色を含む					
		底部	SC4	V.a	13.9	—	回転ナデ ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐灰色	2mm以下の所白色・褐色を多く、微細 なアメ色・透明ガラスを含む				
333	土師器	环	A 2	—	都定	回転ナデ	回転ナデ ナデ	良好	褐色	褐色	微細な透明光沢と、1.5mm以下の灰褐色・ 乳白色を含む					
		底部	SC4	V.a	15.5	—	回転ナデ ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐灰色	1mm以下の所白色・褐色を含む				
334	土師器	高台付塊	A 2	—	都定	回転ナデ ナデ	回転ナデ	良好	浅黃褐色	浅黃褐色	3mm以下の赤褐色をわずか、微細 なアメ色・透明ガラスを含む					
		底部	SC4	V.a	10.0	8.2	回転ナデ ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐灰色	2mm以下の所白色・褐色を多く、 1mm以下の所透明光沢を含む				
335	土師器	高台付塊	A 2	—	都定	回転ナデ ナデ	回転ナデ	風化著しい	良好	浅黃褐色	浅黃褐色	1mm以下の所白色・褐色を含む				
		底部	SC4	V.a	7.0	—	ナデ	回転ナデ	良好	浅黃褐色	浅黃褐色	2mm以下の所透明光沢と、黄褐色を多く、 1mm以下の所白色・褐色を含む				
336	土師器	高台付塊	A 2	—	都定	回転ナデ ナデ	回転ナデ	良好	浅黃褐色	浅黃褐色	4mm以下の所透明光沢と、透明光沢を多く・ 黒色光沢を少額含む					
		底部	SC4	V.a	7.3	—	ナデ	回転ナデ	良好	浅黃褐色	浅黃褐色	5mm以下の赤褐色光沢、3mm以下の灰色 を含む				
337	土師器	高台付塊	A 2	—	都定	回転ナデ ナデ	回転ナデ	良好	浅黃褐色	浅黃褐色	5mm以下の赤褐色光沢を含む					
		底部	SC4	V.a	8.7	3.3	回転ナデ ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐灰色	1mm以下の赤褐色・褐色を含む				
338	土師器	高台付塊	A 2	—	都定	回転ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 褐色	褐色	1mm以下の赤褐色・褐色を含む					
		底部	SC4	V.a	12.6	—	ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐灰色	1mm以下の所白色・褐色を含む				
339	土師器	高台付塊	A 2	—	都定	回転ナデ ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 黄褐色	褐色	2mm以下の赤褐色・褐色を含む					
		底部	SC4	V.a	14.0	—	ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐灰色	2mm以下の赤褐色・褐色を含む				
340	土師器	高台付塊	A 2	—	都定	回転ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐色	2mm以下の赤褐色・褐色・灰褐色 を含む					
		底部	SC4	V.a	13.1	—	ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐灰色	2mm以下の赤褐色・褐色・灰褐色 を含む				
341	土師器	高台付塊	A 2	—	都定	回転ナデ ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐色	1mm程度の軟質赤色・2mm以下の黒 褐色・灰白色を少額含む					
		底部	SC4	V.a	13.0	—	ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐灰色	2mm以下の赤褐色・褐色・灰白色。				
342	土師器	高台付塊	A 2	—	都定	回転ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 黄褐色	浅黃褐色	1mm以下の赤褐色を含む					
		底部	SC4	V.a	14.3	—	ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐灰色	2mm以下の赤褐色・褐色・灰白色。 1mm以下の赤褐色を含む				
343	土師器	高台付塊	A 2	—	都定	回転ナデ	回転ナデ	良好	浅黃褐色	浅黃褐色	1mm以下の赤褐色・灰褐色					
		底部	SC4	V.a	16.2	—	ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐灰色	1mm以下の赤褐色を含む				
344	土師器	高台付塊	A 2	—	都定	回転ナデ ナデ	回転ナデ	良好	浅黃褐色	浅黃褐色	3mm以下の所白色・褐色を少額、微細 な透明光沢を含む					
		底部	SC4	V.a	20.0	—	ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐灰色	2mm以下の赤褐色・褐色・灰白色。				
345	土師器	高台付塊	A 2	—	都定	回転ナデ後ナデ、 回転ナデの後え 方牛	回転ナデ	良好	褐色	褐色	2mm以下の赤褐色光沢を含む					
		底部	SC4	V.a	15.2	—	ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐灰色	2mm以下の赤褐色光沢を含む				
346	土師器	高台付塊	A 2	—	都定	4.2 回転ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 黄褐色	浅黃褐色	2mm以下の所白色・灰白色・軟質赤 色を少額、微細な光沢を含む					

第20表 古代土師器観察表2

高さ	種類	基部	地點	剖位	法算 (cm)		手法・調整・又種はか		焼成	色調			施土の特徴	備考	
					(1)壁	(2)底	(3)器高	外面		外面	内面	外面			
347	土師器	片口壺	A 2	—	回転ナデ	ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 褐色	に赤い 褐色	に赤い 褐色	に赤い 褐色	ごく微細な透明光沢、1mm以下の褐色		
		口縁部	SC4											風化色を含む	
348	土師器	肩付壺	A 2	—	回転ナデ	—	回転ナデ	良好	に赤い 褐色	に赤い 褐色	に赤い 褐色	に赤い 褐色	ごく微細な透明光沢色・黒褐色を含む		
		口縁部	SC4												
349	土師器	片口壺 ～側部	A 2	—	ナデ	—	ナデ	良好	淡黄色	赤褐色	1mm以下の黒褐色・灰白色、軟質赤色	1mm以下の黒褐色	内部に赤色		
		口縁部	SC4											粘をわずかに含む	
350	土師器	高台付壺 (黒土器)	A 2	—	—	—	回転ナデ	良好	に赤い 褐色	黒色	黒褐色	黒褐色	黒褐色をわずかに含む		
		側部～底部	SC4	V a			回転ナデ後方								
351	土師器	高台付壺 (黒土器)	A 2	—	回転ナデ	ヘラ切り	回転ナデ後方	良好	淡黄色	黑色	黑色	黑色	1mm以下の黒褐色を含む		
		側部～底部	SC4	V a			ヘラモガキ								
		B15Gr													
352	土師器	台付壺	A 2	—	既定	既定	ナデ	ヨコナデ	良好	淡黃褐色	淡黃褐色	1mm以下の透明光沢・黒色光沢を含む			
		口縁部	SC4	V a	28.1	20.0	ヨコナデ						3mm程度の範囲で、褐色光沢を含む		
		～底部	B15Gr												
353	土師器	側部	A 2	—	既定	既定	ヨコナデ	良好	明黄色	明黄色	明黄色	明黄色	4mm以下の黒褐色・初赤色・褐赤色		
		側部	SC4	27.3			ハケメ調整						4mm以下の黒褐色・初赤色・褐赤色		
		～側部	B15Gr				斜方向の工芸ナ						4mm以下の黒褐色・初赤色・褐赤色		
354	土師器	側部	A 2	—	既定	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	に赤い 褐色	に赤い 褐色	3mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色	3mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色	3mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
		～側部	SC4	V a	28.1	20.0	平行タタキ						に赤い褐色・角閃石・褐灰・透明		
		B15Gr		V a	22.9		ケズリ						褐色・黒褐色の帯を含む		
355	土師器	側部	A 2	—	既定	既定	ナデ	ヨコナデ	良好	明黄色	明黄色	明黄色	4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
		～側部	SC4	27.9			平行タタキ						4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
		B15Gr					ケズリ						4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
356	土師器	側部	A 2	—	既定	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	褐色	褐色	褐色	褐色	4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
		～側部	SC4	24.4			平行タタキ						4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
		B15Gr					ケズリ						4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
357	土師器	側部	A 2	—	既定	既定	ナデ	ヨコナデ	良好	明黄色	明黄色	明黄色	4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
		～側部	SC4	27.9			平行タタキ						4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
		B15Gr					ケズリ						4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
358	土師器	側部	A 2	—	既定	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	に赤い 褐色	に赤い 褐色	3mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色	3mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色	3mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
		～側部	SC4	18.6			平行タタキ						に赤い褐色・淡褐色・淡赤褐色		
		B15Gr					ケズリ						に赤い褐色・淡褐色・淡赤褐色		
359	土師器	側部	A 2	—	既定	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	に赤い 褐色	に赤い 褐色	4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色	4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色	4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
		～側部	SC4	18.6			ナデ						4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
		B15Gr					ナデ						4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
360	土師器	側部	A 2	—	既定	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	褐色	褐色	褐色	褐色	4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
		～側部	SC4	24.4			平行タタキ						4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
		B15Gr					ケズリ						4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
361	土師器	側部	A 2	—	既定	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	褐色	褐色	褐色	褐色	4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
		～側部	SC4	23.8			平行タタキ						4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
		B15Gr					ケズリ						4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
362	土師器	側部～底部	A 2	—	既定	既定	平行タタキ	良好	淡黄色	淡黄色	淡黄色	淡黄色	4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
		B15Gr					ケズリ						4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
363	土師器	底部	A 2	—	既定	柄子目タタキ	ナデ	良好	淡褐色	淡褐色	淡褐色	淡褐色	4mm以下の灰白色を含む		
		底部	SC4	—			平行タタキ						4mm以下の灰白色を含む		
364	土師器	底部	A 2	—	既定	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	褐色	褐色	淡黄色	淡黄色	4mm以下の灰白色を含む		
		～底部	SC4	—			ケズリの後ナデ						4mm以下の灰白色を含む		
		C15Gr					ケズリ						4mm以下の灰白色を含む		
365	土師器	底部	A 2	—	既定	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	褐色	褐色	褐色	褐色	4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
		～底部	SC4	13.4			ナデ						4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
366	土師器	底部	A 2	—	既定	ナデ	ナデ	良好	褐色	褐色	褐色	褐色	4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
		～底部	SC4	—			ナデ						4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
367	土師器	底部	A 2	—	既定	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	褐色	褐色	褐色	褐色	4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
		～底部	SC4	—			ナデ?						4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
368	土師器	底部	A 2	—	既定	ナデ?	ナデ?	良好	褐色	褐色	褐色	褐色	4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
		～底部	SC4	—			ナデ?						4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
373	土師器	底部	A 2	—	既定	6.2	1.7 ヘラ切り	回転ナデ	回転ナデ	良好	淡黄色	淡黄色	4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色		
		底部	SC5	—			ナデ?	ナデ?	回転ナデ	回転ナデ	良好	淡黄色	淡黄色	4mm以下の灰白色・透明光沢・褐灰色	
374	土師器	底部	A 2	—	既定	7.3	2.3 ナデ?	ナデ?	ナデ?	良好	淡褐色	淡褐色	4mm以下の灰褐色・褐色		
		底部	SC5	—			ナデ?	ナデ?	ナデ?	良好	淡褐色	淡褐色	4mm以下の灰褐色・褐色		
375	土師器	底部～底部	A 2	—	既定	6.4	6.4 ナデ?	回転ナデ	回転ナデ	良好	淡黄色	淡黄色	3mm以下の灰褐色・褐色		
		底部	SC5	—			ナデ?	ナデ?	ナデ?	良好	淡黄色	淡黄色	3mm以下の灰褐色・褐色		
376	土師器	底部	A 2	—	既定	6.3	6.3 ヘラ切り	回転ナデ	回転ナデ	良好	淡黄色	淡黄色	3mm以下の灰褐色・褐色		
		底部	SC5	—			ナデ?	ナデ?	ナデ?	良好	淡黄色	淡黄色	3mm以下の灰褐色・褐色		
377	土師器	底部～底部	A 2	—	既定	6.2	6.2 ナデ?	回転ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐色	2mm以下の灰褐色を少す。微細な透明		
		底部	SC5	—			ナデ?	ナデ?	ナデ?	良好	褐色	褐色	光沢を含む		
378	土師器	高台付壺	A 2	—	既定	13.05	6.3 回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	良好	淡黄色	淡黄色	1mm以下の灰褐色を含む	口縁部	
		底部	SC5	—			風化気味	風化気味	風化気味				1mm以下の灰褐色を含む	口縁部	
														近・高台内面に付着物	

第21表 古代土師器観察表3

遺物 番号	種別	基 標 部 位	出土 地點	層位 (1層 底部 最高 部)	法線 (cm)	手法・調節・支桿はか み	焼成	色 調			胎土の特徴	備 考		
								外 面	内 面	外 面	内 面			
379	土師器	高台付塊 底部	A 2 SC5	—	7.7 4.1	ヘア切り後ナデ、ナデ、回転ナデ	良好	浅黃褐色 浅黃褐色	良好	5 mm程度の軟質色色料をこぐわすか。 2 mm以下の中間色を含む				
380	土師器	高台付塊 底部	A 2 SC5	—	標準	回転ナデ	良好	に高い 黄褐色	に高い 黄褐色	ごく微細な透明光沢感。 3 mm以下の黒				
381	土師器	高台付塊 底部	A 2 SC5	—	7.1 7.6 2.5	ナデナラ切り 回転ナデ、ナデ、 ヘア切り後ナデ	良好	褐色 黄褐色	褐色 黄褐色	灰・黒褐色を含む 1 mm以下の中間色・軟質色料を少量				
382	土師器	高台付塊 底部	A 2 SC5 V a	—	標準 18.2	回転ナデ 風呂切味	良好	浅黃褐色 浅黃褐色	良好	2 mm以下の中間色・灰白色・軟質色 料を含む				
383	土師器	昇またき塊 口縁部	A 2 SC5	—	—	回転ナデ 風化	良好	灰白色 風化	灰白色 風化	微細な黒褐色・淡黄色を含む ごく微細な透明光沢感。 3 mm以下の灰	外面: 黄褐色			
384	土師器	表裏 口縁部 ～脚部	A 2 SC5	—	標準 13.8	ヨコナデ 椅子目タキ	良好	に高い 黄褐色	に高い 黄褐色	2 mm以下の中間光沢・黒褐色・脚回色、 赤褐色、2 mm以下の褐色を含む	外面: スス 付着			
385	土師器	表裏 脚	A 3 SC6	—	—	ヨコナデ	良好	明黄褐色 明黄褐色	明黄褐色 明黄褐色	3 mm以下の中間光沢・黒褐色・脚回色、 灰白色を多く含む				
386	土師器	表裏 脚部	A 3 SC6	—	—	椅子目タキ	ナデ	良好	浅黃褐色 褐色	に高い 褐色	2 mm以下の透明光沢・黑色光沢・黑色 色料を多く含む			
387	土師器	布目土器 口縁部	A 2 SC11	—	2.7	繩方向のナデ?	布目痕 ナデ	良好	に高い 褐色	褐色	2 mm以下に高い透明・脚回色を含む			
389	土師器	高台付塊 高台付塊 脚	A 2 SC12	—	6.5 1.5	回転ナデ 布目 痕(後ナデ?)	良好	浅黄色	浅黄色	微細な透明光沢をわずかに含む				
390	土師器	高台付塊 底部	A 2 SC12	—	5.0	繩方向のナデ? 繩方向のナデ?	良好	に高い 黄褐色	に高い 黄褐色	1 mm以下の脚回色・黒褐色・黑色光、 微細な透明光沢を含む				
391	須恵器	表裏 口縁部	A 2 SC12	—	11.8	2.6	回転ナデ	回転ナデ	脚回色 灰黃色	灰黃色	3 mm以下の中間色をわざかに含む			
392	土師器	高台付塊 口縁部 ～底部	A 2 SC13	—	標準 14.9	標準 7.65	ナデの後一部繩 方向のナデ	回転ナデ、回転ナデ、回転ナデ ナデの後一部繩 方向のナデ	良好	に高い 黄褐色	に低い 黄褐色	2 mm以下の脚回色・黑色光沢。4 mmの大 内外面: 黑		
393	土師器	表裏 脚	A 2 SC13	—	標準	ヨコナデ 繩方向のナデ 調整	良好	脚回方向のナデ ナデ	脚回方向のナデ ナデ	に高い 褐色	2 mm以下の脚回色・褐色を少量、 褐色	1 mm以下の透明光沢をわざかに含む		
394	土師器	表裏 脚部	SC14 V a	—	9.2	2.5	2.0	ヘア切りの後ナ デ	回転ナデ	良好	褐色	1 mm以下の脚回色・脚灰色・軟質赤色 料を含む		
395	土師器	表裏 ～底部	SC14 H12Ge	—	11.7	8.3	1.7	ヘア切りの後ナ デ	回転ナデ	良好	に高い 褐色	1 mm以下の灰白色・黒褐色・軟質赤色 料を少量含む		
396	土師器	高台付塊 (黒色土器) 口縁部 ～底部	A 3 SC14	—	標準 標準 標準 標準	標準 標準 標準 標準	回転ナデの後 斜め方向のミガ ガキ、ナデ、ヘ リ 少しきり後ナデ、 一部風化気味	斜め方向のミガ ガキ、ナデ、ヘ リ 少しきり後ナデ、 一部風化気味	良好	浅黃褐色 黑色	2 mm以下の灰白色を少し。微細な 透明光沢が・浅褐色。	ごく微細な透明光沢・浅褐色。	外面: 黑 部: 黑化	
397	土師器	表裏 ～脚部	A 3 SC14	—	標準	ナデ	ナデ	脚回色	良好	黑色	脚回色	2 mm以下の脚回色・脚灰色		
398	土師器	表裏 ～底部	A 3 SC14 N H12Ge	—	標準	繩方向のナデ? ナデ	良好	に高い 黄褐色	に高い 黄褐色	1 mm以下の脚回色・灰白色・透明光 沢を少し。微細な灰白色を少し含む				
399	土師器	表裏 底部	A 3 SC14 H12Ge M a	—	丁寧なナデ	ケズリ	良好	褐色	脚回色	2 mm以下の灰白色・透明光沢・黑色光 沢を多く含む				
400	須恵器	表裏 ～脚部	A 3 SC14	—	標準	ヨコナデ 椅子目タキ	良好	灰褐色 脚回色	灰褐色 脚回色	3 mm程度の所白色・脚灰色をわずか、 1 mm以下の所白色、脚灰色を多く含む				
401	須恵器	表裏 脚部	A 3 SC14 N H12Ge	—	標準	椅子目タキ	同心円状当其 痕	良好	に高い 黄褐色	に高い 黄褐色	3 mm以下の浅黃褐色・黒褐色・灰白色 料をわずか。脚灰色・黄褐色を含む			
404	須恵器	表裏 脚部	A 2 SC14 H12Ge M a	—	標準	椅子目タキ	ナデ	精良	灰褐色	2 mm以下の灰白色・1 mm以下の黒色 料を少量含む				
405	布紋土器	口縁部 ～底部	A 2 地上 5	—	ナデ	布目痕	良好	褐色	褐色	6 mm以下の脚回色・褐色を多。黑 色光沢をわずかに含む				
406	土師器	高台付塊 (黒色土器) 口縁部 ～底部	B 1 SC21	—	13.4	6.7	6.1	回転ナデ 方向のヘラミガ ギ	回転ナデの後 方向のヘラミガ ギ	良好	褐色	微細な褐色・褐色光沢。1 mm以下の黑 色光沢をわずか。微細なガラス質粒 を含む		
407	土師器	高台付塊 (黒色土器) ～底部	B 1 SC21	—	13.7	6.6	6.3	回転ナデ ナデ	回転ナデの後 ナデ	良好	褐色	微細な褐色・褐色光沢をわずかに含む		
408	土師器	高台付塊 (黒色土器) 口縁部 ～底部	B 1 SC21	—	13.0	6.7	6.3	回転ナデ ナデ	回転ナデの後 ナデ、ミガナデ	良好	褐色	1 mm以下の脚回色・黑色・灰白色を含む 外側: 部分 的に黒化		

第 22 表 古代土師器観察表 4

番号	種別	基 種 部 位	地點	剖位	法算 (cm)	(口徑 基部 邪部)	手法・調整・又種はか			焼成	色 調 外 面 内 面	埴土の特徴	備 考
							外 面	内 面					
409	土師器	高台付塊	B 1	—	13.2	6.9	6.3	回転ナデ	回転ナデの後ミ ガキ、ナデ?	良好	褐色	黒色	1 mm以下の灰白色・灰褐色・明褐色 をわずかに含む
(黒土上)	～底部	U3Gr	V a										
410	土師器	高台付塊	B 1	—	12.98	6.7	6.2	回転ナデ、ナデ、 回転ナデの後標、 ヘラ切り後ナデ	斜方向のミガキ	良好	褐色	黒褐色	豊かな透光明沢。2 mm以下の黒褐色・ 灰褐色・軟質赤色・透明光沢、1 mm以 下の黒褐色が特有
(黒土上)	～底部	SZ1											
411	土師器	高台付塊	B 1	—	13.3	6.65	6.23	回転ナデ、ナデ、 回転ナデの後標、 ヘラ切り後ナデ	斜方向のミガキ	良好	明褐色	黄	ごく豊かな透光明沢。3 mm以下の 黒褐色、灰褐色、軟質赤色、透明光沢、1 mm以 下の黒褐色が特有
(黒土上)	～底部	SZ1	V a										
412	土師器	高台付塊	B 1	—	13.25	7.0	6.0	回転ナデ、ナデ、 回転ナデの後標、 ヘラ切り後ナデ	斜方向のミガキ	良好	明褐色	黄	1 mm以下の軟質赤色粒子、黒褐色 を少量含む
(黒土上)	～底部	SZ1	V a										
413	土師器	高台付塊	B 1	—	13.5	6.9	6.1	回転ナデ、ナデ、 回転ナデの後標、 ヘラ切り後ナデ	斜方向のミガキ	良好	黄褐色	黒褐色	豊かな明褐色・灰白色・褐色を少量 含む
(黒土上)	～底部	SZ1											
414	土師器	高台付塊	B 1	—	13.75	—	—	回転ナデ	ガキ、ミガキの 後ナデ	良好	褐色	黒	豊かな赤色・灰白色をわずかに含む
(黒土上)	～底部	SZ1											
415	土師器	高台付塊	B 1	—	12.75	—	—	回転ナデ	斜、横方向の ミガキ	良好	褐色	黒色	豊かな明褐色・灰白色・褐色を少量 含む
(黒土上)	～底部	SZ1											
416	土師器	高台付塊	B 1	—	13.0	—	—	回転ナデ	斜方向のヘラミ ガキ、工具ナデ	良好	明褐色	黒	豊かな赤褐色・灰白色・褐色を少量 含む
(黑土上)	～底部	SZ1											
417	土師器	高台付塊	B 1	—	13.68	—	—	回転ナデ	回転ナデの後標、 斜方向のミガキ	良好	明褐色	黒色	ごく豊かな透光明沢、1 mm以下の灰 褐色、黑色、軟質赤色、浅黒褐色 を含む
(黒土上)	～底部	SZ1											
418	土師器	高台付塊	B 1	—	14.15	—	—	回転ナデ	回転ナデの後標、 斜方向のミガキ	良好	明褐色	黒色	ごく豊かな透光明沢、2 mm以下の灰 褐色、灰白色、軟質赤色、淡褐色。 薄削小槽を含む
(黒土上)	～底部	SZ1											
419	土師器	高台付塊	B 1	—	13.25	—	—	回転ナデ	横方向のヘラミ ガキ、ミガキ	良好	明褐色	黒褐色	豊かな明褐色・灰白色をわずかに 含む
(黒土上)	～底部	SZ1											
420	土師器	高台付塊	B 1	—	13.35	—	—	回転ナデ	横方向のヘラミ ガキ、ミガキ	良好	褐色	黒褐色	豊かな赤褐色・灰白、灰褐色を少量 含む
(黒土上)	～底部	SZ1											
421	土師器	高台付塊	B 1	—	13.7	4.9	4.9	回転ナデ	回転ナデの後標、 斜方向のミガキ	良好	明褐色	黒色	2 mm以下の軟質赤色・黒褐色・淡い灰 褐色を少量含む
(黒土上)	～底部	SZ1											
422	土師器	高台付塊	B 1	—	13.65	5.1	—	回転ナデ	回転ナデの後標、 斜方向のミガキ	良好	褐色	黒色	2 mm以下の軟質赤色・灰白色・黒褐色 を含む
(黒土上)	～底部	SZ1	IV										
423	土師器	高台付塊	B 1	—	13.4	—	—	回転ナデ	回転ナデの後標、 斜方向のミガキ	良好	明褐色	黒色	ごく豊かな透光明沢。1 mm以下の軟 質赤色・黒褐色・褐灰色・灰白色を 含む
(黒土上)	～底部	SZ1	V a										
424	土師器	高台付塊	B 1	—	16.7	—	—	回転ナデ	回転ナデの後標、 斜方向のミガキ	良好	褐色	黒色	ごく豊かな透光明沢。1 mm以下の軟 質赤色・黒褐色・褐灰色・灰白色、 淡褐色を含む
(黒土上)	～底部	SZ1	V a										
425	土師器	高台付塊	B 1	—	26.9	—	—	ヨコナデ	ヨコナデ 平行タキ	良好	褐色	黒色	2 mm以下の灰白色・黒褐色・暗褐色、 灰白色を多く含む
(黒土上)	～底部	SZ1	V a										
426	土師器	高台付塊	A 2	—	7.05	4.7	—	回転ナデ	回転ナデ	良好	淡褐色	淡褐色	3 mm以下の灰白色・暗褐色・暗灰色、 黑色光沢を多く含む
(黒土上)	～底部	B15Gr	V a										
427	土師器	高台付塊	A 2	—	12.75	6.8	4.0	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	良好	淡褐色	褐色	2 mm以下の暗褐色・灰白色、 褐色を含む
(黒土上)	～底部	D13Gr	V a										
428	土師器	高台付塊	A 2	—	11.9	6.8	4.6	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	良好	褐色	黒褐色	2 mm以下の暗褐色、豊かな透光明沢 を含む
(黒土上)	～底部	B11+12Gr	V a										
429	土師器	高台付塊	A 2	—	11.75	6.8	4.6	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	良好	褐色	褐色	3 mm以下の赤褐色・褐色を多く含む、 1 mm以下の白色をわずかに含む
(黒土上)	～底部	B15Gr	V a										
430	土師器	高台付塊	A 2	—	7.7	—	—	回転ナデ	ヘラ切り	良好	淡褐色	黒褐色	3 mm以下の暗褐色・灰褐色、 暗褐色を多く含む
(黒土上)	～底部	D13Gr	V a										
431	土師器	高台付塊	A 3	N	11.9	6.3	4.3	回転ナデ	ヘラ切り後ナデ	良好	褐色	褐色	1 mm以下の黒褐色・灰白色、 暗褐色を含む
(黒土上)	～底部	J10Gr											

第23表 古代土師器観察表5

遺物 番号	種別 基 標 部 位	出土 地點	層位 (付)	法線 (cm)		手法・調査・文様ほか	地成	色 調			胎土の特徴	考		
				直	横			外 面	内 面	外 面	内 面			
432	土師器	口縁部 ～底部	A 2 B15Gr	V a	規定	規定	回転ナデ	回転ナデ	良好	浅黃褐色	黃褐色	2 mm以下の黒褐色・灰白色・軟質赤色 粒少量、黑色光沢・透明光沢を多く含む		
433	土師器	口縁部 ～底部	A 2 E12Gr	V a	規定	規定	回転ナデ後ナデ	回転ナデの後ナデ	良好	に高い 黄褐色	褐色	微細な赤褐色・褐色色をわずか、2 mmの大範囲をこくわすに含む		
434	土師器	口縁部 ～底部	A 2 D13Gr	V a	規定	規定	回転ナデ	回転ナデ	良好	に高い 黄褐色	褐色	4 mm以下の大範囲・褐色・黒褐色光沢、 軟質赤褐色・褐色・褐色色粒・に低い 灰色・透明光沢・淡黃褐色を含む		
435	土師器	口縁部 ～底部	B 1 + 2 S4-T3Gr	V a	規定	5.6	4.0	回転ナデ	回転ナデ	良好	黄褐色	褐色	2 mm以下の灰白色・褐色色を多く、 微細な透明光沢を少含む	
436	土師器	口縁部 ～底部	A 2 B15+D14 E14+15Gr	V a	規定	5.55	4.1	ヘア切り後ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐色	2 mm以下の軟質赤褐色をわずか、1 mm 以下の黒褐色・灰・灰白色色を含む 外面：暗褐色	
437	土師器	口縁部 ～底部	A 3 E10Gr	V a	6.6		回転ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐色	微細な褐色・褐色・灰光沢を多く含 む		
438	土師器	口縁部 ～底部	A 2 B15Gr	V a	5.2		ヘア切り	回転ナデ	良好	浅黃褐色	褐色	1 mm程度の褐色色をわずか、微細な 赤褐色・褐色色を少含む		
439	土師器	口縁部 ～底部	A 2 B15Gr	V a	11.5	6.4	4.0	回転ナデ後斜方 向の工具ナデ	回転ナデ	良好	浅黃褐色	黃褐色	微細な褐色・黒褐色・灰白色光沢、3 mm以下の軟 質色料・黒褐色・灰白色、2 mm以 下の黒褐色光沢・褐色色を含む	
440	土師器	口縁部 ～底部	A 2 E12Gr	V a	6.6	2.4	ヘア切り後ナデ	回転ナデ	良好	黄褐色	褐色	1 mm以下の透明光沢を少量、軟質赤 色をわずかに含む		
441	土師器	口縁部 ～底部	A 2 B15Gr	V a	6.1		回転ナデ	回転ナデ	良好	浅黃褐色	浅黃褐色	2 mm以下の細赤褐色・細褐色・軟質赤 色料を少含む		
442	土師器	口縁部 ～底部	A 3 B10Gr	N	6.6		回転ナデ ヘア切り後ナデ	回転ナデ	良好	に高い 黄褐色	褐色	微細な赤褐色・褐色色をわずかに含 む		
443	土師器	口縁部 ～底部	A 2 C15Gr	V a	6.1		回転ナデ ヘア切り後ナデ	回転ナデ	良好	に高い 黄褐色	褐色	2 mm以下の黒褐色・に高い赤褐色・灰 褐色・黒褐色光沢・灰白色、軟質赤 色を含む		
444	土師器	口縁部 ～底部	A 2 D12Gr	V a	7.2		ヘア切り	回転ナデ	良好	褐色	黄褐色	微細な褐色色をわずかに含む		
445	土師器	口縁部 ～底部	A 3 E10Gr	V a	11.0	5.8	4.8	回転ナデ ヘア切り	回転ナデ	良好	浅黃褐色	浅黃褐色	1 mm以下の細灰褐色・明褐色色、微細な 透明光沢を含む	
446	土師器	口縁部 ～底部	A 3 H11Gr	V a	12.2	4.8	4.2	斜方の工具ナデ ヘア切り	回転ナデ	良好	褐色	褐色	微細な褐色・灰白色を少含む	
447	土師器	口縁部 ～底部	A 2 C14Gr	V a	12.4	6.2	4.4	回転ナデ ヘア切り	回転ナデ	良好	浅黃褐色	浅黃褐色	4 mmの褐色色をわずか、微細な透明 光沢、2 mm以下の軟質赤褐色・黒褐色 光沢・褐色色・灰褐色色を含む	
448	土師器	口縁部 ～底部	A 2 B15Gr SC4	V a	12.6	5.8	4.7	回転ナデ ヘア切り	回転ナデ	良好	褐色	褐色	3 mm以下の黒褐色・灰白色をこくわ ずか、1 mm以下の赤褐色・黒褐色・褐 灰褐色を少含む	
449	土師器	口縁部 ～底部	B 1 T4Gr	N	規定	5.0	5.0	回転ナデ ヘア切り後ナデ	回転ナデ	良好	に高い 黄褐色	浅黃褐色	1 mm以下の所白色・褐色・初色・褐 灰褐色を少含む	
450	土師器	口縁部 ～底部	B 2 U2+T4Gr	V a	12.0	5.9	4.55	ヘア切り	回転ナデ	良好	浅黃褐色	浅黃褐色	1 mm以下の所褐色・灰白色を多く含 み、褐色色・明褐色色、微細な透明光 沢を含む	
451	土師器	口縁部 ～底部	A 2 B16Gr	V a	12.4	6.2	4.7	回転ナデ ヘア切り	回転ナデ	良好	褐色	褐色	1 mm以下の褐色・褐色色をわずかに 含む	
452	土師器	口縁部 ～底部	A 2 C14Gr	V a	12.2	6.1	5.0	回転ナデ ヘア切り	回転ナデ	良好	褐色	浅黃褐色	1 mm以下の黒褐色・灰白色・明褐色色 を含む	
453	土師器	口縁部 ～底部	A 2 D13Gr	V a	6.1		回転ナデ ヘア切り	回転ナデ	良好	浅黃褐色	褐色	微細な透明光沢が多く、1 mm以下の 褐色色料をわずかに含む		
454	土師器	口縁部 ～底部	A 2 E12Gr	V a	規定	6.1	6.1	回転ナデ後削り 工具調整、ヘア ヘア削り後ナデ	回転ナデ	良好	に高い 黄褐色	褐色	1 mm以下の所白色・褐色・褐色色・透 明光沢を多く含む	
455	土師器	口縁部 ～底部	A 2 E15Gr	V a	12.1	6.6	4.8	回転ナデ ヘア切り後ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐色	1 mm以下の黒褐色・褐色・灰白色 を含む	
456	土師器	口縁部 ～底部	A 2 B15Gr SC4	V a	13.0	7.2	5.1	回転ナデ ヘア切り後ナデ	回転ナデの後ナ デ	良好	に高い 褐色	褐色	3 mm以下の所白色・明褐色色、1 mm以 下の褐色色を含むか、2 mm以下の明 褐色・褐色色・灰白色を含む	
457	土師器	口縁部 ～底部	A 3 H12Gr	V a	17.0	7.6	5.7	回転ナデ ヘア切り後ナデ	回転ナデ	良好	に高い 黄褐色	褐色	2 mm以下の褐色色・灰白色光沢・透明 光沢を少含む	

第 24 表 古代土師器観察表 6

高さ	種類	基部	断面	剖位	法線(10)		手法・調整・又種類		焼成	色調			施土の特徴	備考	
					上	下	底部	都部		外	内	外			
458	土師器	杯	A 2	V a	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 相色	に赤い 黄相色	ごく微細な透明光沢、2mm以下の黒 褐色・に赤い褐色・淡黃色・褐灰色・ 淡褐色に含む			
		体部・底部	D14Gr		6.8		ヘラ切り								
459	土師器	杯	A 2	V a	既定	5.7	回転ナデ	回転ナデ	良好	浅黃相色	相色	ごく微細な透明光沢、3mm以下の赤 褐色・黒褐色・灰白色を含む			
		体部・底部	C12Gr				ヘラ切り								
460	土師器	杯	A 2	V a	既定	6.7	3.0	回転ナデ	回転ナデ	良好	浅黃色	浅褐色	2mm以下の赤褐色を含むか、1mm 以下の黒褐色・灰白色を含む		
		体部・底部	(D-2)3G				ヘラ切り後ナデ								
461	土師器	杯	A 3	V a	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	相色	浅黃相色	2mm以下の透明光沢を少量含む			
		体部・底部	H1Gr		6.0										
462	土師器	杯	A 2	V a	既定	6.7	4.2	回転ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 相色	相色	2mm以下の黒褐色・褐色・灰白色 を多く含む黒色の光沢もわずかに含 む		
		口部	B16Gr	—	10.8		ヘラ切り								
463	土師器	杯	A 2	V a	既定	6.5	5.0	回転ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 相色	相色	2mm~1mmの褐・褐灰色・白色不透明 料を含む		
		口部	D13Gr	V a	12.5		ヘラ切り								
464	土師器	杯	B 1	N	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	相色	相色	1mm以下の灰褐色・褐色・黑褐色を わずかに含む			
		口部	54	V a	12.35	6.8	5.0	ヘラ切り後ナデ							
465	土師器	杯	A 2	V a	既定	既定	既定	回転ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 相色	相色	1mm以下の赤褐色・褐灰色を多く含 む		
		口部	D13Gr		13.9	7.1	4.5	ヘラ切り							
466	土師器	杯	B 1	V a	既定	既定	既定	回転ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 相色	相色	1mm以下の褐灰色・灰白色をわずか に含む		
		口部	T3+4Gr	V a	12.5	6.5	4.9	ヘラ切り後ナデ							
467	土師器	杯	A 2	V a	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	相色	相色	2mm以下の灰白色・褐灰色・灰白色 を少額含む微細な透明光沢 料を少額含む			
		口部	C14Gr	V a	13.1	6.5	5.0	ヘラ切り後ナデ							
468	土師器	杯	A 2	V a	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	相色	相色	ごく微細な透明光沢・淡黃色、2mm 以下の黒褐色・灰白色を含む			
		体部・底部	C16Gr		6.5										
469	土師器	杯	A 2	V a	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	浅黃色	浅黃色	ごく微細な透明光沢・灰白色を 含む			
		体部・底部	D11Gr		5.95		ヘラ切り								
470	土師器	杯	A 2	V a	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	浅黃色	浅黃色	ごく微細な透明光沢を含む			
		底部	R18Gr		6.2		ヘラ切り後ナデ								
471	土師器	杯	A 2	V a	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 相色	相色	2mm以下の赤褐色・褐灰色・灰白色 を少額含む			
		底部	D12Gr		4.4		ヘラ切り後ナデ								
472	土師器	杯	A 2	V a	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	浅黃色	浅黃色	1mm以下の褐灰色・褐灰色・灰白色、 灰白色を含む			
		底部	B15Gr		5.6	2.3	ヘラ切り後ナデ								
473	土師器	杯	A 2	V a	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	浅黃色	浅黃色	1mm以下の黒褐色を含む微細な透明 光沢を含む			
		底部	C16Gr		6.2	2.6	ヘラ切り後ナデ								
474	土師器	杯	A 2	V a	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 相色	相色	微細な褐色・1mm以下の褐色・褐 色を含む			
		底部	C15Gr		6.2		ヘラ切り								
475	土師器	杯	A 2	V a	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	浅黃色	浅黃色	微細な灰白色・褐色を含むかに含む			
		底部	C17Gr		6.0		ヘラ切り								
476	土師器	杯	A 2	V a	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 相色	相色	3mm以下の暗褐色・黒褐色を含む に赤褐色・褐灰色。4mm以上の 黒褐色・透明白色を含む			
		体部・底部	D13Gr	V a	8.2		ヘラ切り後ナデ								
477	土師器	杯	A 2	V a	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	相色	黃褐色	に赤い 相色	2mm~1mmの明黄色・淡褐色を含む か、微細な透明光沢・淡褐色を含む		
		体部・底部	D14Gr	V a	7.4		ヘラ切り								
478	土師器	杯	A 2	V a	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	浅黃相色	相色	3mm以下の軟質化色、1mm以下の 褐色・黑色を含む			
		底部	C14Gr	V a	8.3										
479	土師器	杯	A 1	V b	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	明褐色	明褐色	2mm以下の軟質化色、1mm以下の黒 褐色・黑色を含む	底部: 黑褐色		
		底部	D11Gr		6.3		ヘラ切り後ナデ								
480	土師器	杯	B 1	V a	既定		回転ナデ	回転ナデの塊	良好	明褐色	明褐色	1mm以下の黒褐色・白色、軟質化色を含 む			
		底部	U4Gr		5.8		ヘラ切り後ナデ	部工痕あり							
481	土師器	杯	B 2	V a	既定		回転ナデ	回転ナデの塊	良好	相色	相色	1mm以下の軟質化色・微細な透明光 沢を含むかに含む			
		底部	S8Gr		7.3		ヘラ切り後ナデ	部工痕あり							
482	土師器	杯	A 2	V a	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	相色	相色	1mm以下の軟質化色・灰白色・黑褐色 を含む			
		底部	Tr		6.9		ヘラ切り後ナデ								
483	土師器	杯	B 1	V a	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 相色	相色	6mmの赤褐色を含むかに含む 2mm以下の褐色・相色・相色・黑色・ 透明光沢を多く含む	外側: 一部 スス付着		
		底部	E14Gr	V a	6.6		ヘラ切り								
484	土師器	杯	A 3	V a	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	浅黃相色	浅黃相色	5mmの赤褐色を含むかに含む 2mm以下の褐色・相色・相色・黑色・ 透明光沢を多く含む			
		体部・底部	H12Gr	V a	9. 5	5.05	2.7	回転ナデ	回転ナデ						
485	土師器	杯	A 2	V a	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	に赤い 相色	相色	1mm以下の赤褐色・褐灰色・ 透明光沢を多く含む微細な褐灰色 民白色を少量含む			
		底部	B19Gr	V a	8.7		ヘラ切り後ナデ								
486	土師器	杯	A 2	V a	既定		回転ナデ	回転ナデ	良好	浅黃相色	浅黃相色	1mm以下の透明光沢・黑褐色・褐 色を含むかに含む			
		底部	D13Gr	V a	10.7	6.8	2.5	ヘラ切り後ナデ							

第25表 古代土師器観察表7

遺物 番号	種別 基 標 部 位	出土 地點	層位 (付)	法線 (cm)			手法・調節・支桿ほか	焼成	色 調			胎土の特徴	考	
				内	外	面			外	内	面			
488	土師器	口縁部 ～底部	A 3 H12Gr	N 9.9	6.0	2.4	回転ナデ ヘア切り	回転ナデ	良好	に高い 黄褐色 褐色	褐色	1 mm以下の細灰化色。褐色を多く。 1 mm以下の透明光沢をわずかに含む		
489	土師器	口縁部 ～底部	A 3 E14Gr	V a V a	9.4	4.5	3.2	回転ナデ ヘア切り後ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐色	4 mm以下の細灰化色。1 mm以下の黒色・ 灰褐色を含む	
490	土師器	口縁部 ～底部	A 2 E16Gr	V a V a	7.0	4.1	2.7	回転ナデ ヘア切り後ナデ	回転ナデ	良好	浅黄褐色	褐色	2 mm以下の灰白色・黒褐色をわずか、 微かな透明光沢を少量含む	
491	土師器	口縁部 ～底部	A 2 B18Gr	V a V a	13.1	9.9	2.4	回転ナデ ヘア切り	回転ナデ	良好	に高い 褐色	褐色	ごく微細な透明光沢。1 mm以下の黒 褐色。黑褐色光沢を含む	
492	土師器	口縁部 ～底部	A 2 B14Gr	V a V a	12.8	7.9	5.8	回転ナデ ヘア切り後ナデ	回転ナデ	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	2 mm以下の軟質灰色・透明光沢・黒褐色・ 灰褐色を含む	
493	土師器	口縁部 ～底部	A 2 D11-12 SC1	V a V a	13.3	7.8	6.1	回転ナデ ヘア切り	回転ナデ	良好	褐色	褐色	ごく微細な透明光沢。2 mm以下の軟 質灰色・黑褐色・灰褐色・灰白色を含む	
494	土師器	口縁部 ～底部	D11-12 14Gr	V a V a	12.4	7.4	2.4	回転ナデ ヘア切り後ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐色	2 mm以下の細灰化色をごくわずかに含 む	
495	土師器	高台付塊 ～底部	A 2 B15Gr	V a V a	12.95	—	—	回転ナデ ヘア切り	回転ナデ	良好	褐色	褐色	ごく微細な透明光沢。2 mm以下の軟 質灰色・黑褐色・灰褐色・灰白色を含む	
496	土師器	高台付塊 ～底部	A 2 E12Gr	V a V a	7.9	—	—	回転ナデ・ナデ ヘア切り後ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐色	3 mm以下の軟質灰色をごくわずか、1 mm 以下の軟質灰色・褐色・暗赤褐色・黒褐色・ 灰褐色・透明光沢を含む	
497	土師器	高台付塊 ～底部	A 2 E11Gr	V a V a	8.3	—	—	回転ナデ・ナデ ヘア切り	回転ナデ後方 ナデ	良好	明褐色	褐色	に高い 明褐色	1 mm以下の褐色・暗褐色・黑褐色を含む
498	土師器	高台付塊 ～底部	B 1 E12Gr	V a V a	8.1	—	—	回転ナデ・ナデ ヘア切り	回転ナデ後工具 ナデ	良好	明褐色	褐色	に高い ごく微細な透明光沢。1 mm以下の灰 褐色・白褐色・黑褐色・褐色光沢を含む	
499	土師器	高台付塊 ～底部	A 2 E13-14Gr	V a V a	8.2	—	—	回転ナデ・ナデ ヘア切り	回転ナデ後工具 ナデ	良好	褐色	褐色	1 mm以下の褐色・暗褐色・微細な灰褐色・ 透明光沢・暗褐色光沢	
500	土師器	高台付塊 ～底部	A 2 D15-E15Gr	V a V a	7.1	—	—	回転ナデ ヘア切り後ナデ	回転ナデ 風化ぎみ	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	微細な透明光沢。2 mm以下の灰白・ 褐色・褐色光沢を含む	
501	土師器	高台付塊 ～底部	A 3 F10Gr	V a V a	7.2	—	—	回転ナデ・ナデ ヘア切り	回転ナデ	良好	淡黄色	淡黄色	微細な透明光沢を含む	
502	土師器	高台付塊 ～底部	A 2 E17-18Gr	V a V a	4.2	—	—	回転ナデ・ナデ ヘア切り後ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐色	2 mm以下の軟質赤・灰褐色・黒褐色・ 透明光沢を含む	
503	土師器	高台付塊 ～底部	A 2 B15Gr	V a V a	7.0	—	—	回転ナデ・ナデ ヘア切り後ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐色	1 mm以下の褐色・軟質赤・透明光 沢を含む	
504	土師器	高台付塊 ～底部	A 2 D12Gr	V a V a	7.44	—	—	回転ナデ・ナデ ヘア切り	回転ナデ	良好	浅黄褐色	褐色	2 mm以下の褐色・2 mm以下の灰白色・ に高い・褐色を含む	
505	土師器	高台付塊 ～底部	A 3 J10Gr	V a V a	7.4	—	—	回転ナデ ヘア切り後ナデ	回転ナデ	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	微細な褐色・褐色光沢を含む	
506	土師器	高台付塊 ～底部	B 1 T3Gr	V a V a	7.8	—	—	回転ナデ ヘア切り後ナデ	回転ナデ 風化気味	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	2 mm以下の灰白色・黒褐色死灰・軟質 赤褐色・褐色・ごく微細な透明光沢 を含む	
507	土師器	高台付塊 ～底部	A 3 H11Gr	V a V a	8.2	—	—	回転ナデ・ナデ ヘア切り	回転ナデ 風化著しい	良好	褐色	浅黄褐色	2 mm以下の灰褐色・透明光沢・軟質 赤色を少量含む	
508	土師器	高台付塊 ～底部	A 2 C1Gr	V a 上	15.7	8.7	6.7	回転ナデ・ナデ ヘア切り後ナデ	横方 向のミガキ	良好	浅黄色	浅黄色	3 mm以下の軟質色をごくわずか、1 mm以 下の灰白色・暗褐色・褐褐色を含む	外面：部分 的に黒化 SC1周辺
509	土師器	高台付塊 ～底部	A 3 H1-13Gr	V a V a	—	—	—	回転ナデ・ナデ 風化気味	回転ナデ・一部 離方向のナデ?	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	微細な黒褐色・褐褐色を含む	
510	土師器	高台付塊 ～底部	A 3 H2-10Gr	V a V a	—	—	—	回転ナデ 一部風化気味	回転ナデ 風化著しい	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	2 mm程度の褐色・褐褐色を含む	
511	土師器	高台付塊 ～底部	A 2 D12Gr	V a V a	7.7	5.43	—	回転ナデ・ナデ ヘア切り	回転ナデ 風化著しい	良好	に高い 黃褐色	褐色	ごく微細な透明光沢。1 mm以下の軟質赤 褐色・褐色・暗褐色光沢・褐褐色・ 灰褐色光沢を含む	
512	土師器	高台付塊 ～底部	A 2 D13Gr	V a V a	7.6	—	—	回転ナデ・ナデ ヘア切り後ナデ	エガキ	良好	褐色	褐色	褐色を含む	
513	土師器	高台付塊 ～底部	A 2 C13Gr	V a V a	8.2	—	—	回転ナデ?	回転ナデ ヘア切り後ナデ	良好	に高い 浅黄褐色	褐色	1 mm以下の灰褐色・暗褐色・褐褐色・ 灰褐色光沢を含む	

第 26 表 古代土師器観察表 8

高さ	種別	基 種	馬 上	法算 (cm)	手法・調整・又種はか	被成	色 調			施土の特徴	備考	
							外 面	内 面	外 面			
514	土師器	高台付塊 底部	A 3 H12Gr	IV 8.7	都定 ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良好	に高い 青褐色 褐色	に低い 灰白色 褐色	1 mm以下の浅い灰白色・灰白色、透明 光沢・暗褐色・深褐色・赤褐色・秋 青色を含む		
515	土師器	高台付塊 底部・瓶部	A 2 C14Gr	V a	7.35	回転ナデ ヘラ切り	回転ナデ	良好	に高い 青褐色 褐色	に低い 灰褐色 褐色	1 mm以下の黒褐色を少量含む	
516	土師器	高台付塊 底部	A 2 B15Gr	V a	7.4	都定 ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良好	浅黄色	浅黄色	3 mm以下の軟質灰色・暗褐色・暗灰 褐色・深褐色を含む	
517	土師器	高台付塊 底部	A 2 B15Gr	V a	8.0	都定 ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	3 mmの青色調・2 mmの軟質灰色を含 くわずか、微細な明褐色・深褐色・透 明光沢を含む	
518	土師器	高台付塊 底部・瓶部 E11Gr	A 2 V a	7.0	都定 ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	1 mm以下の暗灰色・地鉄色をわずかに 含む		
519	土師器	高台付塊 底部	A 2 C15Gr	V a	6.6	都定 ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良好	浅黄褐色	に高い 黄褐色	3 mm以下の黒褐色をぐくわずか、 灰褐色を含む	
520	土師器	高台付塊 底部・瓶部	A 2 E11Gr	V a	8.0	都定 ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐色	1 mm以下の褐色・暗褐色をぐくわず かに含む	
521	土師器	高台付塊 底部	A 3 B10Gr	V a	8.0	都定 ヘラ切り後ナデ	回転ナデ後ナデ	良好	浅黄褐色	淡褐色	微細な軟質灰色・透明光沢をわずか に含む	
522	土師器	高台付塊 底部	A 3 B9Gr	V a	8.7	都定 ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	2 mm以下の黑色光沢・軟質灰色をわ ずかに含む	
523	土師器	高台付塊 底部	A 2 D14Gr	V a	7.3	都定 ヘラ切り後ナデ	回転ナデ後ナデ	良好	褐色	褐色	微細な暗褐色・灰白色・明褐色・透明 光沢をわずかに含む	
524	土師器	高台付塊 底部・瓶部	A 2 B15Gr	V a	6.9	都定 ヘラ切り	回転ナデ	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	1 mm以下の黒褐色を少量含む	
525	土師器	高台付塊 底部・瓶部	A 2 D13Gr	V a	7.5	都定 ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良好	褐色	浅黄褐色	微細な暗褐色をわずかに含む 褐色	
526	土師器	高台付塊 底部	A 2 D11Gr	V a	8.8	都定 ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良好	浅黄褐色	浅褐色	軟質赤褐色・微細な透明光沢をわ ずかに含む	
527	土師器	高台付塊 底部	A 2 C15Gr	V a	7.15	都定 ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良好	浅黄褐色	褐色	2 mm以下の黒褐色・灰白色・透明光沶・ 軟質灰色をわずかに含む	
528	土師器	高台付塊 底部	A 2 G13Gr	V b	7.4	都定 ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良好	浅褐色	灰褐色	微細な透明光沶・軟質灰色を含む	
529	土師器	高台付塊 底部	A 3 D12Gr	V a	6.9	都定 ヘラ切り	回転ナデ	回転ナデ	良好	灰褐色	2 mm以下の軟褐色・暗灰色・加色光沶・ 黑色・灰褐色光沶・褐色・秋赤色・ 淡褐色を含む	放射状紋
530	土師器	高台付塊 底部・瓶部	A 2 T3Gr	V a	6.98	都定 ナデ、ヘラ切り	回転ナデの後ナ デ後工具ナデ	良好	褐色	褐色	微細な透明光沶・褐色・秋赤色・ 淡褐色を含む	
531	土師器	高台付塊 底部・瓶部	A 2 C13Gr	V a	7.7	都定 ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐色	1 mm以下の黒褐色・褐色・灰白色・ 褐色光沶・軟質赤褐色を含む	
532	土師器	高台付塊 底部	A 2 C13Gr	V a	7.35	都定 ヘラ切り	回転ナデ	良好	浅黄褐色	褐色	1 mm以下の黒褐色を少量含む 褐色	
533	土師器	高台付塊 底部・瓶部	A 2 E11Gr	V a	9.0	都定 ヘラ切り	ミガキ	良好	明褐色	褐色	ごく微細な透明光沶・3 mm以下の軟質赤 褐色を含む	
534	土師器	高台付塊 底部・瓶部	A 2 D13Gr	V a	7.68	都定 ヘラ切り	回転ナデ・ナデ 回転ナデ、風化 著しい	良好	に高い 褐色 褐色	浅黄色	ごく微細な透明光沶・2 mm以下の軟 褐色・深褐色・暗褐色・灰白色を含む	
535	土師器	高台付塊 底部・瓶部	A 3 J10Gr	V a	7.0	都定 回転ナデ	回転ナデ	良好	褐色	褐色	微細な暗褐色をわずかに含む	
536	土師器	高台付塊 底部	A 3 H12Gr	V a	7.7	都定 回転ナデ	回転ナデ	良好	浅黄色	浅褐色	微細な暗褐色をわずかに含む	
537	土師器	高台付塊 底部 ～瓶部	A 2 G13Gr	V a	6.6 7.1	都定 都定 ヘラ切り 洗刷	回転ナデ 回転ナデ	良好	に高い 褐色 褐色	に低い 灰褐色 褐色	1 mm程度の赤褐色をぐくわずか、微 細な暗褐色・暗灰色をわずかに含む	
538	土師器	高台付塊 底部 ～瓶部	A 3 H12Gr	IV 10.0	都定	回転ナデ	回転ナデ	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	1 mm程度の赤褐色をぐくわずか、微 細な暗褐色・暗灰色をわずかに含む	
539	土師器	高台付塊 ～瓶部	A 3 H12Gr	N 11.4	都定	回転ナデ	回転ナデ	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	1 mm程度の赤褐色をぐくわずかに含 む	
540	土師器	高台付塊 ～瓶部	A 3 II0・J10Gr	V a	21.0	都定 ヨコナデ 格子目タタキ	ヨコナデ 格子目タタキ	良好	浅黄褐色	褐色	3 mmのに高い褐色・4 mm以下の 深褐色・に高い褐色・透明光沶・褐 色・灰褐色を含む	
541	土師器	高台付塊 ～瓶部	B 1 54Gr	V a	25.0	都定 平行タタキ	横方向の三弓キ ケズリ	良好	に高い 褐色 褐色	に高い 褐色 褐色	3 mm以下の暗褐色・深い灰白色・透 明光沶・深褐色を含む	
542	土師器	高台付塊 ～瓶部	A 2 B15Gr	V a	—	都定 平行タタキ	ヨコナデ 横方向のケズリ	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	2 mm以下の褐色・暗灰色・深褐色・透 明光沶・黑色光沶を多く含む	

第 27 表 古代土師器観察表 9

遺物 番号	種別 部品	基 標 部位	出土 地点	層位 (付) 順序	法線 (cm)	手法・調節・支桿ほか	色 調			駕牛の特徴	考	
							外 面	内 面	地成	外 面	内 面	
543	土師器	口縁部 ～脚部	A 2 B15Gr	V a	ヨコナデ 平行タキ	ヨコナデ、一部 窓方向のケズリ	良好	浅黄色 黄褐色	3 mm以下の褐色、褐色をわずか。			
544	土師器	口縁部 ～脚部	B 1 T4Gr	V a 21.4	ヨコナデ	ヨコナデ 窓方向のケズリ	良好	浅黄色 黄褐色	1 mm以下の褐色、褐色を多く、黒褐色、透明光沢をわずかに含む			
545	土師器	口縁部 ～脚部	A 2 D14・15Gr	V a	ヨコナデ	窓方向のヨウタメ 調整、ヨコナデ 窓方向のミガキ	良好	浅黄色 黄褐色	に高い 1 mm以下の褐色、褐色、透明光沢	ごく微細な透明光沢、5 mm以下の浅褐色を含む		
546	土師器	口縁部 ～脚部	B 1 T4Gr	V a	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	浅黄色 黄褐色	2 mm以下の褐色、褐色をわずか、2 mm以下の白褐色、	微細な白色、褐色を含む		
547	土師器	口縁部 ～底部	A 2 D15・16Gr	V a 17.0	回転ナデ	ヘタ切り後ナデ	良好	浅黃褐色 浅黃褐色	4 mm以下の褐色、赤褐色、暗褐色、	4 mm以下の褐色、赤褐色、暗褐色、		
548	土師器	口縁部	A 2 E13Gr	V a	回転ナデ	回転ナデ	良好	褐色 褐色	透明光沢を多く含む	褐色、透明光沢を含む		
549	土師器	口縁部 ～底部	A 2 B15Gr	V a —	ナデ	回転ナデ	良好	に高い 褐色 褐色	に高い 1 mm以下の褐色、褐色を含む	褐色を含む		
550	土師器	口縁部 ～底部	A 2 C15・D14 15Gr	V a 6.8 13.3	4.2	回転ナデ ヘタ切り後ナデ	エガキ	良好	浅黃褐色 赤褐色	2 mm以下の褐色、透明光沢を少量含む	内面：赤褐色	
551	土師器	杯またぐ塊 ～脚部	A 2 D13・D10 11Gr	V a 14.44	回転ナデ	回転ナデ後ミガキ	良好	褐色 褐色	に高い 褐色、褐色、	ごく微細な透明光沢、2 mm以下の褐色、	内面：赤褐色	
552	土師器	杯またぐ塊 ～脚部	A 2 E12Gr	—	回転ナデ	回転ナデ	良好	褐色 褐色	5 mm以下の褐色、	褐色を含む	内面：赤褐色	
553	土師器 (黒色土器)	口縁部 ～底部	A 2 E13Gr	V a 7.3	6.6	回転ナデ ナデ	回転ナデの後 方向のヘタミガキ ナデ	良好	に高い 褐色	1 mm以下の褐色、黑色、褐色を含む		
554	土師器 (黒色土器)	口縁部 ～底部	A 2 C14Gr	V a 15.4	6.4	回転ナデ 丁寧なナデ	回転ナデの後 丁寧なナデ	良好	に高い 褐色 褐色	微細な黒褐色、灰白色、褐色を少	底部：一部 黒化	
555	土師器	杯 (黒色土器) 杯またぐ塊	A 2 C16Gr	V a	6.8	回転ナデ ヘタ切り	ミガキ	良好	浅黄色 黑色	ごく微細な透明光沢、1 mm以下の黒褐色、		
556	土師器	杯 (黒色土器) 杯またぐ塊	A 2 E14Gr	V a	6.8	回転ナデ ヘタ切り	ミガキ	良好	褐色 黑色	ごく微細な透明光沢、1 mm以下の灰白色、		
557	土師器	杯 (黒色土器) 杯またぐ塊	A 2 E14Gr	V a	5.9	回転ナデ、糊い ナデ、ヘタ切り	回転ナデの後 糊いナデ、ヘタ切り	良好	褐色 褐色	微細な褐色、に高い褐色、透明光沢		
558	土師器	杯 (黒色土器) 杯またぐ塊	A 2 D14Gr	V a —	5.5	回転ナデ後ミガキ ナデ、ヘタ切り	回転ナデの後ミ ナデ、ヘタ切り	良好	に高い 褐色 褐色	5 mm以下の褐色、透明光沢、褐色を含む		
559	土師器	高台付塊 (黒色土器) ～底部	A 3 J10Gr	V a 13.0	7.57	回転ナデ後ミガキ ナデ、ヘタ切り後ナデ	回転ナデの後ミ ナデ、ヘタ切り後ナデ	良好	褐色 褐色	ごく微細な透明光沢、1 mm以下の黒褐色、		
560	土師器	高台付塊	A 1 R20Gr	V a	—	回転ナデ	回転ナデ ヘラミガキ	良好	褐色 黑色	微細な透明光沢をわずかに含む		
561	土師器 (黒色土器)	高台付塊 底部	A 2 D12Gr	V a	7.9	回転ナデ、ナデ、 ヘタ切り後ナデ	回転ナデの後ミ ナデ、ヘタ切り後ナデ	良好	褐色 褐色	1 mm以下の黒褐色、透明光沢を含む		
562	土師器 (黒色土器)	高台付塊	A 3 E10Gr	V a	9.1	回転ナデ	回転ナデの後ミ ナデ、ヘタ切り後ナデ	良好	浅黄色 褐色	ごく微細な透明光沢、1 mm以下の黒褐色、		
563	土師器	高台付塊 底部	A 2 E15Gr	V a	7.6	回転ナデ 丁寧なナデ	回転ナデ 一部ヘタミガキ	良好	褐色 褐色 黑色	微細な透明光沢、1 mm以下の褐色、		
564	土師器 (黒色土器)	高台付塊 底部	A 2 B17Gr	V a —	7.5	回転ナデ	回転ナデ 一部ヘタミガキ	良好	浅黃褐色 浅黃褐色	1 mm以下の黒褐色、透明光沢を含む		
565	土師器 (黒色土器)	高台付塊	A 3 M a	V a	7.6	回転ナデ、ヘタ ミガキ、ナデ	回転ナデの後ミ ナデ、ヘタミガキ	良好	褐色 褐色	微細な褐色を含む		
566	土師器 (黒色土器)	高台付塊 底部	A 3 D14Gr	N	7.2	回転ナデ	回転ナデの後ミ ナデ、ヘタミガキ	良好	褐色 褐色	1 mm以下の黒褐色、透明光沢を含む	高台内部： スヌル器	
567	土師器 (黒色土器)	高台付塊 底部	A 2 D14Gr	V a	6.5	回転ナデ	回転ナデの後ミ ナデ、ヘタミガキ	良好	褐色 褐色	1 mm以下の黒褐色、褐色、灰白色を含む		
568	土師器 (黒色土器)	高台付塊	A 2 C13・D15Gr	V a	7.35	回転ナデ、 ヘタ切り後ナデ	回転ナデ、 ヘタ切り後ナデ	良好	褐色 褐色	1 mm以下の黒褐色、褐色、灰白色		
569	土師器	廣 (黒色土器) ～脚部	A 2 C13	V a —	ヨコナデ 平行タキ	ヨコナデ 窓方向のケズリ	良好	褐色 褐色	に高い 褐色、	1 mm以下の褐色、褐色、褐色、		
570	土師器	廣 (黒色土器) ～脚部	A 3 J11Gr	V a	23.1	ヨコナデ	ヨコナデ ケズリのナデ	良好	褐色 褐色	褐色を多く、1 mm以下の内凹形、透	褐色を多く、1 mm以下の内凹形、透	
571	土師器	廣 (黒色土器) ～脚部	A 2 E17・D19Gr	V a	24.2	ヨコナデ 平行タキ	ヨコナデ 窓方向のケズリ	良好	褐色 褐色	く、微細な透明光沢、2 mm以下の灰褐色、	褐色を多く、1 mm以下の褐色、褐色、	外見：スヌ ル器

第 28 表 古代土師器観察表 10

高さ	種別	基部	地点	層位	法算 (cm)	手法・調査・又種はか	色調			出土の特徴	備考
							外	内	焼成		
572	土師器	口縁部 ～脚部	D13・14	Va	推定	ヨコナデ 横方向のハケメ 調整、ケズリの 後にミカキナ	ヨコナデ 横方向のハケメ 調整、ケズリの 後にミカキナ	良好	褐色	褐色	2 mm以下の灰褐色を少額。3 mm以下 の黒褐色・褐色・灰白色を多く含む
			C03・139	Va	21.0						
			Tr1B								
573	土師器	口縁部 ～脚部	A 2	Va	推定	ヨコナデ 横方向のハケメ 丁寧なナデ	ヨコナデ 横方向のハケメ 丁寧なナデ	良好	に赤い 褐色	褐色	2 mm以下の黒褐色・褐色色調。3 mm以 下の黒褐色・灰褐色・褐色色調を含む
			B03・14G	Va	26.4						
574	土師器	口縁部 ～脚部	A 2	Va	推定	ヨコナデ 横方向のハケメ 調整?	ヨコナデ 横方向のハケメ 調整?	良好	浅黄褐色 淡黄褐色	淡黄褐色	2 mm以下の灰褐色・灰褐色・白 色透明色を多く。1 mm以下のに赤い褐 色色調を含む
			B15Gr	Va	20.4						
575	土師器	口縁部 ～脚部	A 2	V	推定	ヨコナデ 横方向のハケメ 調整、ナデ	ヨコナデ 横方向のハケメ 調整、ナデ	良好	褐色	褐色	2 mm以下の灰褐色・黑色色・褐色色を 多く含む
			B16Gr	V	IV						
576	土師器	口縁部 ～脚部	A 2	Va	推定	ヨコナデ 斜方向のケズリ	ヨコナデ 斜方向のケズリ	良好	に赤い 褐色	褐色	2 mm以下の灰褐色をわずか。2 mm以下の に赤い褐色色調を多く含む
			D15Gr	Va	15.9						
577	土師器	口縁部 ～脚部	A 3	Va	推定	ヨコナデ 竪方向のケズリ	ヨコナデ 竪方向のケズリ	良好	褐色	褐色	2 mm以下の灰褐色・黑色色調を、1 mm以下の透明白光沢・透明白光沢を少 量含む
			J10Gr	Va	13.8						
578	土師器	口縁部 ～脚部	A 2	Va	推定	粗いヨコナデ 斜方向のケズリ	ヨコナデ 斜方向のケズリ	良好	に赤い 褐色	褐色	1 mm以下の灰褐色・赤褐色・透明光 沢調をわずかに含む
			D11Gr	Va	12.5						
579	土師器	口縁部 ～脚部	A 3	V	推定	ヨコナデ 剥離痕あり	ヨコナデ 剥離痕あり	良好	浅黄褐色 淡黄褐色	淡黄褐色	5 mm以下のに赤い褐色色調を、3 mm以 下の黒褐色光沢・透明白光沢・褐色色 調を含む
			B03・11Gr	V	23.4						
580	土師器	口縁部	A 2	Va	推定	ヨコナデ 技術	ヨコナデ 技術	良好	に赤い 褐色	褐色	2 mm以下の黒褐色・褐色色・黑色色 調を多く含む
			B15Gr	Va	IV						
581	土師器	口縁部	A 2	Va	推定	ヨコナデ 横方向のハケメ 調整	ヨコナデ 横方向のハケメ 調整	良好	に赤い 褐色	褐色	1 mm以下の透明光沢調。2 mm以下の 黒褐色・黑色色調をわずかに含む
			D13Gr	Va							
582	土師器	口縁部 ～脚部	A 2	Va	推定	ヨコナデ 横方向のハケメ 調整、斜方向の ケズリの後ナデ	ヨコナデ 横方向のハケメ 調整、斜方向的 ケズリの後ナデ	良好	に赤い 褐色	褐色	1 mm以下の黒褐色・黑色色調を多く 含む
			B15Gr	Va	17.4						
583	土師器	口縁部 ～脚部	A 3	Va	推定	ヨコナデ 横方向の工具ナ チ、格子目タキ ノ、斜方のケ ズリ後ナデ	ヨコナデ 横方向の工具ナ チ、格子目タキ ノ、斜方のケ ズリ後ナデ	良好	褐色	褐色	3 mm以下の透明光沢調を多く 含む
			H1Gr	Va	14.2						
584	土師器	口縁部 ～脚部	A 2	Va	推定	横方向の工具ナ チ、格子目タキ ノ、斜方のケ ズリ後ナデ	ヨコナデ 横方向の工具ナ チ、格子目タキ ノ、斜方のケ ズリ後ナデ	良好	に赤い 褐色	褐色	1 mm以下の黒褐色光沢を少し。1 mm以 下の黑褐色・褐色色・白色・透明白 光沢を多く、高級小器物をわずかに含む
			C03・10Gr	Va							
585	土師器	口縁部 ～脚部	A 1	Va	推定	斜方の工具ナ チ、横方向の 格子目タキナ チ	ヨコナデ 横方向のケズリ	良好	褐色	褐色	2 mm以下の透明光沢調を少額。1 mm以 下の黑褐色・褐色色調を多く、角石岩・黑褐色 色調を少額含む
			B19Gr	Va	23.7						
586	土師器	口縁部 ～脚部	A 2	Va	推定	ナデ、横方 向のハケメ	ヨコナデ 横方向のハケメ 調整、斜方的 ケズリ	良好	に赤い 褐色	褐色	1 mm以下の透明光沢調を少し。2 mm以 下の黑褐色・褐色色・白色透明白光沢を多く 含む
			D13Gr	Va	20.4						
587	土師器	口縁部 ～脚部	A 2	Va	推定	ヨコナデ、横方 向のハケメ調整	ヨコナデ、横方 向のハケメ調整 ケズリ	良好	に赤い 褐色	褐色	1 mm以下の透明光沢調をわずか。1 mm以 下の黒褐色・褐色色調を含む
			C03・12Gr	Va	24.4						
588	土師器 製鉢	口縁部	A 2	Va	推定	ヨコナデの後 ガラ	ヨコナデの後 ガラ	良好	に赤い 褐色	褐色	ごく微細な透明光沢調。3 mm以下のに 赤い黒褐色・白色・褐色色・明褐色
			D13	Va	18.8						
589	土師器	口縁部 ～脚部	A 2	Va	推定	ヨコナデ、横方 向のハケメ調整 調整、斜方的 ケズリ	ヨコナデ 横方向のハケメ 調整、斜方的 ケズリ	良好	に赤い 褐色	褐色	ごく微細な透明光沢調。5 mm以下の灰 褐色・黑色色・透明白光沢・褐色色・に 赤い黒褐色・白色・褐色色調を含む
			C13	Va	26						
590	土師器	口縁部 ～脚部	A 2	Va	推定	ハケメ調整 ナデの後竪方 向	ヨコナデ ナデの後竪方 向	良好	褐色	褐色	4 mmの透明白光沢を多く含む。1.5 mm以下 の黒褐色・褐色色・白色透明白光沢を多く 含む
			E13Gr	Va	21.9						
591	土師器	口縁部 ～脚部	A 2	Va	推定	格子目タキナ チ	ヨコナデ	良好	褐色	褐色	2 mm以下の黒褐色・赤い白色・黒褐色 色調を含む
			B2・E12G	Va	24.1						
592	土師器	口縁部 ～脚部	A 2	Va	推定	ヨコナデ 格子目タキナ チ	ヨコナデ 格子目タキナ チ	良好	褐色	褐色	6 mm以下の黒褐色・赤い白色・黒褐色 色調を多く、微細な透明白光沢を少額含む
			E12Gr	Va	20.7						
593	土師器	口縁部 ～脚部	A 2	Va	推定	ヨコナデ、横方 向のハケメ 調整	ヨコナデ	良好	褐色	褐色	1 mm以下の黒褐色・褐色色・白色透 明白光沢を少額含む
			C13・14	Va	26						
594	土師器	口縁部 ～脚部	A 2	Va	推定	横方向のハケメ ナデ、ヨコナデ、 竪方向のケズリ	ヨコナデ 横方向のハケメ ナデ、ヨコナデ、 竪方向のケズリ	良好	に赤い 褐色	褐色	1 mm以下の褐色・黒褐色・黑色光沢・ 透明光沢をわずかに含む
			C17Gr	Va	23.0						
595	土師器	口縁部 ～脚部	A 2	Va	推定	ヨコナデ 横方向の工具ナ チ、ナデ	ヨコナデ 横方向の工具ナ チ、ナデ	良好	黒褐色 白色	黒褐色 白色	ごく微細な透明光沢調。3 mm以下の灰 褐色・黑色色・褐色色・に赤い褐色・ 黒褐色光沢を含む
			B18Gr	Va	21.6						
					18.8						

第29表 古代土師器観察表 11

遺物 番号	種別 基 標 部 位	出土 地點	層位 (1m 底辺 基高)	法量 (cm)	手法・調節・支桿ほか	地成 外 面 内 面	色 調			胎土の特徴	備 考	
							外 面	内 面	外 面 内 面			
596	土師器 口縁部 ～胴部		A 2 B18Gr	V-a	ヨコナデ	縦方向のケズリ	良好	褐色	褐色	2mm以下の灰白色・褐灰色・透明光沢 料を多く含む	外面：スヌ 付着	
597	土師器 口縁部 ～胴部		A 2 B18Gr	V-a	都定 ナデ	工具による糊・ ナデ	工具によるナデ	良好	黒色	黄褐色	1mm以下の灰白色・褐灰色・透明色・ 浅黃褐色を含む	
598	土師器 口縁部 ～胴部		A 2 C16Gr	V-a 14.3	都定 ナデ	ヨコナデ ケズリ	工具によるナデ ケズリ	良好	に高い 黄褐色	黄褐色	2mm以下の黒褐色色。繊細な透明光沢 料を少量含む	
599	土師器 口縁部 ～胴部		A 2 E13-14	V-a 8.8	都定 ナデ	ヨコナデ 斜方向ケズリ	ヨコナデ 斜方向ケズリ	良好	褐色	褐色	3mm以下のに高い赤褐色・赤褐色・に 高い褐色・褐灰色・灰白色・黒褐色光沢・ 透明光沢を含む	
600	土師器 剥離～底部		A 2 C13Gr	V-a	横・斜方向のハ ケメ調整	横・斜方向のケズリ	良好	浅黄色	浅黄色	3mm以下の灰褐色光沢・透明光沢・に 高い褐色・褐色・褐灰色・灰白色・に 高い褐色を含む		
601	土師器 底部		A 2 E14Gr	V-a	格子目タキ	ナデ 鉛鉬痕	格子目タキ	良好	に高い 黄褐色	黄褐色	微細な光沢感。1mm以下の黒褐色・灰白・ 透明光沢を含む	
602	土師器 底部		A 3 H12Gr	N 10.8	ナデ ナデ	に高い 黄褐色	に高い 黄褐色	良好	2mm以下の角閃石・ごく微細な光沢感	外面：スヌ 付着、内面: 炭化物有り		
603	土師器 口縁部		A 2 B16Gr	N	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	に高い 色	3mm以下の紺褐色	604と同一 個体か	
604	土師器 底部		A 2 C16Gr	V-a	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	褐灰色	黒色	1mm以下の褐色光沢。2mm以下のに高い 褐灰色・褐灰色を含む	603と同一 個体か、内面： スヌ付着
605	土師器 剥離～底部		A 2 B14Gr	V-a 22.8	平行タキ	工具ナデ	工具ナデ	良好	明黄色	明黄色	3mm以下の灰褐色・灰白色・褐褐色を 多く含む	
606	土師器 剥離～底部		A 3 H11Gr	V-a	格子目タキ	ナデ、斜方向の 工具ナデ	格子目タキ	良好	褐色	浅黃褐色	2mm以下の灰白色・褐灰色・褐色・透 明感を含む	
607	土師器 剥離～底部		A 2 D12-13Gr	N V-a 10.8	横方のハケメ 調整、横方のH ケズリ、ナデ	斜方向のケズリ	調整、横方のH ケズリ、ナデ	良好	に高い 黄褐色	褐色	2mm以下の灰褐色・褐灰色を多く含 む	
608	土師器 剥離～底部		A 2 C16-20Gr	V-a 15.3	都定 ナデ	ナデ	ナデ	良好	褐色	明黄色	5mm以下の赤褐色・褐灰色・黑褐色・ 透明光沢・灰白色を多く含む	
609	土師器 剥離～底部		A 2 C13-20Gr	V-a Tr.2	都定 ナデ	ヨコナデ 縦方向のナデ	ヨコナデ 縦方向のナデ	良好	灰黃褐色	褐色	微細な赤褐色を含む。1mm以下の褐 灰色・灰白色・黑色、褐色をわずか に含む	
610	土師器 把手		A 3 E10-70Gr	V-a	ナデ	ナデ	ナデ	良好	褐色	褐色	2mm以下の褐色・褐灰色・透明光沢・ 黑褐色光沢を多く含む	
611	土師器 把手		A 2 B14Gr	V-a 11	ナデ	に高い 黄褐色	に高い 黄褐色	良好	褐色	褐色	2mm以下の褐色・褐灰色・黑褐色光沶を 多く含む	
612	土師器 把手		A 3 J10Gr	N	ナデ	ナデ	ナデ	良好	浅黃褐色	浅黃褐色	1mm以下の紺褐色・黑褐色光沶を多く含 む	
613	土師器 把手		A 2 C15Gr	V-a	ナデ	に高い 黄褐色	に高い 黄褐色	良好	褐色	褐色	1mm以下の赤褐色・褐灰色光沶をわずか に含む	
614	布目土器 口縁部 ～休部		A 2 C13-21 14Gr	V-a 11	ナデ 風化著しい	布目痕 風化気味	布目痕 風化著しい	良好	褐色	褐色	6mm以下のに高い黄褐色光沶をわずか に含む	
615	土師器 口縁部 ～休部		A 2 C13-16Gr	D13-14 V-a 11.4	ナデ 風化著しい	ナデ 風化著しい	布目痕 風化著しい	良好	褐色	褐色	3mm以下に高い赤褐色・褐色・灰白色 色を含む	
616	土師器 口縁部 ～休部		A 2 C13-16Gr	V-a 11.2	都定 ナデ 風化著しい	ナデ 風化著しい	布目痕 風化著しい	良好	褐色	褐色	1mm以下の紺褐色・灰白色・透明光沢 料を多く含む	
617	土師器 口縁部 ～休部		A 2 D13Gr	V-a 11	都定 ナデ	ナデ 丁寧なナデ	布目痕 丁寧なナデ	良好	褐色	褐色	3mm以下の紺褐色を多く含む。1 mm以下の褐色・に高い赤褐色光沶を含む	
618	土師器 口縁部 ～休部		A 3 D10-20Gr	V-a 10.9	都定 ナデ	和ナデ ナデ	布目痕 風化著しい	良好	褐色	褐色	1mm以下の灰白色・褐灰色・黑褐色光沶 を含む	
619	土師器 口縁部 ～休部		A 2 C13Gr	V-a 11.8	都定 ナデ 風化著しい	ナデ 指痕痕 風化著しい	布目痕 風化著しい	良好	に高い 褐色	褐色	微細な無色透明光沶・灰白色・1mm 以下の黒褐色光沶・淡黃褐色・褐灰色・ 明黄色光沶を含む	
620	土師器 口縁部 ～休部		A 2 D13Gr	V-a 11.2	都定 ナデ 風化著しい	ナデ 風化著しい	布目痕 風化著しい	良好	明黄色	褐色	2mm以下の紺褐色光沶を含む	
621	土師器 口縁部 ～休部		A 3 I11Gr	V-a 11.2	都定 ナデ 風化著しい	ナデ 指痕痕 風化著しい	布目痕 風化著しい	良好	褐色	褐色	2mm以下の褐色・褐灰色・淡黃褐色光沶 を含む	
622	土師器 口縁部 ～休部		A 3 H1-12Gr	V-a 11	都定 ナデ	和ナデ ナデ	布目痕 ナデ	良好 に高い 褐色	褐色	1mm以下の赤褐色・褐灰色・黑褐色光沶 を含む	外面：スヌ 付着	

第30表 古代土師器観察表 12

番号	種類	基部	断面	剖位	法線 (cm)		手法・調整・文様			焼成	色調			出土の特徴	備考		
					(1)壁	底部	器高	外 面	内 面		外 面	内 面	外 面				
623	土師器	口部	A 2	V a	既定	D13Gr	7.8	ナデ	布目模	良好	褐色	褐色	9 mm以下の褐色・灰白色・褐灰色 をわずかに含む				
		～底部					11.3	風化著しい									
			A 2	V a				ナデ	布目模	良好	褐色	褐色	7 mm以下の褐色・灰白色・褐灰色 を含む				
624	土師器	口部	C 13	V a	既定	D13Gr	7.8	ナデ	布目模	良好	褐色	褐色	7 mm以下の褐色・灰白色・褐灰色 を含む				
		～底部					11.3	風化著しい									
625	土師器	口部	A 2	V a	既定	D13Gr	7.8	ナデ	布目模	良好	褐色	褐色	7 mm以下の灰黄色 を含む				
		～底部					11.3	風化気味									
626	須志器	口部	A 3	V a	既定	D11Gr	16.6	ナデ	回転ナデ	不良	灰白色	灰白色	7 mm以下の灰白色・褐灰色をわずかに含む	626と同一 個体			
		～底部					16.6	風化気味									
627	須志器	口部	A 3	N	既定	D11+10Gr	6.5	ナデ	回転ナデ	不良	灰白色	灰白色	3 mm以下の黒褐色を含む	627と同一 個体、外面部付着			
		～底部					6.5	ヘラ切り									
628	須志器	口部	A 3	N	既定	D11Gr	5.4	4.0	回転ナデ	回転ナデ	堅韌	灰黄色	灰黄色	豊かな褐色を含む	外面部：斑斑		
		～底部	V a				12.2	ヘラ切り									
629	須志器	口部	A 2	V a	既定	D15Gr	11.6	4.2	回転ナデ	回転ナデ	堅韌	灰色	灰色	豊かな黒褐色			
		～底部	V a				6.5	ヘラ切り後ナデ									
		SC4・5	V a														
630	須志器	口部	B 1	N	既定	D11+14Gr	11.4	5.6	4.15	回転ナデ	回転ナデ	堅韌	灰色	灰色	1 mm以下の全表面、2 mm以下の灰白色・ 黒褐色・暗褐色を含むか、豊かな灰白色・ 黒褐色・灰褐色を含む		
		～底部	V a				6.5	ヘラ切り									
631	須志器	口部	A 3	N	既定	D10Gr	12.5	6.2	4.5	回転ナデ	回転ナデ、回転ナデ	堅韌	灰黄色	灰黄色	豊かな褐色を含む	外面部：斑斑	
		～底部	V a				6.2	ヘラ切り後ナデ									
632	須志器	口部	A 2	V a	既定	D15Gr	7	ナデ	回転ナデ、ヘラ切り	回転ナデ	やや 不良	灰黄色	灰黄色	1 mm以下の褐色を含む			
		～底部	V a					ヘラ切り後ナデ									
633	須志器	高台付焼	A 2	V a	既定	D12Gr	12.9	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	堅韌	灰黄色	灰黄色	1 mm以下の褐色を含む			
		口部部～ 底部付近	V a														
634	須志器	高台付焼	A 2	V a	既定	D11B	11.3	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	堅韌	黑褐色	灰白色	1 mm以下の黒色・褐色を含む	内面部：口部部に自然 地		
		口部部～ 底部付近	V a														
635	須志器	高台付焼	A 3	V a	既定	D10+15Gr	16.2	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	堅韌	灰白色	灰白色	1 mm以下の灰白色、2 mm以下の灰褐色 を含む			
		～底部	V a														
636	須志器	高台付焼	A 2	V a	既定	D13・14・14Gr	11.9	6.2	5.5	ヘラ切り後ナデ	回転ナデ	堅韌	灰白色	灰白色	1 mm以下の黒褐色・褐灰色を含む	高台：鉄粒 付着	
		～底部	V a					ナデ									
637	須志器	高台付焼	A 3	N	既定	D10Gr	12.5	6.9	6.05	ヘラ切り	回転ナデ	不良	灰白色	灰白色	豊かな褐色を少量含む		
		～底部	V a														
638	須志器	高台付焼	A 2	V a	既定	T3Gr	14.45	8.05	5.35	ナデ	回転ナデ	やや 不良	灰白色	灰白色	2 mm以下の黄褐色・褐色を含む		
		～底部	V a						ヘラ切り後ナデ								
639	須志器	高台付焼	A 3	V a	既定	J10Gr	12.7	6.7	5.0	ナデ	回転ナデ	堅韌	灰色	灰白色	1 mm以下の灰褐色を少量含む		
		～底部	V a						ヘラ切り後ナデ								
640	須志器	高台付焼	A 2	V a	既定	C10+30G	14.58	7.0	ナデ	回転ナデ	回転ナデ	堅韌	灰褐色	灰褐色	2 mm以下の灰褐色・褐灰色光沢、外面部：ヒダ 部に自然地		
		～底部	V a						ヘラ切り後ナデ								
641	須志器	高台付焼	A 2	V a	既定	D14Gr	9.9	ナデ	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	やや 不良	淡黄色	淡黄色	2 mm以下の灰白色を含む			
		体部～底部	V a						ヘラ切り後ナデ								
642	須志器	高台付焼	A 3	V a	既定	J10Gr	6.75	ナデ	ナデ	回転ナデ	不良	灰白色	灰白色	1 mm以下の褐色を含む			
		体部～底部	V a						ヘラ切り								
643	須志器	高台付焼	A 2	V a	既定	C12Gr	8.1	ナデ	ナデ	回転ナデ	不良	灰白色	灰白色	1 mm以下の褐色を含む			
		体部～底部	V a						ヘラ切り								
644	須志器	高台付焼	A 2	V a	既定	C13	7.55	ナデ	ナデ	回転ナデ	やや 不良	淡黄色	淡黄色	豊かな透明光沢を含む			
		体部～底部	V a						ヘラ切り後ナデ								
645	須志器	高台付焼	A 3	V a	既定	J10Gr	7.2	ナデ	ナデ	回転ナデ	良好	灰褐色	灰白色	1 mm以下の灰褐色・灰白色を含む			
		底部	V a						ヘラ切り								
646	須志器	高台付焼	B 1	V a	既定	S4+14Gr	8.12	ナデ	ナデ	回転ナデ	良好	灰黄色	灰黄色	1 mm以下の灰褐色・褐灰色・褐色を含む			
		体部～底部	V a						ヘラ切り								
647	須志器	高台付焼	A 2	V a	既定	D13Gr	6.4	ナデ	ナデ	回転ナデ	良好	灰褐色	灰褐色	1 mm以下の黒褐色・灰白色・褐色・灰 褐色の色を少量含む			

第31表 古代土師器観察表13

遺物 番号	種別 部 位	基 標 地點	出土 層位 (付)	法線 (cm)		手法・調節・支桿はか 定	地成	色 調			胎土の特徴
				前	後			外 面	内 面	外 面	
648	須恵器 口縁部 ～底部 13Gr	跡 A2 D12・ V-a 22.0	都定 都定 9.8	格子目タキの 後ナデ、ナデ	横斜方向のナデ 多方向のナデ	堅緻	灰	灰	灰	1 mm以下の黒褐色・褐灰色・灰白色 灰白～灰色をわずかに含む	外側：ヒ ダスキ
649	須恵器 口縁部 ～底部 B15Gr	跡 A2 C12・ V-a 18.0	都定 都定 8.6	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	堅緻	灰黄	灰黄	1 mm以下の黒褐色・灰白色・褐灰色 をわずかに含む		
650	須恵器 口縁部 ～底部 D13Gr	跡 A2 C12・ V-a 22.8	都定 都定 11.0	ヨコナデ	ヨコナデ	中中 不均	灰白 灰	灰白 灰	1 mm以下の黒褐色・褐灰色を少許含む		
651	須恵器 口縁部 ～底部 E12Gr	跡 A2 C12・ V-a 23.6	都定 都定 11.0	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	浅黄色	灰白色	1 mm以下の灰白色・褐褐色・褐灰色 を含む		
652	須恵器 口縁部 ～底部 E12Gr	跡 A2 C12・ V-a 22.9	都定 都定 11.0	ヨコナデ	ヨコナデ	良好	浅黄色	灰白 黑	1 mm以下の灰白色・褐褐色を含む		
653	須恵器 底部付近 D13Gr	跡 A2 V-a	回転ナデ	回転ナデ	良好	灰	灰	1 mm以下の黒褐色をわずかに含む			
654	須恵器 口縁部 ～底部 D13Gr	跡 A2 B18・ V-a 20.1	都定 都定 11.0	ヨコナデ 格子目タキ 工具ぬあり	ヨコナデ	やや 不良	灰白色	灰白色	1 mm以下の灰白色・褐褐色 を含む		
655	須恵器 口縁部 ～底部 E11・12Gr	跡 A2 D12～14 V-a 9.85	都定 都定 都定 11.3	格子目タキの 後、横方向の相 いナデ、ナデ	横斜方向の相いナデ ナデ	堅緻	灰白	灰白色	1 mm以下の灰白色・褐白色を少許含 む	外側：薄ハ ジケ	
656	須恵器 口縁部 ～底部 D14Gr	跡 A2 V-a 12	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	堅緻	灰白～ 灰色	灰	1 mm以下の灰白色をわずかに含む	外側：自 然釉	
657	須恵器 口縁部 B15Gr	跡 A2 V-a 14.3	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	堅緻	灰白	灰白色	2 mm以下の黒褐色を含む	外側：自 然釉	
658	須恵器 口縁部 ～底部 D15・E14Gr	跡 A2 V-a 10.2	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	堅緻	灰白	灰	1 mm以下の灰白色・黒褐色を含む	外側：自 然釉	
659	須恵器 脚部 D13Gr	跡 A2 V-a	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	堅緻	灰白	灰	1 mm以下の灰白色・褐褐色を含む 発泡物が見られる。	底部内部： 脚部穴隙	
660	須恵器 脚部～底部 H1・H15Gr	跡 A3 V-a 11	都定 都定 ナデ	回転ナデ ナデ	回転ナデ	堅緻	灰白	灰	2 mm以下の黒褐色・灰白色・褐褐色を 含む	底部内部： 脚部ハジ ケ	
661	須恵器 脚部～脚部 砂2	跡 A2 V-a	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	堅緻	高灰色	灰	微細な淡黄色系、2 mm以下の黒褐色・ 灰白色を含む。発泡物が見られる。		
662	須恵器 脚部～脚部 H14・H15Gr	跡 A2 V-a	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	堅緻	灰白	灰	3 mm以下の黒褐色を少許含む	外側：自 然釉	
663	須恵器 脚部付近 E15Gr	跡 A2 V-a	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	堅緻	灰白	灰	微細な灰白色を少々、1 mm以下の黒 褐色・黒褐色を含む。	外側：踏 み跡	
664	須恵器 脚部付近 ～底部 E15Gr	跡 A2 V-a	格子目タキ ナデ	平行タキ ナデ	回転ナデ、斜方 工芸ナデ	堅緻	灰白	灰	3 mm以下の灰白色・黒褐色・灰褐色を 含む	外側：踏 み跡	
665	須 残 脚部～脚部 E10Gr	跡 A3 V-a	平行タキ ナデ	回転ナデ、斜方 工芸ナデ	回転ナデ	堅緻	高灰色	高灰色	2 mm以下の灰白色・褐褐色・褐灰色 を含む	外側：自 然釉、底部： 把手	
666	須 残 底部 D14Gr	跡 A2 Tr2 V-a 14.8	都定 都定 ナデ	格子目タキ ナデ	ナデ	堅緻	灰白	灰	2 mm以下の灰白色を含む		
667	須 残 脚部～底部 H1・H10Gr	跡 A3 V-a 10.1	都定 都定 ナデ	格子目タキ ナデ	斜方向のナデ	堅緻	灰白	灰白	微細な褐灰色・灰白色を少許含む	外側：自 然釉	
668	瓦質土器 口縁部 ～底部 D13・14Gr	跡 A2 N V-a 12.6	都定 都定 6.4	回転ナデ ヘア切り後ナデ	回転ナデ	堅緻	灰白	灰白	2 mm以下の灰褐色・灰白色・褐褐色 を含む		
669	瓦質土器 口縁部 ～底部 J10Gr	跡 A3 V-a 13.3	都定 都定 7.3	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	堅緻	灰白	灰白色	2 mm以下の黒褐色・黄褐色・灰白色 を少許含む		
670	瓦質土器 高台付塊 D12Gr	跡 A2 V-a 13.8	都定	回転ナデ	回転ナデ	堅緻	高灰色	淡黄色	1 mm以下の黒褐色・褐褐色を含む		
671	瓦質土器 口縁部 J10Gr	跡 A2 V-a	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	堅緻	灰白	灰	4 mm以下の灰褐色を含む		
672	瓦質土器 脚部～底部 C12Gr	跡 A2 V-a 7.2	都定	回転ナデ、ナデ ヘア切り後ナデ	回転ナデ	堅緻	灰白	灰白	1 mm以下の灰白色・黒褐色を含む		
673	瓦質土器 脚部～底部 C13Gr	跡 A2 V-a 7.4	都定	回転ナデ、ナデ ヘア切り後ナデ	回転ナデ	堅緻	灰白	灰	微細な透明灰沢を少許含む		

第 32 表 古代土師器観察表 14

番号	器種	出土地点	層位	計測値				色調	備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
221	上製品	A2 SC4	—	5.9	3.6	1.6	21.1	浅黄褐色 にぶい 黄褐色 黄褐色	2mm以下の軟質赤色・黒色・灰白色を少額 含む。 2mm以下の軟質赤色・黑色光沢・透明光沢 含む。
222	上製品	A2 SC4	—	10.5	4.6	4.1	94.1	にぶい 黄褐色 黄褐色	3mm以下の赤色系・1mm以下の白色・周 縁褐色 にぶい 黄褐色
674	輪形1	A2 D2+1G V.a	—	10.8	8.4	8.1	300.0	にぶい・褐色 黄褐色 黄褐色	3mm以下の赤色系・1mm以下の白色・周 縁褐色と白い・赤褐色を含む。にぶい・褐色と明褐色土 ガラス質付着 がアーチ状に残っている。
675	輪形1	A2 B3+D3G V.a	—	9.9	7.5	7.8	384.0	浅黄褐色 灰黄色	4mmの明褐色系・2mm以下の灰灰・灰褐色 系と・1mm以下の灰白色を含む。
676	切跡車	A2 B3+D4G V.a	—	7.6	7.6	0.9	36.0	稍色	稍色 3mm以下の軟質赤色糸をわずか、1mm 以上の透明白色糸・黒色光沢を少額含む。
677	切跡車	A2 D12Gr V.a	—	6.9	3.1	0.8	18	黄褐色 黄褐色	にぶい 黄褐色 黄褐色 光沢糸を少額含む。
678	切跡車	A2 D13Gr V.a	—	4.6	3.2	0.9	11	稍色 稍色	にぶい 黄褐色 黄褐色 を少額含む。高強小孔糸を含む。
679	切跡車	A2 D13Gr V.a	—	3.4	3.3	0.8	6	にぶい 黄褐色	にぶい 1mm以下の灰灰・微細な透明光沢糸を少額 含む。
680	上製品	A2 D15Gr V.a	—	4.7	1.7	1.2	5.7	浅黄褐色 —	1mm以下の黒色・灰白色糸をわずかに含む。 中央に径5mmの穿孔 有り
681	上製品	A2 C13Gr V.a	—	4.2	2.1	0.8	8.8	明褐色 —	1mm以下の軟質赤色糸・灰白糸・黒色・透明 光沢糸を少額含む。
682	上製品	A2 C13Gr V.a	—	7.8	1.9	1.7	18.2	稍色 —	1mm以下の灰白糸・黒色・透明光沢糸を少 額含む。

第33表 古代土製品計測表

番号	器種	出土地点	層位	計測値				備考
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
305	鉈頭	B1 SE3	—	9.3	—	1.7	1.6	20
683	鍛先	A2 B16Gr V.a上	—	6.2	—	3.2	1.05	16.0 筆部が木質で覆われている。
684	鍛先	B1 —	—	6.2	—	3.2	1.05	16
685	鉈頭	A2 C14Gr V.a	—	4.1	—	2.2	0.55	16.0
686	鉈頭	—	—	9.3	—	0.6	0.4	31.0 筆部が

第34表 古代鐵製品計測表

番号	器種	層位	出土地点	層位	計測値				備考
					U径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
687	滑石製品	石 輪	A2 C14Gr	V.a	—	—	—	226.2	把手

第35表 古代滑石製品計測表

番号	器種	出土地点	層位	計測値				石材	備考	
				最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)			
311	金床石	奥上5+C13+ D12+1G6	V.a	—	27.5	17.5	3.95	1,890	滑灰岩	
671	籽石製品	A2 SC4	—	16.1	12.2	8.6	354.5	籽石	上右部欠損、面版	
672	籽石製品	A2 SC4	—	6.9	12.7	1.3	139.1	籽石	上右下部欠損、面版	
388	籽石製品	A2 SC13	—	3.1	5.3	3.6	15	籽石	面版	
402	籽石製品	A3 SC14	—	—	12.7	4.1	3.1	44.1	籽石	上左部欠損、面版
403	支柱	A3 SC14	—	17.75	6	5	172	籽石	圓化欠損	
688	有孔石製品	A2 C17Gr	V.a	—	4.6	5.2	1.0	32	砂岩	穿孔径0.75cm、下部欠損
689	砾石	A3 H12Gr	N	6.1	8.5	2.5	226	砂岩	上右下部欠損	
690	砾石	A2 E13Gr	V.a上	—	4.5	4.3	0.8	25	砂岩	上右左部欠損
691	砾石	A2 D15Gr	V.a	—	12.9	3.5	2.6	202	砂岩	—
692	砾石	B2 Y2Gr	V.a	—	11.2	4.0	1.7	178	砂岩	—
693	砾石	A3 J9Gr	V.a	—	15.2	8.8	4.9	930	砂岩	—
694	砾石	A2 D11Gr	V.a	—	26.8	11.6	9.1	343.2	砂岩	—
695	籽石製品	A2 D12Gr	V.a	—	5.3	8.5	2.8	35	籽石	面版、下部欠損
696	籽石製品	A3 H12Gr	N	—	5.5	6.1	5.1	43	籽石	面版

第36表 古代石製品計測表

第IV章 自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第1節 顔料分析（蛍光X線分析）

1. はじめに

物質にX線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー（蛍光X線）が放出され、この蛍光X線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類や量を調べることができる。

この方法を用いて、考古学分野では朱やベンガラなどの顔料分析、金属製品の素材分析、リン・カルシウム分析などが行われている。また、指標となる特定の元素の検出パターンの比較から、土器（須恵器など）の生産地推定や石器（黒曜石など）の産地推定も行われている。

古代の赤色顔料としては、一般的に水銀朱（硫化水銀：HgS）、ベンガラ（酸化第二鉄： Fe_2O_3 ）、鉛丹（酸化鉛： Pb_3O_4 ）が知られている（市毛, 1998, 本田, 1995）。蛍光X線分析では、水銀（Hg）・イオウ（S）、鉄（Fe）、鉛（Pb）の元素の検出状況から赤色顔料の種類を推定することが可能である。

2. 試料

分析試料は、SA 3竪穴建物跡から採取された赤色物の塊である（写真参照）。なお、試料の赤色部分と非赤色部分の2箇所を測定して比較検討を行った。

3. 分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析装置（日本電子㈱製、JSX3100R II）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。測定の条件は、測定時間 240 秒、照射径 7.0mm、電圧 30kV、試料室内真空、プロレンフィルム使用である。また、光学顕微鏡下（1000倍相当）で赤色物の粒子形状を観察した。

4. 分析結果

第35表に各元素の定量分析結果（wt%）を示す。定量分析結果は、慣例により代表的な酸化物名で表記した。なお、測定に際してプロレンフィルムを使用していることから、定量分析結果の数値は必ずしも正確なものとはいえない。

5. 考察

蛍光X線分析の結果、試料の赤色部分では鉄（Fe）の明瞭なピークが認められた。鉄（ Fe_2O_3 ）の含量は、赤色部分では 40.3%、非赤色部分では 20.7% であり、赤色部分では比較試料の約 2 倍と明らかに高い値である。また、赤色部分では顕微鏡観察によりパイプ状粒子が確認され

原子No	化学式	試料	
		赤色部	非赤色部
12	MgO	0.713	0.395
13	Al2O3	16.795	22.199
14	SiO2	36.068	49.247
19	K2O	1.284	1.590
20	CaO	2.834	3.695
22	TiO2	1.260	1.528
25	MnO	0.508	0.407
26	Fe2O3	40.348	20.747
30	ZnO	0.053	0.038
37	Rb2O	0.038	0.018
38	SrO	0.042	0.049
40	ZrO2	0.056	0.068
80	HgO	0.003	0.017
82	PbO	0.000	0.004

第37表 赤色物の蛍光X線分析結果

た（写真参照）。なお、水銀（Hg）や鉛（Pb）はほとんど検出されなかった。

以上の結果から、赤色物の塊はパイプ状粒子が密集したパイプ状ベンガラ（岡田, 1997）と考えられる。パイプ状ベンガラは、沼澤地などに生育する鉄バケテリアの生産物（パイプ状の鞘細胞）を焼成して生産されたと考えられている（大久保, 2000, 内山ほか, 2012）。

文献

- 市毛 繁（1998）新版朱の考古学、考古学選書、雄山閣出版
内山伸明・橋本英樹・古谷充章・團野瑛章・辻広美・高田潤（2012）赤色顔料の原料採取地を求めて—鹿児島県上水流遺跡・闘山遺跡の例から—、鹿児島県立埋蔵文化財センター研究紀要第5号、p.47-54。
大久保浩二（2000）鹿児島県出土の赤色顔料—日本最古の赤彩土器をはじめとして、人類史研究 12, p.163-169。
岡田文男（1997）パイプ状ベンガラ粒子の復元、日本文化材科学会研究発表要旨集、14. p.38-39。
本田光子（1995）古墳時代の赤色顔料、考古学と自然科学、31-32, p.63-79。
本田光子（2003）「朱」から見た弥生時代の文化交流—博多湾沿岸地域に残された辰砂の謎—、日本文化財科学会報、46, p.25-32。

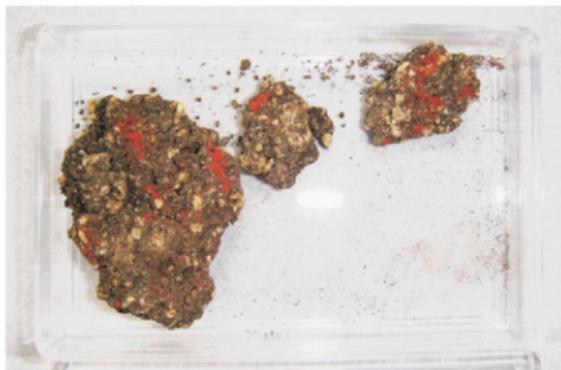


写真1 SA 3から出土した赤色物塊写真



写真2 赤色物の顕微鏡写真

第2節 種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靭なものが多く、堆積物や遺構内などに残存している場合がある。堆積物や遺構埋土などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や植物利用の実態を明らかにすることができます。

2. 試料

試料は、竪穴建物跡（SA 2、SA 4）や土坑（SC 4、SC17）から採取された炭化種実類である。試料の詳細を分析結果表に示す。

3. 方法

種実類について肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

(1) 分類群

種実同定の結果、樹木 4、草本 8 の計 12 分類群が同定された（第 36 表）。以下に同定根拠となる形態的特徴を記載し、主要な分類群について写真を示す。

試料 番号	対象試料	学名	分類群		部位	個数	備考
			和名				
2	SA2						種実無し
3	SA4	①	Zanthoxylum	サンショウ属	種子	1	種実無し
		②	Polygonum	タデ属	果実	1	
			Chenopodium	アザガ属	種子	1	
		④	Swida contorta Hemsl.	ミズキ	核（破片）	1	
			Cornus brachypoda C.A. Mey.	クマノミズキ	核（破片）	1	
			Polygonum	タデ属	果実	3	
			Cocculus orbiculatus DC.	アオツヅラフジ	種子	1	
			Rubiaceae	アカネ科	種子	1	
			Perilla frutescens var. japonica Hara	エゴマ	果実	17	
4	SC17						種実無し
5	SC4	Cornus brachypoda C.A. Mey.	クマノミズキ		核（破片）	2	
		Oryza sativa L.	イネ		果実	4	
		Hordeum Triticum	ムギ属		果実（破片）	3	
		Vigna	ササゲ属		子葉（破片）	3	
	262	Prunus persica Batsch	モモ		核	2	同一個体の破片
					（破片）	6	有り

第 38 表 炭化種実同定結果

〔樹木〕

モモ Prunus persica Batsch 核（完形・破片）バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。長さ×幅：21.54mm×13.74mm

サンショウ属 *Zanthozylum* 種子 ミカン科

黒色で楕円形を呈し、側面にへそがある。表面には網目模様がある。この分類群はへそが欠落し破片のため、属レベルの同定までである。長さ×幅：2.88mm×2.55mm

ミズキ *Cornus controversa* Hemsl. 核（破片） ミズキ科

黒褐色で横長の楕円形を呈す。表面には縱方向に深い筋が走る。

クマノミズキ *Cornus brachypoda* C. A. Mey. 核（破片） ミズキ科

淡褐色で球形を呈す。表面に一本の広い溝がめぐり、数本の細い縱筋が走る。

[草本]

イネ *Oryza sativa* L. 果実 イネ科

炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。長さ×幅：4.00mm×2.70mm、4.26mm×2.81mm

ムギ類（オオムギ・コムギ）*Hordeum-Triticum* 果実（破片） イネ科

オオムギもしくはコムギと思われるが、発泡しているためムギ類とした。長さ×幅：4.81mm×2.85mm
タデ属 *Polygonum* 果実 タデ科

黒褐色で頂端の尖る広卵形を呈す。断面は三角形、表面には光沢がある。長さ×幅：1.69mm×1.16mm
アカザ属 *Chenopodium* 種子 アカザ科

黒色で光沢があり円形を呈し、片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。長さ×幅：1.13mm×1.22mm
アオツヅラフジ *Cocculus trilobus* DC. 種子 ツヅラフジ科

茶褐色で円形を呈し、中央部は大きくくぼむ。縁は隆起し、隆起上には放射状の模様がある。長さ×幅：3.18mm×3.40mm

ササゲ属 *Vigna* 子葉 マメ科

黒色で楕円形を呈す。へそは縱に細長い。長さ×幅：4.21mm×2.76mm×2.63mm

ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれるが、現状では識別は困難である。

アカネ科 *Rubiaceae* 種子

偏球形を呈し、背面は広楕円状円形である。中央に円形の穴がある。長さ×幅：2.19mm×1.86mm

エゴマ *Perilla frutescens* var. *japonica* Hara 果実 シソ科

黒褐色～灰褐色で球形を呈し、下端はわずかに突出する。表面に大きい網目模様がある。径2.2～2.4mm。
径2.2mm以上をエゴマとした。長さ×幅：1.83mm×1.34mm、1.80mm×1.35mm

(2) 種実群集の特徴

1) SA 2（試料2）

種実は認められなかった。

2) SA 4①（試料3）

種実は認められなかった。

3) SA 4②（試料3）

樹木種実のサンショウ属1、草本種実のタデ属1、アカザ属1が認められた。

4) SA 4 ④ (試料3)

樹木種実のミズキ1、クマノミズキ1、草本種実のタデ属3、アオツヅラフジ1、アカネ科1、エゴマ17が認められた。

5) SC17 (試料4)

種実は認められなかった。

6) SC 4 (試料5)

樹木種実のクマノミズキ2、草本種実のイネ4、ムギ類3、ササゲ属3が認められた。

7) SC 4・262 (試料5)

樹木種実のモモ8が認められた。

5. 種実同定から推定される植生と農耕

種実同定の結果、SA 4 の②ではサンショウ属、タデ属、アカザ属、SA 4 の④ではミズキ、クマノミズキ、タデ属、アオツヅラフジ、アカネ科、エゴマ、SC 4 ではイネ、ムギ類、ササゲ属、クマノミズキ、箱内 262 ではモモが認められた。なお、SA 2、SA 4 の①、SC17 では種実は認められなかった。

SA 4 の④で認められたエゴマ、SC 4 で認められたイネ、ムギ類、ササゲ属、モモは栽培植物である。

SA 4 で認められたサンショウ属、ミズキ、クマノミズキは、二次林や集落周辺に多い樹木であり、タデ属、アカザ属、アオツヅラフジ、アカネ科は、集落や畑およびその周辺のやや乾燥した人為地に生育する草本である。

文献

笠原安夫 (1985) 日本雑草図説、養賢堂、494p.

笠原安夫 (1988) 作物および田畠雑草種類、弥生文化の研究第2巻生業、雄山閣出版、p.131-139.

金原正明 (1996) 古代モモの形態と品種、月刊考古学ジャーナル No.409、ニューサイエンス社、p.15 - 19.

吉崎昌一 (1992) 古代雑穀の検出、月刊考古学ジャーナル No.355、ニューサイエンス社、p.2-14.

第3節 樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、竪穴建物跡 (SA 2、SA 3)、土坑 (SC 1、SC 4、SC 5、SC22)、不明遺構 (SZ 1)、焼土 (焼土 8) から採取された炭化材 8 点である。なお、試料はいずれも軟質の消し炭 (からけし) の状態である。

3. 方法

以下の手順で樹種同定を行った。

- 試料を洗浄して付着した異物を除去
- 試料を剖析して、木材の基本的三断面（横断面：木口、放射断面：柾目、接線断面：板目）を作成
- 落射顕微鏡（40～1000倍）で観察し、木材の解剖学的形質や現生標本との対比で樹種を同定

4. 結果

第37表に同定結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

試料番号	対象試料	結果（学名／和名）	状態	復元性
6	SA2	炭化材 <i>Melia azedarach</i> L. var. <i>subtripinnata</i> Miq.	センダン	消し炭 約10cm
7	SA3	炭化材 <i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima	スダジイ	消し炭 約10cm
8	SC1	炭化材 <i>Melia azedarach</i> L. var. <i>subtripinnata</i> Miq.	センダン	消し炭 約10cm
9	SC4	炭化材 Lauraceae	クスノキ科	消し炭 5-10cm
10	SC5	炭化材 <i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属	消し炭 約10cm
11	SC22	炭化材 <i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima	スダジイ	消し炭 10cm以上
12	SZ1	炭化材 <i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima	スダジイ	消し炭 15cm以上
13	磯上8	炭化材 <i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ	消し炭 5-10cm

第39表 樹種同定結果

スダジイ *Castanopsis sieboldii* Hatusima ブナ科 試料7、11、12

年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。放射組織は単列の同性放射組織型を示す。

以上の特徴からスダジイに同定される。スダジイは本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽・保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 試料10

横断面では、中型から大型の道管が1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。道管の穿孔は單穿孔、放射組織は同性放射組織型で単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴からコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強韌、弾力性強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

クスノキ科 Lauraceae 試料9

中型から小型の道管が単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。道管の穿孔は單穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の特徴よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモ属などがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、道管径以外の点が不明瞭なためクスノキ科の同定までである。なお、道管径の大きさか

らクスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

センダン *Melia azedarach* L. var. *subtripinnata* Miq. センダン科 試料 6、8

年輪のはじめに大型の道管がやや疎に配列する環孔材である。孔圈部外の道管は単独または2～3個複合して散在し、年輪界付近の小道管は群状に複合する。道管の径は徐々に減少する。道管の穿孔は單穿孔で、小道管および中型の道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織は平伏細胞である。放射組織は同性放射組織型で、1～6細胞幅である。小道管および中型の道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の特徴よりセンダンに同定される。センダンは、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ30m、径1mに達する。材は強さ中庸で、建築、家具、器具などに用いられる。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 試料 13

横断面では小型の道管が単独ないし2個複合して密に散在する散孔材である。放射断面では道管の穿孔が階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越えるものも観察される。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。接線断面では、放射組織が異性放射組織型で単列を示す。

以上の特徴よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8～10m、径20～30cmである。材は強靭、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

5. 所見

樹種同定の結果、スダジイ3点、センダン2点、コナラ属アカガシ亜属1点、クスノキ科1点、サカキ1点が認められた。

SA3、SC22、SZ1で認められたスダジイは、やや重厚で耐久・保存性は低い材であり、温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素あるいは二次林要素である。九州において古くからシイ属を木地として容器に利用するなどの例は多いが、スダジイの同定例はやや少ない。なお、縄文時代および弥生時代の九州においてスダジイには礎板や柱などの建築部材、自然木や用途不明品の他に板や棒などの施設材、例物の鉢などの同定例がある。試料7と試料11は復元径が約10cm、試料12は復元径15cm以上であり、中木から高木程度でいずれも柱材としての利用も考えられる大きさである。

SA2とSC1で認められたセンダンは、強さ中庸の材であり、暖地の海辺沿いや山地に自生する落葉高木である。九州における同定例は少ないが、建築部材、杭、板材などの例が見られる。センダンは暖地の海岸沿いに多く、地域的に特有な樹木である。試料6と試料8は、ともに年輪が比較的平行であることから中木以上の大きさの木材とみられ、建築部材としての利用も考えられる。

SC5で認められたコナラ属アカガシ亜属は、硬堅な材であり建築材などに広く用いられるが、西南日本では弥生時代以降になると特に農耕具を中心に用いられる傾向にあり、薪炭としての利用もある。コナラ属アカガシ亜属は、一般にカシと総称されるが、イチイガシ、アラカシなど多くの種があり、温帯下部の暖温帯の照葉樹林を形成する主要高木である。

SC4で認められたクスノキ科は、クスノキ、タブノキ、ヤブニッケイなどがあり、概して強さ耐久性とともに中庸な樹木である。九州では鋤、鍬、燃料材、柱などの同定例があり、弥生時代においてはクス

ノキとタブノキ属が容器として利用される例が多い。温帯下部の温暖な暖温帯に分布し、照葉樹林の主要構成要素を含む常緑高木である。なお、クスノキ科の中でクスノキは、九州や瀬戸内の沿岸の遺跡に特有に多い遺材である。

焼土 8で認められたサカキは、強靭、堅硬な材で、現代では建築部材や器具、薪炭などに利用され、枝葉は神事に利用される。縄文時代の九州では報告例は少なく用途の確かなものはほとんどない。縄文時代後・晩期になると用途は杓子、杭、建築部材など多様になり、九州北部では矛柄が目立ち、九州南部では例は少ないと鎌柄、弓、杭などがあり、また燃料材としての利用も見られる。サカキは常緑高木で温帯ないし暖温帯に生育する照葉樹林の構成要素である。

木材の復元径は、10cmないしそれ以上に達するものがほとんどで、柱などの建築材としての利用も可能な木材である。なお、試料はいずれもやや柔らかく焼き彫れの多い燃焼した消し炭（からけし）状態であり、火災で燃焼したか燃料材として利用されたと考えられる。

スダジイ、コナラ属アカガシ亜属、サカキは温帯ないし暖温帯に生育する照葉樹林の構成要素であり、センダン、クスノキ科は海岸沿いに生育する樹木である。いずれも温暖な西南日本に分布する樹種であり、当時の遺跡周辺もしくは近隣の地域で採取可能であったと考えられる。

文献

- 伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学、出土木製品用材データベース。海青社、449p。
島地謙・佐伯浩・原田浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造。文永堂出版、290p。
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣、296p。
山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史、植生史研究特別1号。植生史研究会、242p。

第4節 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(¹⁴C)の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壤、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である（中村,2003）。

2. 試料と方法

第38表に、測定試料の詳細と前処理・調整法および測定法を示す。

3. 測定結果

加速器質量分析法(AMS: Accelerator Mass Spectrometry)によって得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行い、放射性炭素(¹⁴C)年代および曆年年代（較正年代）を算出した。表4にこれらの結果を示し、第72図・第73図に曆年較正結果（較正曲線）を示す。

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C} / ^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (%) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25(%) に標準化することで同位体分別効果を補正している。

(2) 放射性炭素 (^{14}C) 年代測定値

試料の $^{14}\text{C} / ^{12}\text{C}$ 比から、現在 (AD1950 年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は 5730 年であるが、国際的慣例により Libby の 5568 年を用いている。統計誤差 (\pm) は 1σ (68.2% 確率) である。 ^{14}C 年代値は下 1 術を丸めて表記するのが慣例であるが、暦年較正曲線が更新された場合のために下 1 術を丸めない暦年較正用年代値も併記した。

(3) 暦年代 (Calendar Years)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、放射性炭素 (^{14}C) 年代をより実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴの U/Th (ウラン / トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線のデータは IntCal 13、較正プログラムは OxCal 4.2 である。

暦年代 (較正年代) は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCal の確率法により 1σ (68.2% 確率) と 2σ (95.4% 確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の 1σ ・ 2σ 値が表記される場合もある。() 内の % 表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

試料No.	試料の詳細	種類	前処理・調整法	測定法
No 6	SA 2	炭化材 (センダン)	超音波洗浄、酸-7% 刻-酸処理	AMS
No 7	SA 3	炭化材 (スダジイ)	超音波洗浄、酸-7% 刻-酸処理	AMS
No 8	SC 1	炭化材 (センダン)	超音波洗浄、酸-7% 刻-酸処理	AMS
No 9	SC 4	炭化材 (クスノキ)	超音波洗浄、酸-7% 刻-酸処理	AMS
No 10	SC 5	炭化材 (コナラ属アガシ亜属)	超音波洗浄、酸-7% 刻-酸処理	AMS
No 11	SC22	炭化材 (スダジイ)	超音波洗浄、酸-7% 刻-酸処理	AMS
No 12	SZ 1	炭化材 (スダジイ)	超音波洗浄、酸-7% 刻-酸処理	AMS
No 13	鏡上 8	炭化材 (サカキ)	超音波洗浄、酸-7% 刻-酸処理	AMS
No 14	上部 17	上部付着炭化物	超音波洗浄、酸-7% 刻-酸処理	AMS

第 40 表 放射性炭素年代測定試料一覧

4. 所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No 6 では 1670 ± 20 年 BP (2 σ の暦年代で AD 337 ~ 417 年)、No 7 では 1700 ± 20 年 BP (AD 257 ~ 285, 290 ~ 295, 321 ~ 400 年)、No 8 では 1220 ± 20 年 BP (AD 721 ~ 741, 766 ~ 882 年)、No 9 では 1300 ± 20 年 BP (AD 663 ~ 719, 742 ~ 767 年)、No 10 では 1190 ± 20 年 BP (AD 775 ~ 886 年)、No 11 では 1260 ± 20 年 BP (AD 684 ~ 773 年)、No 12 では 1380 ± 20 年 BP (AD 625 ~ 670 年)、No 13 では 1220 ± 20 年 BP (AD 714 ~ 744, 765 ~ 886 年)、No 14 では 2805 ± 20 年 BP (BC 1007 ~ 907 年) の年代値が得られた。

文献

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の¹⁴C 年代編集委員会編「日本先史時代の¹⁴C 年代」. 日本第四紀学会, p.3-20.

中村俊夫 (2003) 放射性炭素年代測定法と暦年代較正. 環境考古学マニュアル. 同成社, p.301-322.

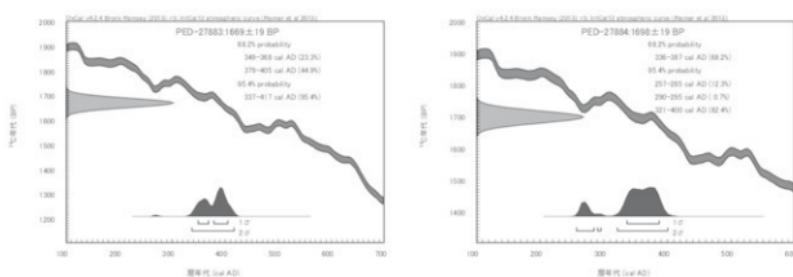
Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

Paula J Reimer et al., (2013) IntCal 13 and Marine 13 Radiocarbon Age Calibration Curves. 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55, p.1869-1887.

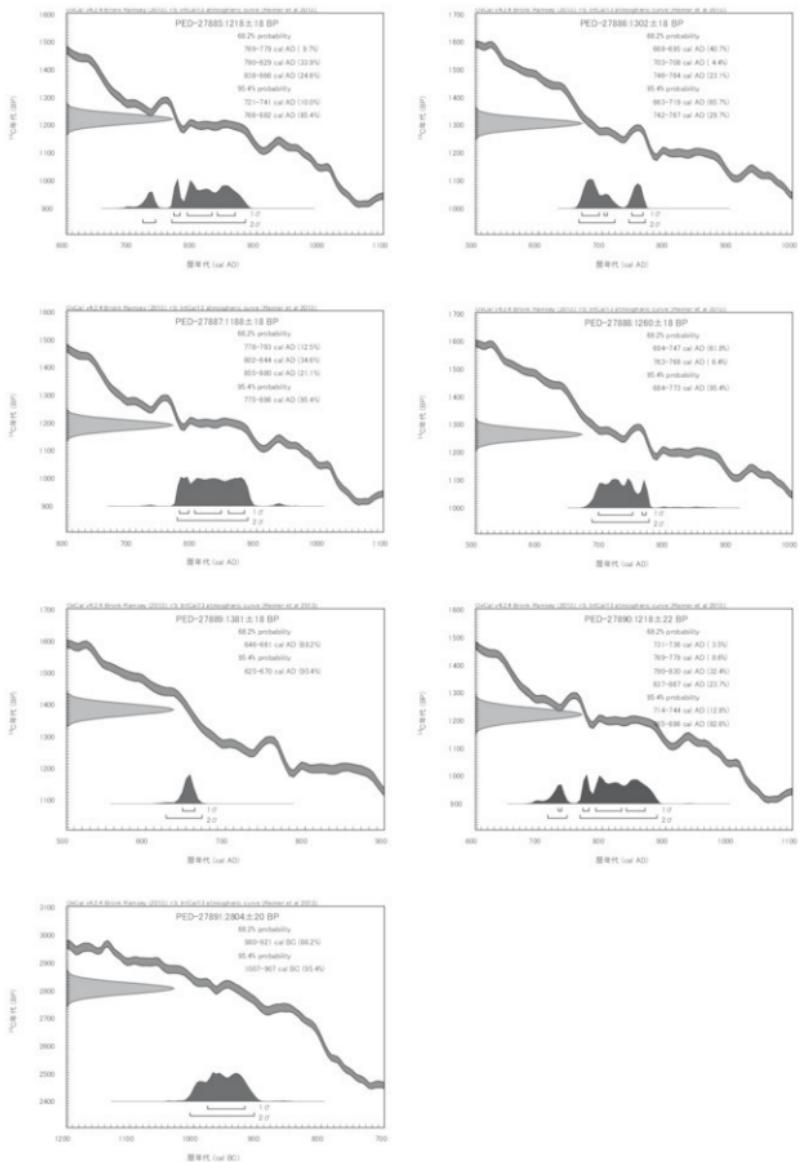
試料No	測定No (PED)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	14C 年代: 年 BP (曆年転用)	曆年代 (較正年代): cal	
				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
No. 6	27883	-25.00 ± 0.18	1670 ± 20 (1669 ± 19)	AD 349-368 (23.3%)	AD 337-417 (95.4%)
				AD 379-405 (44.9%)	
No. 7	27884	-30.12 ± 0.17	1700 ± 20 (1698 ± 19)	AD 336-387 (68.2%)	AD 257-285 (12.3%)
					AD 290-295 (0.7%)
No. 8	27885	-25.62 ± 0.16	1220 ± 20 (1218 ± 18)	AD 769-779 (9.7%)	AD 721-741 (10.0%)
				AD 790-829 (33.9%)	AD 766-882 (85.4%)
No. 9	27886	-25.72 ± 0.14	1300 ± 20 (1302 ± 18)	AD 668-695 (40.7%)	AD 663-719 (65.7%)
				AD 703-708 (4.4%)	AD 742-767 (29.7%)
No. 10	27887	-27.35 ± 0.15	1190 ± 20 (1188 ± 18)	AD 778-793 (12.5%)	AD 775-886 (95.4%)
				AD 802-844 (34.6%)	AD 855-880 (21.1%)
No. 11	27888	-28.04 ± 0.14	1260 ± 20 (1260 ± 18)	AD 694-747 (61.8%)	AD 684-773 (95.4%)
				AD 763-768 (6.4%)	
No. 12	27889	-29.00 ± 0.14	1380 ± 20 (1381 ± 18)	AD 646-661 (68.2%)	AD 625-670 (95.4%)
					AD 790-830 (32.4%)
No. 13	27890	-31.94 ± 0.29	1220 ± 20 (1218 ± 22)	AD 731-736 (3.5%)	AD 714-744 (12.8%)
				AD 769-779 (8.6%)	AD 765-886 (82.6%)
No. 14	27891	-26.77 ± 0.16	2805 ± 20 (2804 ± 20)	BC 980-921 (68.2%)	BC 1007-907 (95.4%)

BP : Before Physics (Present), cal : calibrated, BC : 紀元前, AD : 西暦

第 41 表 放射性炭素年代測定結果



第 71 図 曆年較正結果 1



第72図 历年較正結果2

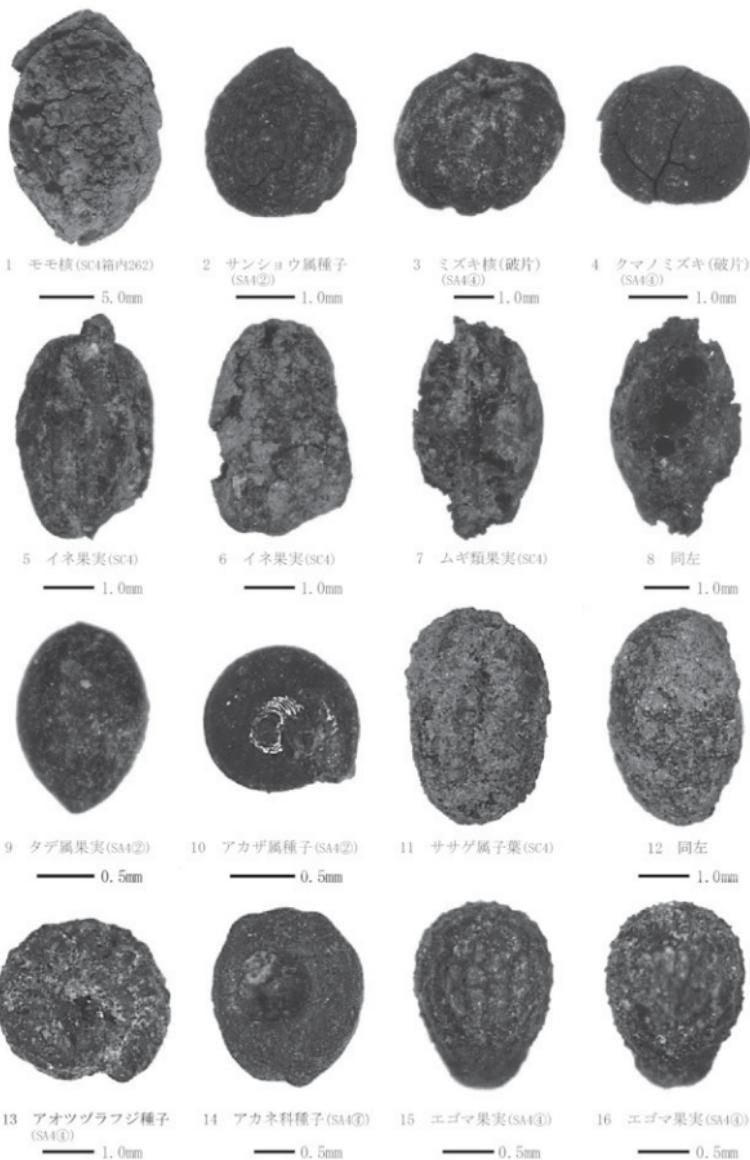
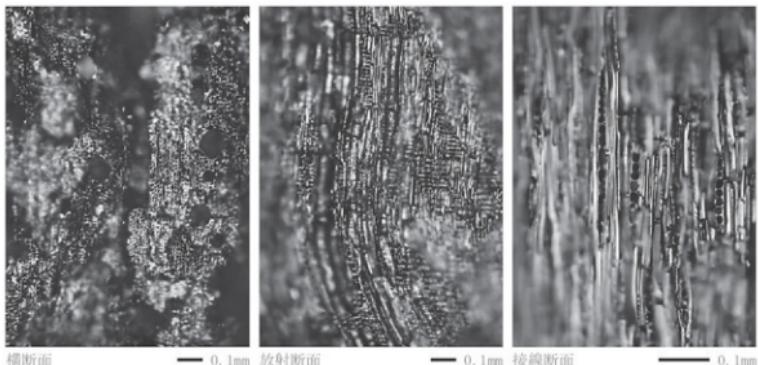
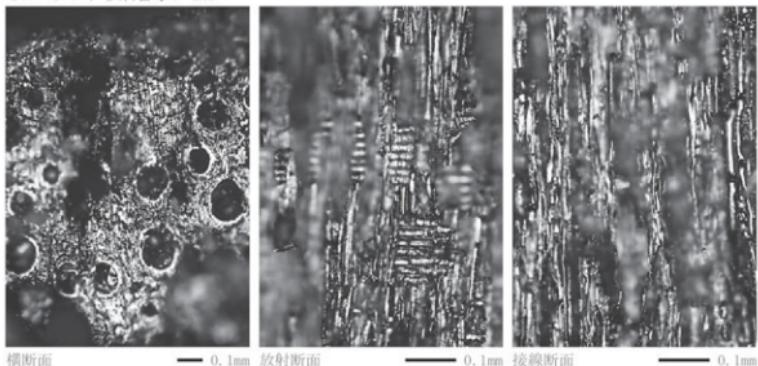


写真3 種実同定試料写真



横断面 放射断面 接線断面
0.1mm 0.1mm 0.1mm

1. スダジイ 試料番号 7 SA3



横断面 放射断面 接線断面
0.1mm 0.1mm 0.1mm

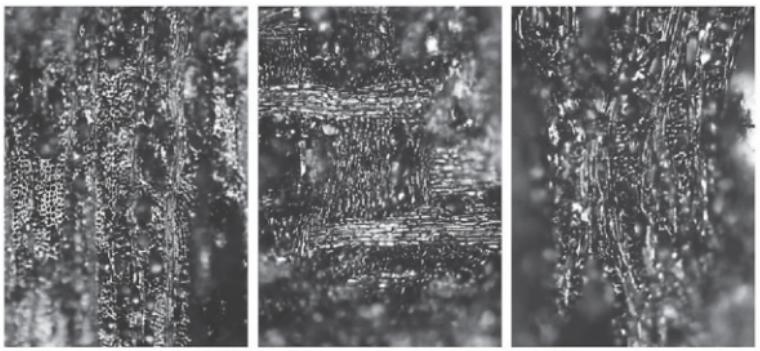
2. スダジイ 試料番号 11 SC22



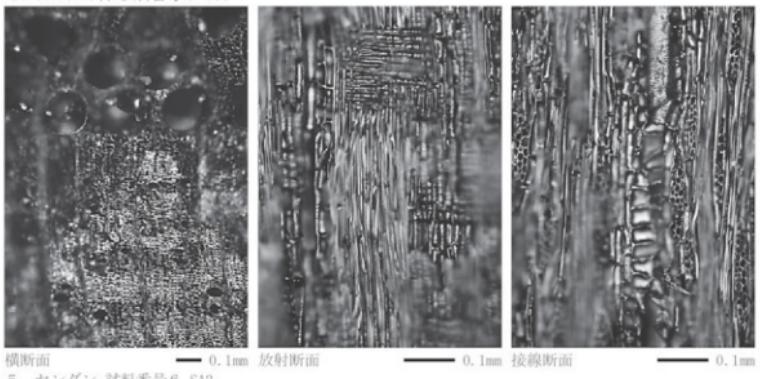
横断面 放射断面 接線断面
0.1mm 0.1mm 0.1mm

3. コナラ属アカガシ亜属 試料番号 10 SC5

写真4 樹種同定試料写真 1



横断面
4. クスノキ科 試料番号 9 SC4



横断面
5. センダン 試料番号 6 SA2



横断面
6. サカキ 試料番号13 焼8

写真 5 樹種同定試料写真 2

第V章 総括

大庭第1遺跡は、大淀川右岸に発達した標高約131mの河岸段丘上に立地する遺跡で縄文時代晩期の土坑や弥生時代の竪穴建物跡、古墳時代の竪穴建物跡、古代の溝状遺構や土坑、焼土、性格不明遺構が確認されている。また遺物では、縄文土器や弥生土器、古墳時代～古代の土師器、須恵器、瓦質土器、土製品、滑石製品、石器・石製品、軽石製品などが出土している。ここでは、これらの遺構・遺物について、時代毎にまとめていきたい。

縄文時代

縄文時代では、B区を中心に後期～晩期の遺物が出土している。そのうち後期では、17の沈線文による区画等から後期前葉の指宿式土器の可能性がある。20～33は後期中葉の所産で、そのうち20・21・23・24は文様の特徴から20・21は丸尾式土器、23・24は納曾式土器である。22は口縁部を肥厚させ、口唇部に刻目が入る等、北久根山式土器の特徴をもつ。25～29、31～33は、球状の胴部から頸部でくびれ、口縁部に向かって大きく開き、逆「く」の字に屈折する口縁部をもつ器形で磨消縄文等を有することから西平式系上器と考えられる。これらのことから後期前葉から徐々に人々の生活が確認できるようになる。

晚期になると遺物の出土量が多くなり、人々の生活が活発になる。一部で晩期前葉の入佐式土器（34・76）並行のものや晩期後葉の刻目突帯文土器が認められるものの、大半が晩期中葉の黒川式土器期のもので、深鉢や鉢・浅鉢など様々なバリエーションが認められる。そのうち黒川式の新段階（宮地2008）に位置付けられる無刻目突帯文土器（57）の外面に付着した炭化物の¹⁴C年代（AMS）は 2805 ± 20 年BP（暦年代：BC 1007～907年、 σ 13 C : $26.77 \pm 0.16\%$ ）の測定値を得ており、藤尾氏のいう刻目突帯文土器が併行する黒川式新（藤尾ほか2006）に測定値に近い。この時期までこのタイプの土器が残るのか資料の蓄積を待ちたい。

石器では、狩猟具（石鎌・尖頭器）、調理具（石匙・スクレイパー）、製粉具（磨石・敲石）、土掘り具（打製石斧）、工具（磨製石斧・石錐・楔形石器・敲石）、漁撈具（石錘）、等が出土しており、石鎌や打製石斧の出土が比較的多い。また石核や二次加工剥片、調整剥片（石斧）、碎片等も認められることから、石器製作が行われていたことが窺われる。なお石錘については、川治いに立地するため漁撈が盛んなイメージがあったが、ほとんど見られず、他の時代でも古墳時代のものが1点と少ない。一方で河川敷には石錘に利用できそうな扁平礫もあることから、それらを直接利用したのか、この地域では漁撈があまり盛んではなかったのか、今後の検討課題である。

遺構については、土坑が確認されているのみで竪穴住居跡は確認されていないことからB区の南側に集落が展開していた可能性がある。一方で東側に伸びる台地上（細井地区）では山城第1遺跡（後期前葉～晩期59軒）や上原第1遺跡（後期中葉8軒）や同第2遺跡（後期中葉1軒）、同第3遺跡（後期前葉～晩期4軒）で竪穴建物跡が確認されており、集落の中心は、台地上で形成されていたものと考えられる。

弥生時代

弥生時代では数が少ないものの、前期～後期の遺物が出土している。そのうち前期～中期にかけては、B区で出土しており、前期後半の壺（193）、前期末～中期初頭の甕（180・181）や中期の入来Ⅰ式（182）、入来Ⅱ式（183）、下城式系土器（184・185）の甕が確認されている。

188～192、195～197・199は後期後半の土器群で、A区でもみられるようになる。198は底部の形状より終末期のものと考えられる。

遺構は、B区竪穴建物跡が1軒確認されている。遺物が少ないが、二重口縁壺の口縁部が出土していることから、後期のものと考えられる。遺構と遺物の出土範囲からB区の南側に集落が展開していた可能性がある。

古墳時代

古墳時代になるとA区に生活の場が移動する。当該期の竪穴建物跡が4軒（うち1軒はB区）を確認したが、うち3軒（A区2軒、B区1軒）については4m規模の方形プランもしくは方形プランに張り出しを持つもので、残り1軒は7m規模の台形状プランと大型である。そのなかでS A 2については、北東部に長方形の張り出しを有しているが、貼床下の状況から構築時の建物跡に伴うコーナー部分の存在や南側段差の存在により建物を拡張した可能性が考えられる。また横穴状遺構については、建物床面と開口部の高さを同じくしていることや建物壁面から構築されていることから建物に伴う可能性がある。用途として墓（小児用）や祭祀、倉庫等考えられるが横穴内での遺物は確認されていないため、類例を待ちたい。遺物では、土器以外で輪羽口（専用品）や金床石が出土している。鉄滓等は確認できなかったが、鋳造を行っていた可能性がある。なお、細井地区の上原第1遺跡では、後期の竪穴建物跡（12号）から高环を転用した輪羽口が出土しており興味深い。

S A 3についても、複数の地床炉と貼床・硬化面下の柱穴や段差の存在から建物を拡張した可能性が指摘できる。段差をもとに見ていくと北西部は不明瞭ながら約5.3m×約4.6mの長方形プランで南東部張り出しを持つタイプの建物跡だったことが窺える。貼床下の遺物は、土器小片がわずかに出土したのみで時期差については不明だが、おそらく短期間に拡張したものと考えられる。

遺跡で出土した遺物のうち、竪穴建物跡について、概ね中期から後期にかけての時期と考えられる。時期については、今塙屋・松永編年（今塙屋・松永2002）や近年提示された都城盆地における土師器編年（近沢2016）を基に見ていくと、S A 3では、口縁部が緩やかに外反しながら開き、頸部に刻目突帯を有する甕（225）が出土しているほか、高环では环部の稜が緩いもの（243）やエンタシス状の脚柱部（242・244）をもつもの、环部と脚柱部の接続手法には円錐粘土塊による充填法がとられていること（242・243・245）、口径と胴部最大径がほぼ同規模の小型丸底甕（236）の存在から中期前半頃と考えられる。

S A 2についても、高环はS A 3同様、环部の稜が緩いもの（213）やエンタシス状の脚柱部をもつ（213・215・216）特徴が認められ、小型丸底甕（212）についても口径と胴部最大径がほぼ同規模なことから中期前半になるとを考えられる。

S A 4は、遺物量が少ないが、口縁部に向かって緩やかに外反する甕（262）の特徴がS A 2出土の甕（211）に近いことから中期頃と考えられる。

S A 1については、尖底に近い丸底を呈し、口縁部は打ち欠かれているが、おそらく「く」の字に外反すると思われる甕(206)で宮崎平野部の特徴をもつものや胴部径が口縁部径よりも大きいもの(207)がみられる。また塊については口縁部が直立気味に立ち上がる(208・209)より、後期後半(今塙屋・松永編年の7期)のものと考えられる。

古代

古代の遺構としては、溝状遺構1条、土坑18基、焼土11基、性格不明遺構1基が確認され、これらの遺構に共伴して9世紀～10世紀を中心とする土器が出土している。また、土坑9基、焼土11基の遺構については焼成を伴う作業の痕跡と考えられる。いずれも炭化物が出土しているほか、焼成粘土塊がS C 4～6・11や焼土1・2の遺構内や周辺等で認められている。

このうちS C 4・S C 5については隣接して確認されている。S C 4については、底面(Ⅶ層御池軽石層)が被熱を受けて著しく赤化しているほか、焼けはじけた土器片や変形した环も認められることから土器焼成土坑と考えられる。また土器片が多量に出土していることから、土器焼成土坑としての機能がなくなった後、廃棄場として使用されたものと考えられる。

また遺構内には、モモ核やイネ、ムギ属、ササゲ属(リョクトウ、アズキ、ササゲが含まれる)等の種実が出土している。このうちモモの実は祭祀で使用された例があることから、土器焼成土坑を廃棄する際に地鎮などの祭祀が行われた可能性がある。

S C 5については、遺物量が少ないもののS C 4と同様、底面(Ⅶ層御池軽石層)が被熱を受けて著しく赤化しているほか、焼土上に褐色～にぶい黄橙色粘土が堆積していることから土器焼成土坑として使用された後、粘土を貯蔵するために再利用されていたものと考えられる。S C 4とS C 5の関係については、出土土器の接合関係やS C 4上に褐色粘土が部分的に堆積していることからS C 4廃棄後にS C 5を構築、その後、粘土貯蔵用に転用されたものと考えられる。

都城市では、高城町穂満坊地区の真米田(まめだ)遺跡で古代の土器焼成土坑が2基確認されている。どちらも1m規模の隅丸方形を呈しており、うち1基からは环、もう1基からは甕のみが出土しており、器種別に焼成を行っていたことが指摘されている。本遺跡のものは、环や高台付塊、赤彩のある土器、黒色土器、高台付鉢、甕、壺、須恵器、軽石製品等が廃棄されており、器種別なのか複数器種が焼成されていたのか不明である。時期について环から見ていくと口径が11cm～12.9cm、底径が5.4cm～6.3cm、器高が4.1cm～5.3cmになり、底径の割合が口径に対して低く、馬渡遺跡の环II群のものと類似すると考えられ、都城編年(近沢2011)の9世紀第3四半期に相当する。甕については、ハケ目調整が入るものやタタキ調整、ナデ調整のものが見られるが、割合的にはタタキ調整ものが多い。

一方、S C 11やS C 16、焼土1・4・5を検出したD 13グリッドやS C 12周辺等で鉄滓が出土しているほか、輪羽口についてもS C 11やS C 16周辺、金床石はS C 1やS C 11・焼土5で確認されており、これらの遺構等で鋳造が行われていた可能性が高い。

このように古代になると住居の跡等が検出されなかったことから生業の場へと変化したことが窺える。河川近くに配置していることから火災や煙などに対応したものと考えられ、集落はA区南東方もしくはB区南方に展開したものと考えられる。

またB区で確認された性格不明遺構については、黒色土器(高台付塊等)が入れ子状に重なって出土

している。前述のとおり、遺構の可能性は低く、水穴など自然陥没したものの可能性があり、ある程度埋没した段階で地鎮などの祭祀を行った可能性がある。近隣では、山城第1遺跡（第3次調査）A区の古代1号掘立柱建物跡の柱穴の一つに土器等が一括投棄された事例もあり、この時期の祭祀の在り方を示すものとして重要である。なお黒色土器については、真米田遺跡等9世紀第3四半期の高台付塊で類似する器形が認められるが、本遺跡のものは高台が退化し三角形を呈することから9世紀第3四半期から10世紀まで下がる可能性がある。

参考文献

- 石川悦夫 1984「宮崎平野部における弥生土器編年試案－素描（M k . II）」『宮崎考古第9号』宮崎考古学会
今塙屋毅行・松永幸寿 2002「日向における古墳時代中～後期の土師器－宮崎平野部を中心にして－」『古墳
時代中・後期の土師器－その編年と地域性－ 第5回九州前方後円墳研究会』九州前方後円墳研究会
実行委員会
- 宇土市 2003『新宇土市史』通史編第一巻 自然・原始古代
- 岡元武憲 1991「日向における古代末の土器」『中世土器の基礎研究Ⅶ』日本中世土器研究会
- 岡元武憲 1995「13. 九州南部」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 高城町教育委員会 2004『細井地区遺跡群』高城町文化財調査報告書第14集
- 近沢恒典 2016「都城盆地における古墳時代の土師器について」『第27年度宮崎考古学会研究会 宮崎県央地
域の考古資料に関する編年研究Ⅱ』宮崎考古学会
- 近沢恒典 2016「都城盆地の古代土師器の編年について」『第23年度埋蔵文化財文化財担当専門職員研修会』
宮崎県埋蔵文化財文化財センター
- 堂込秀人 1997「南九州縄文晚期土器の再検討－入佐式と黒川式の細分－」『鹿児島考古第31号』鹿児島県考
古学会
- 戸沢充則編 1994『縄文時代研究事典』株式会社東京堂出版
- 藤尾慎一郎 2009「弥生時代の実年代」「弥生農耕のはじまりとその年代 新弥生時代のはじまり第4巻』雄山
閣
- 堀田孝博 2014「宮崎平野部における平安時代の土器について－土師器供膳具を中心に－」『宮崎考古第23
号 日高正晴先生追悼記念号（上巻）』宮崎考古学会
- 松永幸寿 2001「宮崎平野部における弥生後期中葉～古墳時代中期の土器編年」『宮崎考古第17号』宮崎考古
学会
- 水ノ江和同 2009「黒川式土器の再検討－九州の縄文時代晚期土器－」「弥生農耕のはじまりとその年代 新弥
生時代のはじまり第4巻』雄山閣
- 宮地聰一郎 2008「黒色磨研土器」『総覧 縄文土器』アム・プロボーション
- 都城市教育委員会 2004『馬渡遺跡』都城市文化財調査報告書第62集
- 都城市教育委員会 2006『坂元A遺跡 坂元B遺跡』都城市文化財調査報告書第71集
- 都城市教育委員会 2007『今房遺跡』都城市文化財調査報告書第80集
- 都城市教育委員会 2007『加治屋B遺跡（縄文時代・弥生時代編）』都城市文化財調査報告書第81集

- 都城市教育委員会 2008『加治屋B遺跡（平安時代～近世編）』都城市文化財調査報告書第86集
- 都城市教育委員会 2010『中尾下遺跡』都城市文化財調査報告書第98集
- 都城市教育委員会 2014『真米田遺跡　七日市前遺跡』都城市文化財調査報告書第111集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2000『右葛ヶ迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財文化財センター発掘調査報告書第21集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『筆無遺跡』宮崎県埋蔵文化財文化財センター発掘調査報告書第166集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008『国指定史跡　大島畠田遺跡』宮崎県埋蔵文化財文化財センター発掘調査報告書第178集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2011『板平遺跡（第3・4次調査）』宮崎県埋蔵文化財文化財センター発掘調査報告書第199集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『平峰遺跡（1次・2次調査）』宮崎県埋蔵文化財文化財センター発掘調査報告書第211集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012『平峰遺跡（3次調査）』宮崎県埋蔵文化財文化財センター発掘調査報告書第219集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2013『宮ヶ迫遺跡』宮崎県埋蔵文化財文化財センター発掘調査報告書第228集
- 宮崎市教育委員会 2008『下村窯跡群報告書II』〈遺物編〉宮崎市文化財調査報告書第72集
- 宮崎市教育委員会 2014『宮ヶ迫遺跡』宮崎市文化財調査報告書第100集
- 森隆 1990「西日本の黒色土器生産（上）」『考古学研究』第37卷第2号
- 森隆 1990「西日本の黒色土器生産（中）」『考古学研究』第37卷第3号
- 森隆 1991「西日本の黒色土器生産（下）」『考古学研究』第37卷第4号

写真図版



大塙第1遺跡 調査区（モザイク合成）

図版2



大塙第1遺跡 遺跡遠景1（北東より）



大塙第1遺跡 調査区遺跡遠景2（西より）



A区（モザイク合成）



B区（モザイク合成）

図版4



図版 5



SA 2 内横穴状遺構 (西より)



SA 3 (南西より)



SA 3 遺物出土状況 1 (西より)



SA 3 遺物出土状況 2 (東より)



SA 4 (北西より)



SA 5 (北より)

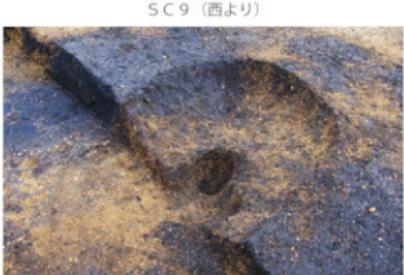


SE 1 (北より)



SC 1 (南より)

図版6



図版 7



SC 17 (南西より)



SC 20 (北より)



SC 21 (東より)



SC 24 (南西より)



SZ 1 検出状況 (南より)



SZ 1 遺物出土状況 1 (南東より)



SZ 1 遺物出土状況 2 (上部を外した状態、南より)

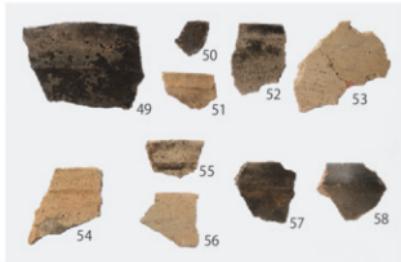


SZ 1 完掘状況 (南より)

図版8



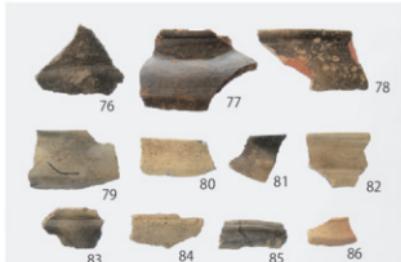
図版 9



縄文土器 7



縄文土器 8



縄文土器 9



縄文土器 10



縄文土器 11



石鏃・石錐・両面加工石器



搔器・削器



石匙・楔形石器・尖頭器・石核

図版 10





S A 1 出土遺物



S A 2 出土遺物

図版 12



S A 2 (古墳時代)・S C 1 (古代)の金床石



S A 3 出土遺物 1



S A 3 出土遺物 2



S A 3 出土遺物 3



S A 4 出土遺物



古墳時代土師器（甕）



古墳時代土師器（壺）



古墳時代土師器（高坏）



古墳時代土師器（小型壺・小型鉢・須恵器）



鉄製品

図版 14



SE 1・SC 1出土遺物



SC 5出土遺物



SC 6・11・12・焼土出土遺物



SC 13出土遺物



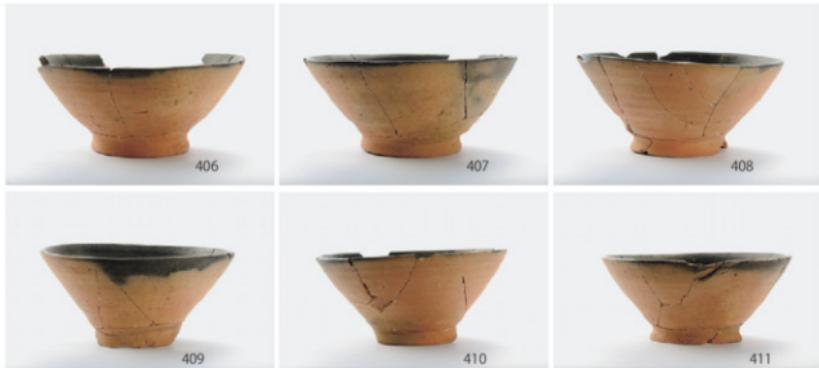
SC 14出土遺物



図版 16



S C 4 出土遺物 2



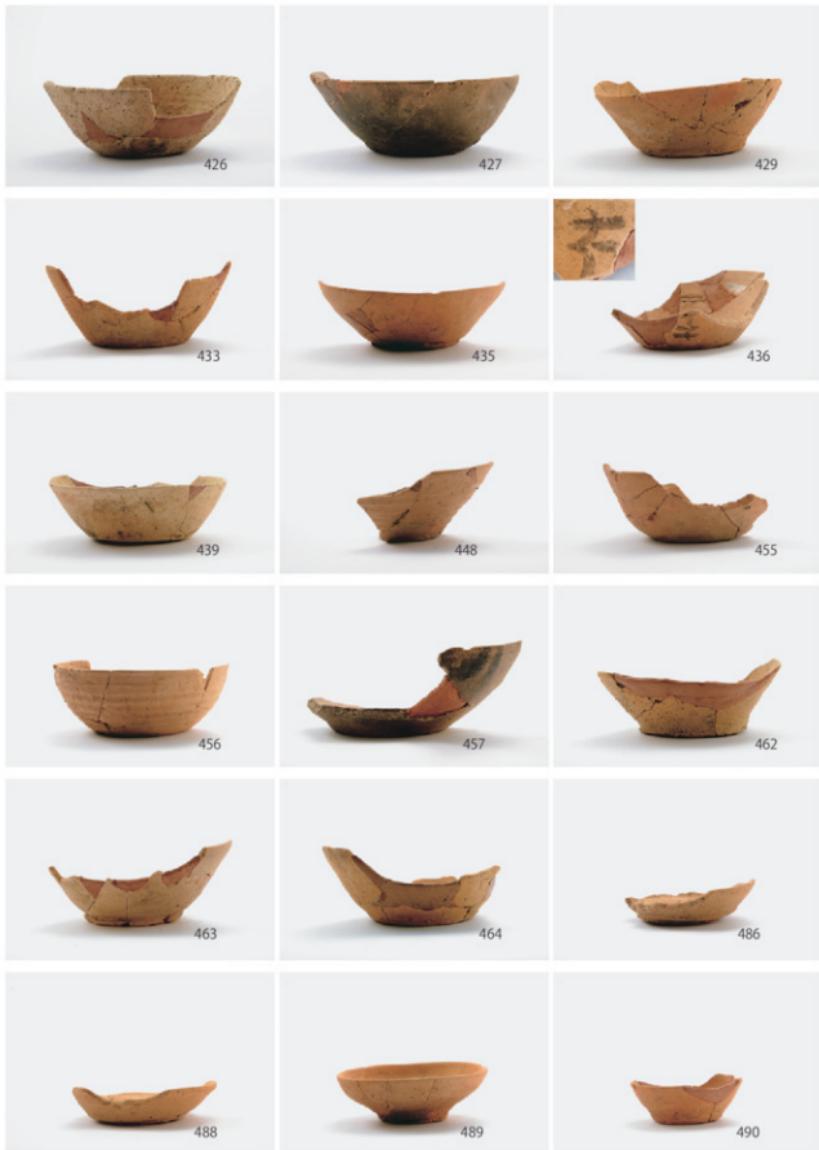
S Z 1 出土遺物 1



406~425・697~699

S Z 1 出土遺物 2

図版 18

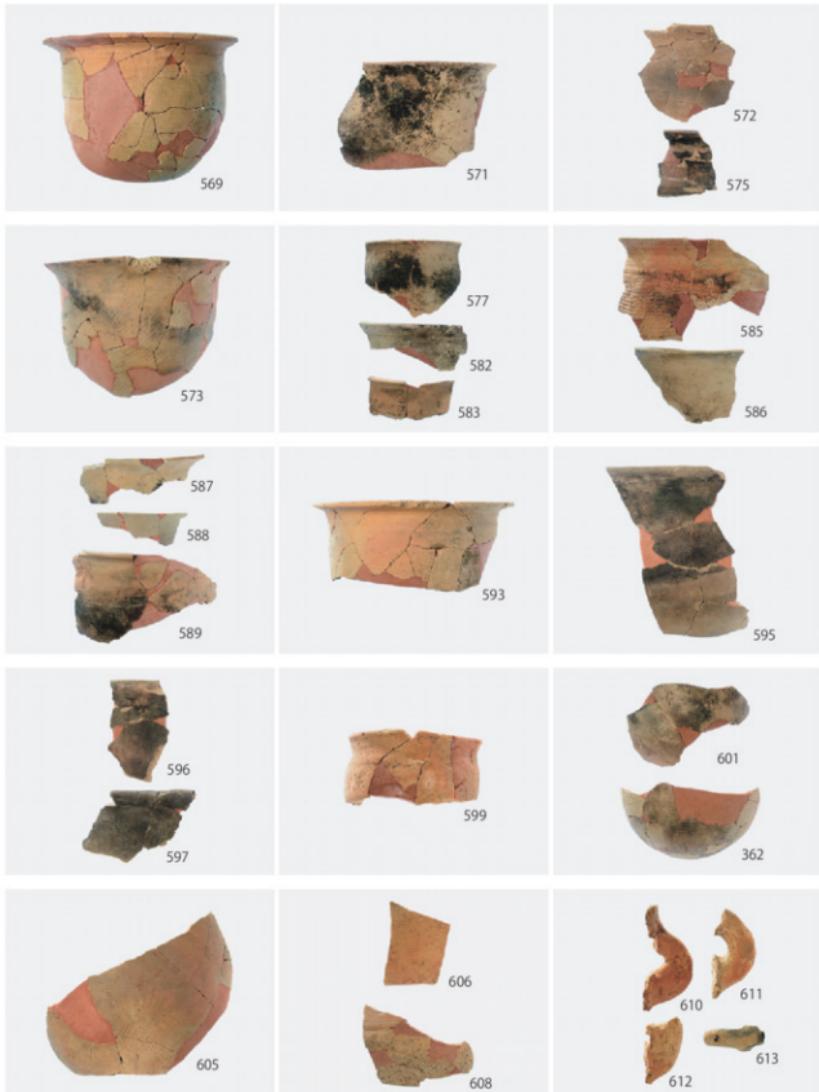


古代土師器（壊）



古代土師器（高台付塊・鉢・赤彩のある土器・黒色土器）

図版 20



古代土師器（壺・瓶）



614~624

古代土師器（布痕土器）



古代須恵器（环・高台付塊）

図版 22



古代須恵器（鉢・甕・壺）



古代瓦質土器（壺・高台付塊）

古代土製品



古代鐵製品・鐵滓

古代滑石製品・石製品・軽石製品

報告書抄録

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第238集

大窪第1遺跡

西久保地区河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2016年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒 880-0212 宮崎市佐土原町大字下那珂 4019 番地

TEL 0985(36)1171 FAX 0985(76)0660

印刷 ダイヤモンド秀巧社印刷株式会社 宮崎支店

〒 880-0803 宮崎市旭1-8-14 旭ビル3階

TEL 0985(24)1072 FAX 0985(26)0925

Miyakonojo City

OKUBO 1 Site

The Excavational Investigation Report of Miyazaki Prefecture Archaeological Center
vol.238

2016

Miyazaki Prefecture Archaeological Center